地域資料叢書 27

青少年義勇軍・葛根廟事件　高知県関係資料集

―第４回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集―

2023 年 7 月

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会編

刊行に寄せて

「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」（以下「語り継ぐ会」）は、高知県内の旧満洲（中国東北部）帰国者、大学教員、マスコミ関係者らが、体験者が次々と逝去し歴史の継承が難しくなる現状を危惧して、2018 年 9 月に結成されました。以前高知にあった「満州会」などの体験者の懇談会という形でなく、次の世代に歴史を語り継ぐ組織です。高知県から満洲へ渡った人の実数は正確に分かりませんが、「満洲開拓団」「満蒙開拓青少年義勇軍」で渡満した人数は 1 万人を超え、人数では全国 10 位ながら、人口比では全国 3 位の 1.4%となっています。戦前の高知県民にとって満洲は、多くの県民が移民した非常に身近な地域だったことが分かります。

語り継ぐ会では活動として 2019 年 7 月、シンポジウム「第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集い」を高知市で初開催しました（『第 1 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集』）。2020 年度のシンポジウム「第 2 回満洲の歴史を語り継ぐ集い」（「満州国の建国に迫る」がテーマ）は台風の影響で中止になりましたが、登壇予定者の報告を『第 2 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2020 年度事業報告』に収録しています。2021 年 7 月には、「満洲と高知の部隊について学ぶ」をテーマにシンポジウム「第 3 回満洲の歴史を語り継ぐ集い」を高知市で開催しました（『第 3 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2021 年度活動報告』）。

今回発行する記録集は、2022 年 6 月 26 日に高知城歴史博物館で高知と満蒙開拓青少年義勇軍をテーマに開催したシンポジウム「第 4 回満洲の歴史語り継ぐ集い」の内容を基にしたものです。『青少年義勇軍・葛根廟事件　高知県関係資料集』と銘打ち、県関係の義勇軍関係の新聞記事や、ソ連軍と避難者が遭遇して多くの犠牲者が出た葛根廟事件帰還者の私信類など、高知と満州に関する新資料を多く紹介しています。

まず、第 4 回の集いの講演内容をまとめた織田千代子さんの「青少年義勇軍と高知」、吉尾寛さんの「満洲移民の〈背景〉」を収録しました。聞き取り記録「義勇軍参加者の戦中戦後（村尾朋市）」も貴重な証言を活字化しています。次に、事件遺族の岡田としさんの「戦禍に散った命を忘れないで伝えていこう」と「葛根廟事件関係資料－伊野部家資料の翻刻－」を掲載しました。空襲により焼失して未確認のものが多い新聞資料では、新発見の新聞資料群から義勇軍関係記事を抽出し、伊野部家資料は葛根廟事件で遭難した家族の戦前戦後がうかがえる新資料群です。

記録集は、青少年義勇軍、葛根廟事件と高知の関わりを学ぶことのできるテキスト、資料集として仕上がっています。今後、様々な形でご活用いただけましたら幸いです。

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・会長
大野正夫

目次

刊行に寄せて（大野正夫）..... 1

青少年義勇軍と高知―満蒙開拓青少年義勇軍と郷土部隊・高知中隊送出―（織田千代子）..... 3

第１章　満蒙開拓青少年義勇軍とは何だったのか..... 6

第２章　郷土部隊編成と郷土部隊送出 45

第３章　引き揚げ後の元隊員たち..... 101

青少年義勇軍関連の新聞記事目録（楠瀬慶太）..... 107

【レジュメ】満洲移民の〈背景〉（吉尾寛）..... 108

【聞き取り記録】「義勇軍参加者の戦中戦後（村尾朋市）」（小野由美子）..... 113

戦禍に散った命を忘れないで伝えていこう（岡田とし）..... 121

葛根廟事件関係資料－伊野部家資料の翻刻－（岡田とし）..... 135

第４回の語り継ぐ集い。約 50 人が参加した

高知と満蒙開拓青少年義勇軍

第４回 満洲の歴史を語り継ぐ集い

日時　2022年６月２６日（日）13：00～16：00

場所　高知県立高知城歴史博物館１階ホール(高知市追手筋２－７－５)

参加費　無料

内容　※新型コロナウイルス感染拡大の状況によってはプログラムが変更になる場合があります。

谷馬寛さん（高知大学名誉教授）
「満洲移民問題の背景（中国史）研究の立場から」

織田千代子さん（高知地域資料保存ネットワーク）
「満蒙開拓青少年義勇軍と高知―郷土部隊・警備中隊送出と高知の動き」

今回の第４回のテーマは、戦前に中国東北へ移民として送った「満蒙開拓青少年義勇軍」。義勇軍とは16～19歳の青少年を開拓団として送出した制度で、全国で約８万人、高知からは1801人が参加、戦後の満洲で多くの犠牲者が出ることになりました。満洲移民の背景、高知の義勇軍の実態について、専門の講師２人から学びます。

主催：満洲の歴史を語り継ぐ高知の会　　連絡先：大野 090－7145－3459

第４回の語り継ぐ集いのチラシ

青少年義勇軍と高知―満蒙開拓青少年義勇軍と郷土部隊・高知中隊送出―

織田　千代子

目次

はじめに

第１章　満蒙開拓青少年義勇軍とは何だったのか

１．義勇軍創設のねらい
２．義勇軍の建白書と発足
３．義勇軍募集と教育会
４．ジャーナリズムの影響
５．内原訓練所
6. 日輪兵舎の生活と教育
７．現地訓練所
８．訓練生の生活実態
９．義勇隊開拓団の入植地
10. 義勇軍の終焉

《コラム》「満蒙開拓」とは何だったのか(森井淳吉　元高知短期大学名誉教授)

第２章　郷土部隊編成と郷土部隊送出

１．郷土中隊編成運動が果たした役割
２．第１次郷土部隊・谷本中隊体験記
３．第２次郷土部隊・山本中隊体験記
４．発見された新聞から郷土部隊送出の動きを見る
５．斉藤中隊に関する記事より
６．第３次郷土部隊・斉藤中隊体験記
７．広瀬中隊送出に関する記事より
８．第４次郷土部隊・広瀬中隊体験記
９．第５次義郷土部隊・田中中隊に関する記事より

３章　引き揚げ後の元隊員たち

１．津野兼吉さん(谷本中隊)
２．山岡勲さん帰国の新聞記事(斉藤中隊)
３．山本義美さん(山本中隊)

《コラム》「満蒙隊拓移民を推進した人　久保佐土美」

参考文献

凡例

・義勇軍は略称で、正式名称は「満蒙開拓青少年義勇軍」である。資料によっては、正式名称使用、また、略称を使用している場合は、そのまま使用した。
・「満洲」について、文献・資料によっては当時の文字の旧漢字「滿洲」になっている場合があるが、「満州」に統一した。ただし、「昭和 13 年度満洲青年移民（青少年義勇軍）募集要綱」の文中では「滿洲」を使用した。
・年号は原則西暦に統一した。
・「ソ連」の表記について、資料によっては「ソビエト」とあるのでそのまま使用した。
・人員数に関して、資料などによって人員の違いがあるが、そのまま使用した。
・人員の単位は、資料によっては「名」、「人」となっているので、そのまま使用した。
・満人、志那人、匪賊など、今日では不適切である語句・表記も、そのまま使用した。
・新聞記事は原文通りの旧字体であるが、変換できない旧字体は、新字体を使用した。（例：隊、清、祖、清、半など）

はじめに

私が、義勇軍に関心を持った動機は、今から 4 年前の 10 月に、93 歳で亡くなった父の 3 回忌を終えた後であった。遺品の中の風呂敷に包んだものを開けてみると、厚さが 5 センチ以上もある写真集だった。写真集の表紙を開けると「昭和 14 年度第 2 次満蒙開拓青少年義勇軍／大和鎮青年義勇隊開拓団／第三中隊(中隊写真集)」と書いてあった。

初めて見る写真集である。写真集と一緒にあった封筒の中の 1 枚の写真には軍服を着て義勇軍のタスキを掛けた 15 歳の父の姿があった。その写真を見て、初めて父が義勇軍に行っていた事を知った。これまで父が義勇軍に行っていたということを聞いたことがなかったので、不思議だった。その後、父が、二男に自分が所属していた第三中隊の隊長の名前を付けたこと、満州に行っていたことは墓場まで持っていくと言っていたことを知った。義勇軍について全く知らなかったので、義勇軍とはいった何なのだろうか、家族にも話さず墓場まで持っていかなければならない義勇軍とはどのような所なのかと疑問が湧いて来た。そこで、義勇軍について知りたいと、図書館でたくさんの文献や資料、多くの隊員の手記や体験記を読んだ。多くの体験者の手記には、14、１5 歳の少年たちが夢と希望をもって胸を張って故郷を出て行ったのに、満州に行ってみれば想像を絶する悲惨な現実が待っていたという体験が書かれていた。読んでいると胸が痛くなる話ばかりである。「子どもたちは、関東軍の弾よけとして送り出されたのである」という言葉が胸に刺さった。そして、父も同じ体験をしていたのに、だれにも話さず、人生を終わるまでどんな思いで自分の胸の中にしまい込み、私たちを何不自由なく育ててくれたことに感謝をした。もっと親孝行したかったと後悔した。なぜ、父が写真集を残してあったのか考えた。義勇軍について知ってもらいたいという私へのメッセージではないだろうかと思った。

そこで、集めた文献や資料がたくさん手元に集まったので、義勇軍について形として残したいと考え、2022 年 3 月に『鍬の戦士　父・前田定の闘い』という本を自費出版した。

終戦から 77 年が過ぎ、体験者の多くが亡くなっている、現在では戦争を知らない世代が中心となり、戦争の記憶は遠い過去の出来事のようで、義勇軍の存在など語られることはない。しかし、敗戦によって夢は破れ、多くの少年たちが犠牲になり、今でも 2 万人以上が、故郷の両親の元に帰ることなく満州の地に眠っている。

義勇軍は国策であり、高知県から 1,331 名の郷土部隊が送出されているのは分かっているのに、県に問い合わせると義勇軍に関する資料は残されていないという。

また、高知県からは一般の開拓団も数多く送り出されており、戦後関係者が記録集として『高知県満州開拓史』(1970 年刊)が上梓(じょうし)されたが、その中にわずかに青少年義勇軍に関する記述があるだけで、それ以外に高知県には義勇軍の存在を示すものは無いということである。

私のこれからの使命は、「義勇軍とは何だったのか」、もの言わぬ体験者に代わって思いを、語り継いでいくことだと考えている。

第１章　満蒙開拓青少年義勇軍とは何だったのか

１．義勇軍創設のねらい

満蒙開拓青少年義勇軍という制度は 1938(昭和 13)年に作られたが、少年のみの集団的な武装移民のこころみは、満州の三江省の驍河に創設された大和北進寮〈驍河(ぎょうが)少年隊〉と呼ばれた少年武装移民がそれであり、その成績良好だったことが青少年義勇軍創設の動機だったということになっている。

そして驍河少年隊も満蒙開拓青少年義勇軍も、もとはといえば、日本の中国に対する植民政策の失敗とその失敗を何とかして挽回しようとする焦りから、苦しまぎれに生み出されたものほかならない。

関東軍が早くより農業移民に関心を抱いたのは、日本国土の 4 倍近い満州においては、日本軍による占領は点と線にすぎない。主要な地域に農民を入植させ、日本人の集団を定住させることが満州の支配には不可欠であると判断したからである。したがって満州移民に対しては、当初から関東軍が目標としていた軍事的(国防・治安)、政治的(日本人指導による満州支配)任務が課せられた。当然、入植地はソ連との国境地帯、治安の悪い地域、あるいは主要都市周辺が選ばれた。

義勇軍の目的は「未墾の荒野を開拓し、将来は独立した農業者となること」が建て前であった。それには開拓団の労働力不足などが深くかかわっていた。

しかし、実際のねらいは日本がうちたてた傀儡(かいらい)国家「満州国」の防備と治安いわゆる北辺鎮護を子どもたちに担わせることであった。子どもたちは、関東軍の弾よけとして送り出されたのである。

義勇軍創設の影の推進者は、関東軍であった。それには開拓団の労働力不足などが深くかかわっていた。まず満州移民の植民政策からみることにする。

日本の植民政策のあゆみ

1894(明治 27)年、1895(明治 28)年頃の日清戦争とその 10 年後の日露戦争とは、ともに国権を中国大陸に伸ばすための戦争であり、その勝利によって台湾・樺太領有のほか満州の商租権を獲得すると、日本は、オランダやイギリスの東インド会社にならった南満州鉄道株式会社を設立するなどして、植民地経営の手を伸ばしていった。

そして 1906(明治 40)年代になると、一部の政治家の頭のなかには、満州を完全に日本の植民地とするには単に資本の投下だけでは不十分で、相当数の日本人を移民・永住させる必要がある、という考えが芽生えて来る。

このような時代の動きを敏感に反映したのが、1914(大正 3)年に関東都督の福島安正陸軍中将の世話で実行された愛川村移民(山口県の愛宕・川上両村の農民を動員)であった。

しかし、集団移民、政府機関が国策的な意図のもとに補助したという点でも画期的な愛

川村移民も、結果的には失敗であった。

だが、1927(昭和 2)年の金融恐慌とその余韻のおさまらぬうちに荒れ狂った世界恐慌とは、日本の為政者の眼をあらためて中国大陸、満州の地にそそがせた。彼らは経済危機の解決を、満州に対する植民地進出の強化によって計ろうと考えたのである。

1927(昭和 2)年の 6 月、東方会議は「対支政策綱領」を決定、中国、満州については、日本が治安維持にあたり、さらに中国本土から切り離して独立の政権下に置こうという「満蒙分離政策」までも打ち出した。そして日本はこの方針を、1931(昭和 6)年 9 月 18 日の柳条溝（満州事変）事件を口火として実行に移し、1932(昭和 7)年 3 月 1 日、清朝の廃帝溥儀を担ぎ出して傀儡(かいらい)国家「満州国」を作り上げたのであった。

※中国の人びとは満州事変を日本帝国の侵略戦争と銘記し、昔も今も「満州国の存在を認めてはいない。

満州国の地図

（「満洲国　世界のまど」より）

「満州国」成立ともに、満州農業移民が計画実施された。中心となって計画推進したのは、現地側では関東軍の東宮鉄男(とうみやかねお)大尉(張作霖爆殺の現場指導者)、日本国内では日本国民

高等学校長加藤完治(のちの内原訓練所所長)である。この二人を引き合わせ、移民に慎重だった関東軍首脳層に決断させ、その実現にこぎつけたのが、関東軍参謀石原莞爾(柳条湖事件首謀者の一人)であった。

第1次武装移民・成人移民の失敗

1932(昭和7)年3月、「満州農業移民」が計画実施されることになり、同年8月、「満州試験移民費」議会を通過、10月3日、492名の第1次移民団は東京駅を出発、昭和8年3月下旬、三江省樺川県佳木新(チャムス)の豊栄鎮に入植、昭和8年、第2次移民団の455名は、七虎力に入植した。

この第1次・第2次の集団移民は完全な武装移民で、ソビエトに対する第1線兵力の扶植という軍事的役割を負わされていた。

移民団は〈佳木新屯墾軍第一大隊〉と呼ばれ、応募資格は、35歳以下の「農村出身者ニシテ多年農業ニ従事シ経験ヲ有スル既教育軍人」に限られ、軍備や統制も軍隊と同じであった。入植地の佳木新といえば、満州の北東部、ソビエトとの国境線近くに位置していて、対ソ戦における戦術上の要地だったのである。

しかし、この試験移民はスムーズにはゆかなかった。入植後半年後の1933(昭和8)年7月、まず第1次移民団に騒動が起こり、それが第2次移民団にも飛び火したのである。

第1次移民団の代表が突然佳木新に東宮を訪れて、幹部の更迭を要求する声明書と決議文を突きつけたのである。幹部更迭の理由は、村の警備指導と関東軍・吉林軍への連絡・交渉の拙劣なこと、農機具計画の杜撰なこと、農作業指導の不良、輸送計画の不適当、経理事務の混乱、幹部の横暴と責任回避など5条11項が挙げられていた。

この要求書を突きつけられた東宮(とうみや)は、移民団の崩壊を防がなければならないと焦慮、7月21日に、日本から駆けつけた加藤とともに永豊鎮を訪れたのである。

移民村の空気は、予想以上に険悪で、東宮は、「自分は死を以て事に当たり、死を以てお詫びする覚悟だ。だから、この東宮に委せろ」といって、事件はようやく収拾されたのである。

こうして第1次移民団は崩壊をまぬがれたが、希望者には退団を認めることにした結果、100数10名が退団、帰国することになった。第2次移民団からも数10名の落伍者が出てしまったのである。

反満抗日パルチザンの攻撃

第1次・第2次の移民団に起こった事件の本当の原因は別にあったのである。それは、第1には、中国農民たちの抵抗・襲撃による生活と生命の危険である。

日本側は、移民団を襲撃した者を一括して〈匪賊(ひぞく)〉と呼んだが、大半は民族独立運動組織としての反満抗日パルチザンであった。

昭和9年春、中国の農民が蜂起した土竜山事件が起こった。関東軍が中国農民の既耕地を安い価格で強制的に買収したため、中国の農民が蜂起し、2カ月半にわたる激しい包囲攻撃を受け、営農上の損害は甚大で精神的動揺も深く、大量の退団者を出した。

満州移民を希望したのは、日本では暮らしの立たない貧農層が多く、国威発揚のためよりもみずからの生活を得ようとして渡満したのであり、生活と生命の危険を根底から揺さぶられ、動揺したのである。

第２は、のちに「屯墾病」といわれる開拓地特有の集団ノイローゼの発生であった。団員は妻子者が多かったが、日本の風景とは異質な自然環境に投げ出され、しかも 500 名だけの閉鎖された男社会で、四辺を見えない敵に囲まれて絶えず緊張していなければならない。烈しいホームシックに陥り、そしてそのストレスは、団員の多くに波及して集団的ノイローゼにまで進展し、幹部排斥事件の大きな原因となったのであった。

少年こそ移民の適格者

第１次・第２次移民団に起こった事件以後、満州への移民計画は、十分に配慮して立てられることになった。特に、以下の２項の対策には細心の注意がはらわれた。

反満抗日パルチザンにたいしては、関東軍や吉林軍などの在満日本軍および満州国軍が全力を挙げて討伐にあたり、移民村付近の治安確保を約束した。屯墾病に関しては、東宮が「第１次武装移民ノ精神動揺状況及第２次以降ノ人選ニ関スル要望」と題する文書を発表。東宮の要望書は、屯墾病にかかって脱落するのは、「薄志弱行者」であるとする。では、どんな人物がそれかというと、それは以下のような者だというのである。

1　農村ニ生レナガラ小学問ヲナシ、農耕ニ従事セズ、事務員等ヲ為シタル者。
2　内地ニテ比較的裕福ナル生活ヲナシ、新聞雑誌ノ満州熱ニ煽ラレテ志願セル者。
3　頭髪ヲ延バセル者。頭髪ヲ延バセル者ノ中ニモ勿論真面目ノ青年アルモ、除名希望者トシテ出タル者ハ、全員髪ヲ延バシ所謂ハイカラ男ナリ。

これにたいして東宮は、同一条件だったのに屯墾病にかからず、「意志堅固、困難ヲ厭ワズ進ンデ難局ニ当リ……警備ニ当リテモ勇敢」だった者もあるとして、次の三者を挙げるのだ。

1　日本国民高等学校出身者。
2　貧困者ニシテ活路ヲ満州ニ求メントシテ渡満セル者。
3　純真ノ年少者。

東宮は、満州移民は「人選」が何より重要であり、在郷軍人よりも上記の３者が適格であると主張する。そしてこの考えは、現地体験から編み出したものだけに拓務省や農林省に強い印象を与え、その後の満州移民政策に大きな変化をもたらしたのである。

すなわち、成人移民にならぶものとしての青少年移民政策の登場であり、具体的には満蒙開拓青少年義勇軍の創設である。

２．義勇軍の建白書と発足

関東軍が早くより農業移民に関心を抱いたのは、移民に満州支配の一環を担わせることを期待したからである。日本国土の４倍近い満州においては、主要な地域に農民を入植さ

せ、日本人の集団を定住させることが満州の支配には不可欠であると判断したからである。

1936(昭和 11)年、関東軍は、「満州農業移民 100 万戸移住計画案」と具体的実施計画の「暫定的甲種移民実施要領案」を審議に付している。さらに、入植用地の取得方法を提示した「日本人移民用地整備要綱案」を策定し、これを土台に「20 ヶ年 100 万戸送出計画」の「満州現地案」を作成した。1936(昭和 11)年 8 月、広田内閣が「満州農業移民 20 ヶ年 100 万戸送出計画」を決定した。実は関東軍の強い要請を受けて「満州現地案」を基礎に作成されたものであり、関東軍の政策であった。

※100 万戸・500 万人というのは、当時満州の人口は約 3,500 万人を数えたが、20 年後には約 5,000 万人に増加すると仮定し、その 1 割 500 万人(1 戸平均 5 人として 100 戸)を日系人で占めさせようと考えたところから算出されたものだという。

拓務省では、1937(昭和 12)年度予算のなかから、100 万戸移民の第 1 期第 1 年度分として、6,000 人送出分 470 万余円を計上した。そして、移住者の募集と送出の仕事をおこなわせるための機関として、日本に財団法人満州移住協会を設立、一方、移民の受け入れと生活指導にあたる期間として、満州に特殊法人満州拓殖公社を設立したのである。

日本国家が望んでいた満州への大規模な農業移民が、いよいよ実現することになったが、しかしこのとき突然、実現をはばむ事態が起こった。1937(昭和 12)年 7 月 7 日の夜、現在の北京の西南方向にあたる盧溝橋(ろこうきょう)附近で日本軍と中国軍が衝突し、日中戦争がはじまってしまったのである。事件そのものはたいしたことはなかったが、日本政府と軍部との拡大方針によって開始されたこの戦争は、満州事変とは比べものにならぬ本格的な戦争であった。日本は厖大な人員の兵士および武器・弾薬を投入しなければならず、その損耗度は非常に激しく、戦死者は 18,000、戦傷者は 52,000 という数に達したのである。

満州には、関東軍がいたが、ソビエトという敵に備えるため出動させるわけにはいかない。やむを得ず陸軍は、予備役・後備役の兵士を大量に戦線に送り出した。

予備役・後備役は 20 代後半から 30 代が多く、満州への農業移民として最適の世代であった。その世代の農村男性を大量に兵役に召集されてしまったのでは、拓務省が移民の必要性を叫んだところで、目的の達成は難しいと言わざるを得ない。そこで拓務省は、代案とするべきものを考えていた。

義勇軍の発足

盧溝橋事件から 2 日後の 1937(昭和 12)年 7 月 9 日から 1 週間にわたり、関東軍は移民事業者を新京(長春)に召集して会議を開いた。最終日の 7 月 15 日には、関東軍提出の「青年農民訓練所(仮称)創設要綱」が決定された。この「要綱」は、満州に青年農民訓練所を創設するのに必要な措置をまとめたもので、方針・要領・備考からなっている。

満州移住協会はさきに「青年農民訓練所(仮称)創設要綱」に基づいて、先遣隊の送出を

開始した。長野県出身の第1班100人は8月下旬に日本を出発、9月14日に伊拉哈駅近くの宿舎に着いた。彼らは後続の第2班とともに伊拉哈より16キロ北の地に嫩江訓練所を建設するために汗を流した。彼らは伊拉哈少年隊と呼ばれ、嫩江をはじめ鉄驪・孫呉・寧安・勃利の各訓練所建設に取り組んだ。

建白書の意味するもの

「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」(以下「建白書」)と題された文書が、近衛首相をはじめとした全閣僚に提出されたのは、1937(昭和12)年11月3日のことである。署名人は農村更生協会理事長の石黒忠篤、満州移住協会理事長の大蔵公望、同理事の橋本伝左衛門・那須晧・加藤完治、日本聯合青年団理事長の香坂昌康の6人で、いずれも満州移住のために働いてきた人々であった。

「建白書」は、義勇軍をして「東亜永遠の平和の礎石たらしむべし」との趣旨の下に、これを国策として即時5万人の義勇軍送出こそ急務と力説していた。「建白書」は、拓務省が提出する予定の「満州に対する青年移民送出に関する件」が、議会で承認されるよう援護する意味もあって提出されたのである。

異例の速さで閣議決定すると、拓務省はその具体化の作業にとりかかった。協議の結果、第1に、拓務省のおこなう満州への青少年移民は、満州移住協会に委託し補助金をあたえて実施すること。第2に、内地訓練所を設営し、適切な精神的・技能的訓練をほどこしたのち開拓地へ入植させること。第3に、内地訓練所を茨城県内原の日本国民高等学校の隣接地に設置し、その所長を加藤完治とすること。

拓務省はその年の12月22日に「満州青年移民実施要綱」を作成。1938(昭和13)年1月にはそれを修正した「満州開拓青少年義勇軍募集要綱」を作って、ただちに募集に着手したのである。わずか1カ月後に名称まで変えたのはどうしてだろうか。

拓務省としては、建白書と同じ「満州開拓青少年義勇軍」の名を当所から使いたかったらしい。しかし、閣議や予算会議などで波紋を起こすことを懸念して、閣議を通過させる便宜上、「少年」と「義勇軍」の2語を隠して、一般の移民と同種のものという扱いをして「満州に対する青年移民」と呼称した。事業が既成の事実となり終わった時点で、ようやく「満蒙開拓青少年義勇軍」の名を公開したのである。そしてこの時以降、日本の敗戦によって地上から消滅するまで、少年たちによる中国大陸への武装移民は「満蒙開拓青少年義勇軍」と呼ばれたのである。

しかし、この呼び名は日本国内であって、現地の満州においては、「軍」という文字から、中国人たちの間には、軍隊であるに違いないという理解が生まれた。そこで関東軍から「軍と呼ぶのは適当を欠く」と申し入れがあり、満州国においては「隊」の文字を使うことにしたのである。

したがって、日本を出発するときには「満蒙開拓青少年義勇軍」であったものが、満州へ上陸したときには、「満蒙開拓青少年義勇隊」と変わったのである。

義勇軍構想実現の立役者加藤完治

中国服姿の加藤完治

義勇軍制度も成人開拓団と同様、民間運動、とりわけ加藤完治(のちの内原訓練所長)の働きによるところが大きかった。義勇軍の構想はいつころから描かれたのであろうか。

武装移民団が 1934(昭和 9)年春、中国の農民が蜂起(ほうき)した土竜山事件等から内部に大動揺を招き、退団者が続出するので加藤はこう考えた。「ごたごたした問題の根にあるのは欲である、また、ソ連と戦争になれば家族もちでは大変なことになる。だから、欲のない純真な、家族のいない少年たちこそ満州移民にふさわしい」。その翌年と思われるが、第 1 次移民団の北大営小隊を視察したとき、労働力が欠乏しているという話を聞き「青年をよび寄せればよい、彼らを現地で訓練し、成人の移民団に送り込むようにする」と答えた。加藤は、日頃から「訓練生には成人開拓団の警備あるいは労力欠乏に泣く移民部落に応援に行くなどして活躍してもらうのだ、すべての面から考えて訓練所設立は必要だ」と説いていたのである。義勇軍創設は日中戦争勃発によって始まったと記している記事があるが、日中戦争以前から、すでに加藤や関東軍によって着々とその具体策が練られていたのである。

名前にこめられた意図

義勇軍が国家の方策として初めて表面に出されたのは、さきの「満州に対する青年移民に関する件」が閣議で承認されたときである。また義勇軍の名が公にされたのは「建白書」においてであった。

『東亜聯盟』昭和 15 年 7 月号掲載の「満州移民を加藤完治氏に聴く」によると、「建白書」は、「加藤一人でわあわあ騒いでも仕方があるまい、建白書にしようじゃないか」との石黒忠篤氏の発言から起こった。また、1940 年にはこうのべている。

「義勇軍になぜしたかと言うと、移民と言うと子どもには響かない。日本人にはお国の為だと言うた方が分かる。それで義勇軍がいいと言うと賛成というのでそうなった。」

(『東亜聯盟(れんめい)』昭和 15 年 7 月号)

義勇軍の義勇の言葉は教育勅語の一節「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」という義勇の言葉と重なってくる。農業や移民ではでは人気がない、そこで「国家存亡の危機を救うために馳せ参ずる」意をもつ義勇の名を冠したという。

義勇軍の任務、目的

義勇軍の任務は、「建白書」によると、①国策移民の完成を助ける、②移民地の管理、③交通線の確保、④一朝有事の際には現地後方兵站の万全に資する。

加藤は分かりやすくつぎのようにのべていた。

① 満州の 1 万キロ余の鉄道を守る。

② 満州には満拓が買収した広大な耕地がある。他民族が入ってこないようにしっかり

確保、管理する。

③　成人移民団を「匪賊」から守る、つまり治安を維持する。

④　ソ連と戦争がはじまったときには、後方で諸任務を果たして軍の活動を助ける。

（永雄策郎編『満州農業移民十講』地人書館・昭和 13 年）

加藤は、義勇軍の任務は「皇軍の片腕になる」ことだとのべ、義勇軍を説明するのに「銃と鍬」をもってした。加藤は、義勇軍の任務は国防・治安と開拓にあり、「満州国」建設の聖業に青少年の純粋な心と若い力を捧げるところに義勇軍の使命、目的があると信じていたのである。しかも義勇軍運動は「真の日本人を作る教育」、すなわち「青少年に日本魂の鍛練陶冶（たんれんとうや）」に置いたのが特徴である。

３．義勇軍募集と教育会

義勇軍募集開始

満蒙開拓青少年義勇軍の募集開始は、1938(昭和 13)年 1 月早々であった。

その前年 12 月、日満開拓機構代表会議で決定した「青少年開拓民実施要領及理由書」は、送出員数を「差当り 13 年度に於いては 50,000 人とし、いかなる場合に於いても 30,000 人を下ざるものとす」としていた。年が明けるとすぐ、拓務省は関係官庁、諸団体と打ち合わせを行ない、「満蒙開拓青少年義勇軍募集要綱」を作成した。そして日本全国を 8 ブロックに分けて義勇軍編成協議会を開き、募集を徹底させることにした。

その後 1938(昭和 13)年度予算決定に伴い、義勇軍募集人員は 50,000 人から 30,000 人となった。拓務省は「昭和 13 年度満州青年農業移民(義勇軍)募集要綱」を作定、募集人員割当数の変更とともに道府県当局に提示した。

割当て数の多い順に山形県・宮城県・長野県が 350 人、新潟県が 250 人と続くが、これらの県に共通するのは雪の多い寒冷地だったということである。

しかしながら、応募者が予定人員をはるかに超えたのは当初だけで、1938(昭和 13)年に開始された第 1 次の 5,000 人の募集は応募者が 9,000 人に迫り、9,600 人に達する盛況であった。ただし、その後の応募者は振るわない。実は、初年度の昭和 13 年度ですら内原への総入所者は 24,365 人であり、そのうち渡満したのは 21,999 人であった。初年度から 30,000 人送出という目標を大きく下回ったのである。翌年以降も送出人数は低迷し、14 年度 8,887 人、15 年度 8,922 人と目標を満たしていない。

1938 年(第 1 次)から敗戦の 1945 年(第 8 次)までの送出実績は、下記表のとおりである。

義勇軍送出実績一覧表

年　度	送出計画　人	実　績　人	比　率　%
1938(13)	30,000	21,999	73.3
1939(14)	30,000	8,887	29.6
1940(15)	30,000	8,922	39.8

1941(16)	12,600	12,622	100.2
1942(17)	10,200	11,795	115.6
1943(18)	15,000	10,658	71.1
1944(19)	13,500	7,799	57.8
1945(20)	10,000	3,848	38.5
合計	151,300	86,530	57.2

（白鳥道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』をもとに作成）

義勇軍への応募が終始低調だったのは、日中戦争の長期化による兵力の動員、軍需産業における労働力需要の高まりとそれにともなう農村労働力の流出などが原因であった。1943(昭和 18)年以降になると、海軍志願兵や陸軍少年飛行兵への応募、さらには軍需産業に就職する者や、上級学校進学者も多くなり、義勇軍送出の困難はますます増大した。

義勇軍募集と公教育の関与

義勇軍送出は国策であった。国側は、はじめから募集人数を道府県に割当て、目標の達成を督励した。また募集実績の不振に伴い、県や地方事務所はあの手この手を使って、町村の役場・学校に対して応募者の勧誘推薦に関する指示を行った。

拓務省は、文部省をとおして地方長官や学務部長に通達を出し、翌春には応募年齢に達する高等小学校の生徒の勧誘であった。拓務省は各府県に対して、高等小学校 2 年生の男子生徒のうち、希望者や二、三男を対象に郡を単位として拓務訓練を実施し、彼らを集めて 1 個小隊を編成して内原へと送り出すよう求めたのである。しかし、割り当てられた小隊編成の目標数は、郡の教育会や教師にとっては割当以外の何物でもなかった。岩手県や長野県では、校長をとおして 1 校に何名と義勇軍志願者の割当が行われ、教師は毎晩のように部落を歩き、義勇軍応募を説得しなければならなかったという。陰には、「成績の上がらない校長や教師は左遷」する卑劣な手段まで講じられた。

指導者育成

しかし、上から圧力を強化しても、教師が満州や義勇軍を理解していなければ、義勇軍送出への情熱はわいてこない。そこで、重点的にとられた対策が、教員と深いかかわりをもった指導者養成(拓務訓練：視学・教員中より 2 府県当たり約 30 人を内原訓練所で行う）である。

「義勇軍送出の国策を完遂させるためには教育者が陣頭に立ってやらなければならない」ということから始まった。当時の教育界には、「義勇軍を出せないような教育をして何になるか」といった風潮がはびこっていた。じりじりと現場に圧力をかけて来たのである。いつの時代でも、国策に苦しむのは現場の人たちであった。

さらに拓務省は、高等小学校での「職業指導」において、義勇軍への募集を推奨するよう厚生省と文部省を通して求める。ここにおいて本格的に公教育の義勇軍募集への関与が

始まったのである。

こうした運動の成果であろうか、義勇軍への応募の動機の半数近くが「教師ノ指導ニ依ルモノ」が占め、それに「本人」の意志によるとする答えが続く結果となっている。

青少年たちが義勇軍に応募した動機は、当時の学校において、教師に対して児童が「いやです」「ノー」といえない教育を行っていた。それだけ義勇軍応募をすすめる教師のことばは千金の重みがあった。以上から、教育の影響、教師の働きかけが大きかったことが浮かび上がってくる。

4. ジャーナリズムの影響

新聞・ラジオ・ポスター・映画などのジャーナルズムも、義勇軍送出に貢献した。

満蒙開拓青少年義勇軍制度が創設されると、新聞や雑誌はあらそってこれを取り上げ、その国策的な意義とすばらしさを書き立てた。

ジャーナリズムの中で、義勇軍の募集・送出に最も影響を及ぼしたのは、多くの人々の目に触れる新聞であった。新聞に掲載された義勇軍関連記事、とりわけ記事や写真で報じられる義勇軍の意義や郷土小隊・中隊の記事は、義勇軍をいざなう重要な手段となった。

ラジオは、優れた速報性から満州事変後、急速に受信契約数を増加させたラジオも、新聞と並んで多大な影響を与えたものと思われる。

1939(昭和 14)年から 9 月までの半年間の満州開拓関係ラジオ放送は、義勇軍送出 2 年目で各種の宣伝が積極的に行われていたとはいえ、講演 21 回・録音 2 回・朗読 2 回・録音ドラマ 1 回・中継 3 回・ラジオ小説 1 回といった内容で、満州開拓や義勇軍に関するラジオ放送が行われていた。

映画は、拓務省や満州移住協会は、義勇軍制度を人びとに周知するため、内原訓練所や満州での訓練所における訓練の様子を撮影した実写映画を数多く制作した。

展覧会の特徴は、会期が長いこと、会場で満州移民・義勇軍に関する図書・雑誌・ポスターなどを直接見ることができたこと、講演会・映画会・座談会・移住相談会などが併設されたことである。

ポスターは、軍義勇はさまざまメデイアで描かれた。中でも、満州移住協会が発行したポスターに描かれた義勇軍は、義勇軍を志望する青少年が、最初に義勇軍をイメージする機会となった。こうしたポスターは、満州移住協会だけでなく、各県でも作成された。

雑誌『拓け満蒙』は、満州移住協会は、満蒙開拓青少年義勇軍制度が正式に創設される以前から、『拓け満蒙』誌上で、青少年移民関係の記事を掲載していた。
当該号から月刊となった第 1 巻第 5 号(1937 年 9 月)では、加藤完治の「青少年移民に就いて」と題する巻頭言を掲載し、「満移ニュース」欄で「少年移民計画具体化　本年度は 3 百名の先遣隊を」を速報し、第 6 号では「少年移民先遣隊出発」「少年移民の制度成る！—満州開拓青少年訓練生」を伝えた。当初『拓け満蒙』は無償で市町村に役場・青年学

校・青年団に配布されていたが、1938 年 1 月から 1 部 15 銭で販売された。市町村役場や青年学校など公共団体には割引価格が適用されたため、役場が購入して関係団体に配布、あるいは学校で購入して児童生徒が購読するケースが多かった。

『拓け満蒙』以外で影響を与えたと思われる雑誌は、義勇軍送出に重要な役割を演じた大日本連合青年団が発行する機関誌である『青年』、発行数が 50 万を超え、最も多くの青少年が購読した『少年倶楽部』、農村家庭が購読した『家の光』である。

漫画は、漫画に描かれた義勇軍という点では注目したい人物は、『少年倶楽部』でもっとも人気を集めた作品「のらくろ」の作者の田河水泡(本名高見沢仲太郎)である。

「のらくろ」は「野良犬黒吉」の略で、1931 年 1 月発行の『少年倶楽部』第 18 巻第 1 号から連載が始まり、子どもたちに爆発的な人気を博して 11 年間連載された。しかし、内閣情報局の執筆禁止令により、1941 年 10 月発行の第 28 巻第 10 号限りで突如中止となる。理由は、印刷用紙節約とも、国策を侮辱し軍部からにらまれたため(「のらくろ」が大陸に渡り、擬人化した熊・羊・豚が登場した)ともいわれる。

義勇軍の歌

義勇軍の歌を懸賞募集することで人びとの耳目を集め、これをラジオその他で放送して、感情面からも義勇軍の宣伝につとめたのである。

このとき 1 等に入選したのは、星川良夏という青年の作った「われ等は若き義勇軍」で、飯田信夫の手で作曲されて広く歌われ、義勇軍生活においては、行軍や訓練の際によく合唱された。

「われらは若き義勇軍」(満蒙開拓青少年義勇軍行進歌)

1．われらは若き　義勇軍
祖国のためぞ　鍬とりて
万里の涯(はて)なき　野に立たむ
いま開拓の　意気高し
　　いま開拓の　意気高し

2．われらは若き義勇軍
先祖の気魄享(う)けつぎて
勇躍夙(つと)にさきがけむ
打ちる腕に響きあり
　　打ち振る腕に響きあり

3．われらは若き　義勇軍
秋(とき)こそ来れ　満蒙に
第二の祖国　うち樹(た)てむ
輝く緑　空をうつ
　　輝く緑　空をうつ

4．われらは若き義勇軍
力ぞ愛ぞ王道(おうどう)の
旗ひるがへし行くところ
見よ共栄の光あり
　　見よ共栄の光あり

5．内原訓練所

義勇軍制度ができた初期のうちは、たいした手立てを講じなくても多くの応募者集まっ

た。こうして政府は昭和 13 年度内に 30,000 名の青少年を満州に送ることになったが、しかし現地の事情は早急を要するので、1 月中旬から全国的に募集を開始し、1 月下旬から続々内原訓練所に入所し始め、3 月上旬までに約 6,500 名の入所を完了した。

なお 2 月締め切りの第 1 期生の応募総数は 9,950 名に達し、その採用者は 7,700 余名に達したので、一部府県の採用者に対しては、その訓練所入試を延期するのやむなき盛況となった。昭和 13 年 1 月から同年 5 月末までの入所人員を、各道府県別に記すと下記のとおりである。

第 1 期生入所者

第 1 期生入所者出身府県　（単位=名）

北海道	199	宮　崎	160	鹿児島	665	秋　田	346
宮　城	376	青　森	249	岩　手	446	茨　城	345
栃　木	244	山　形	993	福　島	412	千　葉	98
東　京	80	群　馬	359	埼　玉	407	富　山	200
石　川	886	神奈川	29	新　潟	456	長　野	1,136
岐　阜	293	福　井	198	山　梨	260	三　重	120
滋　賀	110	静　岡	214	愛　知	185	兵　庫	201
奈　良	43	京　都	133	大　阪	61	島　根	84
岡　山	361	和歌山	283	鳥取	261	徳　島	170
香　川	711	広　島	361	山　口	70	福　岡	147
佐　賀	638	愛　媛	193	沖　縄	51	大　分	395
高　知	**182**	長　崎	505	熊　本	590	計	14,863

入所者の身上調査

入所者の年齢・学歴・家の職業(昭和 14 年 2 月調査)

年齢(数え年)	%	学　歴	%	家の職業	%
15 歳	1	尋常小学卒	4	農　業	77
16	10	高等小学卒	47	商　業	8
17	30	高等小学中退	3	工　業	5
18	19	青年学校卒	5	官　吏	2
19	17	青年学校中退	34	会　社　員	2
20	19	中等学校卒	2	教　員	1
21	3	中等学校中退	4	漁業その他	4
22	1	その他	1	不　明	1

訓練所の概況

内地訓練所にあてられた内原訓練所は、茨城県東茨城郡下中妻村字内原にあった。水戸市の西方約 12 キロ、常磐線内原駅から南へおよそ 2 キロの地点に、国有林 27 ヘクター

ル、民有地 13 ヘクタールを買収して建設したもので、昭和 13 年 3 月から正式に満蒙開拓青少年義勇軍訓練所となった。

日輪兵舎と呼ばれる円形の建物大小約 300 棟が松林の中に点在し、弥栄(いやさか)広場と呼ばれる広場の正面には城郭型の警備司令部や大講堂、本部、望楼など訓練所の建物があって威容を誇っていた。

内原名物の日輪兵舎は、蒙古式のパオの形を模した特殊な簡易建物で、訓練生用の宿舎は丸太を組み合わせ造った円形の板囲いの上に杉皮の屋根をふいただけの簡素な木造 2 階建ての建物だった。

内原訓練所本部

日輪兵舎

入所

義勇軍に応募し、銓衡に合格した少年たちは、内原訓練所に入所するために、各県の県庁前に集合し、歓呼の声や旗の波に送られながら、県の係官に引率されて内原訓練所に出発して行く。

内原駅に中隊長以下隊付の幹部職員が出迎え、駅頭において粛然たる隊形の下に入所者たちを集結させる。集合が終わると、中隊長が宣言、あいさつして、訓練所まで行進する。こうして、いよいよ少年たちの訓練生活が始まるのである。

引率して来た県の係官は、なお数日間内原に滞在して、入所最初の体格検査の結果を待ち、帰郷静養の要ありと認定された者を連れて帰る。

小隊編成が終わり、日輪兵舎に入って各自荷物の整理が済むと、練兵場に集まって入所式が行われる。漆黒の長髯をなびかせた訓練所長加藤完治の声がマツ林に響く。

入所した訓練生は、その日のうちにま新しい国防色の訓練服から戦闘帽、巻脚絆、地下足袋、シャツ、ズボンなどが支給され、兵舎の中には布団、毛布、食器なども準備されてあった。先輩訓練生が炊き出しをしてくれた五分搗米を食べると、休養の間もなく舎内訓練に入る。

組織と編成

訓練所長の下に本部をおき、総務部、訓練部、警備司令部、第 1～第 5 大隊本部に分か

れており、訓練生は 1 班約 20 名で 3 班をもって 1 小隊(60 名）を作り、5 個小隊(300 名)をもって 1 中隊を編成し、6 個中隊で 1 大隊を作ることになっている。班長と小隊長は訓練生の中から選任し、中隊長、大隊長には指導員が配属された。各中隊の編成は渡満後もこれを維持したまま現地訓練を行うことになっていた。

1 大隊(6 個中隊)：1,800 名:大隊長(開拓指導員)
1 中隊(5 個小隊)：300 名：中隊長(開拓指導員)
1 小隊(3 班)：60 名：小隊長(訓練生から選抜)
1 班(20)名：20 名：班長(訓練生から選抜)

この組織、編成の中で、訓練所本部が最も重視したのは、栄養部門である。ここでは訓練生自らが炊事をして、自給自足体制の中で全員の栄養を図っていかなければならないからである。そのため、ここには栄養指導部が設けられ。各中隊から 10 名選抜されてきた栄養補助員候補者に 2 か月の栄養訓練を行なう。また、ここでの特徴は、所長・訓練本部職員以下各中隊の幹部・訓練生にいたるまで、同じ食事をとることである。

６．日輪兵舎の生活と教育

住居

日輪兵舎の標準型は建坪 30 坪、 1 個小隊は 60 人用で、入り口を入ると中央が広い土間になっており、そこに荒板張りの長テーブルと 60 個の丸椅子がならべてある。荒板テーブルが、食卓になり、また手紙を書いたりする机になる。そして土間の周囲には、板壁に沿って床板が二段に張られおり、60 人の少年たちがその二段の床板に上で起居する。少年一人当たりのスペースは、畳一畳ほどであって、夜は頭を壁側に、足を土間に向けてまるで番傘の骨のように並んで寝るのである。

ある隊員の手記に、夜寝ていると 2 階からおしっこ(寝ションベン)が落ちてきたと書いてある。

衣生活

入所時に下着、帽子、上下服、靴、巻脚絆など所定の物が、各位に支給された。制服以外の服装は自由を許されず、陸軍の兵士に似た褐黄色の制服・制帽を支給され着用した。下着など私品も許されていたため、衣服に関しての不満はあまりなかった。

食事

食生活となると、少年たちの不満の声が高くなる。少年たちが困ったことは、食事の分量が極めて少ないことであった。

炊事は当番制で少年たちがやり、総務部に栄養本部というものがあって、食事の献立と材料の配給にあたり、普段は 5 分搗米または胚芽 7 分搗(つき)米で、副食はみそ汁、煮マメ、た

宿舎内での食事風景

くあんが基本で、米麦混合飯に一汁一菜の簡素な献立で職員も同じだった。

満州に渡ってから困らないようにと、大豆、小麦、高粱など現地材料だけで調理した食事も多かった。たとえば、饅頭、豆もやし、豆乳、パン、ビスケットなどであった。

残飯の処理も一つの教育であるというので、お櫃に残ったものは飴に、茶碗に食べ残したのはブタの飼料に、さらに流しに落ちた炊事場から流出するものは養魚池に引いてコイの飼料にすることを教えられた。

このように、内原訓練所での生活はすべて訓練に連なり、開拓訓練即教育であった。

保健衛生

保健衛生には特に注意が払われ、初年度 1938(昭和 13)年の記録には、内・外・眼・歯科の診療室が各一つずつ、7 名の医師が配属されていた。200 名のベッドを備えた病舎があり、9 名の看護師と 2 名の看護人がいた。

衛生看護にも訓練生の手で営まれ、衛生班の訓練生には簡単な看護術が教えられたが、注目すべき特色は、「一気寮」という灸療所が設けられていたことである。点灸術は渡満後の僻地の訓練所生活、開拓団移行後の傷病の予防、治療に役立てようとの配慮から採用されたもので、内原訓練所時代から実効をあげていた。

義勇軍の一日の生活

午前 5 時半、訓練本部の大太鼓が打ち鳴らされ、警備本部衛兵所のラッパ手が 2 人、礼拝台に佇立して東西南北に 2 度ずつ起床ラッパを吹奏して起床する。午前 6 時、全員中庭に集合して小隊ごとに点検し、中隊長に報告。そのあと 7 時まで朝の礼拝行事が行われる。

中隊長が礼拝台に上で、ゆっくりと 2 拝 2 拍手 1 拝。そのあと「あっぱれ、あなおもしろ、あな手伸し、あなさやけおけ」続けて、「すめらみこと弥栄(いやさか)、弥栄、弥栄！……」と天皇陛下に弥栄を三唱し、義勇軍綱領を唱える。この朝の礼拝は、義勇軍生活訓練の基本であった。この朝の礼拝を欠かせて義勇軍の生活はなかった。

礼拝のあとは、「日本体操(やまとばたらき)」と、朝食前に整列して 4 キロ程の駆け足である。駆け足は訓練生たちの気力、体力、団結力を修練するのにもっとも効果的な手段だというので採用された訓育方法であり、日本体操は加藤の恩師筧克彦(かけいかつひこ)博士の創案にかかる皇国農民体操である。

日本体操

加藤完治の恩師で古武道論者の筧克彦(かけいかつひこ)博士の創案の皇民農民体操で、加藤所長が「皇国精神、武道、農業」の三位一体の象徴として取り入れたという。『古事記』の中の天孫降

臨の神話を織り込んで祝詞が多く、動作はゆっくりで、体操とよべるほどのものではない。日本人のやまと心を養うにはもっとも大切な農業と、それに携わる者の精神を簡潔に表現したものがこの皇民農民体操である。

日本体操の様子

まず「立て」の号令で、安らかな気分で正常直立の姿勢をとり、敬礼をし、両手を左右に開いて静かにおろす。そして「みたましずめ」で目を閉じ、精神を鎮め、呼吸を整える。次に「おろがめ」で天地にたいし敬礼をし、いよいよ運動に入る。「抛(ほう)げ棄て」で世のよごれ身の濁りを棄てる運動をし、「吹き棄て」で深い呼吸をするとともによごれをと遠く吹き払い、「いざ進め」で高らかに足踏みをしつつ理想に向って邁進する意気をあらわし、「いざ漕げ」で海原を漕ぎ分け、理想境へと突進し、「舞い上れ」で高天原の神のみ元へ参る心をもって両手を高々と天に開き、「息吹木」は「吹き棄て」と同じ深呼吸をするのだが、その心は前と反対に、清められた心をもって世を美化するために気を吐くのである。それから四種の「神（かむ）遊び」があり、「天晴れ、あなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ」の復唱をする。そして最後に「三大神勅」を奉読して「天皇陛下(スメラミコト)の弥栄」を三唱する。

加藤完治は、皇国精神と武道と農業の三者の神髄がこの〈やまとばたらき〉に象徴されていると信じ、内原訓練所の少年たちに、朝に夕にこの体操を行わせた。

訓練日課

訓練日課表

時　刻	合　図	行　事
6：00	太鼓　ラッパ	起床(夏 5：30)
6：30→6：40	ラッパ	点呼
6：40→7：00	太鼓	礼拝・体操(武道又は作業)
7：30	ラッパ	朝食
8：30→11：30	ラッパ	学科・教練・武道・作業
12：00	太鼓　ラッパ	昼食
13：30→16：30	ラッパ	作業・教練・武道・学科
17：30	ラッパ	夕食
18：00→20：00		入浴・自習・放送・唱歌
20：00→20：10	ラッパ	点呼・礼拝・就寝
20：30	太鼓　ラッパ	消灯

（水戸市内原郷土史義勇軍資料館）

義勇軍は戦争をしに行くのではなく、りっぱな開拓農民として大陸の広野に立のが目的であるから、それに必要な精神力、体力、知識、技能を十分授けておかなければならない。それもただ教えるというだけでは実際の役にたたないので、本当に訓練生たちの血となり肉となるように教えなくてはならなかった。しかし、内原での訓練期間は通常２カ月間であるから、心構えを作ることに終始した。

朝食後の訓練内容に「学科・教練・武道・作業」として組み込まれていた訓練は、「内務訓練」「農事訓練」「教練」「武道」「教学」「特殊訓練」の６つに分けられていた。

学科は、皇国精神、満州植民問題、満州事情、満州農業要綱、栄養食物問題、生理衛生、軍事講話、国語、日満歴史、地理、満州語、習字など。

内務訓練は、「宣戦の大詔」「軍人勅語」「教育勅語」、集団生活や衛生に関する指導。

農事訓練は、農具の基本的な使用法、開墾、除草や農業労働の意義や重要作物の栽培法を学ぶ。

特殊訓練は、満州の生活に必要な技能を訓練する科目で、「縫製」「農産工芸」「農産加工」「林産加工」「畜産」「ラッパ鼓隊」「鍼灸」などの訓練。

教練は、軍事訓練であり、軍事訓練は義勇軍教育でもっとも重視された。匪賊（ひぞく）が出没するという現地の情勢上、そして対ソ連国境防衛や満州国の治安維持などの役割を期待されていることから、本格的な訓練が要求されたのである。片手に鍬、片手に銃という開拓時代の農民には軍事訓練はかかせない。

武道は、直心影流法定の型が重視された。

ラッパ鼓隊訓練

武道訓練

軍事訓練

開墾訓練

作業訓練は、訓練所創設期の午前中は、日輪兵舎の建築や木工、鍛工等が多かったが、第3次以降になるとたいていは資材の運搬や溝掘り、土運びなどの土木の仕事が多かった。午後はほとんど雑木林の開墾作業であった。マツ林を切ってその根株を掘り抜き、伐った材木を運搬して日輪兵舎の用材にするのである。

訓練生たちは農具舎から貸し出された開墾鍬をかついで、行軍歌を歌いながら目的地に辿り着くと、いっせいに散開して抜根作業にとりかかる。

「掘った木の根を見れば、その人間の性格がわかる！」加藤所長は現場を回って、口癖のようにそう言った。「百姓だけは嘘の利かない仕事だ！」、「人の目に見えない所に力を入れる」ことこそ、加藤所長が訓練生に教える開拓農民の精神であった。

少年たちの受けとめたもの

掘立小屋のような日輪兵舎に鶏のように詰めこまれ、物質的に不足しがちな生活に加えて、加藤完治の農本思想による極端な精神主義的・国家主義的な教育と訓練は、少年たちにどのように受け取られていたか。

少年たちが義勇軍に応募した根本の理由は、そうする以外に身の立て方がないという社会的・階層的な問題があったが、一方また、満州国を「五族協和」の「王道楽土」たらしめようという義勇軍のスローガンを、額面どおりに信じたところにもあった。少年たちは、真面目で正義感が強ければ強いほど、内原訓練所の精神主義的・国家主義的な訓練に忠実にしたがおうと心底から努力したのである。

義勇軍には「満蒙開拓青少年義勇軍手牒」というものがあって、全員に手渡されており、その中には多くの教訓が記されていた。まず巻頭を飾るのは「青少年義勇軍綱領」で抽象的にかかれている。が、それを具体的に箇条書きに書かれたのが「青少年義勇軍心得」で、簡潔明瞭で、少年たちのこれを遵守実践すれば「綱領」に叶うものとされていたのである。

全部で26条にもおよぶ「青少年義勇軍心得」を紹介する。

1、古ノ武士ニ負ケルナ	1、生命ヲ尊ビ死ヲ怖ルナ
1、仲良クセヨ	1、常ニ工夫セヨ
1、他民族ヲ敬セヨ。	1、家ヘ便リヲ欠カスナ
1、他人ニ親切ニセヨ	1、楽ハ人ニ譲リ苦ハ己ニ引受ケヨ
1、規律ヲ重ンジ命令ニ服セ	1、歩哨ハ任務ヲ厳重ニ守レ
1、武器ハ大切ニ手入レヲ怠ルナ	1、農具モ武器ト心得ヨ
1、部屋ハヨク整頓セヨ。	1、灯火ハ外ニ洩ラスナ
1、火ノ用心ヲセヨ	1、水ヲ粗末ニスルナ
1、独リ外出スルナ	1、堂々ト歩ケ
1、口ヲ堅ク結べ。	1、雑談ヲ止ヨ
1、愚痴ヲ言ウナ	1、元気一杯デ働ケ

1、丈夫ナ時ハ身体ヲ鍛練セヨ　　1、病気ノ時ハ医者ノ言ウコトヲ守レ
1、生水ヲ飲ムナ　　1、毎週夜具類ヲ干セ〉
そして多くの少年たちがこの「心得」に忠実にならんと務めたわけである。

【参考資料】
◆1942 年 12 月 31 日高知新聞朝刊
“東條さん　内原訓練所で一泊　膝つき合せて土の戰士激勵”

東條さん
内原訓練所で一泊
膝つき合せて土の戰士激勵

(内原發)増産尖兵たらんと茨城縣内原訓練所の合宿猛訓練にいそしむ 1 萬 5 千の土の精鋭と膝をつき合わせて激励しようと東條首相は 29 日の閣議終了とともに歳末の多忙をよそに内原訓練所を訪れ鍬の若人達を感激させ・・・・いつもながら元氣一杯の東條さんはこの日の午前中行はれた本年最後の閣議が終わると中食もそこそこに珍しくも**国民服**に身を固めた上にねずみ色のオーヴァと鳥打帽の身軽ないでたちで午後 3 時上野發夕闇たちこめる午後 5 時 28 分内原驛着、石黒農報推進隊長の案内で内原国民高等学校女子部に就き加藤完治校長らと共に満洲國東寧報國農場で作り明治神宮の神前に供へた御餞米で炊いた夕飯を生徒同様の献立で舌つづみを打ち午後 7 時から加藤校長、石黒推進隊長の先導で折柄座談会を開催中の推進隊員宿舎日輪兵舎を巡歴した。嚮導隊の部屋では円形の兵舎内に中央のストーブを囲んで圓座した逞しい隊員 50 名が法被姿、百姓そのもの西村嚮導隊長の司會で活發な討論を續けてゐる。(以下略)

3 カ月の訓練期間

義勇軍の内地訓練所における訓練期間は 3 カ月で、その期間が過ぎるとすぐに渡満、現地訓練所へ移されるのが規則であった。この訓練期間 3 カ月というのが、どのような根拠から定められたのかは不明である。

満蒙開拓青少年義勇軍の理想を信じきって入隊してくる少年たちは、その緊張感をしばらくは持続させることができる。しかし、少年たちが訓練所生活に慣れると同時にその緊張もほぐれ、さまざまな形で反動がやって来る。

そして義勇軍の指導者たちは、少年たちの心理的緊張から弛緩・反動への移行期間を約 3 カ月と見て、内原訓練所へ入れて 3 カ月経ったら現地訓練所へ連れて行くように定めたのであった。地つづきの国内にある内原訓練所とちがって、満州は荒海をへだてた遠くにあり、そこまで連れて行ってしまえば、少年たちがたやすく脱走・帰国することは不可能だったからである。

あこがれの満州へ

内原訓練所で３カ月の訓練を終えた義勇軍の門出は、可能な限りの勇壮を旨として演出された。「心身を鍛練し、建国精神の徹底及共同生活の涵養を期す」ことを目的に３カ月の訓練生活を終えて満州へ出発する訓練生は、新品の衣類一式を支給され、洗面具、裁縫用具、飯盒（はんごう）、水筒などをリュックサックに入れる。渡満に備えて健康診断、予防注射を受け、訓練生たちは正装姿で小隊ごとに日輪兵舎前で記念写真を撮る。

そして渡満名物の「鍬の柄」が支給される。開拓の象徴ともいえる鍬は、一人一本が支給され、刃の部分は手荷物として梱包して送り、柄だけを持参、鍬の柄を立てて着席し、車内で眠るのもそのままの姿勢。鍬の柄はいわば兵士の銃のようなものであり、移動中の規律を守るのにも役立つ持ち物であった。

渡満壮行式は、出発前日か数日前に、内原訓練所の弥栄広場において、関係大臣や名士など多数が参列し、激励や訓示が訓練生に送られた。「丈夫で、仲良く、迷わずに」が壮行式での加藤所長の訓示である。

義勇軍の制服・制帽に身を固め、大きなリュックサックを背負い、樫の木でできた鍬の柄を銃のように担ぎ、渡満中隊の少年たちが、ある時はラッパを鳴らし、ある時は「われらは若き義勇軍」の歌を歌いつつ、内原駅まで行進して行く。

日輪兵舎前で記念撮影

鍬の柄を担いで内原駅へ

訓示中の加藤所長

渡満中隊は、常磐線で東京に出、皇居の二重橋に整列して「天皇（すめらみこ）、弥栄」を三唱。それから郷土部隊であれ郷土を訪問。さらに伊勢神宮に参拝したのち敦賀・新潟・門司などに向かい、そこから乗船した。

少年たちは、時として、皇族が臨席することもあり、巧みに演出された壮行式によって、いやが上にも異国の地へ行くのだという悲しみを更に大きな勇壮感で打ち消して、日本海を北へ渡る船に乗ったのである。

渡満コース

義勇軍の渡満部隊がとるコースは４つあった。

①上野駅から上越線で新潟、日本海を渡って清津に行く。
②東海道線を利用して敦賀に行き、そこから清津に行く。
③東海道線と山陽線を乗り継ぎ、神戸もしくは下関から黄海を渡って大連に行く。
④同じ鉄道路線で下関から関釜連絡船で釜山へ、朝鮮半島を縦断して満州に向かう。

当初は、神戸から大連へ、あるいは敦賀・新潟から清津への船便を利用する路線が一般的であった。日本海を渡って朝鮮半島の清津・羅津に上陸するルートは、戦況の悪化に伴って機雷や潜水艦による攻撃で危険とされ、関釜航路を選ばざるをえなくなる。

７．現地訓練所

あこがれた満州へ

少年たちは、巧みに演出された壮行式によって、いやが上にも異国の地へ行くのだという悲しみを更に大きな勇壮感で打ち消して、日本海を北へと渡る船に乗ったのである。

着いて少年たちがまず驚いたのは、その自然のきびしさと、その自然の中で暮らしている中国農民の汚さとであった。

見なれた日本の風景とはまったく違い、見わたす限り草原また草原の眺めは異様であった。そして、温暖多雨な日本と全く違った大陸的気候の、冬になると零下 30 度にもなる寒気のすさまじさが少年たちを苦しめた。鶴嘴(つるはし)を力いっぱい振り下ろしてもはね返ってしまうほど凍てついた大地の上をシベリア渡りの寒風がふきすさぶ。

きびしい自然に加えて、はじめて見る中国農民の非衛生な姿。隊員たちは、内原訓練所で、満州の自然とそこで生活する中国人の話は聞かされていたが、ほとんど実感をともなわぬものであった。満州の厳しい自然とそこで暮らす中国農民の実態にふれて、少年たちは驚かずにはいられなかったのである。

渡満した少年たちは、到着すると各地にある現地訓練所に入所したのである。

現地訓練所の構成

現地訓練所での訓練期間は 3 カ年である。現地訓練所は大別して大訓練所と小訓練所とがあって、大訓練所の訓練期間概ね 1 カ年とし、渡満当初はまず開拓民としての必要な基的訓練を実施し、小訓練所の訓練期間は概ね 2 カ年とし、大訓練所の訓練と一貫して、さらに農事実務訓練を少年たちに徹底させる計画であった。

現地訓練所入所式

第 1 次の隊員しかいなかった 1938(昭和 13)年には、北安省の嫩江(のんこう)、黒河省(くろかわしょう)の孫呉(そんご)、牡丹江省の寧安(ねいあん)、北安省の鉄驪(てつれい)、および三江省の勃利(ぼつり)の 5 カ所に大訓練所が建設され、1939(昭和 14

年、第 1 次訓練生を移行させる必要から諸方に小訓練所が設置されはじめ、昭和 16 年には全満州に 94 もの訓練所が完成したのである。

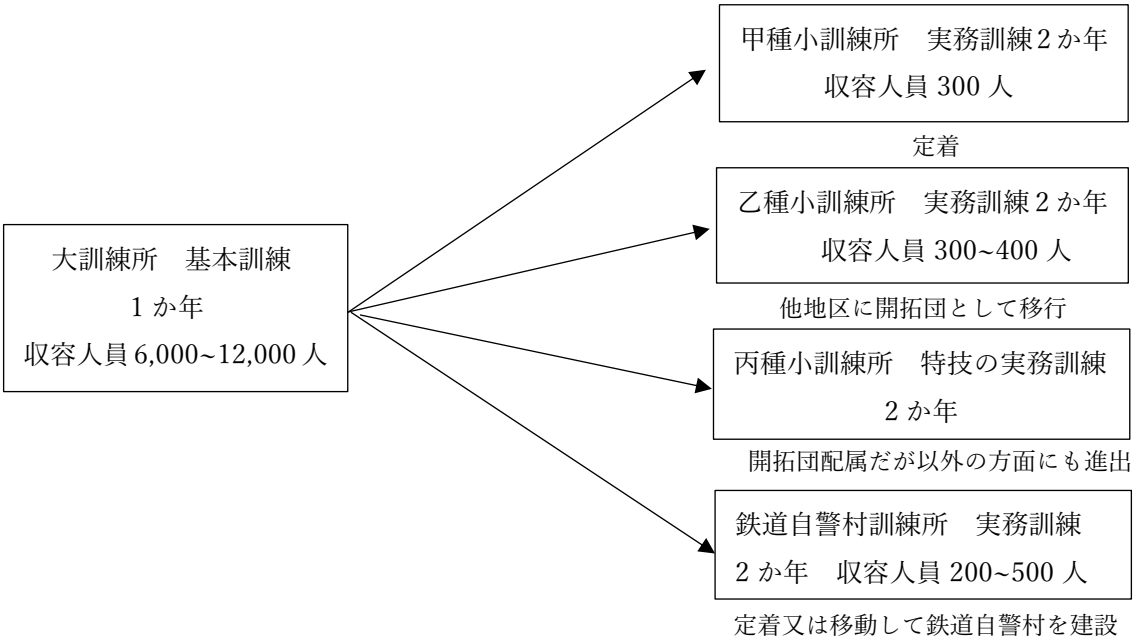
組織の概要

訓練所の組織と内容等については、創設当初と昭和 15，6 年頃とでは格段の進歩を遂げているが、一応形式の完備した昭和 15 年頃につて、その概貌(がいぼう)を記録する。

大訓練所の組織は、所長、副所長の下に訓練所本部(通常は「本部」という)を置き、本部は総務、経理、訓練、増健の 4 分に分かれており各部にはそれぞれ部長があり、各部はまたおのおのの係に分れて所管事項を担当している。

訓練生は 50 名を以て 1 個小隊を編成し、小隊長は訓練性より選任し、6 個小隊を以て 1 個中隊を編成している。この 1 個中隊 300 名は訓練の基本かつ核心的単位であってその結合は鞏固である。中隊長を主班に 6 名の中隊幹部がこれを統率し、さらに、5 個中隊 1,500 名を以て 1 個大隊を編成し、大隊長がこれを統轄し、大隊長の下に大隊本部を組織し大隊付各種職員を配備し、大隊訓練ならびに事務をとっているのである。

義勇軍訓練過程略図（昭和 15 年度『満洲開拓年鑑』から作成）



現地訓練所の立地

「義勇隊の本質とその将来の発展を考慮し、国防的要請と義勇隊開拓団入植の背後地に重点を置いて」定めた。そのため、ソ連との国境地帯また一般開拓団よりも悪条件の地域に設置されることになった。したがって訓練所の多くが鉄道の最寄駅から遠くへだった地にあった。下記の表から、大訓練所の設置場所は最寄駅から遠くても 40 キロ以内であるが、小訓練所の多くが鉄道の最寄駅から遠く離れた奥地の不便な地に建設されていること

が分かる。

最寄駅からの距離

大訓練所名	降　車　駅	距　離	駅よりの交通	所　在　地
勃利大訓練所	勃　　利	40 キロ	バス 1 日 2 往復	三江省勃利県
鉄驪大訓練所	鉄　山　包	4	トラック	北安省鉄驪県
嫩江大訓練所	八　　洲	4	トラック	北安省嫩江県八洲
寧安大訓練所	東　京　城	16	トラック	牡丹江省寧安県沙蘭鎮
対店大訓練所	海　　北	31	トラック	北安省海倫県海北鎮
小訓練所名	降　車　駅	距　離	駅よりの交通	所　在　地
烏蘇里小訓練所	虎　　林	40 キロ	トラック先は馬	東安省虎林県
驍河北進寮	虎　　頭	90	車	東安省驍河県
孫呉訓練所	孫　　呉	30	汽船	黒河省孫呉県
興安訓練所	海　拉　爾	160	トラック	興安北省爾克納左翼旗
不二訓練所	浜神線慶城	52		北安省慶城県
大椅山訓練所	寧墨線嫩江	75		北安省嫩江県

訓練所用地

1938(昭和 13)年度に建設された 5 大訓練所の総面積は、約 20 万 8,000 ヘクタール、うち「既耕地・未墾地」の別が分かる嫩江・孫呉・寧安・鉄驪の 4 訓練所の可耕地は 8 万 9,000 余ヘクタール。その中で約 14%の 1 万 2,600 余ヘクタールは既耕地であった。

8．訓練生の生活実態

渡満する隊員たちは、内原訓練所では満州の苛酷な実態についてほとんど知らされていなかった。現地について初めて過酷な現実に触れ、青少年は、訓練所とはいえ、天地根元造りといわれた掘立小屋の宿舎、訓練所の周囲は茫々たる草原に強いショックを受けた。満州の実態は聞くと見るとでは大違いの現実に立ちすくんだ。特に満州での高粱(こうりゃん)飯など劣悪な食事に仕方なく隊員たちは、自分の所持品を現地の人々の食糧品と物々交換した。隊員たちはこれを「マイマイ」と呼んだ。

このように常に空腹にさいなまれた訓練所生活は、「ある者を凶悪化させ、ある者を怠惰に押しやり、またあるものを屯墾病(ノイローゼ・精神疾患)」にかりたてた。その結果どんな意志の強い者でも屯墾病にかかり、脱走者が後を断たなかったのである。

だが、当時の満拓関係資料による衣・食・住・生活訓練などの関する義勇隊の公式発表では、当時の訓練生にはよだれの出るような事実が記されている。果たしてそのとおりの生活がなされていたかどうか。総じて、満拓など開拓推進当局が作成した資料には、宣伝文句が多い、とにかく理想と現実とは食い違う本当の義勇隊の生活はどうであった。以

下、公式発表と訓練生の実態を比較紹介する。

衣(被服)

被服に関して下記のように記されている。

被服は実質本位とし、訓練生の品位を保ち日常生活に支障を来さないように十分配慮し、支給標準によって一切満拓公社でこれを支給している。

そして、その制作については夏衣袴、防寒衣袴。布団等の主要なものは原料を直接購入し、奉天で 2、3 の主要被服会社に委託制作せしめ。その他のものは内地あるいは満州の商人から既製品を購入して配給した。

被服類支給標準

帽子(微章)、制服衣袴、巻脚絆、ズック靴、リュックサック、防寒帽子、防寒外套、防寒衣袴、防寒大手袴、満服上下、夏衣袴、腹巻、日除笠、除虫面覆、雨外套、ゴム長靴、軍手、マスク、敷布団、掛布団、掛毛布、敷布、掛布、枕＝それぞれ 1

地下足袋、防寒ゴム底靴、夏肌着上下、冬肌着上下＝それぞれ 2

体験者の証言によれば

特に農事と軍事訓練に力を注いでいた小訓練所では、野外で作業をすることが多く、衣服類の消耗がはげしかった。その破れた制服や外套を、少年たちは自分で継ぎ接いで着ていた。毎年新品を支給する訓練所と、3 年間 1 回の訓練所とに分かれていて、不公平な取り扱いになっていた。

また、「渡満の際に支給された服は、すでにあちこち繕いだらけで寒さを防げないので、私達はウサギの皮などで、防寒服や防寒帽を作りました」という記述や、「多数の者は故郷より送付してもらって着用」しているという記述がある。

制服・制帽は、着ているうちに色が褪せて来るので、少年たちは食糧庫から盗み出したカレー粉で染め直したという話があった。

寝具は極めて薄く、冬期の宿舎で燃料が不足するため、常時オンドルやストーブを焚けない中隊では、防寒着を身につけて寝るしかなかった。また、訓練生はシラミに悩まされていた。

第 1 次義勇隊訓練生の菅野正男さんの『土と戦ふ』の中に、

「日曜でも休むのはたいてい午後だから、ろくに洗濯もできず、垢のついた着物を着ているし、入浴も 1 週 1 回くらいだからシラミがついた。だんだんだれにもついていることが知れると、シラミ捕りをした。もしこの有様を親たちに見せたら、さぞかし涙ぐむことであろう。先生方にもついたと言っていた。シラミがチフスの媒介をすると言うので、大隊命令で各人の下着やさるまたをまとめて、ふろで煮沸しシラミ退治をした。3 度もやったが、なかなかシラミはなくならなかった」と書いている。

食(糧食・食事)

訓練生の栄養は発育状態、季節、職務、運動、嗜好その他種々の条件に関係が深く一概に断定し難いのであるが、だいたい 16 歳ないし 20 歳までの発育旺盛期にある者の熱量は約 3,700 カロリー、タンパク質は 120 グラム程度を適当と認めてこれを実施している。

① 主食としては無砂 7 分搗米を使用し、訓練終了独立入植の際の心構えを考慮して、精粟を少量混入したのであるが、その後廃して麦を混用した。

② 副食としては出来るだけ野菜類の自給自足を図るとともに、獣、魚肉類、乾物、海藻、缶詰、調味料その他を購入して調理していた。

③ 間食としては毎日 3 時頃、饅頭、豆乳、汁粉、果物等を交替で与えていた外、1 週 1 回ないし数回、煎餅、カリント、その他の菓子を栄養部の手により製造して支給していた。

第 1 次義勇軍の食事は内地訓練所よりも粗末だったが、分量については概(おおむ)ね満足できるものだった。しかし、第 2 次義勇軍以降の食事はさらに粗末になり、激しい作業や訓練を強いられながら、極めて少ない分量しか食べることができなかった。

第 2 次義勇軍以降の体験者の証言には、

食事に満足したというものは全くなく、飢えを凌ぐ方法として、訓練所の近くの川で魚を捕って食べた、収穫の終わった畑で大豆を拾ってきて空缶に入れて煎って食べた、栗などの木の実を採ってきて焼いて食べた、蛙や蛇を捕まえて食べたなど、とにかく腹を満たすために必死だったことが窺える。訓練生たちは常時空腹の状態に置かれていた。

訓練生が当番で作る食事は粗雑で、副食も味噌汁等の一汁ばかり、食欲をそそるものではなかった。育ち盛りの食べ盛りの少年たちを待っていたのは、このような貧しい食生活の訓練所であった。食糧生産を表向きの任務とした義勇軍が、満州在住日本人になかでも最も食糧の欠乏に苦しんだ。

ある体験者は、「嫩江(訓練所)での辛い思いでとしては何と言っても砂まじりの箸にもかからんぽろぽろの粟飯にアカザやタンポポの葉 5、6 枚のじゃっぱ汁に、沢庵 2 切れが思い出されてならない」と述べている。

絶対に欠かすことのできない、飲料水を供給する井戸は、冬期は凍結との戦いであった。大半の井戸の水質が悪く、その上に非衛生的な所にあるので、生水を飲んだ者はたちまちアメーバ赤痢にかかって苦しまなければならなかった。

空腹に耐えかねて、禁をおかして生水を飲み、生野菜をかじる者があとを絶たず、赤痢等で死亡する隊員が各訓練所にみられた。 これら元隊員の証言は、現地の実態を赤裸々に示している。

住(宿舎)

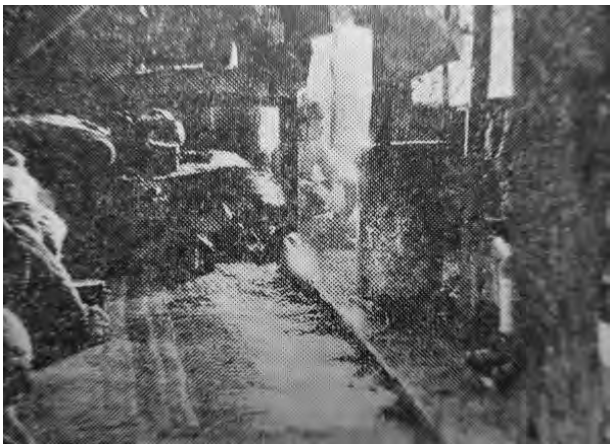
現地訓練所には、大訓練所と小訓練所とがあって、大訓練所では基本的訓練を 1 年間、小訓練所では農事訓練と軍事訓練を 2 年間行うようになっていた。これら現地訓練所に

は、一応ではあるが設備が整って生活に不自由を感じないという例もあったが、特に、第1次入所生の少年たち は、その宿舎から自分たちで建てねばならなかったところが少なくなかった。

体験者の証言によれば、満州では、木材が得にくく、加えて寒気がきびしいので、保温のよくない木造の家は建てずに、固有の暖房具であるオンドルを備えた土煉瓦積みの家屋をつくる。

宿舎は小隊ごとに建てられたが、その構造は、柱や骨組は木材、壁は土で固めたレンガを積み、天井と屋根のあいだに土または草を厚く置き、屋根は湿地に自生する洋草で葺く、という粗末なもので、体験者の手記には、オンドルやストーブを焚いても翌朝起きると、布団や口まわりは吐いた息で白く凍っていたなど述べている。

アンペラ宿舎は聞くと見るとは大違い。早速兵舎造りが始まる。天地根元造りの兵舎である。三角形(長さ5メートルほどの10センチ角材を双方から寄せ掛けた三角型で幅5メトル長さ30メートルほどの掘立小屋。屋根はアンペラ(日本のむしろ=高粱の皮を編んだ)葺きの中に通路両側に頭を内に寝る。地面に干草を敷き、アンペラを敷く。外に排水溝を掘り、アンペラで囲う。夜は月の光が入ってくる。入り口は南京袋を広げて吊るす。朝方には布団の上に白く霜が降りていた。



アンペラ小屋の内部

1938(昭和13)年第1次義勇隊訓練生で4月25日に入所した菅野正男さんによると、アンペラ張りの三角屋根の建物が経緯の線をそろえて建っていた。その宿舎に入れられるかもわからず、凍った地面へ敷いたアンペラの上に腰を下ろして休んだ。中隊ごとに整列して割り当てられた宿舎に入った。 身体の温かみで、布団や毛布が暖まっても、わたしは眠れなかった。寝ていると、いやでもアンペラ張りの屋根と、それを通してくる外の明るさが痛々しく目にしみる。地均しもせず地面からじかに柱を立てて、三角に組み立てた骨組へ、アンペラを二重に張って屋根のみのような建物は、りっぱなレンガ造りの宿舎を想像してきたわたしたちに幻滅を感じさせた。私は、ふと内原での楽しい生活を思い出して、現在かくあることが夢ではないかと思われた。友達は皆寝てしまって、舎内は死んだように、ひっそりとしていた。

朝から雨の降る日は、作業ができないから、たいてい休みだ。アンペラの屋根からは、所きらわず雨が漏り、布団はぬれるけど、やり場がない。皆は油紙や新聞紙を張ったりしたがそんなことで防げるものではなかった。夜はしかたないから、雨漏りの少ない場所へ重なり合って寝た。ビシャビシャとアンペラを打つ雨の音は、強くなったり弱くなったりして、妙にもの寂しかった。」と書いている。

また当初は風呂設備のない訓練所が大半で、長いときには半年も入浴しなかったため、誰にも彼にもシラミが湧き、疥癬(かいせん)が蔓延(まんえん)してなかなか治らなかったのである。

医療・保健

義勇軍募集要綱には、「訓練所には所長以下多数の指導員ありて指導、訓育にあたる外、専属医師を拝して医療、保健に当らしむ。」とある。

データを確認できる1941年3月末時点で、医師が配属されている訓練所は、全訓練所90箇所に対して、わずかに36箇所(全体に40%)しかなかった。54箇所は医師のいない訓練所で、命にかかわる急病が発生しても手遅れになるケースも多かった。

医療体制が十分でなくても保健体制が充実していれば病気の発生を防ぐことができるが、飲料に適さない井戸水、汚水が浸透する井戸の構造、病原菌を媒介する蠅の放置、洗面器等の共同使用による伝染病の蔓延など、訓練生が極めて非衛生的な生活を送っていたことが分かる。

生活訓練

義勇隊の訓練は一面からいえば生活訓練であって、軍事訓練も教学訓練もすべてこれを一如に総合して生活訓練として実施すべく考慮せられていた。そして日常生活の指導においては特に皇道精神を体得し、満州の気候風土に順応せしめ、所内においては新しい生活様式を創造して健全な共同生活に徹し、外においては原住民との協和を実践して訓練成果の生活化を期すべく、特に下記の諸点に留意していた。

①皇民修練　②協和訓練　③内務訓練　④共同生活訓練　⑤団体規律訓練　⑥保健衛生訓練⑦情操陶冶　⑧時事に関する訓練

訓練標準日時数及び日課

下記の表は、大訓練所における訓練日数を表した表である。訓練日数は1年間240時数、1440時間の実施を目標(一日平均6時間)としている。

	大訓練所		小訓練所	
科　目	適時数	年時数	適時数	年時数
終身公民	1	40	1(2)	40
普通学科	5	200	3(5)	120
農　業　科	8	320	7(8)	280
軍　事　科	5	200	5	200
作　　業	15	600	18	720
語　　学	2	80	2(1)	80
計	36	1,440	36	1,440

(満洲開拓史復刊委員会編『満洲開拓史』)

日課

訓練所における日課は、夏期は午前 6 時起床、午後 9 時半消灯、冬期は午前 7 時起床、午後 8 時半消灯とし、さらに夏期にあっては戸外作業を主とし晴耕雨読の方法をとり、昼食後適当なる午睡をさせるなど、その休養について配慮している。また冬期にあっては教学に重点を置いている。

日課表

	時　　刻	行　　事
午前	6：00	起床(冬期は 7 時)
	6：30～6：40	点呼
	6：40～7：00	禮拝・體操(武道又は作業)
	7：30	朝食
	8：30～11：30	学科・教練・武道・作業
正午	12：00	昼食
午后	1：30～4：30	作業・教練・武道・学科
	5：30	夕食
	6：00～8：00	入浴・自習・放送・唱歌
	8：00～8：10	点呼・禮拝・就寝
	9：30	消灯

（満洲開拓史復刊委員会編『満洲開拓史』）

体験者の証言によると、1944（昭和 19）年 3 月に勃利大訓練所に入所したある朝は起床後点呼、中隊毎に朝礼（日・満両国旗掲揚、宮城遥拝）、点呼（各小隊毎上司に報告）、日本体操（やまとばたらき）。夜は小隊兵舎ごとに就寝点呼及び2名ずつの不寝番、2 時間交代。

夏は、雨以外の日は朝食前に農作業、主として除草約 1 時間。大陸での夏は雑草とのたたかいであり、一夜で 5 センチほど伸びる雑草を炎天下で相手にするのは重労働である。「心身を鍛練し、同時に技術を習得する」などの綺麗ごとではなかった。

冬は、「学科には皇民課云々」とあるが、主なものは軍歌、義勇隊の歌、詩吟などの練習。一般的には精神講話の類で、加藤完治氏の皇国農本主義、東宮大佐の武装移民の武勇伝などが語られ、文化的な面など全くなかった。また「必要な専門語学科」の講義などなきにひとしかった」と話している。

満州紀行

1939(昭和 14)年、農民文学懇話会に属していた作家の島木健作が北満の勃利訓練所を視察し、親しく義勇軍の少年たちと膝を交えながら、訓練所での生活の様子を、その紀行文『満州紀行』の中に書いている。夜、各小隊から何名かずつ出て小さな集まりを持ってくれた。何より先に彼らが語ったのは、苦しかった去年の思い出だった。

私は訓練生の言葉に従って書いている。少しも誇張していない。私はほとんど黙って話

を聞くだけだった。私はたくさんの事を聞いたが、少年たちがこうもあって欲しい、ああもあって欲しいと心から望んでいることを、書き記しておこうと思う。これらは少年たちの切実な声なのである。

訓練生たちの話

1　小遣銭のもらえぬことが苦痛である。渡満してからは、ほとんどみんなが故郷から金を送ってもらっている。しかし、自分の家は貧乏だし、それに小遣いはもらえるとの話だったから、今さら家へも云ってやれぬのである。

2　すべて公費でまかなわれているのだし、奥地にいて金を使うこともあるまい、小遣いはいらないだろうと思うのはまちがいである。配給の不敏速と配給品が当を得ていないことが金の要る第一の原因である。たとえば石鹸のようにたいしていらぬものが、すぐに 20 もたまる。しかし地下足袋は年わずか 2 足である。地下足袋がなくては作業にも出られぬ。しかたなく貯金を下ろして配給品の不足を補うことになる。地下足袋は 1 足 2 円 50 銭する。

3　ここの訓練所独自の考えで、酒保を作ったが（伝票制度、月 1 円50銭まで）すぐに取り止めになった。これも品物の配給がうまくいかぬと、組織の不完全のためであった。

（酒保：旧日本軍の兵営・施設・艦船内で、士官、兵に日用品・飲食物等を売った店）

4　7 月から 8 月にかけて、赤痢流行の時の薬の配給が不十分である。

5　読みものに対する要求は非常に強い。読ものにいろんな制限を付けないでほしい。教科書の『学習資料』に対しては、みな不満である。

6　夜具を干すところも洗濯物を干すところもない。洗濯ものは鉄条網にかけて干したりしている。なんでも自分でつくらねばならないが、それに必要な材料と道具がない。不足に負けないで、たとえば、下駄は、ノコギリとノミだけで立派なものを作っている。

7　これは故国の人々に云いたいが、県庁も村も、国策だ、国策だといってわれわれを送り出しておきながら、送り出したあとはまったく知らぬふりである。手紙は 1 本も来ない。出しても返事がない。便箋 4、5 枚に書いてやるが、葉書に大きな字で形式的なことしか書いて来ない。馬に乗り 7 本も旗を立てて駅まで送ってくれたがあとはかえり見ない。忘れられるのが一番つらい。兵隊さんには慰問袋は来るが、われわれには来ない。しかし、送られる時には、すべて兵隊なみだったのである。

8　われわれのあとから来る人々のために云いたいが、内原に来る前の、県庁での体格検査は、今にして思えばかなりいいかげんではなかったかと思う。何でも多く送り出せばいいという風があった。あとになって倒れたもののことを思うと、そうゆうことが感じられる。こっちの生活はなんといっても荒いということは思わねばならぬ

やはりここでも、何といっても指導能力の方が立ちおくれているといえるのではないか。これらの優秀な少年たちを導いて行くということは、何というやり甲斐のある、しか

しむずかしいことであろう。教練とか、農事とかそれぞれの分野はいい。しかし伸びてゆく少年の人間を全体として導いて行くという能力においてはどうであろうか‥‥‥」

義勇隊哀歌に憂さを晴らして

現地訓練所のこうした過酷な生活は、少年たちに、いくつもの「勇隊哀歌」と呼ぶべき歌を生み出させることになった。かつて大正期に、紡績女工たちはその囚われの苦しみを訴えて「女工小唄」を作り、軍隊で階級制度に苦しめられた兵士たちが「兵隊小唄」などを作って心の憂さを晴らしたように、義勇隊の少年たちも、自分たちの悩みをうたわないではいられなかったのである。

「軍隊ブルース」を換骨奪胎して作られた「義勇隊ブルース」は少年たちの本心だけで一篇が成り立っている。その意味でこの歌は、満蒙開拓青少年義勇軍(隊)哀歌の随一といっても差し支えないだろう。

人の嫌がる　義勇軍へ　　三度々々の　焦がれ飯
志願で出て来る　馬鹿もある　　おまけにおかずは　鉄火味噌
銃取る　哀れさよ　　黒いたくあん　かじりつつ
これが義勇の　生活か　　その日を送る　義勇隊

点呼に出るのが　いやになり　　彼女を思う　一念で
仮病使って寝ていたら　　ラブを一通　書いたとて
中隊幹部に　見つけられ　　中隊本部に　呼び出され
苦い薬を　飲まされた　　読まるる奴の　哀れさよ

青少年義勇軍は、「われ等は若き義勇軍」をはじめ詩人・作曲家の手で作られた歌をいくつも持ち、少年たちはそれを朝に晩に歌わされていた。これにたいして少年たちがみずから作った義勇軍哀歌は、義勇軍の実際の姿と心の本音を表現したものである。

屯墾病の蔓延

ホームシックのことで、少年たちは心理的にも肉体的にも発達が不十分で、心理学では青少年心理ととらえ、「不安定」と「ものごとに感じやすい」。

屯墾病の具体的特徴には、自閉型と攻撃型のふたつの種類があった。

自閉型は、精神的に自分の内部に閉じこもってしまう傾向で、性格的におとなしい少年に多い。農作業にも軍事訓練もする気にならず、一日中宿舎に寝ており、故郷の父母兄弟を思っては落涙している。食欲も衰え、夜は熟睡できなくなる。

脱走する者もあるが、多くは鉄道の駅や港で追手につかまってしまう。そこで、少年たちは、両親や村長などから「チチキトクスグカエレ」とか「ハハシス」とか電報を打ってもらうという方法を案出した。家父長制度の強かった時代であり、訓練所ではその少年

を、旅行証明書を持たせて帰国させなくてはならなかった。

攻撃型は、義勇軍生活の鬱憤を自分の心のうちに鬱積させ、鬱憤を外部世界に向けて攻撃的になってゆく。当初は、鬱憤のはけ口として木刀を持ち出して草や作物をなぎ倒し、野原に火を付けてどこまでも燃えて行くのを見て叫び、またそこらで遊んでいる犬や猫を叩き殺したりした。しかし、少年たちのあれた気持ちは、つぎには、人間を攻撃することに向かっていった。その攻撃の対象に、訓練所の後輩が選ばれた。日本の軍隊においては、一つでも階級が上なら部下に絶対権力を振るえたが、義勇隊でもまたその悪しき伝統を受け継ぎ、一日でも早く入所した者が先輩で、後輩にどのようにでも暴力を加えることができたのである。

義勇隊の暴力・非行の要因

訓練所では一般社会常識が通用しなかった。周囲は人家も見当たらない曠野(こうや)の真っ只中に、粗末な宿舎と劣悪な食事の訓練所において、感じやすい年頃の少年が、女気ひとつない環境におかれ、しかも生活物資が不如意ときている。そんな義勇隊社会には、独特の雰囲気が生まれてくる。生活ボケ、ホームシック、先輩と後輩、腕力のある者とそうでない者、幹部との関係などさまざまな要因が複雑にからみ合って暴力、非行が発生した。

事件の背景として、義勇隊の幹部、指導者の数不足、質的不足がある。1 中隊 300 名に対して幹部定員 6 名を常時確保できる状態ではなかった。1 中隊 300 名の訓練生にはさまざまな能力差があり、中隊長と幹部数人で指導するのは、無理があり、訓練生の中にさまざまな暴力事件が発生したのは当たり前であった。義勇軍制度自体に欠陥があったのではないだろうか。

中国人への暴力

しかしながら、屯墾病の攻撃型の矛先は、訓練所の周辺に住む中国人にも向けられたのである。どのように中国人を痛めつけたかといえば、主食の粟飯や包米飯(ポーミーハン)からはじまって、放し飼いにされている鶏・家鴨・犬・豚などを密殺し、さらに包米・豆・芋・西瓜畑などへ忍びこんで作物を盗む。休日に町へ出れば、中国人の商店から品物を盗む。中国農民は「小盗児義勇隊」と呼んだ。

こうした盗みについで多かったのは、女性への凌辱を含む身体的暴行であった。

元隊員は、中国の人たちに「あらゆるうっぷんをぶちまけ、暴虐の限りを尽くしたことは事実である。最も多かったのは、盗み、渡満 2 年目ともなれば、ほとんどの義勇隊は中国人の上に君臨してわがままの限りをつくすようになる」と記している。また、「中国人、朝鮮人は自分たちとちがう人間だと、下に見ていた。訳もないのに中国人をいじめていた」と証言している。

寮母制度

寮母と少年たち

屯墾病が訓練所に蔓延すれば、しまいには、義勇軍という組織そのものを崩壊させるに至るかもしれない。そこで拓務省や満州拓殖公社は、義勇軍を存続させてゆくためには、対策を立てざるを得なくなった。少年たちが望んでいたのは、人間的な愛情であり、女性的・母性的な優しさであった。そこで、拓務省では、現地訓練所へ住みこんで常時少年たちに女性的な優しさを与える人が必要だと考え、「寮母」正式には「満蒙開拓青少年義勇軍女子指導員」という制度を設けた。

応募資格は、「年齢 25 歳以上 45 歳までの寡婦又は独身者」、「高等小学校卒ないし専門学校卒」のちに「年齢 30 歳以上」で「女子中等学校卒以上」と変更した。そして、東京の聖和学苑と日本国民高等学校女子部で 5 カ月近い訓練を受けた後、義勇軍の場合と同様な壮行式で満洲へ送り出された。

昌図(しょうと)事件

訓練所での最大不祥事件に昌図事件がある。

事の起こりは、1939(昭和 14)年 5 月 5 日の端午の節句に行われた運動会に始まる。もちろんその前、新旧渡満中隊間に、感情の疎隔があったことがその原因ではあるが、運動会をきっかけにして悪化した結果であった。それも前後 3 回にわたって衝突を起こし、事件は 1 回ごとに拡大し、ついに第 3 回にいたって大衝突、大襲撃となり、銃器を持ち出して発砲する状態にまで発展した。この事件で死亡 3 名、重軽傷 4 名が出た。また警察・憲兵隊の取り調べを受け、123 名が奉天第 2 監獄に移され、その中 37 名が起訴されたという未曽有の大事件であった。

伏せられた真相と処理

昌図事件判決の結果は、被告の少年たち 37 名のうち 32 名が有罪であった。科せられた刑はいずれも有期懲役で、その期間は,騒乱・殺人・放火の罪に問われた者のうち 10 名が 3 年、2 名が 2 年、2 名が 1 年 8 カ月、騒乱・殺人に問われた 1 名が 1 年 6 カ月、そして騒乱・傷害罪の 17 名が、1 年 8 カ月からもっとも短いものは 4 カ月であった。

しかし、すべての被告が 1 年ないし 4 年の執行猶予付ききとなっていたので、早くもその年の 12 月 20 日には、ひとり残らず出獄することができたのである。

7 カ月ぶりに出獄した 37 名の少年たちは、原隊へは帰されず、ひとまず哈爾濱(はるびん)特別訓練所へ収容されて昭和 15 年の正月を迎え、1 月 14 日に勃利訓練所へ移された。

「昌図事件を生み出したものが屯墾病という集団ノイローゼであり、その屯墾病を不可避的にうみだすものが満蒙開拓青少年義勇軍という制度そのものであるとすれば、死んだ３名のみならず、加害者と裁定された 32 名の少年たちもまた、加害者たることを余儀なくされたという点で、被害者だったと見なければならないのである。」と上笙一郎氏は言っている。

大陸の花嫁

当時のジャーナリズムは、日本の若い女性たちよ、「大陸の花嫁」となって満洲に行け、それが日本国家に尽くす最善の道である―と宣伝し、小学校や女子青年学校においても同じことが教えられていた。大陸の花嫁になった娘たちは、いずれも零細農の娘であった。大陸花嫁もまた、義勇軍の少年たちと同じ農村の貧困から生み出されたものであった。

大陸花嫁を受け入れた義勇隊開拓団の生活は、物質的な生活は前より良くなったわけではなかったが、義勇隊開拓団員たちの精神的な変化であった。夫婦としての契りを結んだ女性が身近にいるということは、彼らにとってこの上ない生きがいであった。以前のように中国人の部落へ出かけて行って、家畜その他を盗み、暴力をふるったり女性を凌辱（りょうじょく）したりするようなことは少なくなった。

９．義勇隊開拓団の入植地

開拓地への入植

義勇軍の制度は、内地訓練所で 3 カ月、現地訓練所で 3 カ年の訓練を受けた後の少年たちのその後の道を、「原則として政府の補助金を受け、建国農民となり、1 戸当たり 10 町歩の耕地と若干の団共同用地有する農村を作るのであります」と規定していた。発足したのは 1938(昭和 13)年だから、1941(昭和 16)年になると、3 年間の現地訓練を終えて、どこかの土地へ入植しなければならぬ隊が出て来たのである。

こうして作られた開拓団は、義勇軍がその訓練を終えて結成した開拓団であって他の開拓団とは違うのだということを強調する意味で、「義勇隊開拓団」の名を用いた。

義勇隊開拓団とは、団長ほか 4、5 名の幹部と訓練生を中心として組織され、300 名程度が基準であった。

そこで満州拓殖公社では、農業に適当な土地をあちこち求め、1937(昭和 12)年より昭和 13 年にかけて渡満した義勇隊 17,000 余名は、3 カ年の訓練を終了して予定通りに昭和 16 年 10 月を期して一斉に理想農村建設に入植させたのである。

第 1 次の義勇隊訓練生は、すべて実務の小訓練所から開拓団に移行した。それは義勇隊制度の当時の計画で、義勇隊在満 3 カ年の訓練は、最初の 1 カ年を大訓練所で、後 2 カ年を小訓練所で行うことになっており、第 1 次の訓練生は、おおむねこの原則により訓練がなされていたからである。この点は、第 3 次以降の訓練生が、大訓練所から直接開拓団に

移行したのとは異なる。

その後義勇隊から開拓団に移行したのは、1941(昭和 16)年度第 1 次 71 個団、1942(昭和 17)年度第 2 次 4 3 個団、1943(昭和 18)年度第 3 次 36 個団、1944(昭和 19)年度第 4 次 51 個団、1945(昭和 20)年度第 5 次 45 団となっており、第 1 次から第 5 次の終戦までに義勇隊から開拓団移行した団の総数は 246 個団にのぼった。

入植形態

第 1 次から第 3 次までの入植がほとんど「新地区入植」に限られ、第 4 次からは「分割入植」とされた。新地区入植は、入植後すぐに増産態勢をとらすため、既設開拓団を調査して、余分の土地を返還させ、隣接の空地と併せて新地区を設定し、新規の開拓団を入植させる方法である。

満州国の可耕面積は、約 3000 万ヘクタール、日本内地の農耕地の約 5 倍近くで、そのうち既耕地は約 1300 万ヘクタール、残りの 1700 万ヘクタールが未墾の原野。満州開拓民が入植するのはこの未墾の原野である。

開拓団をつくる場合、その建設資金は 1 個団 300 戸計画で約 300 万円。団員 1 戸当たり 1 万円の予算が組まれる。団員 1 戸当たりの借金は約 5200 円、団員はこれを 5 年据え置き、25 カ年もしくは年賦償還して行かなければならなかった。

体験者の手記を読むと、当面の生活費用を借入金等で補う必要があった義勇隊開拓団では、義勇軍の頃より、さらに厳しい耐乏生活を送っていたという。

入植地はソ連国境沿い

義勇隊開拓団および一般(成人)開拓団の入植地帯は『満州開拓年鑑』(昭和 19 年版)によると、

イ　開拓第 1 線地帯　　国境地帯で国防が目的、入植率 40%強

ロ　開拓第 2 線地帯　　治安を要する地域、入植率約 50%

ハ　開拓第 3 戦地帯　　政治・軍事・産業・経済・交通上の要衝地点、入植率約 10%

義勇隊の大部分はソ連国境地帯の「開拓第 1 戦地帯」に送り込まれた。

義勇隊開拓団がソ連国境地帯に入植させられた理由は、「北辺鎮護」であった。これは、対ソ連戦略を重視した関東軍が義勇隊に「第 2 軍的機能」を持たせようとしたことによる。関東軍の第一線よりさらに前方の最前線地帯に入植した開拓団もあった。国境最前線に送り込まれた義勇隊の訓練生、団員たちは、まさに関東軍の弾よけであった。

そして 1942、43(昭和 17、18)年ころになると、徴兵適齢期を迎えた団員たちは入隊のために、開拓団を離れ、開拓団の営農は崩壊の道をたどった。一方、訓練生たちは 1944(昭和 29)年末になると、関東軍の要求で、軍倉庫の警備、軍需工場の労働力に徴発された。

隊員を奪われた義勇隊開拓団は、病人など少数の隊員、幹部、家族が残るだけとなり、日本敗戦の直前、義勇隊開拓団は実質的に崩壊していた。

こうした開拓団の運営計画は絵に描いた餅、戦火の激化、戦況の悪化によって開拓団は次第に減り、開拓団とは名ばかりになっていった。

この後、日本の敗戦により義勇隊開拓団、訓練所は潰滅する。

中国人の耕地を取り上げる

それにしても、義勇隊開拓団が、中国農民の耕地と家を強権的に取り上げてそこへ入植したのは一体いかなる理由によるのであろうか。

満州拓殖公社が日本人開拓団のために「整備」したが、土地は圧倒的に「既利用地」（中国の農民たちが現に耕作し、村落をなして住んでいる土地）であった。義勇隊開拓団が、中国農民の耕地と家を強制的に取り上げてそこに入植したのは、ソ連軍に備える兵農植民であるから。戦術上の必要と、既耕地の方が生産性高いからという理由もあった。日本政府は、満州開拓事業に投下した資本を一日でも早く回収したい、そのためには原野の開拓よりも中国農民の耕地を取り上げる方がずっと効率が良かったので、その方法を採ったのであった。

中国農民を追放してその耕地へ入植したので、このことは、中国人への悪虐行為と相まって、中国民衆の心に日本人に対する消しがたい反感をきざみつけた。そしてその骨髄に徹するまでの反感が、やがて日本敗北のあかつき、中国農民の日本人開拓民への襲撃となってあらわれて来るのである。

１０．義勇隊の終焉

ソ連軍の侵攻

・1941(昭和 16)年　独ソ開戦
・1945(昭和 20)年　2 月 5 日から、米・英・ソ 3 カ国巨頭によりヤルタ会談が開かれ、ソ連の対日参戦が討議
・1945(昭和 20)年 5 月、ドイツの降伏により西部戦線終結。連合軍は対日戦に全力集中が可能になり、ソ満国境へのソ連軍集結増強
・同年 6、7 月ヤルタ協定をめぐる中ソ会談が続行され、満州に侵入したソ連軍は日本の降伏後 3 カ月以内に完全撤退する旨の確約を与えていた
・7 月 26 日、英・米・中 3 カ国のポツダム宣言発表
・8 月 9 日、突然のソ連侵攻

関東軍の対応

1941(昭和 16)年の独ソ開戦当時、関東軍特別演習と称して大部隊をソ満国境に集結し、

ソ連を牽制したが、1943(昭和 18)年の秋から在満の兵力は大半が南方に移動、1945(昭和 20)年 3 月には在満師団全部 22 師団が転用されたといわれている。従って対ソ戦は不可能な状態になっていた。

関東軍司令部が、ソ連の対日参戦を知ったのは、7 月 9 日午前零時 20 分であった。大本営は 9 日関東軍に対して「主作戦を対ソ作戦に指向し皇土朝鮮を防衛するごとく作戦すべし」と命令。作戦の主目的は朝鮮の防衛にあるとされ、満州は事実上放棄されるにひとしかった。

国境地帯では関東軍前線部隊は圧倒的なソ連軍の進撃を迎えて死闘を展開していた。ソ連軍の侵攻によりもっとも悲惨な打撃を受けたのは、国境地帯近くに配置されていた開拓民たちだった。開拓団には壮年男子の殆どは召集され、老幼婦女の集団が残された。

8 月 9 日ソ連軍侵攻によって関東軍の敗色が濃厚になると、満軍の反乱、農民の蜂起で、全満各地で略奪、暴行があいついで行われた。

開拓地においては、開拓団のため農地を強制的に収用された中国農民の憤激は根深いものがあった。満州開拓民は日本の侵略主義の尖兵だと抗日分子は煽動(せんどう)、中国民の憎悪の鉾先は開拓民に向けられた。戦局が苛烈(かれつ)化すると労務動員と称し、大量の中国農民が強制徴用されて鉱山などへ送り込まれたことや、過酷な供出割当てによって高粱、大豆など農産物が強権的に買い上げられたことなど、中国農民の反感憎悪は鬱積(うっせき)していた。

このような険悪化した状況の中で、急転した惨めな敗北の逃避行を続けなければならなかった開拓民や義勇隊員の運命は言語に絶する悲惨なものとなったのである。

召集の嵐のあとに

1945(昭和 20)年 8 月 9 日午前零時、闇を突いてソビエト軍は、諸方から満州国内へ攻め入ってきた。ソビエト軍が国境線を超えて進行してきた地点は、西部にあたる満州里・ノモンハン方面のほかは、主として満州の東北部であった。

ほとんど山脈というものがなく、平地に河ひとつでソビエト領に接している満州東北部は、対ソ国防上重要な地域とみられ、義勇隊訓練所や開拓団が主としてこの方面に散在させられたのもそのためであった。

だが、義勇隊は、その役割をほとんど果たすことが出来なかった。というのは、ソビエト軍の侵攻を食い止めるために武器を執って立とうにも、義勇隊は、訓練所も開拓団も、すでに半年以上前からその力を失っていたからである。

日本は 1941(昭和 16)年 12 月に太平洋戦争に突入した。戦況が悪くなり日本軍は、太平洋方面の戦線に軍隊を回すことが必要となったが、関東軍こそ打ってつけであった。関東軍は日本陸軍最強の軍隊との定評があった。

そこで大本営では、関東軍を目立たぬように引き抜いて南方へ転送した。しかしソビエト軍に対する防衛のために、兵員数は確保しておかなくてはならないので、団員を召集したが、特に狙ったのは、ようやく兵役年齢に達した青年ばかりの義勇隊開拓団であった。

召集の嵐が吹き荒れたあと義勇隊開拓団に残ったのは、責任者の団長と兵役に耐えられ

ないと見なされた病弱の団員数名と、子どもを抱えた団員たちの妻であった。これでは開拓団を守りぬくことはできない。一時的に撤退することに決め、馬車や大車(だいしゃ)に必要な荷物を積み、南へ、南へと急いだのであった。

一般開拓団も義勇隊の家族たちも、頼みにしたのは、関東軍であった。後方の関東軍駐屯地までたどり着きさえすれば、安全を保障してもらえるものと信じて、ようやくたどり着いた関東軍の駐屯地であった。

関東軍に見捨てられて

開拓団の人びとが見たものは、空虚な兵営だけであった。しかも兵営には兵士がひとりもいないのは、彼らがいち早く、「連・京・図ライン」の内側、すなわち大連・新京・図們をつなぐ南満州へ撤収してしまったからであった。撤収は、満州東北部に散在している開拓団を見捨てたということを意味する。しかも、ただそれだけでなしに関東軍は、諸方の江河にかかる橋を、自分たちが渡り終えるとただちに破壊したのである。

頼みの綱とめざして来た関東軍がすでにもぬけの殻であったことは、開拓団の人びとをあらためて過酷な運命のもとにおくことになった。

8 月 15 日、日本が無条件降伏したとニュースが嵐のように伝わり、さらにソビエト軍の手によって関東軍や開拓団の武装が解除されると、強剛を誇ったあの関東軍がいないと知った中国農民たちが、なんとかして連京図ラインの内側へ落ちのびようとする開拓団に、遠慮会釈なく襲いかかりはじめた。

このとき、ありとあらゆる日本人開拓団が被害を受け、無傷だったところはなかった。開拓団を捨てて南へ、南へとたどって行く途中、もっとも困ったのが、不安な空気に怯えて火のついたように泣き出す乳幼児であった。嫩江訓練所の寮母だった一女性が、「他人の人の迷惑になることを恐れ、自分の手で子供を絞め殺してしまった人が少なくなかった」と書いている。そういう母親は、子どものあとを追ってみずからの命を絶つものもあったということである。

日本人自身が招いたもの

一体どうして中国農民たちが、日本人開拓民にたいして凶行を働くことになってしまったのか。その理由は、満州開拓がはじまったときから終戦の 8 月 15 日に至るまでの日本人開拓団の行為である。

義勇隊の少年たちが中国農民に対して、盗み・暴行・凌辱(りょうじょく)などあらゆる限りの暴虐を働き、また開拓団への移行に際して日本国家が、中国農民の畑や家屋を強権的に取り上げた。土地に頼って生きている農民からその土地と家屋を取り上げるのは、死ねということにほかならず、盗み・暴行・凌辱などを加えるのは、人間として最低限の価値も認めていないということを意味する。

そのような扱いを受けながら生きてゆく中国農民たちの胸底に、日本および日本人にたいする反感が生まれるのは認めざるを得ないであろう。

要約するなら、中国農民たちの日本人開拓民への襲撃・略奪は、元はといえば日本人がその種を播いたものであった。

しかしながら、襲撃・略奪に加わった中国農民が多かったなかに、それとは反対に、難儀している日本人開拓民を助けてくれた中国人もいた。

かつて義勇隊の一員として満州を彷徨(ほうこう)した人の語るところによると、あちこちの中国人農家で食物を貰ったり泊めてもらったりした話が出て来る。

中国農民の一部が、着のみ着のままで南下して行く日本人開拓民をいたわったのは、彼らが、土地と家を失ってさまよわなければならぬ人間の苦悩を充分に知っていたからである。かつて日本人に土地を追われて苦悩を味わった故に、ほかならぬ日本人の苦しみを理解して、いたわりの手を差し伸べたのである。

収容所における義勇隊

頼みにしていた日本軍に見捨てられ、ソビエト軍と中国農民とに襲われながら南へ、南へと逃げた日本人開拓民は、やがて、主としてソビエト軍の手で、あちこちの大都市およびその周辺に作られた日本人収容所に集められた。

収容所にあてられた建物は、かつての日本人小学校・義勇隊訓練所・工場などで、一つの部屋へ何十人もが詰めこまれた。

全員が着のみ着のままで、垢まみれであり、そのため虱が湧き、発疹チフスや疥癬などの病気が蔓延した。医者も薬も無く、自然のなりゆきに任せておくよりほかなかった。

収容所の中は大半が女性宿舎と男性宿舎を分けなかった。女性宿舎を設けることは、ソビエト兵を日本女性への凌辱に誘うことに等しかったからである。ソビエト兵は、執拗に女狩りをしては凌辱を加えるのである。

ソビエト兵に労役に狩り出された義勇隊の仕事は、鉄道のレール仕事と貨車への物質積みであった。義勇隊員は、統率のとれた若者たちの集団であるため都合が良いと思われたのか、相当の数がシベリアに送られた。

収容所生活での恐ろしいものは、襲って来た冬の寒さと飢餓であった。大陸性気候の満州では、夏が過ぎれば、まばたきする間に冬が訪れる。寒暖計の目盛りが零下 30、40 度にまで下がる。凄まじい冬の寒さを、夏服一枚で過ごせるわけがなく、夜は、夏服のまま麻袋をかぶって寒くてうつらうつらするだけで、寝るしか方法はなかった。10 月、11 月頃まで持ちこたえていたが、本格的な冬の寒さの到来とともに、死亡者が続出しはじめた。

あるひとりは記している「荒れ果てた倉庫の内は大きな鉄の玉や、鉄鎖・鉄枷の散乱している中に、義勇隊員の骨と皮だけの、コチコチに凍っていろんな恰好をした、どす黒い丸裸の屍体がうず高く積み上げられている。‥‥‥これら屍体の、何とおびただしく積み上げられていることか。眼はあくまで落ちくぼみ、頬骨・顎は突出し、ただ皮ばかりが骨にへばりついている顔、顔、顔‥‥‥・」

数年前に人々の歓呼の声に送られて、大きな希望と夢を持って故郷を出た紅顔の少年たちが、このような姿になると誰が思ったであろうか。

こうしてシベリアへ連れ去られた青年たちが、強制労働を解いて帰国を許されるのは、早いもので2年ののち、遅いものは4年もののちであった。それぞれが幾多の苦難の道をたどって内地に引き上げたのである。

義勇隊の終焉

外務省・開拓自興会が協力して作った統計によれば、1956(昭和31)年時点で、満州開拓団関係の人の引き揚げ者・死亡者・行方不明者は下記の表のようになっている。

満州開拓生死統計(昭和31年現在　単位名)

種　別	死亡者	行方不明者	帰国者
開　拓　団	67,680名	9,550名	118,970名
義　勇　隊	3,200	1,000	17,800
報国農場	1,120	450	3,200
計　(名)	72,000	11,000	139,970

この内「義勇隊」とあるのは、現地訓練所にいた訓練生のみを指しており、義勇隊開拓団員の数は「開拓団」一般の中になかに含まれてしまって、その数は分からない。

しかし、内原訓練所の送出名簿によって、満州へ送り出された義勇軍の総数は86,530名と明らかなので、この数から上の表の現地訓練生総数22,000名を引けば、義勇隊開拓団へ移行した青少年の数は約64,500名ということになる。

在満日本人開拓民の総数はおよそ270,000名で、引揚げまでに戦死・自決・病死・凍死した人が約78,500名である。すなわち、3人強に一人の割合で死亡しているわけだが、開拓団に移行した義勇隊にもこの死亡率を適用すると、だいたい20,000名が死んでいるという計算になる。そしてこれに、現地訓練生の死亡数3,200名と行方不明者1,000名とを加算すると、約24,200名の義勇隊員が死んでいるといってさしつかえないのである。

義勇軍の表向きの目的は「未墾の荒野を開拓し、将来は独立した農業者となること」・・・・・。
しかし実際の狙いは、日本がうちたてた傀儡国家「満州国」の防備・治安、
いわゆる北辺鎮護を子どもたちに担わせることであった。
つまり子どもたちは、関東軍の弾よけとして送り出されたのである。
子どもたちに義勇軍参加を決意させたものは、教師の強いすすめであった。
約86,000人が満州へ行き、約20,000人が死んだ・・・・・・といわれる。
だが、その正確な数はいまもわからない。
(陳野守正著『先生忘れないで！「満蒙開拓青少年義勇軍」の子どもたち』1988年より)

《コラム》　　「満蒙開拓」とは何だったのか

（1995 年 4 月）

昨(1994)年の夏は、中国東北の長春で経済開発についてのシンポジュームがあり参加した。そのさい、ロシア・朝鮮国境の延辺地区への視察旅行があった。白頭山麓を走るバスから見える険阻な風景を眺めながら、戦争中大日本帝国政府がすすめた「満蒙開拓」のことが私の頭をかすめた。

もう 20 数年もまえのこと、高知県庁の某氏と 2 人で吾川郡吾北村へ農業視察に行ったときのことである。氏は私に、「こんな山奥に来ると思い出す。戦争中自分は満州で日本人開拓団受け入れの仕事をやっていた。それは、満人たちを山中の開拓地に移動させて、それまで彼らが耕作していた豊饒な土地に日本人を植民させる業務であった。あるとき、満人たちを送り込んだ開墾地に行ってみると、それこそ食うか食わずのひどい生活であった。その悲惨な様は今も忘れられない」と吐き出すように語った。

この話は、私にとって大へんなショックであった。これでは開拓ではなく略奪ではないか。その時私はこの話はそのまま信ずることができないので、数日後、満州国で外交官として重要なポストにおられた故津田幸雄先生(元高知短大国際法教授)を訪ね、この話の真偽について問いただした。すると「全くその通り」という返事であった。

ところで、先日、『佐川町人権史』(1994 年・文理閣刊)を読んでいると、その中に満蒙開拓のことが書かれている。佐川町でもとくに農地にありつけない未開放部落の人々が開拓団として出ている。そして「日本人移民の 4 割は 、反満・抗日闘争のもっともはげしい地域、つまり重要河川沿岸地域・満鉄沿線地域に投入された。」「日本人移民は、満州重工業地帯の周辺に衛星的に配備されてもいた。」と述べられている。

「大東亜共栄圏」「五族協和」などと日本人民および中国人民をあざむきながらの満蒙開拓だったのだ。

（森井淳吉　元高知短期大学名誉教授・元阪南大学名誉教授）

第 2 章　郷土部隊編成と高知中隊送出

高知県は義勇隊員送出数を全国で比較すると、1,331 名と 41 位であるが、一般開拓団員数 9,151 名を合計すると、10,482 名となり、全国第 8 位(人口比では第 2 位)となっている。

「義勇軍」・「満蒙開拓団」全国送出順位一覧表

義勇軍			開拓団		義勇軍			開拓団	
順位	府県名	隊員数	順位	団員数	順位	府県名	隊員数	順位	団員数
1	長　野	6,595	1	31,264	25	埼　玉	1,968	24	2,900
2	広　島	4,827	13	6,345	26	京　都	1,952	38	1,418
3	山　形	3,925	2	13,252	27	山　梨	1,939	22	3,166
4	新　潟	3,290	7	9,361	28	和歌山	1,877	40	1,272
5	福　島	3,097	5	9,576	29	青　森	1,855	12	6,510
6	静　岡	3,059	14	6,147	30	大　分	1,836	45	735
7	岡　山	2,888	25	2,898	31	群　馬	1,818	11	6,957
8	石　川	2,808	16	4,463	32	愛　知	1,724	46	634
9	栃　木	2,802	37	1,429	33	秋　田	1,638	10	7,814
10	山　口	2,745	20	3,763	34	宮　崎	1,613	33	1,769
11	熊　本	2,701	4	9,979	35	島　根	1,528	36	1,507
12	岐　阜	2,596	6	9,494	36	佐　賀	1,500	26	2,800
13	香　川	2,379	15	5,506	37	福　岡	1,445	34	1,669
14	愛　媛	2,325	29	2,200	38	富　山	1,425	19	3,775
15	鳥　取	2,287	39	1,339	39	長　崎	1,403	44	747
16	鹿児島	2,268	21	3,432	40	滋　賀	1,354	47	93
17	宮　城	2,239	3	10,180	**41**	**高　知**	**1,331**	**8**	**9,151**
18	兵　庫	2,230	30	2,170	42	三　重	1,309	27	2,753
19	大　阪	2,125	31	2,030	43	奈　良	1,298	18	3,945
20	徳　島	2,082	41	1,243	44	北海道	1,127	32	2,002
21	福　井	2,079	23	3,057	45	千　葉	1,111	42	1,037
22	茨　城	2,022	35	1,551	46	沖　縄	644	28	2,350
23	東　京	1,995	9	9,116	47	神奈川	575	43	1,013
24	岩　手	1,993	17	4,443					
義勇軍合計		101,627 名			開拓団合計		220,255 名		

『満州開拓史』より(昭和 20 年 5 月ごろのもの)

年度別、郡市別内原訓練所入所人員（昭和 19 年度まで）

	13 年度	14 年度	15 年度	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	計
安芸郡	31	10	13	16	48	31	14	163
香美郡	29	4	10	22	23	13	4	105
長岡郡	39	7	21	26	16	22	10	141
高知市	23	6	5	7	14	18	13	86
土佐郡	11	5	4	10	4	4	4	42
吾川郡	52	9	11	14	37	32	46	201
高岡郡	106	44	23	14	80	54	29	350
幡多郡	19	7	7	16	40	61	30	180
	310 名	92 名	94 名	125 名	262 名	235 名	150 名	1,268 名

(注)上記の表は、昭和 19 年 5 月 9 日高知新聞朝刊に県農政課池田技師が、内原訓練所入所人員数を年度別、都市別に分けて報告したものを、筆者が表にしたものである。

１．郷土部隊編成運動が果たした役割

小隊編成運動

「郷土部隊」とは、同一地域(郡単位・道府県単位)の出身者で構成する小隊・中隊の呼称である。義勇軍の編成は軍隊式で、内原訓練所における訓練生は、大隊・中隊・小隊に分かれていた。その中で核となったのが軍隊同様に中隊である。義勇隊の核をなした中隊は、当初、大部分が複数県出身者の「混成部隊」であった。そのため隊員間の確執、先輩・後輩間の制裁的行為等が発生していた。

長野県では、長野県出身者だけの郷土中隊を編成してトラブルを防止しようと「青年義勇軍編成計画」に基づいて、北信、中信、東信、南信からそれぞれの小隊を送出させる計画を立てた。しかしこの計画は成功しなかった。

郷土中隊の編成にあたっては、各県とも長野県が試みたように、県内各郡出身者で小隊を編成して送り出す方式がとられた。その先鞭(せんべん)をつけたのが、静岡県富士郡であったと言われる。拓務省によれば以下のようである。

「この義勇軍の小隊編成は、静岡県富士郡教育会が農村子弟を大陸へ進出させるため、昨夏、富士山麓上井出村に拓務訓練所を設け、本年 70 名の義勇軍を富士軍として送出したのである」。

このように郷土出身者中心の中隊編成を望む声が高まってきたことと、義勇軍送出不振への対応策が検討されていたこととが重なり、義勇軍送出の組織化をねらう郡市教育会を中心とした小隊編成運動はきわめて時宜にかなったものとなった。

小隊編成運動の成果は 1940(昭和 15)年に入り顕著となった。昭和 15 年度「拓務要覧」は、同年同期にはわずか 3 県だけが郷土中隊を編成したが、194 1 (昭和 16)年度には 17 県に達したと述べている。

郷土部隊編成運動と教育会

義勇軍と教育会との結びつきは、静岡県富士郡教育会の富士小隊から始まり全国に広まった郷土部隊編成運動の中で本格的に深まる。

主たる募集源を高等小学校在学児童に転換するとともに合宿形式訓練の実施を伴う郡単位の小隊編成を導入した。その実施方策が、11 月 4 日、静岡県富士郡教育会の経験に示唆を得て構想した「小隊編成拓殖訓練実施要綱」で各府県に通達された。

小隊編成を推進するうえで大きな役割を担っていたのが「拓務訓練」であった。

拓務省が、「軍事的集団規律」に馴致(じゅんち)した上で、郡単位の小隊を編成するという方針を導入し、そして、この郡単位で編成した小隊を基礎として府県単位で中隊を編成し、その中隊長を当該府県より選定するように措置していた。この郡単位の小隊編成は同一地域出

身者から成る中隊を編成する見通しの下に導入されたものであった。訓練の基礎である中隊をそのように編成することによって、訓練生の憤懣(ふんまん)や種々の入所時期の先輩・後輩による序列や出身地域の異同による差別といった要素を除去し、訓練組織の安定化を図ろうとしたのである。「郷土部隊」は、出身府県を出発する際に市町村段階から「入営兵ニ準ジ」取り扱われることにより、いっそう郷土部隊たらしめられるのであった。

1940(昭和 15)年から 1941(昭和 16)年にかけて郷土部隊、郷土中隊は義勇軍の主要な編成形態となり、それに伴って、それまで一般的であった出身府県が複数の中隊は「混成中隊」と称えられるようになった。こうした混成中隊から郷土中隊への移行は移民関係機関の作為の結果であった。

応募者の減少に対する拓務省の対応について、「はじめの盛況から応募者が予定人員を割ってくると、拓務省は各道府県ごとの中隊編成方針を打ち出した。このこと自体が割当てであるが、この方針が現場に与えた影響は極めて大きかった。」

「各道府県ごとの中隊編成方針」すなわち「郷土部隊編成」の方針が募集活動の不振の打開策として打ち出されたということである。その郷土部隊編成が重大な「影響」を及ぼしたという「現場」とは、言うまでもなく募集活動の現場であり、それは他でもなく学校、とりわけ高等小学校のことであった。

このような状況を打開するために、拓務省は、1940(昭和 15)年度の送出に向けて 1939(昭和 14)年から「郷土部隊編成」運動を導入した。それまでは、小学校を既に卒業した青年団員・青年学校卒業生徒を義勇軍の主たる応募者と想定していたが、この運動では高等小学校の卒業を翌年に控えた児童が、その主たる募集源として位置づけられた。そして、彼らは教育会が主催する合宿形式の「拓殖訓練」を実施した上で、同一地域出身者からなる郷土部隊を編成し、義勇軍へ送出するよう府県側に要請した。

拓務省は、郷土部隊編成運動は「教育者の自発的奮起に依る興亜教育の実践徹底に俟(ま)つ処頗(すこぶ)る大なるものあり」と内原訓練所において教員講習会を開き、全国小学校長、高等科 2 年担任教員、県視学課等より受講者を選抜した。1939 年に 1,269 名、1940 年には 3,422 名が受講している。

高知県における郷土部隊編成運動

高知県でも、1940(昭和 15)年度第 1 次の義勇軍送出に向けて、郷土部隊編成運動が行われた。高知県教育会は、義勇軍訓練の基礎単位となる 1 中隊(300 名)を県出身のみで編成することを「理想」として、高知市及び県内各郡に置かれていた支部を通じて、義勇軍への応募を「熱心に斡旋」した。しかし、結局、「高知小隊」と名つけられた 1 小隊を編成することしかできなかった。なお小隊は、通常 60 名で構成される。

高知小隊は、応募者 70 名から採用された 54 名のうち、「今年高等小学校を出たばかりの」15 歳の少年 6 名を含む計 47 名で編成された。そして、1940 年 3 月末には、高知市から出発し、茨城県にある内原訓練所に向かったが、入所したのは 46 名であった。

県教育会側は、「誠に遺憾」であり、「海外発展などの進取性に乏しき県民性を深く反省

するの要を痛感す」としていた。県教育会では、1940 年中に 280 名の青少年を応募させようと計画したが、結局、第 1 次送出時と合わせて 77 名しか送出することができなかった。

義勇軍送出は国策であった。国側は、募集人員を道府県に割当、目標達成を督励した。また、募集実績不振の県や地方事務所は、町村の役場・学校に応募者の勧誘推薦に関する指示を行い、現場に圧力をかけてきた。

その後、高知県では、1941(昭和 16)年度には前年度に比べて多くの応募者を集めることに成功した、しかし、1 中隊を編成することは、1942(昭和 17)年度第 1 次送出まで実現しなかった。この間、県の義勇軍送出関係者の中には、「送出不振県としての声価を挽回」しなければならないとの強い認識が示されていた。そして、状況を改善するために、「教育者が先づ義勇軍送出に対して確固たる認識と理解を持った」上で、「協力の実を挙げねばならぬ」とされていた。

高知県興亜少年隊・少女隊の結成

1940(昭和 15)年 6 月、高知県は、「次の日本を背負って立つ」、「小学校男女児童」に対して「精神的訓練と団結心を強調して、未来の大陸政策への心身的素質を養わせる」ことを目的に、「近く県下各小学校に興亜少年隊並びに少女隊の結成を呼びかけること」を決定した。このことから、高知県では、興亜少年隊・少女隊の結成が小学校単位でなされようとしたことがわかる。

県の要請に応えて、1940 年 7 月 17 日、高知市女子高等小学校で興亜少女隊の結成式が盛大に行われた。式には、市長や、県学務部長・県社会課長・市教育課長、市内各小学校長、県教育会副会長など学事関係者が多く出席した。また、式の中で、「文部省社会教育課長の祝電」が披露されるなど、同隊の結成には、文部省側からも深い関心が示された。式終了後には、「校長の少女隊視閲、少女隊の大行進、自転車隊の校庭行進、薙刀指導」が行われた。同隊では「自転車乗り、興亜服の仕立て方等、拓植実務に直接関係のある科目」を「実習」として行うように定められた。このような訓練を通じて、「大陸の花嫁」を養成することが同隊に課せられた目標であった。

また、高知県における興亜少年隊・少女隊では、興亜教育を行うだけではなく、「農繁期には出征勇士遺家族の農業を手伝う」などして、各小学校の「校下における自治団体」としての役割を果たすことも期待された。

高知県では、1940 年から、興亜少年隊・少女隊が小学校に結成された。そこでは、興亜教育以外にも様々な校外活動を行うことが期待されていた。しかし、1941(昭和 16)年 9 月、興亜少年隊・少女隊とは別に、「ヨイコドモに興亜聖業の真の意義を自覚させ雄渾(ゆうこん)な精神と剛健な身体を錬成するため」、各国民学校下に「興亜少年団・少女団」が結成されることとなった。

大日本青少年団は、1941 年以降も、「従来呼称スル興亜少年少女隊ノ名称」を「集団訓練等実施ノ際」に使用することを許可していた。高知市旭尋常小学校では、少なくとも 1944 年まで「少年隊」「と「少年団」という 2 つの名称を使用していた。

高知県では、興亜少年隊・少女隊に対しては、興亜教育以外にも様々な校外活動を行う組織としての機能を果たすように期待されていた。

教学奉仕隊

郷土部隊編成運動の中核を形成するもう一つの方策は、「満州開拓青年義勇隊教学奉仕隊」の派遣であった。「教学奉仕隊」は、文部省との連携の下に「満州建設勤労奉仕隊」の一環として実施された。

教学奉仕隊とは、郷土部隊編成運動を推進するため、拓務省は、視学(教育現場の視察・指導・監督にあたる地方教育行政官)及び、小学校・青年学校教員を内原訓練所に集めて拓殖訓練・講習会を、地方においては中堅男女教員に対し、拓植・拓務訓練を行なった。さらに夏季休業を利用し、郷土部隊編成運動に尽力する視学・教員を満州建設勤労奉仕隊教学奉仕班(教学奉仕隊)として現地に派遣させた。

教学奉仕隊派遣の目的は、募集活動に挺身している教員の意欲をさらに昂進することにあった。しかも、「教学奉仕」と「勤労奉仕」を通じて義勇隊訓練所にある訓練生を慰問することをも狙っていたのである。1940(昭和 15)年度は、8 月 1 日から 9 月 2 日にかけて 592 名が派遣された。教学奉仕隊の派遣について拓務省は、「此等の奉仕隊員は現地に於て深き感激を味得し、帰郷後義勇軍運動に挺身しつつあるの状況にして、大いなる成果を収めたものと云うべくである」と評価し、内原訓練所における「拓殖講習」と同様に翌 1941 年度以降もそれを実施していくのである。こうして義勇軍の送出は、教育会が主導した。

女子奉仕隊

心身共に柔軟で屯墾病にかかりにくいから……という理由で義勇軍を構想したが、屯墾病が訓練所に蔓延すれば、だんだん手のほどこしようがなくなって、しまいには義勇軍という組織そのものを崩壊させるに至るかもしれない。そこで拓務省や満州拓殖公社は、義勇軍を存続させてゆくためには、屯墾病対策を立てざるを得なくなった。

まっさきに考えたのは、少年たちに娯楽を与えることだった。しかし、少年たちが望んでいたのは、娯楽ではなかった。少年たちが望んでいたのは、母性的心情であった。現地訓練所の訓練は 3 年だったから 14 歳から 20 歳までの青少年がいた。思春期にはいったとはいえ 14、5 歳の少年には、まだまだ母親の愛情が不可欠であり、20 歳を過ぎた青年は、恋愛の対象としての女性が近くにいないことには心が落ち着かないのである。

そのことに気づいた拓務省や満州拓殖公社は、学生や教師による慰問団として教学奉仕隊のほかに、女子奉仕隊を計画・実行した。これは、日本の女学校や女子青年学校の生徒たちや大日本婦人会に入っている母親たちを、数名から十数名ずつ現地訓練所へ派遣して農作業や衣服の補修などをやらせ、少年たちに女性的・母性的なうるおいを与えようとしたものであった。

高知県送出の郷土部隊

高知県では、1940(昭和 15)年第 1 次の義勇軍送出に向けて、運動が行われ、高知県教育会は 1 中隊(300 名)編成を目指して熱心に県内各所に義勇軍応募を呼び掛けたが、結局、77 名しか集まらず「高知小隊」1 小隊を編成することしかできなかった。1941(昭和 16)年度も 102 名しか集まらずに高知中隊編成には至らなかった。1942(昭和 17)年度は高知中隊(300 名)を目指したが、結局、定員を満たすことができずに 277 名しか集まらなかったが、初の高知中隊を編成して送出した。下記の表から高知県においては、一度も 300 名の高知中隊を編成して送出することは出来なかった。

義勇軍割当数と入所者実数

年　度	送出計画(名)	実　績(名)
1938(13)	500	182
1939(14)	300	90
1940(15)	350	77
1941(16)	100	102
1942(17)	**1**	**277**
1943(18)	300	171
1944(19)	250	219
1945(20)		91
		1.331

(『孫呉先遣隊史』より、備考：17 年度は中隊数で割当、1 中隊は 300 人)

郷土部隊の中隊名

中隊名は中隊長の姓で呼んでいる。

・1940(昭和 15)年第 1 次郷土部隊は、高知県、兵庫県、岡山県、佐賀県の混成部隊で、中隊長は岡山出身の谷本時治で、**谷本中隊**となる。

・1941(昭和 16)年第 2 次郷土部隊は、高知県、大分県、沖縄県の混成部隊で、中隊長は高知県出身の山本繁正で、**山本中隊**となる。

・1942(昭和 17)年第 3 次郷土部隊は、高知県初の高知中隊を編成して、中隊長は高知県出身の斉藤基正で、**斉藤中隊**となる。

・1943(昭和 18)年第 4 次郷土部隊は、2 回目の高知中隊を編成して、中隊長は高知県出身の広瀬正美で、**広瀬中隊**となる。

・1944(昭和 19)年第 5 次郷土部隊は、高知県、熊本県の混成中隊で、中隊長は高知県出身の田中茂喜で、**田中中隊**となる。

２．第１次郷土部隊・谷本中隊体験記

この体験記は、1940(昭和 15)年第１次高知小隊の一員として義勇軍に入隊し、渡満、終戦後シベリアに抑留されていた体験を、旧高岡郡窪川町黒石出身の津野兼吉さんが日記を基に自費出版した、満蒙開拓青少年義勇軍体験記『シベリア物語』(2002 年刊)である。

第１章から第８章まであり、非常に詳しく日々の厳しい生活を綴った長編の日記である。その中から、第１章嫩江訓錬所、第２章西鶴山開拓団、第８章帰還を抜粋・省略して紹介する。

谷本中隊略歴

1940(昭和 15)年第１次郷土部隊・高知小隊として 77 名が、3 月 29 日に内原訓練所に入所後、高知県、兵庫県、岡山県、佐賀県の混成部隊・谷本中隊(谷本時治　岡山県出身)となり、6 月 15 日 305 名が渡満、北安省嫩江県嫩江訓練所入所。1943(昭和 18)年 10 月 1 日、**第３次西鶴山義勇隊開拓団**として、北安省嫩江県西鶴山開拓地に入植する。

第１章　嫩江(のんこう)訓練所　青少年義勇軍(開拓団)

政府と県は移住をすすめて、学校も満州移住について、卒業間近い 1940(昭和 15)2 月に、佐川の県実業学校で高岡郡下の生徒を集めて、5 泊 6 日の講習を行った。高等小学校 2 年を卒業して、大阪の会社へ行くことになっていた私は、先生がすすめる満州を希望し、祖父が許してくれた。

1940(昭和 15)年 3 月 27 日午後、高知県庁へ行った。28 日高知駅から出発して、29 日内原訓練所に着いて、日輪兵舎という円形木造で杉皮ぶきの建物に入る。炊事場も風呂場も松林の中にあって、同じような形をしていた。次々と各地から集合して中隊を編成していった。

内原訓練所の風景

中隊長は岡山県の谷本時治。農事担当は高知県の廣瀬、教学は須貝、佐藤、軍事教練担当は北海道の大沢勘太郎の先生たち。岡山、佐賀、兵庫、高知、北海道の出身者で 300 名。一部の年長者の他はみんな高小卒ばかりである。5 棟の兵舎に 1 棟の中隊本部、1 棟の便所・炊事場・浴場がついていた。4 月 1 日、20 中隊の入所式があり、高知と佐賀は、中隊本部横の 5 舎に入り、見知らぬ者同士、満 14 歳を過ぎたばかりの者が初めて集団生活を行う。生活はすべて中隊単位の軍隊と同じで、軍事教練はきびしく、軍用小銃を持って射撃、行進等が度々行われた。身長の低い私には小銃は長く重くて、長時間支えきれな

かった。毎月初に練兵場に全中隊が集合して分列行進を行い、加藤所長や今井閣下の訓示を受けた。当初は何も知らなかったが、生活の中でだんだん訓練に馴れてきた。内原では行進をする時には常に小さい者を先頭にしていた。

6月初め、満州へ行くことが決まり、被服と飯盒、水筒等を受け取り、所持品を荷造りして発送し、6月14日内原駅を出発して東京駅で乗り換え、神戸三宮駅で下車、6月15日見送りの父とわずかな時間を過ごし、サントス丸に乗船、門司港を経て、18日大連港に着き上陸、夜汽車で北上する。四平街、哈爾濱、斉斉哈爾を通過して6月20日八洲駅で下車、嫩江訓練所に夕方着き、行軍して日の落ちるころ、14中隊に入った。

嫩江訓練所は、北緯49度、東経125度、中国黒龍江省の地図に嫩江という街がある。

1938(昭和13)年には満州国北安省嫩江県の県公署所在地。ソビエトロシアとの国境の黒河とは近い。小興安嶺の中を鉄道でゆくと、約15時間で到着した。この鉄道は地図にない。嫩江から南へ30キロ、草原が起伏して興安嶺に連なり、人家もない丘に満州開拓青少年義勇軍嫩江訓練所が建設された。斉斉哈爾よりホルメンに至る鉄道、伊拉哈と鶴山の間に第3信号機、本線より鉄路が100メートル分岐した小さな駅、八洲は3キロ離れた丘の訓練所に物資や人員を送っていた。

その夜は薄暗い宿舎に並べられたふとんで休んだ。長途旅行で疲れていたがよく眠れない。宿舎は中央が土間で通路だ。両側は板張りで高粱の茎で編んだアンペラ敷き、冬用の壁ペーチカは交互に5つ、小さい窓が6カ所、電灯はなく、石油ランプが2個、薄いふとんと黒く重い毛布1枚の寝具、それを3年間使うのだ。

大陸の夏は午前4時には太陽が昇り、夕方7時には赤く大きくなって沈む。夜のうちに気温が下がって朝は寒いが昼は摂氏40度。風が乾いていて日陰は涼しい。昼は12時から3時まで休む。この時に洗濯すると夕方乾く。

1カ月の手当は3円。軍手等支給される物の他は中隊本部の購買に行って伝票で買う。現金は支給されない。内原では現地生活が無味乾燥、悪く言えば原始生活に近いものだとは教えられなかった。10日もたてば退屈してきた。満州で一生懸命働けば、王道楽土の国が出現し、希望する生活ができると教えられた。訓練所は嫩江の他に鉄驪、昌図、対店等があった。警備は1週間交替で、1小隊から始まって5小隊へくる。年長者が司令や係となり、他は歩哨だ。1カ所2名ずつ1時間交代で昼夜警戒に立つ。昼はいいが、日が沈むと気温が下がり、草に露がつき寒くなる。遠くから野犬の遠吠え、散発する銃声、鳥の羽音、時々赤や青の光、信号弾らしきものにドキドキした。

宿舎でも炊事場でもハエが発生し、食器に盛られた飯が真っ黒になる。家畜の糞尿からも大量に発生して昼寝もできない。

6月中旬、下痢患者が発生し、たちまち急増した。病院の診断では腸チフスが2名、他はアメーバ赤痢である。「生水は飲むな」、飲用禁止であるが、井戸水は冷たく、日盛りは飲んでも汗になって出るのだと言ったが、下痢は各宿舎に伝染し、本部病院だけでは収容しきれない。休養舎では薬品はなく、休んでお粥に梅干しだけの手当だ。

検閲すみの封筒を手に入れた高知市出身の者が、家にこの状態を知らせ、家の者も中隊本部に手紙を送った。彼は中隊本部に行って、こんな所に居られない、帰ると泣いて頼ん

だが、中隊本部では頑として受け付けなかった。「満州開拓の重大使命を、わずか 50 日で男子が志を捨てるのか、恥を知れ。お前を送り出した故国の人の信頼を裏切る非国民だ。」休養舎でただ泣くより他はなかった。高知市で育った彼は、この電灯もない原始生活に近い日常を経験していなかったようだ。

7 月 14 日、1 次先輩の下元さんが訪ねて来た。「1 年経てばこんな気候にも馴れて平気だ」といって慰めてくれた。

8 月 4 日、高知県の者は集まって東の草原に行く。ある地点で草を刈ると、1 基の墓標が現われた。「高岡郡上分村出身、谷脇良土、1938(昭和 13)年この地で腸チフス発症。死亡、火葬にした」とある。菜の花をかざり、米や水を供えて帰る。

8 月の警備が 10 日から始まった。8 月 16 日、警備だけ残して全員 11 中隊へ引っ越した。8 月 25 日夜、何者か分からない敵と 14 中隊警備隊が交戦して、訓練本部から重機関銃を積んだ自動車が応援に急行して無事であったようだ。

新しい小隊編成があり、各県の高年齢者は 5 小隊へ移った。1 小隊は岡山、2、3 小隊は兵庫、4 小隊は高知、佐賀、北海道の混成になった。前のように高年齢者がいた方が良かったと思う。11 中隊に移ると、中隊幹部が次々といなくなった。高知の広瀬先生はあいさつもなくいつの間にか姿が見えなくなり、須貝、佐藤、大沢先生もいなくなった。私達に「今やめて帰るのは裏切り者、非国民だ」と叱った先生が夜逃げのように姿を消した。

小型の発電機を持った巡回映画班が、講堂でニュースと、古川緑波(ろっぱ)のお父さんが映されて、皆大喜びをした。巡回映画は 1 年に 2 、 3 回来てくれた。

8 月 20 日すぎ、朝夕少し寒くなったと感じていたが、25 日朝異常な霜が降りた。農場のトマトは枯れてしまった。南瓜は 1 番生(な)りはよかったが、あとは未熟のままだ。胡瓜、茄子もだめだ。こんなに霜が早くては、冬用の野菜を入れる貯蔵庫はまだ空っぽのままだ。30 日午後の雨は雷に変わった。夏が終わった。

9 月は秋というより冬の訪れのようだ。20 日、真っ白に霜が降りて、大根、キャベツ、人参、馬鈴薯の葉がしおれた。私達は岩下先生と共に、収穫に全力をつくした。早く収穫をしないと、冬期の食糧不足になる。24 日に、本部から数十人の乗馬した人が中隊に乱入し、「小田出てこい」「黒川居るか」と宿舎やうまやを探しまわり、小田、黒川の二人に、殴る、蹴るの暴行の限りをつくしてあいさつもなく去った。突然の暴行は昼間大勢の面前で行われたが、中隊幹部や警備の者は口も出せず、制止もできなかった。 2 年先輩の中隊は先輩の者が多くて、勢力争いが激しかった。幅をきかせると言って中隊毎にけんかをしていた。このように他中隊へけんかに行くことは伝統のようなものとなる。

霜が多くなり、手足にヒビ、アカギレが切れシモヤケがかゆくなった。シモヤケは凍傷 1 度だ。病院では軟膏をくれたが、両手が腫れ上がった。軍手を 2 重にし、重ね着して働いた。

10 月 15 日、曇り空から雪が降り出し、2 時間ほどで真っ白積もり、3 日の後消えた。寒いのでペーチカに火を入れる。本部から防寒衣料が渡された。肌着ネル上下 2 着、中綿入り防寒服上下 2 着、防寒外套 1 着、防寒靴 2 足、中綿のみで毛皮なし。帽子は 10 日ほ

ど遅れたのでほほかむりをして過ごした。

秋の日は短く過ぎ、体力のない年少者は苦労した。作業の割には食糧が少ない。兵隊は1日6合の米が支給されるのに、我々は3合くらいだろう。3合の米と 自給自足の副食ではこらえきれない。収穫した豆や馬鈴薯を持ち帰って、煮炊きした。先生方は朝夕に宿舎を見廻って、注意したがやめなかったので、中隊長はすべての飯盒(はんごう)を取り上げた。

我々はこれに対して、空き缶、古いなべ等を使って空腹を充たし、中には飯盒を持ち出して来た者も居た。シモヤケは気温が氷点下6、7度に下がると、自然に治って安心した。これからは、凍傷になる危険があるので、素手で金物を握ることは禁じられ、扉の金具に布を巻いた。寒気を防ぐため、壁に古新聞を2重に張ったりした。

冬期もゆっくり休養することはなかった。中隊の収穫は終わったが、10町歩の耕地の作業に出た。麦の刈り取りが終わると次は大豆を運ぶ。大豆の収穫はよかった、袋を1つ隠して、皆が少しずつ持ち帰り、ペーチカの鉄板で煎って食べた。内原では、常に仲良く、小さい者を先頭に進んだが、今では大きい者、強い者が先頭に立ち、暖房のペーチカも占領され、小さい者は片隅に押しやられてゆく。5小隊は時々気に入らない者を呼び出していた。帰って来る者は私的制裁を受けて顔を腫らしている。私は出来るだけ目立たないようにつとめた。

11月1日、写真屋が来た。友人と一緒に撮ったり、一人で撮ってもらう。先生の軍刀を借りた防寒姿や、小銃を持つ姿等、一日中にぎやかだった。

寒いので食前作業は薪運びだ。6日朝は雪になり厳冬が始まる。起床は6時半。氷点下15度になった。農場の仕事は終わった。小さい者ばかり本部官舎の当番に行った。炊事場で朝食して行く。先生方は起きていない。ペーチカの火を入れる。石油の空缶2つ担って炊事場の井戸から水を汲む。薪を割って、昼近くになってやっと奥方は起きて、本部購買へ伝票を持って買い物にゆく。ここの奥方はどんな地位の人か、家では母が朝早く起きて、炊事の他に農事もしたのに、火を焚いてもらってから起きるし、水汲み、薪割等、下男を使うやり方だ。家の中でじっとしているだけの怠け者らしい。隣の官舎は高知安芸の安岡利美氏が家族で住んでいた。時々立ち寄って話をした。

宿舎のペーチカは薪をいくら入れても暖まらない。土間が広くて、暖かい空気は屋根裏から逃げ出している。少し多めに衣類を着ているが、身体は暖まらず、2度も3度も小用にゆく。便所が離れているので、近くでごまかしたら、1カ月ぐらいで黄色い氷の山になり、中隊長から、正月迄に畑に捨てて、二度とするなと叱られた。

雪は砂のように凍って、衣服や靴につかないのはよかった。宿舎のペーチカは薪をいくら入れても暖まらない。不寝番はいやだ。眠いのに起こされるし、交替の者は病気だとか、文句を言って起きてくれないし、交替しても寒くて眠られない。

官舎当番をしながら12月を終わった。正月を迎えるのに、するめ1枚、小餅20個、焼き魚、煮豆の入った折詰、みかん5個を支給される。みかんも豆腐も卵も、本部の日本酒も凍っていた。宿舎以外はすべて氷点下20度の冷凍庫である。

中隊長には悪いくせがあった。訓練本部から帰ると、必ず非常召集して全員をたたき起こして、軍事教練をして長い訓示をする。中隊長が本部で飲酒して、酔った勢いでやっている。正月 8 日は、深夜 1 時に非常呼集だ。これから夜間行軍をするという。小銃を肩に、暗く凍った道を北に向かい、朝を迎えた。

1 月半ばから 2 月は厳冬期、気温は氷点下 30 度を超え、北風が休みなく吹く。24 日最低気温は氷点下 47 度になった。入浴出来ないので衣シラミが増えた。肌着を脱いで外気に一晩あてた後、ストーブの鉄板であぶる。凍ったシラミが落ちて焼けたが、卵は死なないで残る。

3 月は太陽が北に傾き暖かくなった。10 日は日露戦争のとき両軍が奉天で会戦した陸軍記念日。各中隊は早朝から行軍して訓練本部に集合して、大演習を行う。重機関銃を乗せたトラクターや、騎兵銃を背負った騎兵隊など、次々と分列行進に加わった。

暖かくなって雪がとけはじめるとどこでも小さい流れと水たまりが出来る。炊事場の雪がとけはじめると、魚の骨や頭が出てきた。「お前達は魚までごまかした。悪い事は現れた」と中隊長が怒った。冬の食糧の冷凍魚を持ち出して隠したが、全部持ち帰らなかった結果だ。3 月 28 日、内原 22 中隊が来て、本部のそばの 3 中隊に入り、16 中隊に替わる。全国各県の出身で高年齢者ばかりだ。

厳寒期を大きな事故もなく過ごした。大地が 2 メートル近くまで凍る寒気。防寒衣にしみ込む寒気をしのいで病気はしなかったが、水不足を口実に 2 日に 1 度くらいの洗面。1 週間着の身着のままで寝起きしたので防寒服は真っ黒に汚れた。洗うと大変なので、雪溶け水に洗剤を溶かしてブラシでこすったが、すすぎが不十分で中綿は水を吸って重く、石けん焼けの赤い染みを作った。

4 月、雪溶けが進んで表土が現われたが、まだ凍っている。岩下先生が今年度の農事計画を発表した。西側の丘の旧来の畑を 100 メートル毎に区切り、3 メートルの道を挟んで 100 メートル平方の四角な畑 60 枚、60 町歩をつくる。翌日から縄を持ち出して区切った。岩下先生は従来の農具では駄目だと、本部から新しいプラオ、馬具を持ち出した。トラクターが欲しいと言ったがこれは駄目で、日本馬を 3 頭渡してもらった。日本馬が来た。馬は勝手に動き回ろうとする。一人が馬の口を取り、2 人で馬を動かした。先生はいろいろ詳しい。満人の農法は駄目だ、肥沃な土地を浅く耕し、生産が落ちると、次へ移る。この国は石炭があるから作物の茎は家畜の飼料とし、家畜の屎尿(しにょう)は畑に帰す。将来は大農具を入れる。草刈りにも日本の鎌は向かない。先生と一緒に働くと気疲れした。馬を巧みに動かさないとすぐに叩かれて、先生のそばにいる者は少なくなる。4 月 4 日、谷本隊長が夫人を迎え本部官舎

馬も大切な家族の一員

に移る。10 日、関東軍の視察団が訪れ、各中隊は本部調教班の丘で攻防戦の演習を行った。20 日、土地の凍結がとけて、トマト苗が大きくなり移植していると野火が迫って来た。始農祭を行って本年の豊作を祈願した。またシモヤケが始まって手足がかゆくなった。

4 月の終わり、食糧の米が来なくなり、馬糧の高粱や古い大豆が食卓に上った。雪どけの後、北翁草(おきなくさ)が紅や赤の花をつけて春が来たのを告げてくれた。冬に見かけない鳥も飛んできた。衣笠先生の下で、トラクターの耕起した畑に、大豆、小麦をはじめ各種の種子を夜遅くまで播き続けて、7 日間過ごした。17 日から警備に入った。嫩江付近で土匪に関して情報が入っている。2、3 日後夕方になって土匪情報が入り、八洲(やしま)駅警備のため 25 名が夕方から翌朝まで防衛に行った。27 日朝 1 時過ぎ、八洲駅方面で激しい銃声があった。帰って来た者の話では、「何があったのか分からない。周囲で急に射撃がはじまり、遅れてなるかと夢中で持っている実包を全部撃った」

黙々と鍬を振る

6 月 17 日は中隊長が軍人勅論を講義して、支那事変に参加した実戦談を述べ、新しく公布された戦陣訓の概要を教えた。6 月 20 日は渡満 1 周年記念日。村山部長がこの中隊の成績は優秀であると訓示した。あと演芸会と相撲大会があった。27 日本部へ集合。武道場で小磯国昭閣下を出迎えた。「訓練成績は良好なれど、設備その他は不十分なり」の講評である。6 月は天候不順で野菜貯蔵庫が浸水して、大量の野菜が腐敗した。

7 月 6 日、中隊長が「本日から嫩江以北の電信電話、一般交通が止められた。封書は受け付けない。ハガキを出すように」という。もしかして、日ソ開戦ではあるまいかという。

同日夕方 30 名が呼び出され、日用品と着替えを背負袋に入れるように訓示。7 日午後 3 時、八洲駅から乗車し、着いたのは東洋一という嫩江飛行場だ。翌日より飛行機掩体工事に加わった。飛行場は 98 式軽爆撃機が多数駐機し、早朝から飛行していた。隣の内務班には安芸郡出身の安養寺という少年航空兵が居た。28 日、予定が変わって訓練所に帰った。嫩江駅では引き揚げた軍人軍属の家族が列車を待っている。戦争かも知れない。

8 月初め、150 人の氏名が発表され、どこか奉仕に行くという。残るは 5、60 人だ。彼らは、南満州の鉄道の各駅に分散して保線や貨物輸送に加わったという。史上有名な関東軍特別大演習だ。1939(昭和 14)年のノモンハン事件につづいて義勇隊は動員された。

草が多いというのは土地が肥沃という事だ。草の生える状態で土地の性質が分かる。除草は大変だが、草に負けてはいけない。寒いけれども 1 年中草木の繋茂する熱帯を考えると、冬は草も生えず、虫も居ないことは幸せだ。

人は草によって生きている。主食の米麦などはほとんどそうだ。衣類も麻、綿など、夏

涼しく、冬暖かく過ごすには欠かせない。家畜の飼料や病気の薬など、直接、間接にかかわっている。もし、草が育たない土地に、どうして生きられるか。畑に生えても、邪魔だなどと言うな、草は大切な隣人だ。ここには 60 種類の草が生える。農事班と一緒に採取して標本を作った。

22 日夕方、中隊に帰った。奉仕隊が出発して中隊はがらんとして人気がない。「集合」わずか 50 人足らずだ。中隊長はひどく不機嫌で、「何があったか理由は分からないが、大挙して岩下先生に暴行したのは間違っている。たとえ先生に非があったとしても、深夜大挙して行動したことは許せない。各人は胸に手を当ててよく考えよ。今度のことは絶対に許さない」

原因は昨日の作業の麦刈りで、怠けていた者をとがめだてして殴った。それが運悪く強く当たって出血した。昨夜は先生に抗議しているうち、「やれ、やってしまえ」ということになったという。岩下先生は中隊を出て、小隊長の一人が責任を取らされ、一時伊拉哈(いらは)の開拓団に研修という名目で追放になった。

9 月 8 日、初霜、続けて 3 日の降霜。西瓜、南瓜、トマトなど枯死。冷雨が 13 日まで続いて小麦 2 町歩は穂が発芽して不良品だ。冬だよとシモヤケの手が言う。30 日、17 中隊の木材伐採班が土匪と交戦したという。広野に野火が現れ、地平線を点滅しながらはしってゆく。秋の終わりを告げているのだ。

10 月初め、朝夕点呼の時、千葉、大久保先生は決まって所持品検査をした。「お前たちは未成年だ。タバコを吸うことはない」。すべて没収されたがやむことはない。満州ではタバコは民間扱いだ。小さい子どもでも、たばこを吸っているのが満州の風景だ。八洲駅の小さい店に菓子と共に売っている。15 日、写真班が 7、8 人ずつの集合写真を撮る。その写真は身分証明書に使われた。20 日、近衛内閣のあとに東條内閣が成立したと知らされた。

12 月 8 日、昼食の支度中に非常呼集だ。中隊長が「本日早朝、米英仏蘭の 4 か国と開戦し、戦闘状態にある」と発表、皆異常な衝撃を受けた。なぜ 4 か国と戦争するのか、6 月以来の動員ではソビエトと戦争を始めるかと思った。軍事教練もすべて対ソビエトを目標にしていたので信じられない。22 日、防寒衣 1 着配布。冬季は農作業が少ないので、教学が中心となってくる。いろいろな学習資料が配られる。日本国内から日米開戦のニュースを紙面いっぱいに掲載した新聞が届いて、開戦早々の真珠湾攻撃の詳細を知る。特殊潜航艇の記事は本部掲示板に張り出された。

2 度目の正月を迎えることになった。昨年のように、餅、菓子、羊かん、スルメ、折詰が支給される。豆腐、こんにゃくは凍って駄目だ。

1 月 9 日、ノモンハン事件に参加したと自称する本部の氷川先生の指揮で八洲の丘に行軍し、6、9 中隊と戦闘演習を行った。演習のあと薬莢(やっきょう)は全部回収された。中隊には上等兵　が宿泊し、毎日戦闘教練を指導した。

2 月 1 日、兵隊は帰って行った。2 年目の冬は馴れたためか、寒さに負けずにすみ、防寒衣もあまり汚さない。ただシモヤケは去年と同じだ。

3 月、藤本勇の父君が高知から訪れた。4 千キロの長旅とこの厳しい寒気には驚かれていた。毎朝氷点下 30 度の寒気だ。暖房が効かないので、天井に霜が降り、ふとんに息が凍って白い。訓練所の物資は常時すべて不足していて補給がない。しかし気候になれたのか、昨年ほど寒くない。空いた時間があるとすぐに空腹になるために考える。いくら考えても動いても胃袋を満足させる物はない。時間つぶしに本を探して読む。本部の図書も読んだ。23 日、炊事場の倉庫から、米 50 キロが紛失した。1 日 1 人 3 合だから 100 人の量になる。班長の浅田君が困っている。大根や大豆を入れて水ぶくれの飯を炊いても、追いつかない。「もう 1 日 2 食だ」

3 月 29 日、本部病院の衛生班に行けと言われた。本部は勤務する作業場の違う班があり、各中隊から 1，2 名集まって本部中隊を構成し、本部機能を運営している。

4 月 6 日身体検査。身長 1 メートル 52 センチ、体重 44 キロ、胸囲 82 センチ、ツベルクリン反応陰性。各中隊から衛生班の勤務者が揃った。全員が初対面だ。私は病棟で班長代理。勤務初めに、何事があっても看護婦と親しくならない、また宿舎に立ち入らない、薬品、器具など病院備品物品は持ち出さない、と誓約させられた。

夕方 6 時から朝 7 時迄の病棟の当直、2 人ずつ 6 時間交替。病室に薪を運んで、1 時間毎にストーブを焚きながら巡回する。病室も看護室も小さなランプの灯火のみで、廊下は暗くて足音がひびく。物の怪など居ないことは 2 年間の訓練で分かっているが、深夜は不気味で少し不安。（以下、病院での様子は省略する）

1 年後、3 月で本部勤務が終わって 11 中隊へ帰った。

4 月から農場作業が始まったが、耕作しても収穫することはない。

6 月 13 日、岡山県女子勤労奉仕隊 5 人が中隊に仮泊した。大久保先生のハーモニカバンドに合わせ、合唱したり、野原に出て花を摘んだりした。6 月 30 日、大久保先生は非常に不機嫌でつんとしている。「お前は本部勤務をしていたが、悪い事はしていなかったか、あれば申し出ろ」とまるで犯罪者扱いだ。「もう誰も信用できない、お前達は大変なことをした」とひどく当たりちらした。この春以来本部の物品盗難があって、八洲の満人部落で衣類を売っていた男を捕らえ、問い詰めると、11 中隊の者が関係していることが分かったのだ。そして 11 中隊を取り調べた。30 人ぐらいから事情を聞いていた。椎名先生、千葉先生がきびしくて、とうとう白状させられたという者がいた。先生は表面だけ見ていた。これは訓練所という限られた中の事で表面には出なかった。立つ鳥跡を濁さずの言葉通りにはゆかない。10 月には 3 年間の訓練が終わって西鶴山開拓地へ移った。

第 2 章　西鶴山開拓地

3 年余りの訓練が終わって開拓地へ移ったのは、1943(昭和 18)年 10 月。満州では康徳（やすとく）10 年。

嫩江訓練所より西方の原野だ。規則ずくめの生活は終わり、一人前に自由にやれると思っていた。開拓誌で自由な新天地、整った宿舎と農耕具を持ち、豊かな収穫の秋を喜んで

いる写真と記事があり、一人 10 町歩の農地を持って自立するとあって、それらの記事を疑わなかった。満州開拓公社は国策を推進し、設備や食糧や、土地営農を司り、まじめに働いていれば満州国の発展と共に王道楽土を築いてゆけると信じられていた。

開拓団長谷本時治は嫩江訓の 11 中隊長で、年長者を約 60 人連れて先発隊としてこの地区に入った。団長は、法律を守って行動し、ここに迷惑をかけないように、五族協和・日満合作の行動をするようにと諭した。ここは 1 次開拓団、長野県人が既に入植し、伊拉哈駅近くに小訓練所があり、300 名の訓練生がいた。所々に支那人の部落がある他は原始そのままの荒地がすべてあった。

40 戸の個人住宅や倉庫を建設していると発表されていたのに、団本部は満人の家屋で、周辺には建設中の建物があるだけだった。倉庫に入ってわずかな荷物を入れると、迫って来る冬を迎えて農作物の収穫が急がれた。北の土地は冬が早い。訓練所のきびしい生活は終わっても、ここも厳しいことには変わりはない。開拓団にゆけば自由にのびのびできるとう思いは早々に崩れ、訓練所より更に悪い状態になった。満拓はこの土地にわずかな設備をしていただけだ。宿舎は建設中で炊事場も便所もない。

支那人の既耕地をわずかに買収して耕作していたが、先発隊の用に足りるだけのものだ。団本部の丘には 8 頭の馬が 2 列に並んでいて、大きな鋤を動かした。支那人は長いむちで馬を追っている。開墾も始まったばかりである。

往復一里！

先発隊が買収した既耕地は少なく、雑草が多かった。嫩江街から西南に 30 キロ南の訥河より 30 キロの中間点で、丘 5 つ越えて東方には鉄路と嫩江があり、西方の丘には嫩江街と訥河を結ぶ国道が通じ、更に進めば嫩江が流れ松花江に至る。

戦略上の要地だろう。義勇隊開拓団は国境近い土地に入植した。国境で異変があれば人員の補給が出来る。ゲリラが横行する第 2 線地帯を埋める為か、伊拉哈より北の山神府までの小興安嶺山地に、青山屯、大南山、大崎山、泥秋、白柏里、第 2 八洲と義勇隊開拓団ばかりが入植している。

一番必要な炊事場は吹きっさらしの屋外にかまどを築いた。便所も大きな穴を掘って、丸太を渡して、わずかなむしろで囲いをした。

今までの編成が崩れ、希望していた者が集って部落を作って別れた。部落は全部で 15 か 16 になったようだ。部落の中に先発隊に加わった者が入って来たので、今迄の生活が分かって来た。病気になる迄働いた者も居れば、作業を怠けて、伊拉哈へ遊びにゆき何日も帰らない者もいた。内地から目薬を送ってもらい、支那人に売りつけ、嫩江へ外出して金がなくなる迄遊び、食糧が乏しい時は、あたりの畑から作物を盗って食ったりもしたようだ。

一日の始まりの起床は本部から言って来たし、礼拝も点呼も先生の都合で度々中止にな

って、規則は崩れ、作業ばかりになった。

炊事当番は3時に起きて大かまどに火を入れる。米は一人一日3合と決っているので、量を増やすために、イモや大根を多量に混ぜた。みそは少ないので味付けには岩塩を使った。栄養なんか分からない。これだけしか入手出来ないのだから。炊きあがると分配する。井戸は10メートルと深く、バケツは破れて水洩りするのを使って、4斗樽に入れてためる。ここでは家畜用も一緒で、また風呂はドラム缶のふたを切っただけの代物だ。1棟が5部屋に分かれ、北が土間になった家がやっと出来上がって、寒い倉庫からそこに移った。食事の質は落ち、量も少なくなったので、皆は夜になるとジャガイモを取って煮た。

飯上げも間近な炊事場

寒くなって宿舎のオンドルに火を入れたが、急いで仕上げたので壁が十分に乾いていない。10月24日、中平さんや松枝等は新しい被服で内地へ発った。「俺も志願していたらよかった」。見送る者は羨ましかった。

初霜が降って炊事場は冷たい水で野菜を洗う等忙しい。炊事当番は7日交替というのに私は10日も行った。ここではだれも交替してくれない。10月、小谷が何か「手伝ってくれ」と言う。倉庫の陰に大きな犬がいた。「俺が足を引っ張るから、お前が首を落とせ」。昨日小谷は国道を南下してきた馬車の老人から、この犬をもらったが中々なつかなかったという。分け前の肉をもらって帰り、ジャガイモやキャベツと共に煮て食った。豚とちがって美味かった。

11月に入って伊拉哈(いらは)の小訓(しょうくん)に行く。若い日本人が来て身分証明書用の写真を撮った。3日は明治節だが、先生の都合で点呼、礼拝なし、大豆刈りにいく。8日に雪が降って根雪になった。雑木を取ってオンドルを焚いたが暖かくない。13日に馬1頭と牛1頭が来た。朝夕の手入れ、水飼いもあるので、寒いからと言って怠けることは出来ない。

騒がしい物音で目がさめた。すぐ上の宿舎で煙が流れ、火事かと思って行ってみたらガス中毒だった。部屋のオンドルの具合が悪く、手直しをしてよくなったので、昨夜からこの部屋で寝ていたら、夜中に苦しくて目がさめた、友達3人が起きないので人工呼吸して助けたという。

共同炊事は解散して各棟毎の炊事になったが、乏しい食糧事情は何ら変わらない。薪取りで私と久川とタイピンセンの畑の付近を歩いた。畑は収穫をすませて何も残っていない。畑のジャガイモはすべて貯蔵庫へ入れたので、残ったのは掘り残した所だけ。ツルハシを持って行き、凍土と共に持ち帰る。

今日は嫩訓へ連絡の日だが、中屋は何も言わないし、寒いのでぐずぐずしている。団本部に行く。団長から「遅いぞ、10時になるぞ。日が暮れると狼が出る所がある。食われるな」。12時までに嫩訓に行かねばならないが、嫩訓(のんくん)に着いたのは12時半、1時間7キロの

行軍だ。郵政班で郵便物を受け取り、幸いにも狼にも遇わずに日暮れに団本部に着いてから、持ち帰った郵便物の員数を本部勤務者に確かめてもらった。風呂当番だ。井戸の近くにドラム缶のふたを開けたのが置いてある。枯れ木も生木も一緒の薪はよく燃えない。諦めずに燃やした。外気は氷点下 15 度だ。夕方近く入浴した。体を拭って帰るとき、ぬれた髪は凍り、赤くなった肌のうぶげが白く凍っている。皆が次々と入浴してゆき、終わるのは 11 時だ。

野草刈りから帰ると、内地に帰っていた中平さんが帰って来ていた。「ここは寒いなあ、生まれた所が悪いから一生苦労することが分かった。せめて 7，8 反の土地でよかった。暗いランプだ」。日本内地に比べて寒いのと電灯がないことを、最悪の生活だと嘆く。文化も娯楽も何一つない所だ。

内地から松枝が帰ったのは 5 日も遅く 11 月は終わっていた。私の家へ行ったが変わりはないといって、皆が寝たあと、「兵役が終わったらここへは来ない。こんな不便な悪い土地では骨折り損だ。新京郊外に上ノ加江の雲井開拓団がある。知人が居るので行ってみた。野菜を栽培するだけで 1 年間の純利益が 6 千円だ。畑は 3 町歩だが、やり方次第では 1 年で 1 万円にもなる。交通の便が良い上に治安もいい。電灯もついているし、水を引けば米が取れる。清岡も野村もあちらに行くそうだ。ここには何があるか、電灯を引くにしても 10 年はかかるぞ。その間に新京はますます繁栄している」という。

松枝は団長に会って新京に行くと伝えたが、団長は 3 年後にはここも新京と同じく繁栄していると聞き入れなかったという。帰国していた者が次々と来て、いろいろの話が出る。寒くて不便な何もない土地だ。

12 月の凍った日も燃料の薪取りと野草刈りを続けたが、入営する者と須藤の怠け者は作業をしなかった。12 月終わりの朝、土間で 1 枚のハガキを拾った。わたしにあてた家から出したものだった。母が死んだと知らせたのに返事もなく帰ってこないと書いてある。団本部へ行って聞いた。手紙は団長にあてて中旬に届いている。また電報もあった。3 日後団長の家に行った。母が死亡したという手紙が来たことは認めたが、「多忙でつい忘れてしまった。内地へ帰してやりたいが、今は時期が悪い。年が明けたら手続きしよう」と言った。年が明けて戦局は重大な危機を迎える。私への電報は村長名で出されていたことも分かり、団本部のやり方は許せないと思った。寒気は日を追ってきびしくなり、薪取りは野草刈りの戻り荷では間に合わなくなったのに、須藤は怠けて出てこない。中平さんがたまりかねて、馬車を出して国道の方へ行く。クヌギのような落葉樹が群生している。中には野火で焼けて枯れた株もある。一日 2 回運んでオンドルで燃やしたが、空気は暖まらず、窓も天

オンドル用の薪を運ぶ

井も霜が真っ白くつき、床だけが暖かい。

牛馬の当番は交替して、本部から粟(あわ)、稗(ひえ)を運び、干し草は農場で取った。馬は元気で、仔を生んだ牛は次第に元気をなくしてゆく。年が明けると各部落で牛が次々と死亡した。解体してみると、脂はなくやせていた。

タイピンセンの畑のトウモロコシは全部私達が取った。久川が農具舎で支那人の使っていた石臼を発見した。トウモロコシの粒を石臼の穴に入れ、引き木を引いて廻すと粒は砕けて粉になる。5 回続けて引くと骨が折れた。荒挽きで止めて鍋に入れた。久川が手早くかき混ぜて塩で味をつけた。不味いが腹のたしにはなった。

正月が近づいた。中平さんが、前に暮らした伊拉哈(いらは)のある部落の友人を訪ねて正月用品を買おうと言う。不要の衣類を売って 15 円を出し、皆も出した金を持ち、牛馬 1 頭ずつにそりを引かせて 12 月 30 日、国道に出て約 10 キロ南下した。嫩江へ 40 キロという標識から小道へ入ると伊拉哈の部落だ。中平さんが友人を訪ねる間に丘を下りて泉を探した。凍らないすんだ水が湧いていた。牛と馬に十分飲ませて、部落へ行くと中平さんと長野県人の友人が待っていて、ジャガイモ 2 袋、人参等を 20 円で買って積み込んだ。すぐに帰ろうとしたが、引き止められて宿舎へ行った。土間に薪ストーブが燃え、床はオンドルで暖かい。自家製のみそ汁、豚肉の煮付け、ジャガイモ飯の御馳走になった。奥さんが親切にもてなしてくれた。

28 日は餅つきだ。5 臼ついて小餅は 1 人 25 個。31 日に小麦粉をこねてマントウ(あんのないまんじゅう)を作り、はるさめも煮た。カレーをつくる予定をしたが、カレー粉がなく、満拓から日本酒を 1 本配給された。ドラム缶の風呂で汚れを落とし、赤飯、はるさめの煮物で酒を飲み、足りない者は酢でもよいと酢を出して飲んだ。

年越しに団本部から餅米(もちごめ)20 キロ、はるさめ 15 斤、菓子、豚肉、冷凍魚、海苔、小麦粉 15 キロの支給があった。皆で出した金でジャガイモ 30 キロ、酒 2 升、月餅数個を買った。 1 人当りは少なく、年末と正月 2 日分であった。

正月はゆっくりと牛と馬の世話をして過ごした。正月の為に用意した米が無くなり、食糧をどうするか相談した。タイピンセンの林に残っているトウモロコシを取ることに決めて大勢が一緒に取って来て、石臼で粉にした。

1944(昭和 19)年 1 月 8 日、団長が全員を集めた。「日米戦争の大詔奉戴日(たいしょうほうたいび)でもあったが、徴兵年齢が繰り下げられて、ほとんど全員が今年徴兵検査に行くように手続きする。各人は家から適齢届と戸籍抄本、卒業証書、体力手帳、青年学校手帳、教練検定合格証、技術免許証を用意して提出せよ。」2 年先の事だと考えていた兵役は目前に迫り、戦争の影響が身近に迫る。

1 月 13 日、長尾茂君の戦死が通知されて戦争が身近になった。嫩江より同行していた馬トワダ号が倒れた。部落の牛もついに力尽きて死亡した。春の農耕期を迎えて最悪の状況だ。馬は人の 10 倍も働く力を持っている。

家から適齢書を送って来た。団長に話して家のことを話すと、「分かってはいるが、命令で国境地域の日本人は移動禁止だ。徴兵検査が済む迄は駄目だ。検査はハルピン兵事部が決めるからこちらでは分からない」。分からないことばかりだ。

今の開拓団はどうなっているのか、満拓から経費がいくら出ているのか、幹部の給料はいくらか、団員は無給で衣類を売って食いつないでいる。配給になる物資の価格はいくらで、支払いはどうしているか、一切不明であるし、公表しない。

今度の徴兵検査は開拓団の存在を不安にしている。兵役は2年で終わるのか、どれくらいの者が動員されて、どこへ行くのか、兵役が終わる迄開拓団は存在するのか、兵役のあとにここに何人が帰ってくるか、先は闇であろう。

2月7日、野村、松永、望月入営に出発。22日、タイピンセンへ行って、豚肉5キロ10円で買う。節約していた米を出して白米飯を炊き、中平、松枝の二人の入営を祝い、23日八洲駅に送った。残ったのは寒い中の作業だけ。

冬の間は面白くない事ばかりだ。兵役のこと、母が死亡したのに家へ帰れないこと、部落内の不和のこと、中平と松枝の去った後は誰も作業に出ない。家に居ても面白くない。一人で毎日薪取りに出た。皆と一緒に酒やたばこを飲み、作業もしないで満人部落へ行き、馬鹿話をして過ごせたら孤独にはならないが。彼等のように他人の働きを食いつぶしてゆくのは性格的に向かない。すべて人並みにすれば問題はないと言うが、やるだけの事はやらないと気がすまぬ。人間とは何者だ。……毎日考えていると、この馬鹿は本当に狂ってしまうのではないかと思ってしまう。生と死は紙一重だ。何も考える事はない。足を一歩踏み出すだけで別の世界に行ける。その世界は良いか悪いか行ってみなければ分からない。後戻りの出来ない世界だ。

2月は草木に厚い霜がついて光っている。空気も凍ってキラキラ光っている。考えてもいい考えは浮かばない。運命なのか、どうするべきか。薪を引きずっていると雪の中から何か飛び出して雪原を走る。大きいウサギだ。鍬を振って次第に追い詰めてついに手に入れた。少しの薪と持って山を下りた。

部屋には久川と野邑が居て、他は満人部落に行ったという。「ウサギを取ったぞ」3人で皮をはぎ煮て料理した。久川が言った。「お前のことは心配していたよ、いつも一人で山へ行くから、何か大変な事になるか分からない。遅くなって帰らないと探しにゆかなければと思っていた」山で死んでいるかもしれないと思っていたと聞いて、心にかけてくれた者が居たことを知った。

久川と一緒に伊拉哈(いらは)部落へ行く。孫(そん)の家でよく来たと歓迎してくれた。孫の家は五間房子(ごけんぼうず)の造りを半分に仕切って、土間が作業場だ。腰かけるといい高さにオンドルがあって暖かい。かまどに麦藁を4，5束入れた。オンドルの出来具合がよく、すぐに湯が沸いた。熱効率がいい。粟飯(あわめし)が炊けたので、いくらでも食べろとすすめるので、大きい椀で4杯食った。帰りに白菜とジャガイモをもらった。人が居なくなったとさわがれるのは、こういう家で歓待されたり、酒やたばこを買うなどしていたからのようだ。

3月も半ば、少し暖かく雪の解けた所があちこち目につくようになった。兵役に50人余り行ったので、今後の営農はどうするか。部落を統合して再編し、耕作することになった。兵役の終わった者が戻って来る。中屋はここより鶴山駅とチュウサイコの中間にいい土地があるので、将来は移りたいと言っている。

団長宿舎の仕事に行けと皆が私に押しつける。団長は嫌われていてだれも行きたがらず、お前に頼むという。仕方なく朝食の後に行き、井戸から水を 10 杯も運んで風呂を沸かす。団長は寝ている。4 畳半 2 間の家には箪笥、戸棚等家具がいっぱい。派手な色の厚い布団と毛布、白い敷布がついている。炊事場の皿、小鉢、コップ、包丁も多い。我々は 4 年前に支給されて汚れて薄いふとんと毛布、わずかな日用品を入れた行李、食器はホーロー引きの古い 4 枚 1 組の鉄皿で、団長のものとは雲泥の差がある。

我々に渡されない物があった。団長も先生もいい生活だ、つづいて本部付の諸兄も一緒にいい生活だろう。団長不信の声が上がるのは、何もかもいい物の上前をはねて渡したと見られる行動を取っているからだ。家の裏には酒瓶がごろごろしている。

満馬 25 頭、日本馬 8 頭が入る。既に満馬 2 頭がおり飼料が大変だ。農機具はプラオ、畝立て機、ハロー、カルチペターだ。原野に溝が連なっている。どうも満州事変の時の名残らしい。18 日から農耕を始めるというのに中谷は嫩江から帰らない。新耕地はプラウで鋤き起こしてあるが、浅くて雑草の根がからんでいてナタハローも具合が悪く、開墾鍬で耕したが疲れる。乗用トラクターが必要だ。燕麦 3・5 町、ジャガイモ 1 町、小麦大麦各 1 町、粟 5 反、大豆 1・5 町、トウモロコシ 5 反、南瓜、菜豆各 1・5 反、大麻 7 畝、野菜 3 反の作付け予定が示された。

先日双山屯へ行って支那人を傷つけた者が居ると、県から特使が来た。この者はすぐに出よ、今なら膏薬代として金一封で済む、遅れると傷害罪で裁判だ。これは正当防衛とは言えない。後方から刺した傷のようだ。

5 月に入り南風が強く、黄塵万丈、仕事は出来ない。丘の隅に小さな花がある。桜草という。農耕期の忙しい時期、怠け者は厄介なものだ。藤本が嫩江へ行って 1 ヵ月も居ないと嘆く。連れに行く者も多忙で行けない。団長が知ったら連帯責任で皆同罪だと言われる。真面目に働く者の血と汗をむさぼるのは共産主義と相通じるし、無責任な男がいくら横行しても罰を与える者は居ない。5 月 4 日夜急に発熱して、右腕が動かせない。右手小指がひどく腫れ上がった。伊拉哈(いらは)診療所が近いので急いでいった。小指から細菌が入ったらしい。農耕期にぶらぶら出来なくて、片手で出来る大豆の種蒔きをした。自然に治るのを待とう。

春。花はいっせいに咲きそろう

5 月 19 日、連合艦隊は山本元帥につづいて古賀元帥を失い、後任は豊田大将に代わる。鈴蘭、百合、芍薬などで野は花畑に変わり、雪原は遠のいてしまった。久川と二人で花畑を歩いてワラビを取るのに興じた。サイパン島に米軍上陸と報道された。新聞がないのでよく分からない。海軍はどうしているか、海軍は米軍に敗れてしまったのか。

7 月 6 日、団長より徴兵検査について長い話があり、各人の服装検査をして、地下足袋

と歯磨き粉が配られた。名簿順に整列し、10 人毎に分隊編成される。志願者や当年の者は今日出発した。7 月 9 日、本部に集合し、八洲(やしま)駅より嫩江へ、夕食の後乗車して 11 時に出発した。先発した者と出会い、14 名中甲種合格 5 名、1 人は病気、残りは乙種合格。甲種、第 1 乙種は兵役に就き、第 2 乙種は予備に入るのが普通である。

7 月 12 日、6 時、黒河神武殿に集合し、名簿順に入場着席し、説明を受け、幹部候補「中学卒」から検査を受ける。私は 12 組の 13 番。

全裸になる。身長 160 センチ、体重 48 キロ、胸囲 80 センチ、視力、色盲、関節、口腔、鼻腔と細かくやって、陰部をしごかれる。次は這いつくばって肛門検査。胸部打診、マントウ反応の大きい腫れには何も言わない。着衣して兵事部長の質問、主に家族のことを聞かれる。「第 2 乙」。別室に行くと更に細かく目の検査があり、終了は 6 時だった。

夕食後映画館で「伊賀の水月」を見た。

翌朝、朝食後全員で黒竜江へ行く。街外れの丘からソビエトロシアを見る。緑の平原に人はなく、点々と小さな家がある。あれはトーチカで砲をかくした所だ。川は幅 1000 メートル、砂ばかりの河川敷の中に細く流れていて、下流に砂の固まった洲がある。あれが紛争の島らしい。満州側の河辺に人が出て騒がしいのに、ソビエト側は何もない。ブラコエの街は見えない。10 時 30 分発列車で出発、午後 2 時八洲着、雨にぬれて帰った。

団長は徴兵検査の成績が悪く開拓団員の栄養不足を叱られた。学力も低い上に、思いがけず性病患者 10 数名が出たため、お前達はおれの顔をつぶしたと当たり散らしている。

8 月 7 日、待望の仔馬が生まれ、母仔共に健在、この馬は 1 年間使わなかった苦労がやっと報われたのだ。徴兵検査後、作業に出る者が少なくなった。作業から帰ると一寸異常だ。酒が配給になったのだ。皆が揃わないうちから酒を飲んで、怠け者が酔って騒いでいるので腹が立つ。外も騒がしい。酒が日頃の不満に火をつけて、嫩訓(のんくん)時代のことからけんかを始めた者、団本部に行って酒を出せ、またかくしているだろうと言って拒否されると、食糧配給の不満や、本部勤務者の役得を言い出し、3 斗 6 升入ったのに我々には半分しか出さない、米も砂糖も小麦粉、これは幹部用だとぬかして隠し、本部がいいように使っている、すべて公開すべきだと、わめいている。

8 月、召集令状が来た。入営まで 20 日しかない事が分かった。いつ召集されるか分からないという思いは現実になった。

久武、小橋、板野他数名は、団長印を使って書類を作り、ひそかに内地に行った。彼らの所に本部勤務者が居た。本部勤務者がうまい事をやっている確認が出たので、皆は我々も同じようにと迫った。伊藤は歯の治療でハルピンへ行ったと団長は言ったが、彼も内地へ行っていた。連絡の持ち帰り郵便物から分かったので、団長が怒って、団長印を家に持ち帰った。燕麦(えんむぎ)を刈っていると呼び出された。「判を持って大至急本部へ来い」とのことである。

とうとう召集だ。一番先だ。団長から令状を受け取る。衛生兵を希望していたのに高射砲兵で鞍山行き。入隊日は 1945(昭和 20)年 3 月、これはよい、5 カ月先だ。一番心配していた事が解決した。続いて貯金通帳も入手、残 86 円とあれば、旅費の半分は出来た。次は許可証を取るだけだ。内地から帰った者の話を聞くと、ハルピンに行けば何とかなるらしい。訥河(のうほ)へ行けば、国境地域外だから証明なしで汽車に乗れる。訥河(のうほ)までは歩いても 35

キロ、半日の行程だ。

戦局はますます重大な事態となり日本本土も安泰ではない。とくに日本近海に潜水艦が侵入して、北朝鮮航路の客船が沈み、関釜連絡船も攻撃されているので、日本へ渡航する者は制限を受け、1日数枚の切符の割り当てがあるのみだ。チチハル駅では1週間待たされるが、入営までの長い5カ月も待てない。召集令状が来た片岡達20名は20日に出発するのに、内地に行った者が居る事が分かったが、どうにもならない。

古い防寒服を出し、ジャガイモを掘る。これをすましたら日本に帰ると決めた。1週間かかって掘り、仮貯蔵した。羊が2匹、狼らしきものに食われた。

日置君がいい便りを持って戻って来た。安原君の友人がチチハルの鉄道局に居る。日本行きの切符が入手できないかと頼んだら、チチハル駅は1日6枚の制限があるものの6枚以内ならなんとかなる。最大の難関の切符の入手が出来そうだ。手配頼む、の至急便を送った。荷物を整理した。何を残しても盗られるので背負袋に夏服を入れ、冬服を着てゆく。不要な汚れ物を入れ、金になる衣類を売って支度した。

10月28日、雪が降りだした。これ以上待てない、早朝、川村、高橋の3人でイラハ部落より伊拉哈(いらは)駅へ向かう。暗くて道がよく分からない。誰も老来へ行ったことはない。曲がった道より鉄路が早いだろうと鉄路に沿って歩く。午後1時過ぎ老来に入り、駅付近を偵察し、列車到着直前に駆け込んで訥河までの切符で乗車したが、何事もなくすんだ。訥河で下車し、チチハル行きに乗り換え、9時に駅に着いた。

出札に安原君の友人が勤務していたので、切符と11月1日関釜連絡船乗船指定、それに間に合う特急券を買って出発日を教えてもらった。日本行きの切符は5枚、発売しない日もあるそうだ。高知駅まで96円95銭だ。

夜、10時10分、夜行普通列車で発つ。15時新京着、20時奉天着。翌早朝4時安東着。18時京城着。11月1日4時、釜山着。6時に乗船。午後3時上陸した。下関だと思ったら九州博多で、乗り換えた。京都行の貨物に乗ってやっと博多を離れた。11月2日9時岡山着。宇野線で宇野につく。連絡船で高松へ、14時20分高松発高知行き。四国は雨であった。20時高知着、旅館に入る。長い旅は終わった。翌朝家に着いた。妹は学校に行き、祖父と伯母がいたが、突然のことで誰が来たのか分からなかったらしい。夕方父が帰って皆がランプの下に揃った。家に帰って数日後、刈り遅れた稲刈りと、割り当てられた麦を播いた。イモを掘ると、洗って切り干しにした。食糧は管理され、イモも切り干しも供出だ。山の畑は蜜柑を抜いてイモ畑に変わっていた。

新　京　駅

どこへ行っても戦死者の墓石が目についた。新しく大きい。

日本は狭い。歩けばすぐ山と川がある。小さい田と畑ばかりだ。ここでも分村移住の話がある。暖かい日本で正月を過ごした。戦局は厳しく台湾が空襲された。満州へ渡航できなくなる不安があって、1月半ばに満州へ帰った。

開拓団は徴兵検査で不合格になった数名と、訓練所から来た5、60名で耕作していたが、団長と衣笠先生が召集され、そのまま8月の敗戦を迎える。嫩江(のんこう)に居た旅団が撤退し、国道をソビエト軍が戦車を先頭に南下してきた。団員は伊拉哈(いはら)から嫩江へ行き難民となった。団長が召集解除され、開拓団へ戻るが、誰も居ない。志那人に日本人は嫩江へ集まったと聞いて、残された食糧と衣料を馬車に積んで後を追ってきた。

団員は再会した団長から、「お前達は腰抜けだ。どうして開拓団に居ないのか。召集解除された者を迎えてやらないとは何事か」となじられた。

1945(昭和20)年10月に収容所に抑留されて5カ月余り、心身ともに疲れ果てた兵隊たちは毎日生きてゆくのに必死であった。

(「第3章　混沌の日々、第4章　シベリアは行き先不明、第5章　古茂山、第6章　三合里へ、第7章　秋乙にて」は、長編になるので省略する。)

第8章　帰還

1946(昭和21)年12月に入ったある日、隊長は笑顔で言った。「長い辛抱のかいがあって願いは叶った。連合国とロシアの協定が出来て、朝鮮に居る日本人の引き上げが10月から始まったそうだ。中部山地の一部は陽徳といって政治体制に反対する者や密告などによって摘発された人々を強制収容し、洗脳することが、此所を脱出して韓国に亡命した人によって実態が公表された。やっと待望の帰国だがまだ喜べない。ロシアは今迄幾度帰国、帰国と言ってだましたか、最後まで安心できない。正月は日本だと喜ぶのは早い」

木材を山から下ろして平城に帰った。

秋乙には大勢の者が居て帰国すると言っている。破れた被服の兵が毎日入所してくる。その中に開拓団の馬島儀一を見つけた。彼も生き延びていたのか。大声で呼んだら、ニヤッとして人波の中へ入り込み、探したが分からない。隊の編成がはじまり、比嘉さんと別れる。刈谷さんと古林を探すが分からない。防寒靴と帽子などは支給されたが冬服はない。

やがて私達の番が来て出発したのはよいが、列車はたびたび停車し、動かなくなる。しかたなく全員が米を出して機関手を買収する、燃料が足りないと山へゆき薪を運んで、それを燃料にとしてやっと着いたのは興南、日本海の都市だ。興南は12月半ばで雪が積もっていた。大工場らしき所が収容所。日本窒素が営業していたという。先発した者と一緒になって引き揚げ船が着くまでの間、民主化教育が始まった。

民主化の進捗(しんちょく)程度を計るといって各隊から3名出して、討論して成績のよい隊は先へ進んで行く。そしてだんだんむつかしくなる。今迄のように勝手にしゃべるな、各自民主化した顔をして態度よくしろ、嫌でもいいから一時の辛抱だと隊長が訓示する。この機会を逃すとシベリア送りだろう。外には打倒帝国主義、打倒李承晩・金九。これは壁新聞というそうだ。日本新聞もすらりと並べてある。

ここでは嫌でも感心して読んだ振りをしながら、共感したと言わねばならない。日本兵を民主化して帰すと言うが、やっているうちに反感が高まってくる。満州と朝鮮のあらゆる資産を掠奪(りゃくだつ)し、軍民をどれいの如く扱って、罪なき者を多数殺し、労働の代償も支払わ

ずにいて、ロシアに感謝せよという計画にどうして共鳴することができようか。ロシアが我々に謝罪して、奪った時計等の金品を先に返す方が正しい。力の関係だ、ロシアは無実の者に、国際法ではなく国内法で刑を課してきた。戦勝国は何をやっても合法だというのか。不満を抑えてやっと関門をくぐり引き揚げ船を待つ身になった。

12 月 31 日の夜に入って全員集合である。誰が計画したのか、ロシア将校達の前で、スターリン大元帥及びソ同盟諸国に感謝をする決議文を長々と朗読した後、スターリン大元帥万歳を三唱して、収容所を出発した。日本の貨物船辰日丸でやっと安心して帰国の途につく。

1947 年 1 月 1 日早朝、雪の降る興南を出て、1 月 4 日佐世保港に着いた。シベリアより帰国したけれど出迎える者は一人もいない。同時期にナホトカより舞鶴に着いた引き揚げ船が盛大に迎えられたのに比べて、忘れ去られたような旅の終わりだった。

満蒙開拓青少年義勇軍とは

「青少年を編成し、勤労報国の一大義勇軍とするため全満数カ所、特に奥地ソ満国境等最重要地点に大訓練所を設けて入所させ、開拓訓練即教育、即ち軍事教練と国境警備の為に現地の環境に即させる方法で、日満を貫く雄大な皇国精神を錬磨し、それを他日堅実な農村建設の指導精神とし、あわせて満州農業経営に必要な知識技能を修練させること」を趣旨に、1937(昭和 12)年 1 月に編成されたものである。

3．第 2 次郷土部隊・山本中隊体験記

この体験記は、2002(平成 14)年 9 月発行の秦史談会『秦史談』第 111 号の P47~49 に、会員の方が、「満蒙開拓青少年義勇軍について」と題して書かれている。それは、2001 年 10 月から高知新聞が『幸せの種はるか―国境を超えた人々」という特集を長期にわたって連載された中に、第 3 次郷土部隊・山本中隊の一員だった山本義美さんの記事が紹介されているものである。

山本義美さんは 1945(昭和 20)年終戦後シベリアに抑留、1948(昭和 23)年 6 月、帰国する。

山本中隊略歴

1941(昭和 16)年第 2 次郷土部隊・高知小隊として 102 名が、3 月に内原訓練所に入所後、高知、大分、沖縄との混成部隊・山本中隊(山本繁正　旧安藝町穴内村出身)となり、10 月 1 日渡満、大石頭訓練所に入所。1944(昭和 19)年 6 月 1 日、**第 4 次豊国(ほうこく)義勇隊開拓団**として、牡丹江省寧安県豊国開拓地に入植する。

13 歳で弟の死をきっかけに 1934(昭和 9)年、満州へ渡った久岡寛さん(60)の父、源二さん。彼が指導者としてかかわった「満蒙開拓青少年義勇軍」とはどんな組織だったのだ

ろう。それを知る人に会った。

「あしが義勇軍に行ったがは1941(昭和16)年。その当時いうたらおんしゃあ‥‥」

ドスン。と山本義美さん(75)＝高岡郡佐川町加茂＝は机をたたく。がっしりした顔と体。声に力がこもっている。

「高等小学校卒業したら、ほら、九州の炭鉱か、満州かになっちょたけ。満州の方が『地の底』よりましじゃけ、行ったわけよ。ほら」。どすんと机がまた鳴る。

◇

「満蒙開拓青少年義勇軍」は14歳から19歳までの少年で組織され、終戦までに10万人以上が満州へ送り出された。「右手に鍬、左手に銃」がスローガンで、開拓と軍事的役割を担わすものだった。参加した多くは、山本さんのように全国の貧しい農家の三男、四男たちである。1941(昭和16)年の春、県内の少年たち100人が県庁で知事にあいさつした後、列車で義勇軍の教育施設である茨城県の「内原訓練所」に向かった。加茂村(当時)からはたった一人、山本少年が参加した。着た服一つ、何も持たない旅出だった。

久岡源治さんは農業指導員として、こうした少年たちを満州へ連れて行った。訓練所の中や満州に渡った後の、少年たちが味わったつらさや悲劇の一つ一つを目にしたはずである。

山本さんは体験を語りながら、声を張り上げ、机をたたいた。

「ほらつらいわ。みんなあ田舎から飛び出して来るがじゃけ。今の中学3年生ぐらいじゃけえ。それが戦闘訓練に入って‥‥それをやらなあ飯を食わしてくれんけエネ…。泣くも泣かんもない、ひっとりぼろぼろ出らあよ」亡くなった弟と同じ年ごろの少年たちの姿に、源二さんは何を感じただろう。

「これは……と思うたね。1941(昭和16)年春。汽車の長旅を経てたどり着いた茨城県内原の「満蒙開拓青少年義勇軍」の訓練所。当時14歳だった山本義美さんは驚いた。

「日輪兵舎」という名の円形の宿舎が、広大な土地にずらり数百ならんでいる。日輪兵舎には40〜50人ずつがいたという。中央に柱が1本立ち、その周囲にぐるり、板の寝台が2段になっていた。少年たちはわらを詰めた袋の上で眠った。

朝は5時に起床。顔を洗い、昼食を取り、正午まで軍事訓練をした。「兵隊と一緒よ。匍匐(ほふく)前進。ほれから歩き方と敬礼仕方。こればっかりやりよったわ」。「あと剣道と銃剣術。銃の置き方が悪けりゃ、小隊長にしかられた挙げ句、みんな並んで、ぱんぱんぱーん。びんたよ」。38式歩兵銃は宿舎に2、3丁ずつあったという。

食事はアルミ缶に麦飯。「そこらで切ってきた菜っぱを炊いて食うがじゃけ。花が咲いちゅうがも、なにもかも食うた。シジミ汁だけがうまかったね‥‥」

耐えられず訓練所を出される少年たちがいた。山本さんも泣いた。「そらそうよ。銃の高さばあに背丈のない子もおったがじゃけえ—」。ぱしん。山本さんは机をたたいた。

銃に届かぬ背丈の子

◇

こうした数万人の少年たちの頂点にいたのは満州開拓論の主張者、加藤完治である。山本さんはその姿を覚えている。「ひげの大けな人じゃった。まあ、あの人を訪ねに皇族がようきたねえ。高松宮や……どっさり訓練を見に来たよ。皇族は毎月1回ばあ、来やせんかったかな」

加藤は東京帝大農学部に学び、古神道に傾倒し満州への開拓教育に熱心だった。

加藤と結び付いたのが張作霖を爆殺した実行犯の東宮鉄男、関東軍参謀の石原莞爾、東京帝大農学部の那須晧教授らである。満州開拓の計画は軍人、学者、官僚、教育者らが一体となって練り上げたものだった。

「開拓」という名ではあるが、実際は武器を持つ民間人を満州に送り、抗日運動に目を光らせて支配体制を固め、ソ連国境の防波堤にする意味合いが当初からあった。

1932(昭和7)年とその翌年、迫撃砲、小銃、機関銃で武装した最初の「試験移民」が吉林省に入っている。その後、村ごとなどの集団移民が相次ぎ、若者を集めた「満蒙開拓青少年義勇軍」などが次々と送り出された。

国際社会からの孤立で1941(昭和16)年、長く続いた南米移民船が途絶えた。人びとは満州を目指した。山本さんもこの年の秋、内原での訓練を終えて満州に渡った。そして38銃を1丁ずつ与えられた。

満州に渡った山本さんたちは、そのまま吉林省の「大石頭訓練所」に入った。満蒙開拓青少年義勇軍には当時、満州に100カ所近い訓練所があった。少年たちは内原、さらに満州で訓練を積み、開拓団として各地に散るようになっていた。

山本さんは高知100人、大分200人、沖縄50人の計350人でつくる中隊の一員だった。隊には軍事訓練、農業、学力など5人の専門指導員がいたという。

「そらあね、内原と全然違う。『開拓に行く』『土地もやる』ちゅうけ、くわの柄を掲げて日本を出たわけ。ほいたら満州じゃ一丁ずつ銃をあてがわれた。訓練も実弾、ぼんぼん撃つがやけえ。完全な軍隊よ」訓練所長らは軍人で、2・26事件にかかわった陸軍「皇道派」の者ばかりだったという。

「よう訓練に耐えん子がおるわけ。『非常呼集』がかかると、完全武装で5里や10里(1里は約4キロ)をさっと走らないかんけぇ……」

皇国史観、軍人勅論がたたき込まれた。従属させるための暴力が日常に満ちていた。軍隊のしごき。物を無くせば殴られた。下着、食器、ボタン一つ。数合わせに隣の物を盗む。盗まれる。殴られる。暴力は連鎖し、弱い者にしわ寄せた。

とどまらぬ暴力の渦

◇

あの時代、人々が自らの民心を押し殺していったのはなぜなのだろう。

米騒動の後で登場した立憲政友会の原敬首相は「平民宰相」として人気があった。しか

しその閣僚の呼びかけで1919(大正８)年、全国のやくざ親分を集めた「大日本国粋会」が発足。言論封殺、暴力を繰り返していた。暴力で手を握った政党政治は暴力で終焉する。原は暗殺され、事件の背景はうやむやになった。

1918(昭和7)年5月には犬養毅首相らが海軍将校にテロで殺され、その4年後には、満州開拓の予算化に強く抵抗していた高橋是清蔵相らが、陸軍将校のクーデターで殺されている。

この2・26事件の背景には、陸軍の2大派閥の争いがあった。事件を起こした「皇道派」は処刑、左遷され、事件処理に当たった「統制派」の石原莞爾は軍内の地位を一層強固にする。こうして満州開拓論への抵抗は、ブレーキを失った。事件後に成立した広田弘毅内閣は「20年間で100万戸、500万人の満州農業移民」の計画を打ち上げる。

広大な土地を用意するため、中国、朝鮮の人びとの耕作地と家が、ただ同然の金で収奪された。現地の人びとは生きるため、日本人の小作農となった。抵抗する者は「匪賊」と呼ばれ殺された。ハルビン郊外の関東軍防疫給水部(731部隊)で、抗日の人びとが人体実験で殺されたのもこのころである。

山本さんもやがて牡丹江省の東京城に「豊国開拓団」として赴く。現地の人から奪った土地。山本さんたちも「匪賊狩り」に出た。こうしたことが敗戦後、開拓団の悲劇へとつながっていく。

４．発見された新聞から郷土部隊送出の動きを見る

ジャーナリズムの中で、義勇軍の募集・送出に最も影響を及ぼしたのは、多くの人々の目に触れる新聞であった。新聞に掲載された義勇軍関連記事、とりわけ記事や写真で報じられる義勇軍の意義や郷土小隊・中隊の記事は、世論を煽り立て義勇軍をいざなう重要な手段となった。

新聞報道の例として、1938(昭和13)年4月10日、最初の義勇軍渡満部隊の壮行式の様子を、4月11日付『東京朝日新聞(現朝日新聞)』は、「行け・次男坊義勇隊／帝都にお別れ行進」の見出し。『東京日日新聞(現毎日新聞)』は、心は早大陸へ／「日輪兵舎」に鍛えた腕を撫し／少年義勇軍第1陣出発(写真4段抜き)。『中外商業新聞(現日本経済新聞)』は、“大地に伸べん志／少年義勇軍四百／帝都に袂別行進堂々(写真2段抜き)。

義勇軍国内出発を伝える各新聞記事は、義勇軍に対する一般世論を喚起する役割を充分に発揮した。

ある時、戦前の高知新聞が大量に見つかったということを聞いた。そこで1942(昭和17)年から1944(昭和19)年の高知新聞朝刊・夕刊の中で、義通軍に関する新聞記事のコピーをお願いした。その中には、たしかに、『高知新聞』でも1942年3月5日付朝刊で、初の高知中隊の壮行式の様子を、「青少年義勇隊高知中隊／想いは大陸へ／けふ癒々高知驛を出發」と大きく写真入りの記事があった。

だが、高知新聞には上記の例のように、義勇軍関連記事を新聞に掲載して世論を煽り立てて喚起する役割もあったと思うが、その一方で、さまざまな地域の出来事や社会情勢などを報道する責務があり、「皇国の楯」、「護国の礎」と題して戦病死した若者の写真入り

で、出身地、学歴、戦死した場所、家族などの経歴が日々紹介されており、軍事訓練の記事もある。

今回、発見された新聞記事から、義勇軍の郷土中隊編成・送出に関して県や郡町村の動向や、「教学奉仕隊」を派遣など当時の社会情勢を知ることが出来た。高知県に義勇軍に関する資料が残っていないので、この高知新聞の記事は貴重な資料となった。高知県初の郷土中隊の第 3 次斉藤中隊や、斉藤中隊につづいて第 4 次広瀬中隊、第 5 次田中中隊に関する記事をそれぞれに分類して記事を原文のまま紹介する。ただし、旧字体に変換ができない文字は、新字体を使い、区別するために濃い文字で表している。

5．斉藤中隊に関する新聞記事から

壯行式

高知県初の郷土部隊・高知中隊であるから、壯行式の様子は大きく新聞紙面を取って掲載されている。

◆1942(昭和 17)年 3 月 5 日高知新聞朝刊

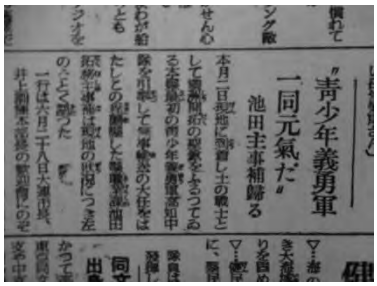
青少年義勇軍高知中隊／想ひは大陸へ／けふ愈々高知驛を出發

(写真は山内神社参拝の義勇軍)

想いを滿洲の桃源鄕に馳せ三月五日内原滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所へと晴れの壯途にのぼる高知中隊は四日に鄕土における最後の一日下記の行事を行ったが出發を前に全隊員の旅装も軽々しく紅顔の青少年には何がなんでもやりぬく決意が表明され筑波颪(おろし)の荒れすさぶ内原の酷寒をものともせず農業報國に挺身する見事な意氣込が窺(うかが)はれたこの日午前九時より各出身町村で激励の町村壯行式を行った全隊員は午後二時縣庁正面内廣場に勢揃ひ郡小隊を編成、小隊毎に點呼をとり國民儀礼を行った後阿部學部長から新調の隊旗を授與(じゅよ)され午後二時半、隊伍を整へた高知中隊は初春の陽光を浴びて燦と輝く眞新の隊旗を碧空に簸(ひ)して縣庁正面出發本町から乘出(のりだし)を経て山内神社に至り参拝をなしそれより乘出に出で電車通を東進青柳橋渡り護國神社に参拝、更に電車通を西進目貫街を堂々行進、新京橋を經て帶屋町を西進、追手筋は天理教會の宿舍に入り、最後の一夜を係官主任からの指示を受け、父兄と共に楽しき懇談を交へたがいよいよ今日五日は縣公會堂に集合壯行式に臨み午後一時二十六分高知驛發晴れの首途にのぼるが、これら義勇軍隊員の輸送保護に池田主任係官、上田幹事以下十名が當ることになっている

◆1942(昭和 17)年 7 月 19 日高知新聞朝刊

“青少年義勇軍一同元氣だ”／池田主事補歸る


"青少年義勇軍
一同元氣だ"
池田主事補歸る

本日二日に現地に到着し土の戰士として滿洲開拓の聖鍬をふるつてゐる本縣最初の青少年義勇軍高知中隊を引率して無事輸送の大任をはたしこの程歸縣した縣職業課池田拓務主事補は現地の狀況につき次の如く語った

一行は六月二十八日大連市長、井上訓練本部長の歓迎會にのぞみ特に本縣出身岡村霞氏の案内で忠靈塔参拝、市内見學ののち開拓會館に一泊、二十九日旅順見學、第十一師団奮戰の各戰跡を辿り白寶山の納骨堂に詣で土州健兒として祖先の名をはづかしめぬことを堅く誓ひ同夜北上、七月一日朝海北驛に着きそれより對店大訓練所まで齊藤中隊長を先頭に行軍、こゝには愛媛、香川両縣の中隊も高知中隊と並び新宿舍が建築されてゐた、風呂場、炊事場、倉庫等の設備も整い何ら不自由はない、隊員は一同元氣旺盛で土佐魂を發揮し奮闘してゐる

高知県派遣の教学奉仕隊

第 3 次斉藤中隊、第 4 次広瀬中隊、第 5 次田中中隊の教学奉仕隊は、文部省との連携の下に「満州建設勤労奉仕隊」の一環として実施された。高知県初の高知中隊・斉藤中隊が渡満したのは 1942(昭和 17)年 7 月であるのに、わずか 1 か月後の 8 月 9 日に最初の教学奉仕員(隊)が派遣されている。

◆1942(昭和 17)年 8 月 9 日高知新聞朝刊

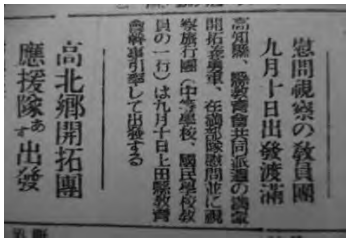
滿洲へ教學奉仕員出發

滿洲へ教學
奉仕員出發

滿洲の曠野に建設の聖鍬をふるふ青少年義勇軍高知中隊へ卿土の報告と慰問を兼ねて魂の錬成に務める教學奉仕員高岡郡檮原國民學校訓導梅原榮兎喜、同郡高東國民學校教頭西原傳、吾川郡伊野町國民學校訓導中山卯月、幡多郡中村町國民學校訓導北代方夫の諸氏は八日午前八時縣學務部長室で擧行された出發式にのぞみ藤野総務部長から訓示と激勵をうけ勇躍同九時四十分高知驛發準急で渡満の途についた、一行は九月十五日まで豫定の訓練所で教學奉仕を行つて歸縣する

◆1942(昭和 17)年 8 月 28 日高知新聞朝刊

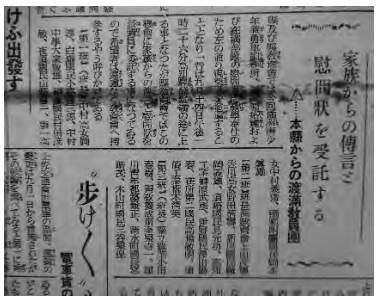
慰問視察の教員團九月十日出發渡滿


慰問視察の教員團
九月十日出發渡滿
高北鄉開拓團
應援隊出發

高知縣、縣教育會共同派遣の滿蒙開拓義勇軍、在滿部隊慰並に視察旅行團(中等學校、國民學校教員の一行)は九月十日上田縣教育會幹事引率して出發する

◆1942(昭和 17)年 9 月 4 日高知新聞夕刊

家族からの傳言と慰問狀を受託する／本縣からの渡滿教員團


家族からの傳言と慰問狀を受託する

縣及び縣教育會では今回滿洲青少年義勇軍訓練所、滿洲開拓團及び在滿部隊の慰問並びに教學奉仕のため下の通り視察員を派遣することになり一行は九月十四日午後一時二十六分高知驛發渡滿の途に上る事となつたが縣教育會ではこの機會に家族からの傳言と慰問狀を派遣員に委託する事になつてゐるので希望者は遠慮なく教育會へ持參するやう呼びかけてゐる

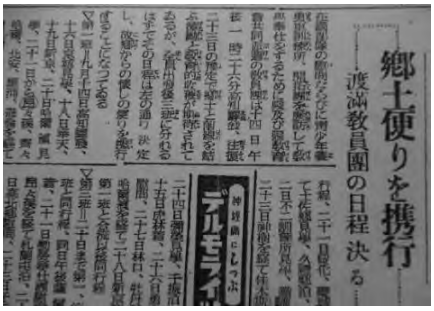
【一斑】(班長)中村高女岡淳、白瀧國民小路吾三郎、中村中學大家數雄、和食國民村田茂敏、夜須國民山崎喜一、第一高女中村義猪、師範付屬國民岡本眞雄

【第二班】(班長)縣教育會上田茂穗、佐川高女野田清壽、新居國民痲岡義雄、須崎國民見元功、高知工業榊原武彦、在所第二國民高橋敏明、須崎工業橋本清美

【第三班】(班長)縣立農業小田春樹、青教養成所秦泉寺一、窪川青年都築兼正、清水町國民宮崎茂、本山町國民三谷泉保

◆1942(昭和 17)年 9 月 11 日高知新聞夕刊

郷土便りを携行／渡滿教員團の日程決る


郷土便りを携行
渡滿教員團の日程決る

在滿部隊の慰問ならび青少年義勇軍訓練所、開拓團を歴訪して教學奉仕をするために縣及び縣教育會共同派遣の教員團は十四日午後一時二十六分高知驛發、往復二十三日の豫定で郷土と前線を結ぶ激勵と教育的収穫が期待されてゐるが、全員出發後三班に分れるはずでその日程は下の通り決定し、故郷からの懐かしの便りを携行することになってゐる

▷第一班＝九月十四日高知驛發、十六日京城見學、十八日奉天、十九日新京、二十日哈爾濱見學、二十一日から昂々溪、齊々哈爾、北安、黒河、海倫を経て對店義勇軍慰問、二十七日大石頭義勇軍慰問、二十八日吉林、新京見學、二十九日奉天、大石橋を経て三十日大連見學、十月一日旅順見學、二日撫順、四日平壤、五日釜山、六日午後五時四十五分高知驛着

▷第二班＝二十日まで第一班と同じ行程、二十一日綏化、慶城を経て土佐郷見學、土佐郷泊、二十二日不二訓練所見學、鐵驪泊、二十三日神樹を経て佳木斯泊、二十四日彌榮見學、千振泊、二十五日虎林着、二十六日勇士を慰問、二十七日林口、牡丹江、哈爾濱を経て二十八日新京着、第一班と合流以後同行程

▷第三班＝二十日まで第一、第二と同行程、同日午後薩爾圖着、二十一日勤勞奉仕團慰問、昂々溪を経て札蘭屯泊、二十二日高北郷慰問、二十三日牙克石泊、二十四日牙克石慰問、二十五日哈爾濱見學、二十六日平安高知慰問、拉法泊、二十七日金錢保慰問、新京に

て第一、第二班と合流、十月六日歸縣

◆1942(昭和 17)年 9 月 26 日高知新聞夕刊

大陸へ先生の慰問團／勇躍出發

大陸へ先生の慰問團 勇躍出發

嚴として北方の守りに任ずる鄕土勇士ならびに大陸建設に聖鍬をふるふ開拓團、青少年義勇軍などを心から慰問する縣ならびに縣教育會協同主催の慰問視察團員二十一名は上田茂穂團長に引率されて二十五日午後一時二十九分高知驛發列車で一路大陸に向け出發した。この慰問視察團は縣下中等學校、實業學校、國民學校、青年學校の教員から成るもので一行は午前十時半縣廳廣場に集合、藤野學務部長から訓辭をうけた後打揃つて山内神社に參拜、ついで高知教育會館の壯行式に臨んだが式は國民儀禮に始まり支部長代理白石副會長ならびに野田清壽氏の力強い挨拶や注意などがあつて萬歲を三唱して閉式、晝食ののち一行を三班に分け旅裝も軽やかに市中を堂々行進午後一時頃高知驛發車中の人となりやがて勇ましく出發した

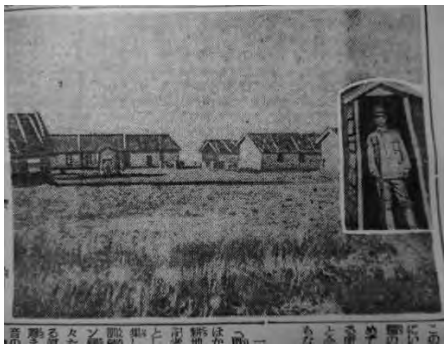
◆1942(昭和 17)年 12 月 29 日高知新聞朝刊

元氣な高知中隊／缺かすな慰問と激勵／開拓青少年義勇隊／教學奉仕隊員の歸高談

元氣な高知中隊
缺かすな慰問と激勵

滿洲開拓青年義勇隊教學奉仕隊冬季班高知市城東國民學校教員岡本良太、長岡郡東豊永同原敬之、安藝郡吉良川同横山福吉、長岡郡長岡青年學校教員下村重徳の四氏は去る十一月十九日全國各府縣から集まつた二百二十二名の教員と下關で落合つて渡満、三十五日間に亘り現地鄕土義勇隊に教學奉仕したが二十七日午後零時二十九分高知驛着元氣で歸高、以下は一行の談話を綜合したものである

本年三月送出の青年義勇隊ははじめて一個中隊を編成して北安省對店訓練所で齋藤中隊長のもとに零下二十余度の寒氣を物ともせず元氣溌溂として訓練を受けてゐる、まづ午前七時半ラツパを合圖に起床し禮拝場に集合東方に向ひ一禮二拍手して國歌を嚴かに齊唱し天皇陛下の彌榮を心から奉唱、續いて義勇隊綱領を朗々と唱へ、同八時三十分作業を開始、午後五時時夕食、同八時就寢、これが一日の日課であり決意を滲ませて奮勵努力する隊員諸君に頭が下つたが、義勇隊の發展は幹部によき人を得ることだ、その意味で鄕土中隊に然るべき幹部を増員してほしい、さらに他府縣では義勇隊後援會を設立して非常な成績を擧げてゐるのを目撃して羨ましく思つた、要するに並々ならぬ隊員の勞苦を偲んで慰問激勵を缺かさぬ熱意を要望するとともに卿里を離れ懐かしい父母の膝下をはなれて酷寒の曠野に黙々として挺身する青年義勇隊諸君に無限の感謝を捧げやう



高知新聞特派員の対店訓練所訪問記

斉藤中隊は昭和 17 年 7 月 3 日に渡満し、対店訓練所に入所した。そのちょうど 3 カ月後に高知新聞の特派員が、訓練所を訪問している。

對店訓練所遠景

◆1942(昭和 17)年 10 月 4 日高知新聞朝刊

開拓戦線を視る／滿洲にて／山崎本社特派員 (1)

殉國の決意も固く黙々土に挑む開拓戰士／對店訓練所〔高知中隊を觀る〕

開拓戦線を視る
滿洲にて 山崎本社特派員
(1)

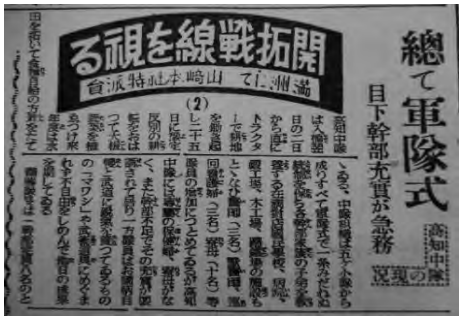
一眸千里厖大な滿洲平原は熟地(既耕地)千八百五十余萬町歩のほか實に三千百六十余萬町歩の可耕地が拓士の聖鍬を待つてゐる、記者は開拓陣營視察行の第一旅程としてまづ若人の意氣と情熱を結集した土の白虎隊青年義勇隊對店訓練所高知中隊を訪ふべくハルピン驛發の夜行で北黒線を急ぐ、坦々たる鐵路をはさんで両翼に展ける原野は魔物のやうにグツスリ寢靜まりただレールをきしる車輪の音のみが強く耳朶を打ち北邊の重要輸送路にさまざまの印象が浮かんでくる、北へ北へ列車はひた走りやがて東の空はかすかに明けて來た、地平線は遠く雲表に接しさへぎる何物もない、なんといふ雄大な景觀であらう翌朝七時半豫定予定よりおくれて訓練所の最寄驛海北に着く、こゝは昭和七年六月九日夜來襲した千餘の馬占山軍と當時海北鎮守備に任じてゐた歩兵第五十聯隊石川大隊と大激戰を演じ惜しくも奈良本少佐の戰死をみた滿洲事變の戰跡地である、訓練所本部と連絡をする驛近くので辯事所で折よく對面した高知中隊長齋藤基正氏(吉良川出身)と同道でトラックの便をかり東南方三十一キロを疾駆する、名物の黄塵が荷物滿載の上に乗つかつた記者の頭上から容赦なく降りかかり速成泥人形が出来上がるかつて中支戦線に従軍した當時がしのばれてなつかしいさて建設へひたぶる精進を續けてゐる義勇隊訓練所は北滿へ六十八ケ所、南滿へ十三ケ所設置され昭和七年の春、元農相石黒忠篤、農博那須晧、現内原訓練所長加藤完治諸氏が滿洲開拓運動の主唱者として政府當局に開拓民送出を進言したがその機に到らぬため加藤氏は蹶然渡滿し關東軍並に現地官憲と折衝を重ねた結果奉天北大營に約百町歩の土地を借うけ昭和七年五月北大營日本國民高等學校を開設したのが訓練所の濫觴期で、高知中隊は本年七月一日現地に到着、井上(宮崎)川原(富山、群馬)中島(山口)浴本(山口)石澤(福島)門田(愛媛)淺野(香川)野口(香川)丸山(熊本)若田(愛媛)福本(佐賀、長崎、福岡)の先遣中隊を一團とする訓練本部を置き缺員中の所長は近く退役陸軍少将が赴任のはずで総務、経理訓練、増健各部にわかれ本部員貞岡清(山北村出身)氏が齋藤中隊長、農事擔任教諭大越之夫(福島縣)教練指導員竹内秀三(福井縣)諸氏とともに鄕士隊員の錬成

に協力してをり齋藤中隊長は入植當時の苦難にも屈せず身魂をさゝげて涙ぐましい活躍中である（つづく）

◆1942(昭和 17)年 10 月 6 日高知新聞朝刊

開拓戰線を視る(2)／滿州にて／山崎本社特派員

總て軍隊式／目下幹部充實が急務〔高知中隊の現況〕


開拓戰線を視る
滿州にて 山崎本社特派員
總て軍隊式
高知中隊の現況
目下幹部充實が急務

高知中隊は入植翌日の二日から直にトラクターで耕地を鋤き起し二十五日に豫定反別の耕転をおはつて大根蔬菜を植ゑつけ來年度は水田を拓いて食糧自給の方針を立てゝゐる、中隊組織は 5 ケ小隊から成りすべて軍隊式で一糸みだれぬ統制を保ち各幹部家族の子弟を教養する在滿對店國民學校、病院、鍛工場、木工場、蹄鐵場の施設もとゝなひ醫師（三名）獣醫師、巡回看護婦（八名）寮母（十名）等隊員の増加につとめてゐるが高知中隊には専属の保健婦、寮母がなく、また幹部不足でその充實が要請されて居り一方隊員はお國柄自慢と武道に鋭氣を養つてゐるものの「マワシ」や武術道具にめぐまれず不自由をしのんで他日の成果を期してゐる齋藤隊長は「幹部定員八名のところ現在三名で隊員の訓育に事を缺き遺憾におもつてゐるが是非とも縣當局の支援で善處を希望してをり内原訓練所で訓練してゐては間に合はんので適當な人材さへあれば現地訓練を施したいと考へてゐる、次に鄕土出身の寮母は何より必要で隊員病氣の時はもちろん女子特有の溫情味から和やかな家庭愛が生れるので大陸に關心の深い香長方面の女先生の中から寮母を送ってほしい、条件は廿五歳以上の獨身者で現地で配偶者の斡旋をしたい考へで俸給は廿五歳で本俸四十円、手當十三割のほか親を扶養する者は一人につき十円の家族手當が支給される、そして隊員の送出については今後量より質に重點を置かれるやう當局にお願ひしたい、折々隊員の家族から來る手紙に却つて子供の忍耐心をにぶらせ歸鄕をうながすやうなものもあるが兵隊として出征させた氣持ちで激勵してもらひたいものである」と語った(後略)

◆1942(昭和 17)年 10 月 8 日高知新聞朝刊

開拓戰線を視る(3)／滿州にて／山崎本社特派員

涯しなき大沃野／我等義務開拓團の手で〔高知中隊の現況〕

開拓戰線を視る
滿州にて 山崎本社特派員
涯しなき大沃野
我等義務開拓團の手で

(前略)かく語る隊員は節米混食と僅かな小遣錢にも不平をこぼさず黙々土に殉じる心根はたのもしい、ただ「母校の先生には恩になつてゐるので度々手紙を出しても一回も返事をくれぬ方もあり一時は欺された感じで憤慨した」との無理からぬ抗議は異口同音でこの點縣下の國民學校教員に記者が代わつて猛省をうながし天下りの義勇隊送出命令？による義務的な観念を一掃し國防の役割を持つ青少年に親心の眞情で助力することを要望したい、試みに弱冠十五歳の同中隊第四小隊高橋青君(横畠村)の純情盛つた渡滿

の感想一篇を示して本稿を結ぶ「どこまで行つてもはて知れぬ大沃野がやがて僕達義勇隊開拓團の手によつて開墾せられるのかと思ふと何ともいへない希望に充たされます、将來はお父さんお母さんを迎へて一家樂しく土にしつかり根を下ろして永久に亡びない農村を建設するのだ、そして自分はこの地で最初の祖先になるのだと思ふと内地にくすぶってゐる青年の氣持が知れない、をはりに郷土への注文その他を下に

一、慰問には内地から受取る手紙が一番うれしいこと

二、後輩がどしどし土州男子の意氣を持つて義勇隊に來て戴きたいこと

三、高知縣そのものがもう少し滿洲開拓を認識して戴きたいこと

大陸の第一歩を印した大連以來もう内地とはがらりと變かわってしまった、内地のあのがつがつとした狭い所で生活してゐた自分たちには廣過ぎるやうな感じがして内地の事を思はぬではなかつた、しかし一ケ月位立つと現地の生活に慣れ大陸特有の好い所を見出し山叉山のはなをつきさうな内地へ歸らうとは思はない、ほんとうに大陸の土興亞の礎となる決心を堅めたのでした。」(後略)

大日本婦人会・市民の協力

◆1942(昭和 17)年 10 月 3 日高知新聞夕刊

若き鍬の拓士に慰問袋／日婦市支部の計畫順調に進む

滿洲の曠野に新東亞建設の鍬を揮ふ青少年義勇軍の若者たちには前線勇士におとらぬ勞苦が續いてゐる、この曠野の青少年拓士に土佐路の香りあふれた慰問袋を送らうといふ日婦高知市支部の計畫は先ごろから順調に進んで目標の八百袋を突破する意氣込みであるがいよいよ九日全市會員の眞心こめた慰問袋が蒐集されることになった

◆1942(昭和 17)年 10 月 11 日高知新聞夕刊

若き拓士に暖い贈物／日婦市支部のおばさん達から

これは酷寒の滿洲曠野に勞苦する青少年義勇軍の若者たちへ日婦高知市支部の眞心を集めた贈物—曠野に冬籠りする若者たちに郷土の應援がどれだけの力になることか、市の日婦會員によつてあたたかく作られた慰問、激勵袋が十日早朝から全市各班から高知武揚協會にあつめられた、この日西内支部長らも武揚協會の庭に姿を見せ久万主事や服部支部員の世話ですぐに荷造りされ倉庫に積まれていつたが正午ごろまでに目標の八百袋を突破した(寫眞は集つた慰問激励袋)

伝書鳩講習会

交通不便な滿州開拓地の通信連絡手段として伝書鳩を育成していたことが分かった。

◆1942(昭和 17)年 10 月 22 日高知新聞夕刊

滿洲開拓地で傳書鳩講習會

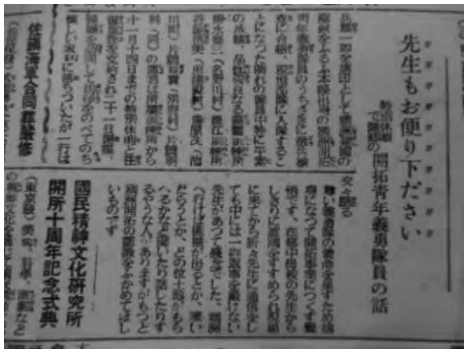
交通不便な滿洲開拓地の通信聯絡係として可愛いゝ鳩君が登場する―滿洲開拓青年義勇隊訓練本部では滿洲國軍通信鳩育成所の好意で昨年同所に傳書鳩の第１回訓練講習會を開き嚮導訓練所訓練生に講習を行つたが同訓練所では昨冬製炭地、訓練所間〇〇キロの通信を連日實施し好成績を上げたので各訓練所へも普及させるため第二回通信鳩飼育管理講習會を九月十九日から五十日間の豫定で開催中であり受講生は對店・寧安兩訓練所から各六名、對店訓練所では高知中隊森敏雄(上ノ加江町)松澤良一(久禮町)両君が新京市の傳書鳩育成所に合宿受講中で教官樋口中尉その他の指導を受けてをり早くも鳩取扱ひの第一課を終へた旨この程この程縣職業課へ便りがあった

先生、お便り下さい

「先生から強く勧められて満州に来たが、来てみると話が違う。先生に手紙を出しても返事が来ない、騙された」というような恨み言は、他県の隊員の手記にも書かれている。

◆1942(昭和 17)年 10 月 24 日高知新聞夕刊

先生もお便り下さい／特別休暇で歸郷の開拓青年義勇隊の話



先生もお便り下ださい

特別休暇で歸郷の開拓青年義勇隊員の話

國民精神文化研究所

開所十周年記念式典

兵農一如を旗印として滿洲建國の聖鍬をふるふ本縣出身の滿洲開拓青年義勇隊のうちさきに徴兵検査に合格、現地部隊に入隊することになつた晴れの隊員中特に平素の成績、品性優良なる鉄驪訓練所掛水豊三(名野川村)嫩江訓練所谷清美(東津野村)藤原茂(池川町)片岡益實(別府村)の諸君は所屬訓練所から十一月十四日までの特別休暇と往復旅費を支給され二十一日歸縣、縣廳を訪問して挨拶をのべてのち懐かしい家郷に落ちついたが一行は交々語る

尊い義勇隊の使命を果すため捨身になって開拓事業につくす覺悟です、在郷中母校の先生からしきりに渡滿を進められ現場に來てから折々先生に通信をしても中には一向返事を戴けない先生があつて残念でした、滿洲に行けば匪賊が出るとか、寒いだらうとか、どの位土地がもらへるかなど聞いたり話したりするやうな人がありますがもつと滿洲開拓の認識をふかめてほしいものです

６．第３次郷土部隊・斉藤中隊体験記

斉藤中隊の体験記は、三宮徳三郎編『高知県満州開拓史』の中に掲載されている、郷土中隊編成の斉藤中隊(第５次不二義勇隊開拓団)元隊員の小松和夫さんの体験記である。

斉藤中隊略歴

1942(昭和 17)年度第 3 次郷土部隊で、中隊編成の 300 名には達しなかったが、277 名で初めて「高知中隊」を編成、3 月に内原訓練所に入所。斉藤中隊(斉藤基正　吉良川町出身)として 7 月 3 日渡満、対店訓練所入所。1945(昭和 20)年 6 月 1 日、**第 5 次不二義勇隊開拓団**として、北安省慶安県不二開拓地に入植する。8 月 15 日開拓団で敗戦を知る。9 月 9，10 日ハルピン、新京方面非難、ソ連軍に抑留される。

満州開拓青少年義勇隊高知中隊の結成

戦時下における国策遂行のかけ声にようやく、義勇軍第 5 次として高知県最初の「郷土部隊」の編成がなる。応募者は 1942(昭和 17)年 3 月 4 日、県下青年学校の生徒、高等小学校卒業者の 14 歳から 17 歳の青少年のみが当時の城東中学校に集結。同月 7 日茨城県内原の満洲開拓青少年義勇軍内原訓練所に 277 名の若人が入所した。すでに同訓練所で幹部訓練終了の元公立青年学校教官の斎藤基正氏を中隊長に迎え、同訓練所第 45 中隊として所長加藤完治先生のもと約 3 カ月の訓練を終了する。

（応募者数は、郡別に編成されており、高知小隊 14 名、安芸小隊 48 名、香美小隊 22 名、長岡小隊 26 名、土佐小隊 10 名、吾川小隊 37 名、高岡小隊 80 名、幡多小隊 40 名、計 277 名である。）

渡満・対店義勇隊訓練所

皇居、伊勢神宮に参拝、梅雨に煙る高知の郷土訪問。昭和 17 年 6 月 25 日神戸港を出港大連経由、旅順の戦跡を見学ののち、満州国北安省海倫県、対店訓練所に同年 7 月 1 日、225 人が入所。同訓練所にはすでに入所訓練中の第 3 次 4 個中隊、第 4 次 5 個中隊、第 5 次 2 個中隊があり、高知中隊を加えて 12 個中隊の大訓練所で、所長陸軍少尉藤田与五郎閣下のもと、軍事訓練、開拓農事、普通科学の基礎訓練から、トラクター班を始め郵便業務に亘(わた)るまで凡そ開拓村を建設するに必要なそれぞれ特殊班の技術訓練 3 カ年で開拓団へ移行する。

回想すれば広野に沈む赤い夕陽を眺めて望郷の涙を流し、零下 30 度の酷寒の凍傷に泣きながらも、きびしい訓練の中に若人たちは青春をかけた北満の荒野を痛快に暴れまくった 3 年間であった。途中満鉄に希望転出者、新京師範に入学者、親族の所属開拓団への転用者を除き 186 名が開拓団へ移行と決る。すでに戦局は厳しくなり、軍隊に現地入隊者も多数となる。戦局の悪化に伴い義勇隊開拓団も団員が召集を受け労働力不足は明らかとなり、吾が 5 次義勇隊はすでに入植の第 1 次、第 2 次義勇隊に補充入植のうき目となり、高知中隊も第 5 次不二義勇隊開拓団に入植が決定する。

入植当時

1944(昭和 19)年 10 月、先遣隊は入植決定地の北安省慶安郡上欧根(土佐郡、久礼郷開拓団の隣接地)に移行。本隊も昭和 20 年 4 月 10 日同地に移行。移行に先だち 80 名は入植地

も見ずに軍属派遣隊として関東軍軍務に出発。慶安街から 15 里も奥地の開拓団であったが、付近ことごとく一般開拓団、義勇隊開拓団囲まれ、未開地広大にして土地肥沃、特に高知県出身の久礼郷開拓団、土佐郷開拓団が隣にあり同地の土佐弁に故郷を感じて若人達の意気盛んなものがあったが、現地入隊者で団員は減る一方であった。昭和 20 年 8 月 14 日残り少ない団員のほとんど(満 18 歳)に最悪時の第 2 国民兵役による動員が下り後に残る 17 歳組と最後の杯を交して 15 日の夕方慶安街に出た瞬間敗戦を知り、唖然としながらも夜道を開拓団に引き返す。

敗戦・引揚げ

国破れたりとなれば悲惨である。異国の地とあってはこと更痛感する。いつ内地に帰れるのか？見当もつかず、大小のデマ、流言に希望を失いかけながらも、若さの力で或は幼い頃の故郷の山河を夢にみて必ず生きて帰ると希望をとりもどす。幸に隣同士の開拓団が団結し慶安街に近い華陽、佐知密両開拓団に土佐郷、久礼郷、不二義開、大利根義開の在団者が避難集結し越冬の準備にかかる。昭和 20 年 9 月 9 日、10 日の両日のわたり同地区駐屯の公安隊員が指揮する暴民の襲撃を受け、隣り部落に連絡する余裕もなく着の身着のままで開拓団を追出され、途中、次々と暴民に襲われながらも命からがらそれぞれの運命をたどりハルピン、新京方面に避難する。昼は高粱畑にかくれ夜は寒さにふるえながら、幼な子をせめて一思いにと親が我が子を処分する一般開拓団の悲惨さに胸をつまらせながら、或はようやく慶安街までたどり着きながら進駐のソ連軍に抑留され、または黒河に連行されてその後逃走するもの運つたなく捕(とらわ)れ銃殺刑と散り、或は国府軍に投じ又は中共軍に投じ他国内乱の犠牲と散り、異国の土となった同志 32 名を数える。

帰還後

ソ連の抑留から無事帰還者で 1953(昭和 28)年 8 月親睦団体「対店朋友会」を結成。最後の帰還者は敗戦後 10 何年を異国にさまよい漸(よう)やく昭和 33 年 4 月 27 日帰郷した。昭和 39 年 11 月 22 日「対店朋友会」主催で、異国に散った同志 32 柱の御霊安かれと、五台山護国神社において慰霊祭を行いその冥福を祈る。

７．広瀬中隊に関する新聞記事から

広瀬中隊は、高知県で初めて第 1 次郷土中隊・高知中隊として 1942(昭和 17)年 3 月 5 日に内原訓練所に入所した斉藤中隊に続いて、第 2 次郷土中隊として 1943(昭和 18)年 3 月に内原訓練所入所している。以下、関連する新聞記事を紹介する。

◆1942(昭和 17)年 7 月 24 日高知新聞朝刊

拓殖訓練打合會

青少年義勇軍拓殖訓練ならびに女子拓殖講習會は二十一日午後一時から高知市丸の内縣農業會館で開催、縣教育會幹部、同會各郡市支部長、穂積縣職業課長、井上、池田両主事ら

出席、義勇軍訓練は日程未定の高知市、土佐郡の分をのぞき下の如く決定、拓士の配偶者錬成目的とする女子講習會は縣女教員會を主體となし開催日、場所その他は追つて決定することとなつた(括弧内は拓殖訓練場たる國民學校)
▷安藝八月廿五日ー廿八日(田野) ▷香美九月八日ー十一日(城山) ▷長岡八月十一日ー十三日(本山)廿二日ー廿五日(大篠) ▷吾川同十七日ー二十二日(伊野) ▷高岡十八日ー二十一日(檮原) ▷二十一日ー二十四日(久禮、幡多九月八日ー十三日（中村）
なほ幡多郡は別に郡内を五ケ所にわかち特殊な興亞訓練をも行ふがその日程は追つて決定する

◆1942(昭和 17)年 8 月 6 日高知新聞朝刊

斗賀野村／大陸の花嫁勉強／七〇餘名が熱心受講

寫眞はその花嫁講習生

極致の寒暑に挑んで黙々と開拓の聖鍬を振る北滿進出の若き戰士たちに先づ何よりも先に送るべきはよき花嫁であると仲介役の同和奉公會縣本部と縣職業課並に北滿開拓の分村計畫を進める高岡郡斗賀野村の主催にかかる女子拓殖訓練講習會は去る三十日午前九時より同村の西願寺に盛大に開かれたが、會する女子青年斗賀野村四〇名、日下村二〇名、佐川組合青校生一〇名計七〇名で、井上、池田両職業主事、井上社會主事、長岡同和奉公會主事、汲田社會主事補等指導講習の外西田斗賀野村長、刈谷同校長、寺尾本願寺住職はじめ各関係教職員、吏員等多數参加の上先づ國民儀禮と朝の行事に始まり、各講師の講演、歸鄉開拓者の現地報告、質疑應答、協議懇談、晝食、夕食、料理等を盛澤山に織り交ぜ大陸入嫁の乙女の集ひに相應しい一日に終始して午後九時終了した

◆1942(昭和 17)年 8 月 15 日高知新聞朝刊

鍛へる拓士魂／義勇軍訓練講習(本山町)

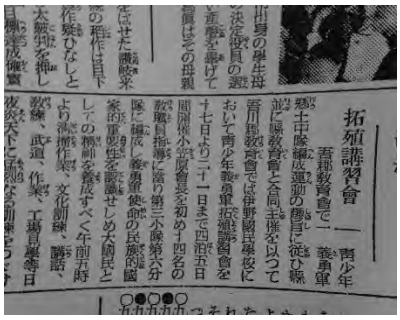
(上)その分列式(下)グライダー整地奉仕

長岡郡本山町本山國民學校で十日から十二日までの二泊三日間長岡郡北部〝青少年義勇隊拓植訓練講習會〞を〝開催〞〝伸びよ青少年〞の決意も固く集ふ健児百四十三名、國民儀禮、西内長岡郡教育會長の訓示、受講生総代の宣誓ありて、午後三時から竹村東豊永校長、滿洲開拓義勇軍に關する講演、四時より教練水泳、七時夕禮食事、午後八時から九時まで全員點呼や軍歌合唱會をなし、就床一泊の夢円かに第二日を迎へた全員は午前五時起床洗面清掃作業後歸全山に駈足鍛練をなし朝食、午前七時清水道場長の開拓訓練精神陶冶に關する講話九時か

ら小島道場教官の武道指導、つづいて教練體操を了つて晝食、午後二時から六時まで本山町島ノ磧に建設中の〝グライダー整地勤勞奉仕作業〟に率先協力の炎暑克服行事をなし午後七時から九時まで〝開拓座談會〟を開催、一同和やかな睦じい笑ひの中に就寝、明くれば第三日目朝行事は變りなくすゝめられ八時堀内縣視學官の有益なる講話午前十時無事閉講式を擧行し次で校庭で偉風颯爽として分列式を執行した

◆1942(昭和 17)年 8 月 20 日高知新聞朝刊

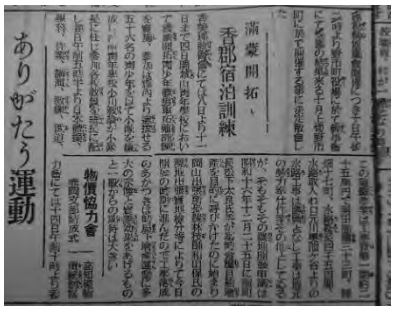
拓殖講習會／吾郡教育會で


拓殖講習會
吾郡教育會で
青少年義勇軍

青少年義勇軍郷土中隊編成運動の趣旨に従ひ縣並に縣教育會と合同主催を以つて吾川郡教育會では伊野國民學校において青少年義勇軍拓殖講習會を十七日より二十一日まで四泊五日間開催小笠原會長を初め十四名の教職員指導に當り第三小隊六分隊に編成し義勇軍使命の民族的國家的重要性を認識せしめ大國民としての精神を養成すべく午前五時より清掃作業、文化訓練、講話、教練、武道、作業、工場見學等日夜炎天下に猛烈なる訓練をつゞけてゐる

◆1942(昭和 17)年 9 月 12 日高知新聞朝刊

滿蒙開拓／香郡宿泊訓練


滿蒙開拓
香郡宿泊訓練
ありがたう運動

香美郡教育會にては八日より十一日まで四日間城山青年學校において滿蒙開拓青少年義勇軍拓殖訓練を實施、参加は郡内より選抜せる五十六名の青少年以て小隊を編成し香南青年學校小川教諭が小隊長に任じ参加各校教員を班長に配し毎日午前五時半より日本體操、學科、作業、講演、教練、武道、夜間の復習、娯樂、座談會等が行はれ十一日正午解散式を擧行、講師として穂積縣食糧課長、縣青年教員養成所、潮見教諭、中島圖書館長の諸氏が當つた

◆1942(昭和 17)年 10 月 17 日高知新聞朝刊

青少年義勇隊／高知中隊の編成

青少年義勇隊
高知中隊の編成

縣では本年初旬から各市郡単位に明年送出の少年義勇隊高知中隊の編成工作を開始しこの程來縣した滿州移住協會三澤参事も縣と連應して十五日中村町國民學校で開かれた編成協議會を最後として各地でこれが勧奨につとめたが目下送出割當數の決定を見たものは下記のとおり
▷安藝五十▷香美郡三十五▷吾川郡三十七▷高岡郡八十八▷幡多郡六十六▷長岡郡三十中央(土佐郡　高知市)四十九

◆1942(昭和 17)年 10 月 17 日高知新聞朝刊

鍬の戰士激勵／知事歸全農場へ

沖野知事は高野農政課長宮地官房主事を帶同し十六日午前十時長岡郡本山町縣立歸全農場に赴き午後一時農業增產報國隊推進隊地方訓練隊二百名の錬成講習入所式に列席し同隊員および目下錬成講習中(期間一ケ月)の農會技術員五十名に對し訓示をなし農業增產に敢闘せんとする鍬の戰士を激勵鼓舞し、農場や付近を視察した

◆1942(昭和 17)年 10 月 26 日高知新聞朝刊

日本随一／大陸花嫁養成所／桔梗ケ原女子拓訓所訪問記(一)／秋空にひびく開拓の歌

(桔梗ケ原にて特派員發)天そゝる北アルプスの連峰を西の彼方に仰ぐところ、その名も戰國時代の古戦場で長野縣東筑摩郡廣丘村桔梗ケ原には過ぐる昭和十五年九月以來、全國嚆矢の大陸花嫁養成所ともいふべき女子拓務訓練所が開設されてゐる、これは縣立ではあるが實は拓務省の息がかゝつてゐるものであり、また他府縣には極く最近一、二ケ所に同様の施設が生れたほどで、今なほ全國随一の興亞女性訓練所の聲名をほしいまゝにしてゐるそれかあらぬか、北は青森、秋田から南は四國九州までの各地から、うら若き女性たちが集り、膨らむ胸に明日の滿蒙開拓職に一身を捧げようとの熱望を一ぱい包んで毎日蒼穹の下で逞しい自己訓練を續けてゐるのだ、記者は今日この地に足を運び、大地に生きる皇國女性の生氣脈々たる姿を目の當りにし、また、指導員諸氏の熱と力と愛情の籠つた教導ぶりに近接することが出来た

◆1942(昭和 17)年 10 月 27 日高知新聞朝刊

日本随一／大陸花嫁養成所／桔梗ケ原女子拓訓所訪問記(二)／血書志願の娘さん

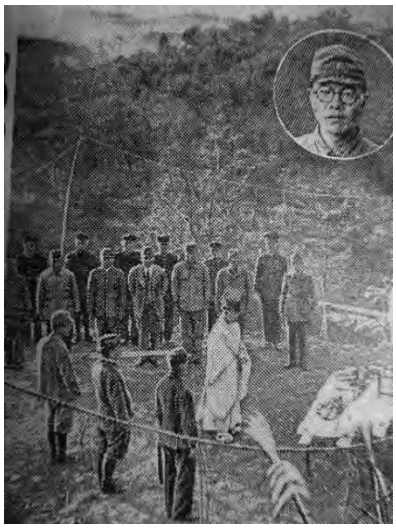
整列し所長の朝の訓活をきく

滿蒙の曠野には今日、数萬の青少年義勇軍が渡り、血と汗と脂を流して國防と開拓の任に當つてゐるが、彼らも次代の皇國民の父となる人物である以上どうしても良き配偶が必要である、しかし、彼らの心持は所謂義勇隊精神に鍛へ上げられてゐて、平凡な大陸花嫁型ではとても駄目であるそこで、かういい花嫁は、別個に本格的に養成する必要のあるを認め、あり來りの女は添物的の農民道場から獨立した女子拓務訓練所を全國三十數ケ所に設置する方針を定めたのである、そしてその先陣の光榮を賜つたのが、この桔梗ケ原訓練所であった、(以下中略)

今年の三月には、和歌山縣から次のような血書入りの手紙まで寄越した健気な娘さんもあつた、十萬人の血潮流せし滿洲の樂土建設に身を捧げむ、滿一ケ年私はこの決心を夢にも忘れずに過して參りました、書物などで貴訓練所の有様を知るたびに「あゝ嬉しい自分の行くべき所はこゝだ」と思ひました、私は今年十九です、訓練所で御世話になって後一年を家事の手傳で送り、それから拓士の花嫁を志願する覺悟です(後略)

◆1942(昭和 17)年 10 月 31 日高知新聞夕刊

沼氏が私財六千圓投じ／潮江皿ケ峰に農民道場／ 野村、宇田兩氏も賛助



地鎮祭と円内は沼氏

青年の魂の血をつくり肉をつくる農民道場が潮江山の一角に建設の第一歩を踏み出した—二十九日午後四時高知市潮江皿ケ峰の頂に青年學校教員養成所藤平主事、陰山棟梁、立田監督以下約二十名の關係者が出席して農民道場の建築等にふさはしい質素な地鎮祭が行はれた、大高知市を脚下に赤土の山に日輪兵舎が出來るのである、この聖なる事業の中に織り込まれた感激美談—〝土佐の加藤完治〟として讃へられる青年學校教員養成所沼鶴喜(三八)教諭が「新東亞、新世界には新しい青年魂が必要である、それには西洋文化に中毒した祖國の感覚から遠ざかつて來た従來の魂を生まれ還らせ、眞の日本魂、土の魂を奮ひ起さねばならない」と私財六千圓を投出してこゝ潮江皿ケ峰に二町一反余の地を買い取り農民道場建設に乗り出したのは本年二月の事であった、この美擧を聞いた本縣實業界の両巨頭野村好之、宇田耕一の両氏は「教育者は教育のみに全靈、全力をそゝいでくれ、日輪兵舎は吾々が建てる」と、その名も〝野村兵舎〟〝宇田兵舎〟として青年教育に鐵壁の布陣が成つた、更にまた建築請負にはせ参じた立田亀太郎監督に陰山虎重棟梁は〝私の一世一代の仕事……〟と腕によりをかけてから茨城縣内原訓練所の日輪兵舎を十分に視察した上で建築にとりかゝる事になつてゐる、かくして総ての作業計畫は完備した後は時代の脚光を浴びて落成する來春一月を待つばかりである

◆1942(昭和 17)年 11 月 7 日高知新聞夕刊

縣女子拓殖訓練所／歸全農場に併設【内定】

縣女子拓殖訓練所
歸全農場に併設【内定】

やがては農村のよき妻、良き母となるうら若い女性たちに皇國農民魂を植ゑつけ一面滿洲の曠野に鍬をとる拓士の花嫁候補を錬成する目的から縣では縣立歸全農場に女子拓殖訓練所を併設することを内定、収容人員は十六歳以上廿五歳まで三十名とし経費豫算は約四萬円で明年度國庫の助成金交付が決定次第縣で追加豫算を計上し開所のはず

◆1942(昭和 17)年 11 月 17 日高知新聞朝刊

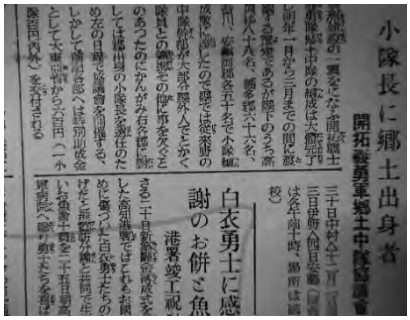
開拓團編成懇談

高岡郡東津野村船戸青年學校ではこの程開拓團編成懇談会を開催、義勇隊員谷脇清美、川田一男両氏の現地報告在り上岡校長、八木夫人會長他會員、男女青年團員ら参集し盛會であつた

◆1942(昭和 17)年 11 月 26 日高知新聞朝刊

小隊長に鄉土出身者／開拓義勇軍鄉土中隊協議會

滿洲建設の一翼をになふ開拓戦士義勇隊鄉土中隊の編成は大體完了し明年一月から三月までの間に渡滿する豫定であるが縣下のうち高岡郡八十八名、幡多郡六十六名、吾川、安藝


小隊長に郷土出身者
開拓義勇軍郷土中隊協議會

両郡各五十名で小隊編成數に達したので縣では従來の中隊幹部が大部分縣外人でとかく隊員との連携その他に事を欠ぐとのあつたのにかんがみ右各郡に對しては郡出身の小隊長を選任のため下の日程で協議會を開催する、しかし前記各部へは特別助成金として大東亞省から六百円(一小隊百円内外)を交付される　三十日中村、十二月二日須崎、三日伊野、四日安藝(開會時刻は各午前十時、場所は國民學校)

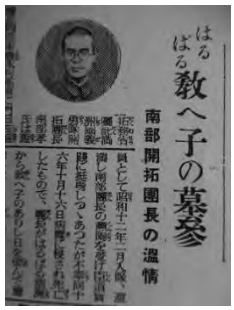
◆1942(昭和 17)年 12 月 18 日高知新聞朝刊

義勇軍獲得へ／安藝で打合會

安藝郡の滿蒙開拓義勇軍第二回打合會は十五日午前十一時安藝町青年學校で開催、縣職業課池田主事、地方事務所広瀬縣視學、入交安藝郡教育會長、畠中安藝青年學校長および郡教育會各區長の田邊(安藝)白石(藝西)立仙(奈半利)中澤(室戸)各國民學校長ら参集して、義勇軍安藝小隊編成諸般について現狀報告打合せおよび對策の協議懇談を行つた

◆1943 (昭和 18)年 1 月 8 日高知新聞朝刊

はるばる教へ子の墓参／南部開拓團長の溫情


はるばる教へ子の墓参
南部開拓團長の溫情

拓務省嘱託滿洲國義勇隊開拓團長南部孝氏は、長岡郡東豊永村高原に門田茂盛氏を訪れ、令息茂武君の墓参をした、故茂武君は滿洲國開拓義勇隊員として昭和十二年二月入隊、渡滿し南部團長の薫陶(くんとう)を受け臣道實践(しんどうじつせん)に挺身しつゝあつたが不幸同十六年十月十六日病魔に侵され死亡したもので、團長がはるばる滿洲から教へ子の在りし日を偲んでしたことに對し門田氏は固より村民一同大いに感激してゐる

左寫眞は南部氏

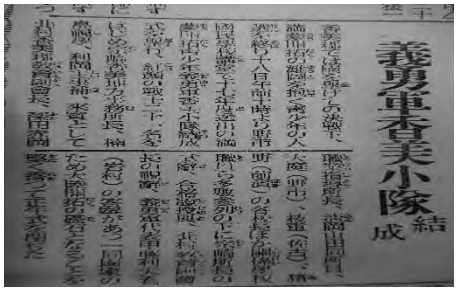
◆1943 (昭和 18)年 1 月 14 日高知新聞朝刊

行け！滿州義勇隊／高知中隊／本年度送出割當(わりあて)決まる

行け！滿洲義勇隊
高知中隊本年度送出割當決る

縣では滿洲建設の一翼を背負ふ青年義勇隊高知中隊の十八年度送出割當を安藝郡五十名、香美郡三十五名、長岡郡三十五名、中央四十九名(高知市、土佐郡)吾川郡三十七名、高岡郡八十八名、幡多郡六十六名と決定し目下募集中であるが、十二日現在の應募(おうぼすう)數は高岡郡三十六名、吾川郡二十八名、安藝、幡多両郡各二十三名、中央、長岡郡各八名、香美郡四名である、なほ十七年三月五日の縣最初の義勇隊送出數は二百七十七名で内訳は高岡郡の八十名を筆頭に下記の通り

▷高知市十四◁安藝郡四十八▷長岡郡二十六▷土佐郡十◁吾川郡三十七▷高岡郡八十▷幡多郡四十◁香美郡二十二



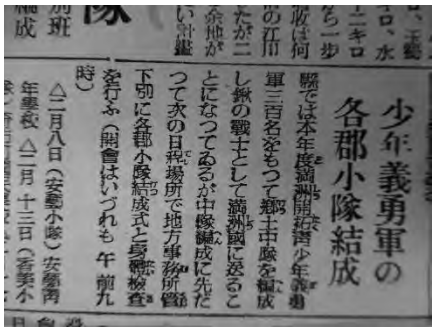
◆1943(昭和 18)年 1 月 16 日高知新聞朝刊

義勇軍後援會津大村で結成

滿蒙義勇軍五ケ年計畫に關しては各縣とも萬全を期しつつあるが幡多郡津大村ではこれに對處するため村内各青年學校を打つて一丸とする後援會を組織することを一月常會において満場一致可決したが今後の活躍が期待されてゐる

◆1943(昭和 18)年 1 月 29 日高知新聞朝刊

少年義勇軍の各郡小隊結成



縣では本年度滿洲開拓青少年義勇軍三百名をもつて郷土中隊を編成し鍬の戰士として滿洲國に送ることになつてゐるが中隊編成に先だつて次の日程場所で地方事務所管下別に各郡小隊結成式と身體検査を行ふ(開會はいずれも午前九時時)

▷二月八日(安藝小隊)安藝青年學校▷二月十三日(香美小隊)野市町國民學校▷二月十七日(長岡土佐小隊)大篠村國民學校▷二月十八日(高知小隊)高知縣公會堂▷二月九日(吾川小隊)伊野町國民學校▷二月十五日(高岡小隊)須崎町國民學校▷二月十三日(幡多小隊)中村町國民學校

◆1943(昭和 18)年 2 月 6 日高知新聞夕刊

青少年義勇軍／推進隊結成打合會

青少年義勇軍郡市小隊の推進隊結成打合會は午前十時から縣廳内政部長室で各地方事務所視學室主任、神寺教學課、職業課、農政課各係官出席して開催、積極的な勧誘方法を協議し郡市小隊の補強工作に乗出すことになつた

◆1943(昭和 18)年 2 月 20 日高知新聞朝刊

土長でも結成

土長地方事務所管内から選抜の滿蒙開拓義勇軍二十名の小隊編成式は二十二日午前十時から長岡郡大篠國民學校で擧行、國民儀禮についで織田地方事務所長の式辭、西内郡教育會長、中平職業指導所長らの祝辭後小隊代表高橋今治氏の答辭あり綱領を誓言ののち閉会したが一行は三月上旬から内原で三カ月の内地訓練を受けたのち鍬の戰士として渡滿する

◆1943(昭和 18)年 2 月 23 日高知新聞朝刊

義勇軍香美小隊／結成

香美郡では國を擧げての決戦下、滿蒙開拓の雄闘を抱く青少年の人選を終り十八日午前十時より野市國民學校講堂で十七年度送出の滿蒙開拓青少年義勇軍香美小隊結成式を擧行、紅顔の戰士二十一名をはじめ宗崎香美地方事務所長、楠島視學、利岡主事補、來賓として

北村香美郡教育副會長、深田赤岡職業指導所長、清岡山田同所員、大庭(野市)、枝重(佐古)、猪野(前濱)の各校長のほか關係學校職員ら多數参列の下に宗崎所長の式辭、合格證授與、北村教育副會長の祝辭、義勇軍代表甲藤利夫君(岩村)の答辭があつ一同國家のため大陸開拓の礎石となることを堅く誓つて正午式を閉ぢた

◆1943(昭和 18)年 2 月 28 日高知新聞朝刊

青少年義勇軍／高岡小隊結成

高岡郡青少年義勇軍小隊結成式は二十五日午前十時から須崎町國民學校で行はれた

森田高岡地方事務所長、宮田高岡郡教育會長、宅間視學、大利須崎、市川伊野、和田窪川各國民職業指導所長等多數列席の下に擧行

小隊員五十四名に合格證書の授與があり、森田所長の訓示に對し小隊代表井上光顕君(高東組合校)の力強い答辭があり青少年義勇軍綱領を全員唱和、聖壽萬歳を奉唱して閉式した

◆1943(昭和 18)年 3 月 5 日高知新聞朝刊

久禮同郷會／發會式

愛郷精神に燃える高岡郡久禮町出身の市在住有志は既報の如く久禮同郷會の結成を目論み常光鹿恵、岡辯三郎、仙頭源一の三氏が發起人となり結成を急いでゐたが、このほど諸般の準備が整つたので一日午後四時から市帶屋町つぼみで發會式を擧行した

義勇軍出發

高岡郡津野町では一日午前十時から滿蒙開拓青少年義勇軍七名の壯行會を開催、村民多數参列の下に國民儀禮ののち村長の式辭、村教育會長の激勵の辭があつて盛況裡に萬歳を三唱して散會、一行は二日勇躍出發した

◆1943(昭和 18)年 3 月 5 日高知新聞夕刊

青少年義勇軍勇躍内原へ

壯行式

滿州開拓青少年義勇軍高知中隊壯行式は四日午前九時から縣公會堂で擧行、沖野知事代理鈴木官房長、高野農政課長はじめ、農政、職業、社寺教學課各關係官、各地方事務所長、來賓大野高知市長、聯隊區司令部二宮中佐、中平高知職業指導所長列席、高野課長の開會の辭あり沖野知事(鈴木官房長代理)から一國の盛衰はその國の青少年の意氣如何にかかつてをり大東亞共榮圏の確立すなはち皇道を四海に宣布し東亞十億の諸民族をして御稜威を光被せしむべき國策である滿洲開拓の大使命は諸君青少年の熱烈なる意氣により達成される…土佐魂を充分に發揮されたい旨の力強い激励訓辭ののち中隊旗を授與し大野市長、二宮中佐の祝辭、隊員代表井上光顕君の答辭等あって閉式、それより中隊旗、日満両國旗を

先頭に隊伍堂々高知驛まで行進、午前十一時三十分と午後一時二十六分の二回にわかれ勇躍内原に向け出發した

◆1943(昭和 18)年 3 月 17 日高知新聞朝刊

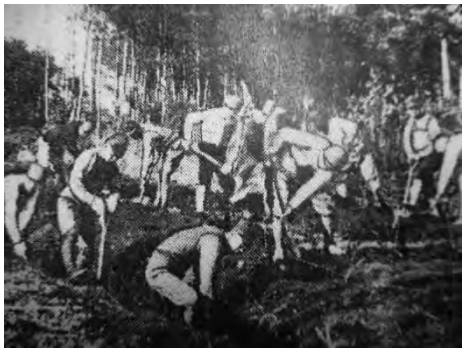
内原で勵む／引率者池田縣屬の談

去る六日内原訓練所に入所した滿洲開拓青少年義勇軍高知中隊の輸送責務を果し 15 日歸廳した池田縣屬は隊員その後の狀態につき下記のごとく語った

隊員二百十九名は皆途中つゝがなく内原に着き広瀬中隊長に引渡しをすませ八日の大詔奉載日に入所式を擧げたが當日と翌九日は折柄の大吹雪で開拓戰士にまことにふさはしく嚴肅な情景で意義深く感じた

◆1943(昭和 18)年 5 月 8 日高知新聞朝刊

他縣の模範とさる内原で錬成の青少年義勇軍高知中隊



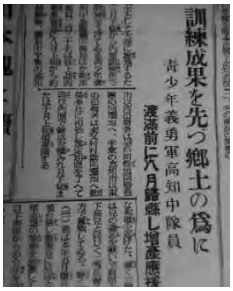
郷土中隊の作業狀況

去る三月六日内地訓練のため内原に入所し今夏の渡滿を前に土の猛錬成を積んでゐる青少年義勇軍高知中隊はいづれも他縣の模範とせられ就中奈半利出身竹崎文雄君は成績抜群で全國一萬三千余人の同期入所者中から選ばれ本年度第一回の榮ある表彰を受け菅野訓練課長から感謝狀を授與された、また本年度から内原に新設された義勇軍幹部養成の中等學校試に應募し志願者五百六十名、採用人員二百五十名のうち郷土中隊から桑原榮治（介良)高橋克男(夜須)甲藤秋男(岩)中平三郎(池川)隅田房男(上八川)片岡正秀(横畠)福岡勲顕(尾川)入本憲明(小築紫)諸君が第一次詮衡で合格、土佐青少年のために氣を吐いた、右につき義勇軍補充隊員を引率して内原出張中であつた縣農政課池田屬は七日歸廳、郷土中隊の訓練狀況を語る

郷土部隊はいづれも傳統の土佐魂を發揮して頑張つてをり眞劍な錬成ぶりは涙ぐましい程である、今夏渡滿前に郷土訪問のため一時帰縣することになつてゐるが一部の病氣退所者をのぞき元氣旺盛で他縣中隊員の模範として将來を期待されてゐる

◆1943(昭和 18)年 7 月 17 日高知新聞朝刊

訓練成果を先づ郷土の爲に／青少年義勇軍高知中隊員／ 渡滿前に八月歸縣し増産應援



訓練成果を先づ郷土の爲に

青少年義勇軍高知中隊員

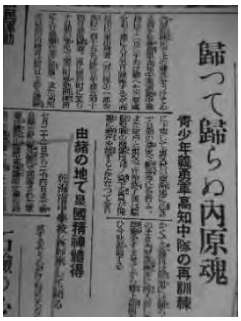
渡滿前に八月歸縣し增産應援

鍬の戰士として大陸に雄飛するため去る三月下旬から内原訓練所で土の猛訓練をうけてゐる青少年義勇軍高知中隊廣瀬中隊長ほか幹部二名、隊員二百二十名は郷土訪問と食糧増産應援に八月上旬から約一ケ月間歸縣、隊員中半數の高知市以西出身者は室戸町農地開發營團の開墾地へ、半數の高知市以東の出身者は東叉村村營開墾地へ勤勞奉仕に出動し豫定期間を了へて再び内原で錬成を積み九月下旬または十月上旬頃

渡満する

◆1943(昭和 18)年 7 月 28 日高知新聞夕刊

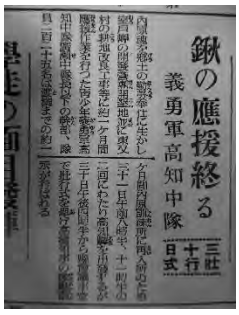
歸つて歸らぬ内原魂／青少年義勇軍高知中隊の再訓練


歸つて歸らぬ内原魂
青少年義勇軍高知中隊の再訓練
由緒の地で皇國精神體得

内原訓練所で土の訓練をうけてゐる青少年義勇軍高知中隊廣瀬中隊長以下二百三十名は鍛へた内原魂をお土産に八月五日歸縣するが高知市以東出身者(吾川郡の一部を含む)百十五名は同日午後五時十四分後免驛着、直に室戸町に至り十日間の豫定で室戸町移動訓練所に入り開墾作業に従事、また高知市以西の出身者は同日土佐久禮驛に下車して東叉村の開墾地に赴き十日間の豫定で勤勞奉仕を行ふ、また室戸と東叉で作業終了後は縣農報聯の開墾地鴻ノ森で全員が開墾に熱汗を流すことになつてをりかくて全隊員は郷里には歸らずそのまま内原訓練所に再入所し渡満準備を済ませてから郷土訪問を行ひ今秋渡満する

◆1943(昭和 18)年 8 月 29 日高知新聞朝刊

鍬の應援終る／義勇軍高知中隊／三十日壯行式


鍬の應援終る
義勇軍高知中隊
三十日壯行式

内原魂を郷土の勤労奉仕に生かし室戸岬の開發營團開墾地並に東叉村の耕地改良工事等に約一ケ月間應援作業を行つた青少年義勇軍高知中隊廣瀬中隊長以下の幹部、隊員二百二十五名は渡満までの約一ケ月間内原訓練所に再入所のため三十一日午前八時半、十一時半の二回にわたり高知驛を出發するが三十日午後四時半から縣會議事堂で壯行式を擧げ高橋知事の激励訓示が行はれる

◆1944（昭和 19)年 5 月 24 日高知新聞朝刊

満洲こそ拓士墳墓の地／縣農政課／池田歸廳談

寧安義勇隊訓練所は満洲における大訓練所の一つで十二個中隊を収容する設備を有し東京城驛から二十八キロの地點にあり郷土中隊廣瀬正實隊は本年二月二十四日現地に到着し昨年秋新築せる洋館官舎五棟に起居し隊員は喜んで使命の達成に努めてゐる現在一名の病人もなく全員元氣一杯で朗らかな建設工作に挺身してゐる

8．第 4 次郷土部隊・広瀬中隊体験記

義勇隊訓練所・広瀬中隊体験記は、郷土中隊編成の斉藤中隊(第 5 次不二義勇隊開拓団)の体験記と同じ『高知県満州開拓史』の中に書かれているものである。

広瀬中隊略歴

1943(昭和 18)年度第 4 次郷土部隊編成も、中隊編成の 300 名には達しなかったが、177

名で 2 回目の「高知中隊」を編成、3 月 6 日に内原訓練所に入所、広瀬中隊(広瀬正美 旧中村市天神出身)として 1944(昭和 19)年 2 月 13 日渡満、寧安訓練所に入所。1944(昭和 19)年 2 月 13 日、**第 6 次義勇隊訓練所・寧安訓練所**に入所。ソ連軍侵攻後 1945 年 8 月 14 日訓練所を脱出。8 月 25 日鏡泊湖付近でソ連軍の武装解除うける。 9 月 東京城収容所に収容され、10 月 東京城出発延吉へ。12 月 8 日広瀬中隊長は、液河陸軍病院において死亡する。

隊の状況

大陸の土となる事を心に期して、伊勢神宮の参拝を終え、雪の新潟港を後に、冷たいウラルの嵐吹き荒れる日本海に船出したのは、第 2 次大戦も末期の 1944(昭和 19)年 2 月 13 日の事であった。

船は北鮮の羅津へ、そして今は希望に燃えた若人 170 余名を乗せて、東満大陸を走る車中である。未だ明けやらぬ車窓をながめていると、内原訓練所での毎日が昨日の様に、走馬灯ごとく車窓に浮かんでくる。思い起こせば、1943(昭和 18)年の 3 月 6 日満蒙開拓の父、加藤完治先生の待つ内原訓練所に入所、3 カ月の基礎訓練をみっちり受けいよいよ渡満開始、次々に出発して行く中で、我々広瀬中隊は現地受入訓練所の宿舎の都合で留守部隊と決り、同年中隊の盛大な壮行式の度に羨望のくやし涙を流したものであるが、今、やっと我々中隊も夢にみた大陸の曠野をかけている。厳しい内原での訓練のかたわら、各地に出た所外訓練はまた忘れる事の出来ない、今は楽しい思いでの一つ一つである。

埼玉県鴨巣農事試験場での米麦の栽培講習(6 月 15 日から 2 週間)や、実習の手伝い、あの時、誰だか青梅を食べ過ぎて青酸中毒とかで大騒ぎをやったっけ‥‥。また帰省を兼ねての郷土への所外訓練は全員東西に別れ一隊は高岡郡東又の貯水場掘り他の一隊は安芸郡室戸市元(7 月 28 日より 1 カ月)で西寺に泊り、約 1 カ月における開墾作業、そして内原に帰ると、間もなく北海道の所外訓練(9 月 7 日より約 2 カ月)毎日毎日稲刈りばかりの者、馬鈴薯堀ばかりの作業の合間に旭川で落合いアイヌ部落の見学をした想い出、訓練所に帰る早々水戸市航空通信学校の所外訓練、最後に行った潮来での 1 カ月(11 月 20 日から約 1 ヶ月)の干拓作業中でも入所当時の弥栄広場における全中隊 1 万数千人の合同朝礼の壮観等々、終生忘れることのない思いでにふけっている‥‥‥と「下車用意」の隊長の号令で皆我に帰る。待望の大陸に第一歩を印すべく下車の準備を始める。きびきびした動作の中にも、未知の曠野への不安の影は隠しきれない。「外はとても寒いから用心せい！」隊長のうわずった声。私たちは高い階段を一つ一つそれぞれの思いを込めて、大満州の大地に第一歩をおろした。漸く踏むことの出来たこの大陸、希望の大地、ああこれがやがて死への、そしてあの苦難への第一歩となることなど誰が知ろうか…。駅前の出張所で防寒服の支給を受け、朝食を始める頃になってやっと夜が明けて来た。台地に立って、この目で見る初めての大陸、駅の東方に見える富士山の中腹を真一文字にチョン切った様な山が印象的だ。

いよいよ目的地、寧安訓練所に向かって出発。長旅にもめげず、内地からの長途の旅に

もめげず、リュックサックいっぱいの荷を背負っていくつかの丘を越えて、8 里余りの行軍はさすがにこたえたが、日暮れ近くになってやっとめざす訓練所本部で迎えられ中隊宿舎に向かう。やがて丘陵の一角に赤煉瓦の真新しい隊舎が見えて来た。あれだ！一瞬歓声は鯨波(げいは)の如く上りそれが次第に軍歌と変じ、夕闇迫る大陸の一角にとどろきやがて長白山脈の奥深くこだましていった。

我等は　　若き義勇軍
祖国の為ぞ　　鍬とりて
万里涯なき　　野に立たん
いま開拓の　　意気高し
いま開拓の　　意気高し　以下略

私たちが入る宿舎はもう 9 分通りで来ていたが、まだ中隊本部となる大きな建物で満人の大工、左官が 5、6 人どこからか通って来ていた。私達の中隊宿舎は三方を小さな湿地で囲まれ、やや傾斜のある台地でその一方は遠く長白山脈の霞む原野に連なっている。私達中隊の北西 2 キロの地に満人部落、和尚屯があり、南西 5 キロに沙蘭鎮、南へ 3 キロに先輩の横谷中隊(和歌山県出身)、北に 4 キロここには 10 年とはいえ、まだ治安が十分でないのか、うっかり日本人は行かれないという満人部落もある。東に 3 キロ行けば訓練所本部となって、病院や各種専門技術指導所、食糧、物品倉庫等があり、所長栗田小三郎(元少尉)が控えている。私達入所後、最初の作業はペチカに焚く枯れ草刈りであった。この寒さの中で歩哨に立つのはやりきれない。うっかり銃口に唇でも当てようものなら、忽ち全く焼き肉の様に肉をはぎとられる。又、深夜ともなると遠くで咆える無気味な狼の唸り声。広い満州の夜空を見上げ、トンコン病になるのはこの夜の立哨勤務のときである。

話は大変びろうになるが。寒さのために困ることの一つに、糞便の処理がある。立派な便所は出来ているが零下 20～30 度も下がると、一人一人の排出物が順々に積み重なって凍結し、春先の筍の様に上へ上へと伸びて来る。清掃当番が鶴嘴(つるはし)でコツンコツンと欠ぎ取るのであるが、一寸仕事をさぼると忽ちこの筍は、踏み板の上迄頭を出して来てうっかりしようものなら大事なところ突き刺さる、笑い話ではない深刻に困ったことの一つである。3 月 10 日の陸軍記念日の全中隊(6 カ中隊)が本部に集合、記念行事の後、各種の競技(大運動会)に打ち興じていた時、当時マレーの虎と呼ばれた山下将軍の突然の来訪を受けた時の感激…。私達は開拓し、自活し、北辺を護り満州建国という大義の下に立ち上るべき使命を帯びた土の戦士であったのだが、戦局の展開とともに次第に軍事訓練を受けることが多くなった。1945(昭和 20)年私達は 2 回目の春を迎えた。寒さが厳しいだけに、春の喜びは又格別である。この大陸にも日本と同様ノビルが一番先に顔を出したのには驚いた。「今日はノビル狩りだ！」と、久し振りに重い防寒服をかなぐり捨てて、大地を這い廻る快よさ。ノビルの 1 本 1 本に郷愁をこめてぬきとり、これが夕餉の食膳を賑わすのである。満州の春は急ピッチだ。百花繚乱、一度に咲き揃う様は、到底日本内地では想像もつかない

絶景だ。このように大自然の春は訪れたものの、世界の戦局は次第に苛烈となり、我が聖戦の鉾先もあやしく揺れ出した。

我広瀬中隊でも様相が急変、西森、浅利両隊員の召集、川村小隊長と藤原隊員はハルピンの特務機関へ、藤野幹部も現地召集で関東軍に入隊、筒井小隊長も 2 個小隊を引率蘭嵐の兵器工場へ、又 1 個小隊は奉天に挺身隊として出発。中隊長と横田小隊長の率いる 2 カ小隊が訓練所に残留、宿舎のまわりに蛸壺掘りが続く。初夏の太陽は焼けつくように暑い「愈々(いよいよ)くるべきものがきたねや！！」と黙々と掘る蛸壺(たこつぼ)は、単に空爆に備えるのみでなく、現地満人の暴動化に備えてでもある。夜の衛兵も、不寝番も周囲の空気から、ヒシヒシと危険をはだに感ずる様になっては、犬の遠吠えも高粱の葉ずれも不吉な音となって伝わってくる。衛兵の持つ 38 式歩兵銃にはいつも実弾が装填(そうてん)され、厳重な警備体制はかつてのマンマンデーの農作業どころでなくなったが、矢張り私達は世界最強と信じて来た関東軍の実力をたよりにし日々を過ごした‥‥‥。

そして迎えた終戦

それは 1945(昭和 20)年 8 月 12 日夜半であったろうか。突如として全員集合のラッパが鳴る。私達は、何事かと中隊本部へ集合待ち受けた。中隊長から「明朝当分の間の食料、身の回りの品を持って本部へ集合する。各自のその他の所持品は行李に納め官舎に集め！」との事であった。訓練所本部には早くも各中隊より集まり、まるで火事場のようなさわぎである。本部では今迄大事に貯えていた糧抹倉庫、衣類その他の倉庫を開放し「皆んな持てるだけ何でも持っていけ、牛馬には米と弾薬を積め‼」「砂糖がまだ沢山残っているが誰か持っていかんか！」等々‥‥‥。このとき塩を持ち出したものが少なく後日大変な苦労の種となる。

やがて出発である。馬上の栗田所長、今日は陸軍少尉の立派な軍服姿である。この時になって、日ソ開戦の真相を知らされ、要塞が設けられてあるという鏡泊湖の関東軍の下へと向かったのである。突然「あっ！中隊が焼けている！あっ本部も焼けている！」「ほんとうだ！」かすかに望む中隊が煙りを上げている。又本部と思われる上空も黒々と煙っている。「満人に焼かれたのかな？」誰かがいう。しかし、そうではなかったのである。最後に残った 1 隊が各中隊を廻って石油をかけて焼き払っているとの事であった。東京城の空も油の煙が真黒に立昇っている。東京城まですでにソ連軍が来たのかもしれない。いや、あれは飛行場をわが軍が焼払っているのだ。何れにしろ只事ではない。全く足もとに火がついたとはこの事であろう。私達はこれ等の煙りに追立られる様に鏡泊湖へと歩を早めた。出発してから 2、3 日頃途中関東軍の参謀と覚しき金モールの肩章をぶらぶら下げた一団に出会い、所長や幹部の会談が続く‥‥‥。私達は日本が勝ったということで、東京城の方へ引返し行軍することになった。

ソ連戦車隊と遭遇

突然山頂で機銃音が数分続いた。ここは満州とはいえ、草木繁茂する山岳の岩盤地帯で

ある。さては満軍の反乱かと思いつつ延々と続く隊列に混じって重い足を山頂に運んだ。山頂に来てこれは驚いた。ソ連軍の重戦車がずらりと銃口を並べて構えている。何たる事ぞや！！で呆然とした。その道の両側に散兵していた我が歩兵の数人が無残な屍体となって横たわっている。先程の銃声がこの人達の体を、ハチの巣のように穴をあけているではないか。「これが戦争というものか!!」私達は実戦の惨状を初めて体験した。わずか15、6歳の少年が世界最強を誇る赤軍の重戦車との対決なのである。私達はその場に最初に血祭りとなった友を丁寧に奉り何時の日か必ず迎えに来ることを誓って男泣きに泣いたのであった。そうする間にわが方の隊長栗田所長と、敵将との交渉がなされていた。私達はこの場に及んでも、尚日本軍の全面降伏のことは考えもしなかったし、亦、全然知らされもしなかった。只、眼前に構えている戦車と戦えば、おそらく数分にして我々は全滅する事であろうという事だけはよく解っていた。しかし、幸いな事に栗田所長がよく終戦の真実を理解していた事により、又我々が正規の軍隊でない事が判った為5、6名の尖兵の犠牲でその場がおさまった事は「あ、よかった。」と、今でも背筋が寒くなるような思いがする。

一方、蘭嵐の101部隊にいた挺身隊は8月9日、日ソ開戦と同時に軍の指揮下に入り、ソ連の接近により8月13日未明、奉天の101部隊の本隊に合流するとの軍命令を受け蘭嵐を出発、長白山脈越えで奉天に向かう。出発当時の編成は、私達義勇隊が筒井小隊長以下97名、軍隊は4個小隊で200名程、外に工場軍需関係の家族30名余りと記憶している。8月26日、和尚屯西北方5、60キロの地点で終戦を知り、ソ連軍の武装解除を受け、捕虜になるまでに、昼は高粱畑や湿地帯に身をかくし、夜間ばかりの行軍で途中2、3度満軍と交戦するなど、又食糧も少なく病人や落伍者が出るなど大変な苦労をして進んだ。途中訓練所の近くを通過する時に出した 5 名の斥候(せっこう)中、隅田房男君はついに帰らなかった。8 月末日東洋城の収容所に入れられるまでにも、食糧を求めて連行中の隊列より逃亡した者も何人かいたが、私達が満人の部落を通過する際、大勢の満人の中からは罵倒投石する者などがいて、当時の避難していく日本人等に畑の作物を荒らされた農民達であろう。対日感情は非常に悪く連行中逃亡した者で生還した話を聞かない。東京城の収容所で奇しくもめぐり合った本部中隊との邂逅(かいこう)もつかの間、身長、体格による隊の編成があり大きい者は北へ向かってダバイ、ダバイと追い立てられ、各地の軍民施設を取りこわし、シベリア鉄道に積み込む作業を続け乍ら、各地の収容所を転々として行った……。小さい者はそのまま南へ、東京ダバイダバイと追い立てられて、鮮満国境を越えて朝鮮へ、それぞれが幾多の苦難をたどって内地に引き上げたのである。

引き揚げ後

1943(昭和18)年3月6日内原訓練所入所、1944(昭和19)年2月13日渡満寧安義勇隊訓練所広瀬中隊に入隊の郷土出身者は、内地引き揚げ後「寧安拓友会」を結成して旧交を暖め合い堅く結ばれている。

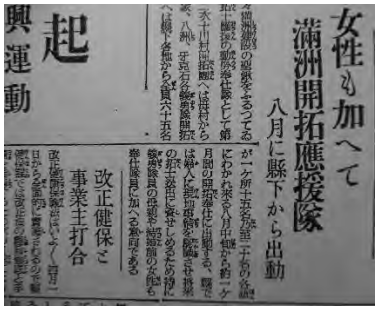
（編集責任者）

筒井昭夫　沢田末治　中平三郎　甲藤昭夫　山中茂一　石本嘉己
伊藤里美　山尾　勲　笹岡成長　鍵山次郎　山崎龍男　門田　才

９．第５次郷土部隊・田中中隊に関する記事から

◆1943(昭和 18)年 3 月 13 日高知新聞夕刊

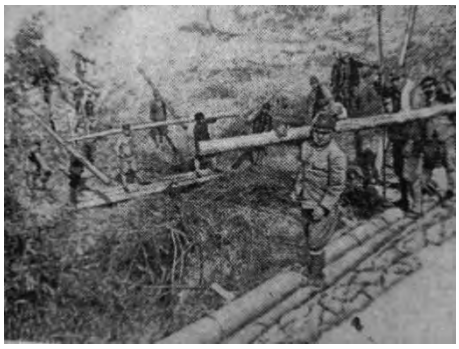
女性も加へて滿洲開拓應援隊／八月に縣下から出動


女性も加へて
滿洲開拓應援隊
八月に縣下から出動
起興運動
改正健保と
事業主打合

黙々滿洲建設の聖鍬をふるつてゐる拓士應援の勤労奉仕隊として第十二次十川村開拓團へは母村から蘇家、八洲（はちす）、牙克石義勇隊開拓団へは縣下各地から全員六十五名が一ケ所十五名乃至二十名の各班にわかれ来る八月中旬から約一ケ月間の開拓奉士に出動する、縣では婦人に現地事情を認識させ将來の拓士送出に資せしめるため特に義勇隊員の母親や結婚前の女性も奉仕隊員に加へる意向である

◆1943(昭和 18)年 3 月 27 日高知新聞朝刊

流材陸揚に愛汗／日輪兵舎建設の勤勞奉仕



本山青校生徒の木材陸揚作業

長岡郡本山町青年學校では本年度事業計畫の一つとして日輪兵舎の建設に協力、全生徒職員がに分れて三日間出動、勤勞作業をなし報酬金を設資金にすることになり、本山町貯木場に陸揚る事になつてゐた流材の陸揚（りくあげ）作業に着手し三日で約五百敷石を揚げ決戦下青校生徒の眞劍な愛作業に所期の目的を達成したが近く日輪兵舎建工事に着手と共に更に全生徒の奉仕が展開されことになつてゐる

◆1943(昭和 18)年 4 月 2 日高知新聞夕刊

内原魂忘れぬ「心耕塾」／指導員養成に東叉村に敢然建設

内原魂忘れぬ「心耕塾」
指導員養成に東叉村に敢然建設

銃後の生活決戦へ自ら尖兵をちかひ不屈の農士魂を錬成する青年道場「心耕塾」が高岡　郡東叉村藤之川小森山麓に建設された提唱者は縣農業推進隊員の久川賢一君で塾長は東叉國民學校長田井清氏を推し塾員のうち男子は坂本平二郎、久川重亥、叉川岩男、長山政則、鬼頭忠義、岡崎一郎、窪田秀美、樋口秀美、樋口要、堀見南海、坂本豪一郎、下元直三郎
いづれも歸全（きぜん）農場または内原訓練所で土への敢闘精

神を身につけた實践者ぞろひ、女子は窪田鹿尾、岡本直枝、西森梅尾、西本登美子、西本綾子、津野豊子、久川喜代子さんたち修練方法は心耕塾文庫の設置、農村婦人生活文化研究會組織、未開墾地および荒廃地開發と農作の實行などで塾内に神社を設け修練生活はすべて神を中心に敬神の念を昂め日本性格を培ひ女子に對しては時代的な婦道を磨き健全農村への推進力とするもので収容定員は三十名、年齢は十六歳以上の男女を入塾資格としてゐる、事務室その他の建設費は塾員の共同作業による勤勞収入や講習會等の旅費を蓄積し捻出敷地は健氣な塾員の心根に感激した東叉村長前田円平衛氏が自己の植林地を無償提供せるものである

◆1943(昭和 18)年 4 月 10 日高知新聞朝刊

開拓義勇軍送出懇談會

大陸開拓の雄圖を抱いて滿洲の野に聖鍬を振つてゐる本年送出の青少年義勇軍郷土部隊は非常な成果を擧げてゐるが、なほ人員不足のため郷土中隊を編成の運びに至らないので十二日午後一時より赤岡職業指導所で宮下青年學校長、楠島香美地方事務所視學深田職業指導所長ほか係員参集の下に送出懇談會を開催する

◆1943(昭和 18)年 4 月 16 日高知新聞朝刊

女青團員を滿洲開拓團へ派遣／各県から五名づつ選抜

女青團員を
滿洲開拓團へ派遣
各府縣から五名づつ選抜

(東京發)大日本青少年團では文部、大東亞両省の協力を得て来る六月上旬から一ケ月間女子青年團員を滿洲開拓青少年義勇隊及び開拓團に派遣し義勇隊員および開拓團員の内助の勤労奉仕を行はしめ歸還後は興亞の女性として團員の指導に當らせることとなつた、派遣隊員は全國各道府縣團から選抜された指導者十四名および道府縣團から五名づつ、選ばれた隊員二百三十六名および随醫一名隊醫付一名から成る総勢二百五十二名で數日開拓團のもとに留まり主として隊員の被服の補修、洗濯、炊事清浄、整頓、農耕などの奉仕を行ひつゝ開拓團を巡回するが隊員はなるべく郷土出身の開拓團へ配属されることになってゐる、なほ隊員の資格は各地方青少年團長が推薦し年齢は十八歳から二十五歳までの身體の強健にして将来大陸への熱あるもので東京出發前五月下旬乃至六月上旬指導者は七日間、隊員は二日間日本青年館および東京府下北多摩郡小金井浴恩館で豫備訓練を行つたのち壯途に上る豫定である

◆1943(昭和 18)年 5 月 12 日高知新聞夕刊

征け義勇軍に／各郡の割當決まる

滿洲建設の一翼を背負う兵農戰士として縣が本年度において募集する青少年義勇軍は総數三百八十名で、その割當は次の通り

◁安藝五十五名◁香美、土佐、長岡、高知各四十名◁高岡九十名、幡多七十名

◆1943(昭和 18)年 6 月 3 日朝日新聞朝刊

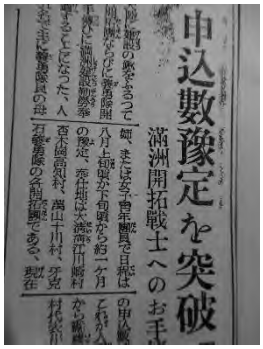
勤勞奉仕乙女隊／元気で満洲へ

右から西岡、伊尾木、河邑、沖本の諸嬢

やがて一人前の拓士となって大陸建設に協力するため目下満洲開拓青少年義勇隊對店訓練所で精錬中の隊員と共に一ケ月の間起居をともにしながら勤勞奉仕する大日本青少年團主催の満洲建設女子勤労奉仕隊に選ばれて参加する高岡郡久禮町西岡具子さん(二三)、長岡郡長岡村伊尾木きよさん(一八)、同郡吉野村河邑喜水さん(一九)、高岡郡東津野村沖本清子さん(二〇)の四嬢は一日午後一時二十六分高知驛発列車で元氣に出発したが縣廳に勢揃ひしたところをとらへると「ぜひ一度はと憧れてゐた大陸へ行くことが出來てこんなに嬉しいことはありません、たつた一ケ月の奉仕ですが力いつぱい働いて帰ります、その間に出來るだけ大陸の生活に触れまた建設にいそしむ青少年の意氣にあやかりたい念願です、七月五日には下関へ帰る豫定ですがもつと永くゐたいと思ふにきまつてゐます」と代るがわる語った

◆1943(昭和 18)年 7 月 14 日高知新聞朝刊

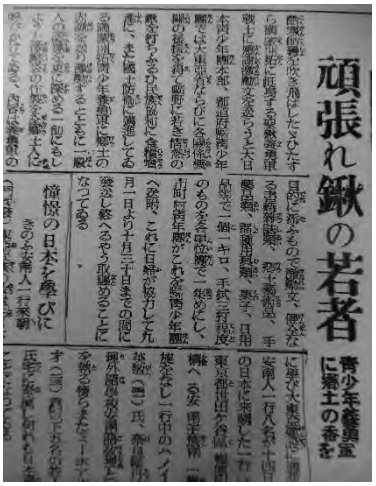
申込數豫定を突破／百名を算す／満蒙開拓戰士へのお手傳(つだ)ひ女性



縣では大陸に建設の鍬をふるつてゐる分村開拓團ならびに義勇隊開拓團のお手傳ひに満洲建設勤勞奉仕隊を派遣することになった、人員は六十五名で主に義勇隊員の母姉、または女子青年團員で日程は八月上旬頃か下旬頃から約一ケ月の豫定、奉仕地は大清溝江川崎村杏木崗高知村、萬山十川村、牙克石義勇隊の各開拓團である、現在の申込數は豫定突破の百名を算しこれが人選のため十三日午後二時から縣農政課分室で係官、關係町村代表出席のうへ協議した

◆1943(昭和 18)年 7 月 15 日高知新聞朝刊

頑張れ鍬の若者／青少年義勇軍に郷土の香を



極寒酷暑を吹き飛ばしただひたすら満洲開拓に挺身する聖鍬義勇軍戰士に感謝激勵文を送らうと大日本青少年團本部、都道府縣青少年團では大東亞省ならびに各関係機關の後援を得て曠野に若き情熱の鍬を打ちふるひ民族協和に食糧増産に、また國土防衛に邁進(まいしん)してゐる満蒙開拓青少年義勇軍に郷土の誠を送り激勵するとともに一般人の認識を更に深める一助にもしようと激勵袋の作製を全郷土人に呼びかけてゐる、内容は義勇軍の目的に添ふもので激勵文、健

全なる書籍雑誌類、郷土藝術品、手藝品類、諸種用具類、菓子、日用品等で一個一キロ、手拭三打程度のものを各単位團で一集めにし、市町村青年團がこれを縣青年團へ送附、これを日婦が協力して九月一日より十月三十日までの間に發送
し終へるやう取纏めることになつてゐる

◆1943(昭和 18)年 7 月 22 日高知新聞夕刊

開拓團指導者中央錬成會へ／本縣から百十名

滿洲開拓團指導者中央錬成會は廿四から八月三日まで内原訓練所で實施、全國から千百名参加するが本縣からは吾川、幡多両郡各四十名、安藝郡その他三十名合計百十名で中隊長磯部萬助氏以下全員が廿三日午前九時縣廳前で壯行式を挙げ同日午前十一時三十五分高知驛發で内原に向ふ

◆1943(昭和 18)年 7 月 23 日高知新聞朝刊

烈々の開拓魂／少年義勇軍の華

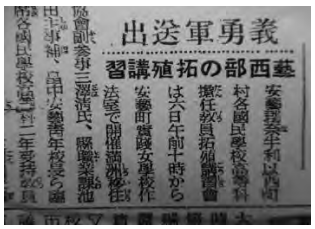
（写真は故和田満君）

長岡郡本山町上開、和田猛氏二男満君は小學校卒業後内原訓練所を経て渡満、青少年義勇軍としてハルビン嚮導訓練所に入所、さらにハルビン醫大入學を志望し大陸開拓戦士として猛訓練の傍ら不断の勉學を續けてゐたが不幸さる七月病氣のため死亡、このほどハルビン嚮導訓練所では所葬を以て葬儀を執行、雄圖空しく散つた若櫻の心からなる冥福を祈つたが父猛氏は次のやうに語つた

満が義勇軍に参加するとき年少なので最初は案じましたが〝僕も日本の少年です、興亞のため必死で奉公致します、十年もすれば軍刀を佩いてお父さんに會ひに帰ります〟と元氣に出發し何時の便りにも郷土本山の青少年が一人でも多く満洲に雄飛するやうにと書いてあり倅も満蒙開拓の礎石と散つてさぞ本望だらうと存じます

◆1943(昭和 18)年 12 月 8 日高知新聞朝刊

義勇軍送出／藝西部拓殖講習



安藝郡奈半利以西町村各國民學校高等科担任教員拓殖講習會は六日午前十時から安藝町實践女學校作法室で開催満洲移住協會副参事三澤清氏、縣職業課池田主事補、畠中安藝青年校長ら臨席各國民學校高等科二年受持教員ら約三十名が参集して定刻國民儀禮の後協會並に縣係官による講演並に懇談を行つたが來年三月送出の満蒙開拓青少年義勇軍安藝小隊編成確保の運動に拍車を加減することとなつた

◆1944（昭和 19)年 2 月 24 日高知新聞夕刊

大陸建設の後續部隊／青少年義勇軍郷土部隊の編成

大陸建設の後續部隊
青少年義勇軍郷土中隊の編成

（寫眞は田中氏）

滿蒙開拓の農兵隊として先發隊につゝき新に編された青少年義勇軍郷土中隊二百名は三月三日午後一時から縣農業會館壯行式にのぞみ同夜は丸ノ内の天理教會に一泊、翌四日午前七時八分高知驛出發、内原訓練所で四ケ月間にわたり猛訓練を受け六月下旬渡滿するが隊員と共に現地に入植し隊の指導者として陣頭指揮にあたる中隊長の人選は最も重要であるので適格者の選定につき縣で慎重詮衡（せんこう）の結果高知市東部組合青年我學校教諭で青少年の教導育成に最も熱意を有し各方面から囑望されつゝある高知市高須四〇六田中茂喜(四〇)氏を推薦、交渉の結果、快諾を得て氏の中隊長就任を見たので更に以下の如く中隊指導員を選任し隊の編成を終つたなほ中隊長田中氏は縣立農業學校卒業後高須村農會技手、一宮第一青年學校指導員、高知縣公立青年學校教諭を経て昨年四月東部青年學校教諭となり今日におよんだものである

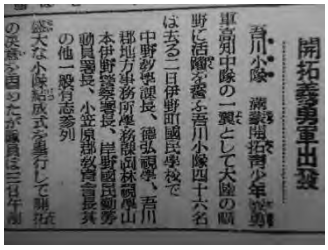
◆1944（昭和 19)年 2 月 29 日高知新聞朝刊

義勇軍吾川／小隊結成式

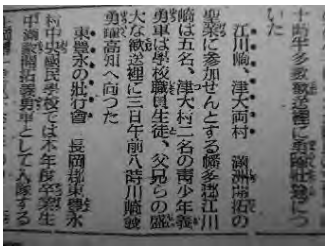
吾川郡では滿蒙開拓青少年義勇軍の募集に割當突破を目標に運動をつづけてゐたがいよいよ三月二日午後三時から伊野町國民學校で文木縣農政課長、吾川地方事務所松田所長以下學務課岡林視學、小笠原郡教育會長、山本伊野所長はじめ各関係職業所長列席の下吾川小隊結成を盛大に擧行したのち勇躍滿蒙開拓の壯途につくことになった

◆1944（昭和 19)年 3 月 7 日高知新聞朝刊

開拓義勇軍出發／吾川小隊


開拓義勇軍出發
吾川小隊

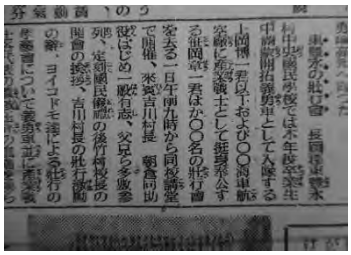
滿蒙開拓青少年義勇軍高知中隊の一翼として大陸の曠野（こうや）に活躍を誓ふ吾川小隊四十六名は去る二日伊野町國民學校で中野教學課長、徳弘視學、吾川郡地方事務所學務課視學、山本伊野警察署長、岸野國民勤労動員署長、小笠原郡教育會長其の他一般有志参列盛大な小隊結成式を擧行して開拓の決意を固めたが隊員は三日午前十時半多數歓送裡に勇躍壯途についた


十時半多數歓送裡に勇躍壯途についた
江川崎、津大両村、滿洲開拓の聖業に参加せんとする幡多郡江川崎は五名、津大村二名の青少年義勇軍は學校職員生徒、父兄らの盛大な歓送裡に三日午前八時川崎發勇躍高知へ向かった
東豊永の壯行會

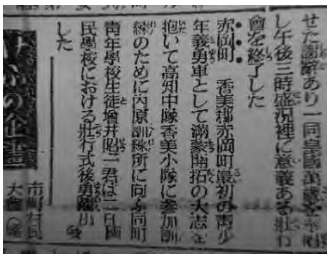
江川崎、津大両村

滿洲開拓の聖業に参加せんとする幡多郡江川崎は五名、津大村二名の青少年義勇軍は學校職員生徒、父兄らの盛大な歓送裡に三日午前八時川崎發勇躍高知へ向かった

東豊永の壯行會



長岡郡東豊永村中央國民學校では本年度卒業生中滿蒙開拓義勇軍として入**隊**する上岡博一君以下および〇〇海軍航空廠に産業戰士として挺身奉公する笹岡章一君他〇〇名の壯行會を去る一日午前九時から同校講堂で開催、來賓吉川村長、朝倉同助役はじめ一般有志、父兄ら多數參列、定刻國民儀禮の後竹村校長の開會の挨拶、吉川村長の壯行激励の辭、ヨイコドモ達による壯行の學藝會についで義勇軍並に産業戰士各代表の職域玉**砕**の血潮を沸らせた謝辭あり一同皇國萬歳を奉唱し午後三時盛況裡に意義ある壯行會を終了した



開拓義勇軍出發／赤岡町

香美郡赤岡町最初の青少年義勇軍として滿蒙開拓の大志を抱いて高知中**隊**香美小**隊**に參加訓練のために訓練所に向かふ同町青年學校生徒增井昭一君は二日國民學校における壯行式後勇躍出發した

田中中隊略歴

1944(昭和 19)年 3 月、郷土部隊として 171 名が内原訓練所に入所。高知県、熊本県との混成中隊・田中中隊(田中茂喜　高知市高須出身)となり、222 名が同年 7 月 10 日渡満、東安省勃利県の第 7 次義勇隊訓練所・勃利訓練所に入所。1945(昭和 20)年 8 月 15 日、東安省勃利県勃利訓練所で終戦を迎える。ここまでは分かっているが、隊員たちの手記や体験記などは見つからないので、訓練所での生活、体験等は分からない。

「義勇隊訓練所の終焉」の資料の中に、田中中隊について、勃利義勇隊訓練所・田中中隊の送出県は高知・熊本で、在籍者数 214 名、帰還者数 162 名と書かれている。

第 3 章　引き揚げ後の隊員たち

1. 津野兼吉さん(元谷本中隊)

給料の清算支給と抑留時の労働の支払いもなく、300 円の帰郷旅費と 1 枚の鉄道切符が支給されたのみである。当時の闇米 1 升が 100 円である。正規の配給米 1 升 5 円で、 1 カ月に 5 升しか無い。かの東洋人が言っていたように、海外引き揚げ者は余り者として取り扱われていた。旧軍隊の物資はなく、民間の衣料もない。浦島太郎のように故郷の山河も人情も変わり果てていた。

法律はすべて変わっていた。憲法は勿論の事、農地は農地改革で分割され、引き揚げの遅れた者は北海道開拓への道しか残っていなかった。戦後の秩序は出来上がり、米軍の占

領政策は徹底していた。シベリア帰りは共産主義者と警戒された。日本の大地から出た事のない、戦場の経験のない人が、出来るだけ米の供出を少なくして闇米を売り肥え太っている所へ、突然に海外から帰って来た他所者は水と油のようになじまない。

軍人恩給の算定をしてもらった。

鞍山は 1944(昭和 19)年 8 月の空襲以来戦争地域であったのに、戦時加算されたのはロシア軍が侵攻した 8 月から 9 月 2 日のたった 2 カ月、一日千秋の思いの抑留期間は 4 カ月が 1 カ月、義勇軍期間に加算はないが、訓練所職員は加算された。

帰国した北朝鮮が争点になった。シベリアならナホトカより帰国しなければいけないと決まっていたらしい。国家権力とは巨大な化け物だ。振り回されて過ごした青春の日々。多くの友も失った。時代が悪いと人は言う。たしかに生まれた時が 2 年早いか、2 年遅かったらよかっただろう。

戦後復員して 30 年、開拓会に参加して旧友に再会し、1982(昭和 57)年 6 月、私を加えた 4 人で嫩江(のんこう)と西鶴山を訪れた。長州、連桂等他の組織と合同したので行動に自由はなかった。

嫩江は国営農場になり、各中隊のあった場所はすべて煉瓦建ての家屋になり、電灯がつき、テレビのアンテナが立ち、広大な原野はことごとく耕作されていた。機械は乗用トラクター、刈り取り機が整備され、調教班跡地は製糖工場に、植樹班苗圃は中学校になっていた。楊樹(やんじゅ) と呼ぶ植林が防風林を作って、その種子、タンポポのような白い綿毛のついた種子が雪のように積もっていた。西鶴山は国営農場で、ここもすべての丘は耕されて、雀の 1 羽も見えない。狼の居た丘は小麦畑となり、わずか 2, 3 株の鈴蘭がわびしく残っていた。八洲駅は引き込み線が 6 本と拡大され、特急の停車駅となって双山と改名されて賑わう一方、伊拉哈(いらは)は昔のデーシャン造りの家がつづいていた。木造の車輪はタイヤとベアリングが入って馬も軽く引いている。各地の井戸は水道になって、我々がめざした開拓を中国人が 30 年後に実現していた。

ゴルバチョフ首相 1991(平成 3)年 4 月 16 日来日の時シベリアの死亡者名簿が発表されて、新聞号外を入手した。知った名前はあるが、書き記されていない氏名もある。ノートを失っているから、これについて言うことはできない。地名も変わっているようだ。どこでも何一つ教えられず、着いた地点で労働ばかり強制されたのだからよく分からない。軍人恩給もなく、ロシアよりの賃金支給もなく、自己の労働のみが帰国してからの今迄の生活の基だ。

当時の少年は故人となった者が多く、その足跡をたどる者は居ない。残った日誌を基にこの文を記して苦労多かった青春の去りし日を偲んでいる。

２．山岡勲さんの一時帰国(元斉藤中隊で唯一未帰還者)

◆1992(平成 4)年 12 月 24 日　高知新聞朝刊

ロシアから／山岡勲さん(東洋町出身)５０年ぶりにロシアから日本に一時帰国

『生きてて良かった』／親族、戦友らとの涙の再会

「生きてて良かった…」
ロシアから 山岡さん 50年ぶりの母国
親族、戦友らと涙の再会

満蒙開拓団青少年義勇軍として戦争中、旧満州(現中国東北部)に渡り５０年ぶりにロシアから日本へ一時帰国することになった県出身の山岡勲さん(64)が２３日、ロシア貨物船で名古屋港に到着した。午前１０時４５分、名古屋検疫所前桟橋に降り立った山岡さんは、待ち受けた親族や戦友らと再会。約半世紀を経た夢の対面に「生きてて良かったなあ」と涙をこぼす妹の坂本田鶴さん(62)ら胸に抱き止め、「体は大丈夫ですか」などと語りかけた。

山岡さんは 1942(昭和 17)年、14 歳で現在の安芸郡東洋町から青少年義勇軍に志願、旧満州で行方不明となった。今年 1992(平成 4)年 1 月、故郷に出した手紙から健在であることが分かり、親族や同県出身の元開拓団員らがカンパなどで資金を作り、一時帰国を実現させた。

山岡さんは終戦後、ソ連軍に捕虜として拘束され、釈放後ロシア女性と結婚. ノリ網等で生計を立てながら 2 人の娘をもうけた。現在はウラジオストクで年金生活を送っている。

５０年ぶりに祖国の土を踏んだ山岡さんは「僕も変わったが、日本はもっと変わったね。まるで浦島太郎さんだ」と戸惑いを見せたが、「何よりも早くすしが食べたい」と周囲を笑わせた。

あす朝高知入り

山岡さんは同日、大阪に移動し 24 日まで滞在。25 日午前 9 時 10 分着の飛行機で高知入りし、同 11 時半から東洋町野根公民館で開かれる歓迎式に臨む。今後 1 カ月間日本に滞在し、故郷の両親の墓参りや旧友との再会を予定している。

３．山本義美さん(元山本中隊)

◆1981(昭和 56)年 8 月 17 日高知新聞夕刊 1 面

戦争／酷暑の記憶(8)／亡き戦友の声㊦

社会奉仕の弔い合戦／帰国後も開拓団訓の実践

1948(昭和 23)年 6 月、山本義美は 2 年 9 カ月に及ぶシベリア抑留生活を終え母国に帰った。満蒙開拓の意気に燃え故郷をあとにしたのが 16 年 3 月末、7 年 3 カ月ぶりの加茂村は山も川も、そっくり昔のままだった。一瞬、彼の脳裏からあの大陸での苛酷な日々を忘れさせてくれるほど平和そのものだった。

しかし、大きく変わっていることが一つ。それはシベリアからの復員兵を迎える人々の目だった。「わしは共産党員になるほどの頭もないのに、シベリア帰りというだけで白い目で見られた。一時はやけを起こしてぐれちょった」。

彼は復員後、すぐに村内の石灰鉱山の荷役の職に付いたが、ある日、村の戦没者遺族の

会に招かれ、シベリアでの抑留生活の報告をする機会があった。彼にしてみれば「ただ体験をありのままに話しただけだった」が、会場にいた一部の人はそれがソ連賛美と映った。「ソ連へ帰れ！お前なんか鉱山事故で死んでしまえ！」。激しくののしられた。そうかと思うと、牛小屋を改造した粗末な家に住み、ふるせを食べて生活している彼に、「村一番の重税が課せられた」(本人の話)こともあった。このころ国内全体が反ソ的な傾向を強めていた。県内でも帰国はしたものの、まともな職からはじき出され、高知城周辺で浮浪者同然の生活をしているシベリアからの復員兵がごろごろしていた。あまり話したがらないが、そんな風潮の中で帰国直後の山本の生活も相当荒れていたらしい。「いっぺん死んだ体じゃどうにでもなれ」。そんな気分に陥っていたとき、北海道から彼のもとに一通の手紙が届いた。「開拓魂を忘れずに、まじめに生き抜いてください」—青少年義勇軍時代の教育部長、太田義雄(沖縄戦で戦死)の未亡人からだった。彼女、太田りよは教え子たちがつらい抑留生活の末、やっと帰り着いた母国で苦労をしているのを見かね、消息を調べては励ましの手紙を送っていたのである。満州時代、若い隊員の面倒をよく見てくれ、山本自身「お母さん」と呼んで慕っていたその人からの手紙。それが失意のどん底にあった彼を立ち直らせた。頭のなかで「口より実行、まず働け」というあの開拓団訓がよみがえった。

亡き戦友の声に励まされながら佐川町加茂駅前で立つ山本義美 雨の日も雪の日も毎月 20 日に姿が見えないことは 1 度もない

「よっしゃ。見よってみ。10 年、20 年後には(まっとうな)人間になっちゃる」。そう誓いを立てた彼は、社会奉仕の道を選んだ。彼にって開拓団訓の実践は死んだ戦友たちのへの弔いでもあった。村内で道路補修があれば真先に。高い税金に悩む鉱山の勤労者があれば村役場と談判、税金を負けさせた。自分は決して贅沢な生活はしていない。鉱山でも人一倍働き、通産大臣表彰を受けた。1965(昭和 40)年からは、沖縄で夫を失った太田りよの進めもあって、沖縄の早期復帰を訴えた。1973(昭和 48)年からは、交通安全のため街頭に立つようになった。

がむしゃらに戦後を生きてきた山本だったが、決して一人きりではなかった。月一回は近くの忠魂社で英霊たちと無言の会話を交わした。そして、1950(昭和 25)年 10 月 17 日、鉱山の落盤事故で仲間 2 人が死に、彼だけが石のすき間で助かったとき「自分には英霊たちがついていてくれる」ことを確信したという。

1976(昭和 51)年のある日、牡丹江八面子の戦いで死んだ戦友がまくら元に現れ、「ここまで帰っている。おれの両親は生きている。両親のところへ連れて行ってくれ」と拝むように頼んだのである。翌日、仕事が手につかなくなり、県の世話係へ駆けこんだ。遺族年金の受給者を手掛かりに、彼の両親は健在だった。1977(昭和 52)年 6 月、沖縄で営まれた

友の 33 回忌に出席した山本は、八面子の戦況をつぶさに報告した。友の両親は「息子が帰った」と泣いて喜び、那覇空港では土下座して両手を合わせて見送ってくれた。

今、佐川町加茂の家の居間には鉱山労働や交通安全運動でもらった 10 数枚の表彰状が飾ってある。それらを指さして彼は、

「みな戦友がもろうたんです。わしには戦後も新しい生き方いうのはなかった。開拓魂を実行しただけです。死ぬまで義勇軍です」と話すのである。(佐川)＝敬称略

《コラム》　「満蒙開拓移民を推進した人　久保佐土美」

久保佐土美氏(1899~1978 年)は、高岡郡須崎町出身で、1957 年から 1971 年まで高知大学長。専門は農業経営学。鳥取高等農林学校卒業、1936(昭和 11)年に農村更生協会に入り、1940(昭和 15)年石黒田忠篤の後をつぎ八ヶ岳(長野県)の中央修練農場の場長となる。戦前の編・著書に『北満農業物語』(1940 年 11 月再販、満州移住協会発行)、「國本　農道編」(1943 年、財団法人農村更生協会八ヶ岳中央修練農場発行)がある(中略)。

小山富見男著『鳥取県県史ブックレット 7　満蒙開拓と鳥取県』(2011 年、鳥取県発行)の中に「満蒙開拓移民を推奨した人達」として「久保佐土美(鳥取高農助教授、のち農村更生協会主事)」と名前が挙げられている。

三宮徳三郎編纂『高知県満州開拓史』(1970、高知県満州開拓史刊行会・財団法人高知県開拓民自興会発行)に久保氏は「(高知大学学長」の肩書で序文を寄せている。長文なので一部を紹介すると「さらに戦争が不利となり遂に敗戦となるや、敵軍の襲撃や同胞の弱みにつけこんで瀕々と匪賊の襲撃があり、犠牲者を無数に出す悲惨な運命に陥り、昭和 7 年以来大陸に積み重ねてきた開拓の甚大な成果も水泡に帰してしまったことはまことに残念であり、あわれでもあった。とはいえ満州開拓という、空前絶後の日本民族の断行した島国から大陸を目指す一大民族移動の壮挙は、永遠に歴史を飾ることであろう」と記されている。

『北満農業物語』の裏表紙の左下隅には持ち主の名前が書かれている。かろうじて「千葉中隊第 4 小隊／大熊元□」と読める(□は判読不明)。

満蒙開拓青少年義勇軍は軍隊にならって編成されており、20 人を単位にして 1 班をつくり、3 班 60 人で 1 個小隊、5 個小隊 300 人で 1 個中隊、6 個中隊 1,800 人で 1 個大隊を編成していた。国内や満州での訓練や開拓団への移行後の生活も 300 人の中隊を単位にしており、中隊長の姓を取って中隊名にしていた。また原則として中隊は同一都府県の出身者で構成されていた。

したがってこの『北満農業物語』の元所有者は、千葉県で組織された中隊の第 4 小隊に居た大熊青年(少年かも)だったことになる(後略)。

ともかく、久保氏の『北満農業物語』を読んだ青年がいたのである。

久保氏には『ふるさとの山川』(1974 年)という自叙伝があり、八ヶ岳での寒冷地農業の実践については詳しく語られているが、満蒙開拓青少年義勇軍との関わりについては残念

ながら１行も書かれていない。

（『同胞』22 号　編集・発行「同胞（はらから)の会」　2022 年より）

ところが、下記の新聞記事から義勇軍募集に大きく関わっていたことが推測される。

1938(昭和 13)年 2 月 6 日の高知新聞朝刊に、

滿蒙開拓へ／青少年義勇軍／県下から数百名募の見出しでこう書かれている。

滿満蒙開拓青少年義勇軍編成という重要な使命を帯びた大日本聰合青年團主事補五百蔵幸碌、農村更生協会主事久保佐土美の両氏は 4 日来高、直に縣社會課、教育課を訪問、打合せをなしたが、義勇軍に對する滿蒙の現地における希望は全國各地から 5 萬人の青少年を集めたいといふのであるが、議會開會中のためこの拓務豫算が決定しないので、縣内の募集人員もハッキリしないとは言へ數百名を募集する豫定であり、これが趣旨徹底並に募集事務打合せのため下記日程で縣下各地の町村長、小學校長、青年學校長、青年團長らを召集して協議會を開催する事になっている。

5 日幡多郡中村町　　6 日高岡郡窪川町　　7 日吾川郡伊野町

8 日香美郡山田町　　9 日香美郡野市町

（『鍬の戦士父・前田定の闘い』P58~59　前田千代子　2021 年）

参考文献

陣野守正『先生、忘れないで！「満蒙開拓青少年義勇軍」の子どもたち』
1988 年　梨の木舎

伊藤純郎　『満蒙開拓青少年義勇軍物語』「鍬の戦士の素顔」2021 年　信濃毎日新聞社

土佐史談会『土佐史談』(土佐の女性史特集号)　227 号　2004 年

上笙一郎　『満蒙開拓青少年義勇軍』1973 年　中央公論社

旅の文化研究所　『満蒙開拓青少年義勇軍の旅路』2016 年　森話社

高知新聞　1941 年~1945 年朝・夕刊。1981 年 8 月 17 日夕刊。1992 年 12 月 24 日朝刊

秦史談会　『秦史談』第 111 号　2002 年

梅谷昭一　『梅谷昭一回想録』　2019 年　中島出版

津野兼吉　『シベリア物語』　2002 年　リーブル出版　非売品

前田千代子　『鍬の戦士父・前田定の闘い』 2021 年　高知新聞総合印刷

三宮徳三郎　『高知県満州開拓史』1970 年　土佐新聞社出版部

白鳥道博　『「満蒙開拓青少年義勇軍」の変容「郷土部隊編成」導入の意義』
北海道大学教育学部紀要(北海道大学教育学部)第 54 号　1990 年

内木　靖　『満蒙開拓青少年義勇軍―その生活の実態―』
愛知県立大学大学院国際文化研究科論集第 11 号　2010 年

森本　繁　『ああ満蒙開拓青少年義勇軍』1973 年　家の光協会

別冊１億人の昭和史『日本植民地史２　満州』1978 年　毎日新聞社

森井淳吉　コラム・エッセイ集『スケッチ・ブック』　2022 年
地域産業総合研究所(代表　山西万三)

『同胞』22 号　編集・発行「同胞（はらから)の会」　2022 年

青少年義勇軍関連の新聞記事目録

楠瀬　慶太

織田千代子「青少年義勇軍と高知」に掲載された青少年義勇軍関連の新聞記事を目録化した。内訳は『高知新聞』が 62 件、『朝日新聞』が 1 件の計 63 件で、斎藤中隊、広瀬中隊、田中中隊と高知県関係者で編成された義勇軍の中隊記事で分類した。このうち 59 件は、高知新聞社のデータベースにテキストデータが登録されていない記事であり、戦災により所在不明のものも多く、新資料といえるものである。「青少年義勇軍と高知」では、原資料（当時の新聞紙面）を閲覧して、記事内容をほぼ全て活字化している。

上記より今回紹介された記事内容は、高知県および全国の義勇軍および満州移民の歴史を知る上で貴重な資料になると考え、目録および記事本文のテキストデータをインターネット上でも公開する。以下の「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」のホームページ（https://mansyu-kochi.yuhocreate.com/）および「高知工科大学フィールドデータベース」（https://sites.google.com/view/kochi-gis/home）で、Excel 形式のデータを公開しているのでご活用願いたい。

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会の HP の QR コード

高知工科大学ﾌｨｰﾙﾄﾞﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽの QR ｺｰﾄﾞ

青少年義勇軍関連の新聞記事目録【抜粋】（「資料集頁数」は本書の掲載頁数）

記事見出し	年月日	新聞	資料集頁数	分類
満蒙開拓へ／青少年義勇軍／県下から数百名募	1938(昭和13)年2月6日	高知新聞朝刊	107	
青少年義勇軍高知中隊／想ひは大陸へ／けふ愈々高知驛を出發	1942(昭和17)年3月5日	高知新聞朝刊	74	斎藤中隊
“青少年義勇軍一同元氣だ”／池田主事補歸る	1942(昭和17)年7月19日	高知新聞朝刊	74-75	斎藤中隊
滿洲へ教學奉仕員出發	1942(昭和17)年8月9日	高知新聞朝刊	75	斎藤中隊
慰問視察の教員團九月十日出發渡滿	1942(昭和17)年8月28日	高知新聞朝刊	75	斎藤中隊
家族からの傳言と慰問狀を受託する／本縣からの渡滿教員團	1942(昭和17)年9月4日	高知新聞夕刊	76	斎藤中隊
鄕土便りを携行／渡滿教員團の日程決る	1942(昭和17)年9月11日	高知新聞夕刊	76-77	斎藤中隊
大陸へ先生の慰問團／勇躍出發	1942(昭和17)年9月26日	高知新聞夕刊	77	斎藤中隊
元氣な高知中隊／缺かすな慰問と激勵／開拓青少年義勇隊／教學奉仕隊員の歸高談	1942(昭和17)年12月29日	高知新聞朝刊	77	斎藤中隊
開拓戦線を視る／滿洲にて／山崎本社特派員　(1)	1942(昭和17)年10月4日	高知新聞朝刊	78－79	斎藤中隊
開拓戰線を視る（2）／滿州にて／山崎本社特派員	1942(昭和17)年10月6日	高知新聞朝刊	79	斎藤中隊
開拓戰線を視る（3）／滿州にて／山崎本社特派員	1942(昭和17)年10月8日	高知新聞朝刊	79-80	斎藤中隊
若き鍬の拓士に慰問袋／日婦市支部の計畫順調に進む	1942(昭和17)年10月3日	高知新聞夕刊	80	斎藤中隊
若き拓士に暖い贈物／日婦市支部のおばさん達から	1942(昭和17)年10月11日	高知新聞夕刊	80	斎藤中隊
滿洲開拓地で傳書鳩講習會	1942(昭和17)年10月22日	高知新聞夕刊	80-81	斎藤中隊

第４回　満洲の歴史を語り継ぐ集い（2022/06/26　高知城歴史博物館）

満洲移民の〈背景〉

（中国史の地域社会について考えてきた者の一関心）

吉尾　寛

０　自己紹介：これまでに出会った方々

・ 1960-70 年代：（高校生の頃まで）満蒙開拓団（地区？）の病院の医師（長？）
　　であった沖縄出身の老先生
・ 1980 年代：結婚　義父、満洲の錦州出身で旧満洲医科大学（旧奉天）に進学
　　（1946 年 4 月 29 日まで在学を証明する文書有り）。同窓会『楡（二〇）の会』
　　：『されど、わが「満洲」』（文藝春秋　1984 年）
・ 1990 年代：中国遼寧省出身の社会科学院歴史研究所の教授
・ 1992 年 7-10 月（社会科学院歴史研究所（北京市朝陽門）に出張）
　　：研究所と対面する日本国大使館
　　：遼寧省瀋陽市の中国医科大学（旧満洲医科大学）のキャンパス見学
・ 2000 年代：明清時代の史跡調査のため河南省の数村を訪問（日本軍との攻防戦跡）
　　※拙書『明末華北の流賊反乱と地域社会』（汲古書院　2001 年）
　　※編著『民衆反乱と中華世界―新しい中国史像の構築に向けて』（2012 年）
・ 2010 年代：崎山ひろみさんを訪ね、高知県の満洲引揚者への聴取調査に参加
・ 2018 年　：『崎山ひろみ文庫』を高知大学の学内承認を経て同図書館に設置
・ 2021 年　：中国人画家・王希奇「一九四六」高知展の準備に参加
　※2015 年～：日本統治時代の台湾南方澳への高知県漁民移住の聴取調査（両現地）

１　中国の帝政崩壊（辛亥革命）＝共和政体誕生から全国統一へのプロセス「北伐　（ほくばつ）」のインパクト

※「一九四六」高知展で配布した資料「満洲引き揚げ者の背景―日露戦争から『満洲国』崩壊まで」（実行委員会作成）　　※本報告資料の後ろをご覧ください。

1895 年　日本、日清戦争に勝利→→朝鮮、「満州」の支配をめぐってロシアと対立

1905 年　日本、日露戦争に勝利し、ポーツマス条約締結。遼東半島の大連、旅順の割譲、南満州の鉄道と沿線の財産、炭鉱などを奪い、軍隊の駐留を認めさせる

1906 年　日本、遼東半島の南端関東州に関東都督府を設置し、「南満州鉄道株式会社」（満鉄◆）を設立。関東都督府陸軍部と南満州鉄道沿線の守備隊を合わせて、「関東軍」を設立。

◆東北 3 省（奉天、吉林、黒竜江）南部のすべての鉄道を経営、鉄道線、　周辺を付属地として支配、撫順、煙台の炭鉱を採掘、鉄鋼･鉱山･電力･金融･流通･商業などあらゆる分野に及ぶ。撫順炭鉱は東洋第一の大炭鉱。

1907 年　満鉄調査部（旧慣調査班、経済調査班、露西亜班）が発足

1911 年　孫文による辛亥革命がおこり、二千年以上続いた帝政が倒れ共和制政治へ。ただし中国各地に軍閥が割拠。

1926 年　中国国民党の国民政府（広東）は蒋介石の指揮の下北方軍閥を打倒して、全国を統一するための「北伐」を開始。

1928 年 6 月　**日本を後ろ盾に北京政府を抑えていた奉天軍閥張作霖**は北伐軍に敗北、本拠地奉天へ引き上げる途中、関東軍によって列車が爆破され殺害される。（関東軍は、北伐軍の勢力が満州に及ぶことを恐れ、かつ張作霖爆破事件の混乱に乗じて出兵し満州を制圧する計略を立てるが、失敗。）**張作霖の後を継いだ張学良が、同年 12 月東北全土に国民党の旗を掲げ（易幟）、国民政府に合流。**
※保阪正康著『蔣介石』（文春新書　040　1999 年）など

1931 年 9 月 18 日　「満州事変」　関東軍は政府の「不拡大方針」を無視、増軍を要求し、4 か月後にはほぼ東北全土を占領（→→　1933 年日本、国際連盟脱退）

1932 年　関東軍参謀部、満州領有から傀儡国家建設に方針転換、建国工作へ。

1932 年 1 月末　満鉄調査部を基礎とする「満鉄経済調査会」を設置

1932 年 3 月 1 日　日本「満洲国」建国宣言、溥儀「執政」。満洲国「王道楽土」、「五族協和」のスローガンを掲ぐ。

1932 年 8 月　「満鉄経済調査会」が中心となり「満州国土地制度案」作成される

1932 年 9 月 15 日　「抗日ゲリラ」撫順炭鉱事務所を襲撃。関東軍による「平頂山事件」。

◆東北地方では、**抗日武装勢力**が各地に組織され、連合して「東北抗日連軍」を結成。関東軍は、これらを「匪賊」（略奪、殺人などを行う盗賊集団）と呼び、討伐作戦を徹底。**都市の中国人も、地下活動や反満抗日の組織を作って抵抗**。（→→　「関東軍防疫給水部（731 部隊）」活動）

1932 年 10 月　「第一次試験（武装）移民」が三江省（現在の黒竜江省）佳木斯（ジャムス）へと向かう（関東軍、満洲国の治安維持と対ソ連戦の兵站地および防衛線構築のため「在郷軍人による屯墾軍を駐屯させる」構想をもつ）

1933 年 1 月　関東軍は山海関から熱河省、長城へ侵攻。
（→→　1935 年、日本は華北 5 省の「自治」と「経済圏の独立」を掲ぐ）

◆「満洲移民」の入植地はその 6 割が、**現地農民の耕作していた既耕地を法外な価格で強制的に買収・取り上げたため、農民の抵抗が起こり**、関東軍「匪賊討伐」。

1933 年 1 月　関東軍特務部、「満洲国土地制度に関する件」を提示

1934 年 4 月　同「満洲国土地制度確立方針」作成、「満洲国地政略目」等の具体化

1934年5月　同「満洲国土地調査大綱」（「満洲国土地制度調査及整理に関する連合研究会」）

1936年8月　広田弘毅内閣、「満洲移民二十ヵ年百万戸計画」を含む七大国策を決定。

1939年12月　日本政府「満洲開拓政策基本要綱」を発表。開拓団送出の目的 ① 満洲国の治安維持　② 対ソ戦の防備　③日本的秩序の確立　④ 満洲重工業地帯防備　⑤ 主要食糧供給　⑥ 日本国内の農業対策、と記す。
（→→　開拓団の約8割がソ連国境近くに配置され、団には銃器を配備）

２　中国東北部の土地権利関係の「重層」性をめぐって〔１〕
：1930年代の満鉄経済調査会による調査とそれに基づく満洲国の土地制度政策

※江夏由樹「関東都督府、及び関東庁の土地調査事業について―伝統的土地慣習法を廃棄する試みとその失敗」（『一橋論叢』第97巻第2号　1987年）
※広川佐保「『満州国』初期における土地政策の立案とその展開」（『一橋論叢』第132巻　第6号　2004年）
※石田眞「戦前の慣行調査が『法整備支援』に問いかけるもの―台湾旧慣調査・満州旧慣調査・華北農村慣行調査―」（2006年？）　など

１）中国東北・内モンゴル東部地域の土地権利関係：
（清朝時代）漢人農民の入植禁止→→「蒙地開放（開墾）」→→開放蒙地においてモンゴル側（旗、王公、旗民）は漢人入植者より「押租銀」（権利金？）、「蒙租」（地代）を徴収するが、土地所有権はモンゴル側に止める。
（清末）東三省（奉天、吉林、黒龍江省）の各地方政権、土地権利関係の整理を進める（土地測量→漢人入植者申告、手数料徴収、地券の書き換え）。但し、「蒙租」等の旧慣習残る。
（日本・関東都督府）1910年代より土地調査事業に着手、土地所有権者を確定し、権利関係の整理に臨む。だが、関東州は清朝皇帝保有の直轄地（内務府官荘）多く、旗人は土地売却禁止されていた。かつ「典」（金銭の融通を受ける代わりに土地を使用収益させる）、「押」（抵当権）による転売が進み、一定の土地に複数の権利が存在する状態。土地所有権は「業主（地主）」、「典主（差し押さえ者）」いずれに帰すか等々。

２）上記の状況に対する当時の満鉄調査部（杉本吉五郎等）の考え：（土地権利等の）伝統的慣習（法）を一挙に廃止ることは困難、混乱させるだけ。→→経済調査会の旧慣調査

３）経済調査会『満洲国土地制度案』（1932年8月）の考え：土地制度の旧慣保護を図る
・満洲の社会経済は「前資本主義的形態」、「満洲の土地制度の整理こそは国家統治の本質的組織の整備」等々
・**日本の満洲移民について：「対満殖民政策上満洲の土地制度が如何なる重要性を有つかは今更ら改めて言及すべき必要はない」**
※「満洲の社会経済、殊に満洲農村の社会経済の資本主義化を歓迎すべき何等の理由を見出し得ないのみでなく、其の団体主義的諸共助制度こそは満洲農村社会の根本的自治方法であり、且唯一の救恤制度なるが故に、之等の村落総有地又は官倉、学田若くは善地等の土地総有乃至独立財産の存続は決して破るべからず」

・満洲国では今後移民を国内のみに限定、土地過少分割地＝南部から他の地域へ移住奨励、等々

３　中国東北部の土地権利関係の「重層」性をめぐって〔２〕

：1930 年代の関東軍の土地制度案（地籍簿を作成、地券を発給し、土地権利関係を確定していく方向性）

１）関東軍特務部、1933 年１月「満洲国土地制度に関する件」を提示（「土地制度要項」）

２）1934 年４月　同「満洲国土地制度確立方針」作成、「土地の種別に関する件」、「満洲国地政略目」の具体化）

３）1934 年５月　同「満洲国土地調査大綱」（「満洲国土地制度調査及整理に関する連合研究会」

４）1934 年９月、「土地局」（下記）に顧問として加藤鉄也を送り込む（→→「５」）

４　中国東北部の土地権利関係の「重層」性をめぐって〔３〕

：1930 年代の‘満洲国（土地局）として’行った土地政策

１）1932 年３月、民政部内に「土地局」を設置（→→土地制度確立に向けて調査・研究）

２）1935 年２月、国務院統計処主催の満洲郷村社会実態調査班に、土地局職員を派遣・参加させ、当該地区の６地域で土地沿革・権利・慣行について実地調査を実施。

３）同年４月「土地問題研究会」、６月「第１回土地科長会議」等開催

４）同年８月「臨時土地制度調査会」設置（政府高官、学者など）、関連諸会議を開催
　　＝地籍整理事業の本格開始

※満洲国には、多くの民族が複合的に居住しており、地域ごとに制度が異なっていたり、諸制度が重層的に展開していた。それゆえ、地籍整理事業により、国内のあらゆる事業と関連をもつ土地制度を統一し、土地権利関係を明確にすることが、中央集権体制を確立するうえでの基礎的な作業であると位置づけられたのである。（広川論文）

※蒙政部･モンゴル人官僚は、土地権利関係の一元化に強く反発
　→→　杉本吉五郎（元満鉄調査部）らを起用して、土地問題の解決に当たらせる

５　北中国（華北）の農村社会の「自治」性をめぐって

：1940 年代前半期、南満洲鉄道株式会社調査部による「中国社会における民衆の生活と法意識の解明」をテーマとする河北省・山東省６村の農民に対する聴取調査

※福武直紹介文（1953？年）中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』（第一巻（村落篇、家族篇）　岩波書店　1952 年）

※内山雅生「農村から見る現代中国社会の変動」（黒正塾第 10 回講演会 2012 年）等

１）1940～1944 年の調査、『北支農村慣行調査』123 冊として当時関係機関に配布
（→→1952-58 年　＋解説、索引『中国農村慣行調査』全六巻　岩波書店）

※「本調査が、あの戦争中にもかかわらず、軍国主義の制約を排除し、科学的目的のために行う意図を最後まで堅持した」
＝「現実の社会生活とそれにからまる法規範が農民から聞き出される」
＝「中国の民衆が如何なる慣行の下に社会生活を営んでいるか、換言すれば、中国社会に行われている慣行を明らかにすることによってその社会の特質を生けるがままに描き出すことこそ吾々の目的である」（当時東京帝国大学・末広厳太郎教授）

２）『調査』分析に基づく「共同体」論争：中国農村社会に共同体は存在したか
・平野義太郎（存在した→大アジア主義、「大東亜共栄体」の建設へ）
・戒能通孝（存在せず：日本のアジア侵略という「時局への抵抗」→市民社会へ？）

３）華北を中心とする中国農村に見られる様々な社会結合　（←←平野の追論）
・河北省順義県沙井村の「会（村公会・公会）」についての旗田巍（ﾀｶｼ）の調査と分析：村の寄り合い、定期市、頼母子講、土地神やその祭に関わる資産（廟産）の管理、雨乞い等々を主導するもの（「会首」など）→→「村民の自然的な生活協同態」
＝「村落の自治的要素の全てを結合した地縁団体たる自然部落そのもの」

６　結びにかえて

１）満洲移民の〈背景〉１：中国（蒋介石・中国国民党等）において「北伐」を軸に起こっていた全国統一の動きが、東北地区にも及ぼうとする政治状況

２）満洲移民の〈背景〉２：中国農村地域社会の「重層」性或は「自治」性

３）先行せる「台湾旧慣調査」（1900-1922 年）の意味（→『台湾私法』、『清国行政法』、『台湾番族慣習研究』等の成果物）
※石田眞「戦前の慣行調査が『法整備支援』に問いかけるもの―台湾旧慣調査・満州旧慣調査・華北農村慣行調査―」前掲：西欧近代法の台湾への「慎重な注入」
・初代台湾総督府民政長官、後藤新平（後に満鉄初代総裁）が企画。その考え方：
◎「宜シク十分ノ調査ヲ待チテ、然ル後一定ノ政策ヲ立テンコトヲ要ス」
←台湾は中国法系に属し、２００年以上にわたり相当程度発達した文化を有する、台湾統治はこれを無視して日本式の立法その他の法施策を実施できない（石田）
←植民地立法を行い行政を実施に移すためには台湾における法的慣行（＝旧慣）を調査し十分に調べねばならない（同前）
・京都帝国大学 岡松参太郎（後に満鉄理事）が主導（『台湾私法』の刊行）、「叙言」：
◎植民地台湾における立法・行政のための基礎資料を作るという政策目的への奉仕
◎「支那本土ノ制法」の研究

４）中国（近世以降の）農村社会の「重層」性と「自治」性をとらえる観点は、現在の中国の今後のあり方にも関わるか……

【聞き取り記録】「義勇軍参加者の戦中戦後（村尾朋市）」

文字起こし：小野由美子

2013 年から満洲引揚者の崎山ひろみさん（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・副会長）や高知県立高知城歴史博物館の渡部淳館長らが高知城歴史博物館の事業として定期的に続けている高知在住の満洲引揚者への聞き取りの会。2022 年までに約 60 人に聞き取りを行い、音声と映像データで満洲での体験の証言を記録している（高知城歴史博物館でデータ保管）。こうしたデータは、満洲での体験を語り継いでいくために欠かせないものだが、今後の活用のためには証言の資料化（文字起こし）と映像データの編集作業が必要である。これまでに高知大生らの協力を得て、『第 2 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集･2020 年度活動報告集』（2021 年 1 月発行）、『第 3 回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2021 年度活動報告集』（2021 年 9 月発行）で、計 4 人の聞き取りを文字起こしして活字化している。

今回は、2016 年 1 月 10 日に高知市鷹匠町 2 丁目の山内会館で聞き取り（30 回目）を行った故村尾朋市さん（昭和 4 年生、旧西土佐村出身＝写真）の証言を文字起こしした。高等小学校卒業後、満蒙開拓青少年義勇軍に参加し、戦後は八路軍に所属。壮絶な青年時代の記憶を活字化した。一部発言を修正して掲載している。

故村尾朋市さん

聞き手　高知城歴史博物館館長　渡部　淳
満洲の歴史を語り継ぐ高知の会　﨑山　ひろみ
NPO 地域文化計画　中村　茂生

村尾：私は村尾朋市と申します。高知県幡多郡江川崎村、今四万十市になっておりますが、江川というところに生まれて 1929 年の 8 月 20 日生まれです。昭和で言ったら 4 年です。今年で 86 歳になります。1944 年の 3 月江川崎村の川崎国民学校を卒業して、1944 年のすぐ満蒙開拓青少年義勇軍に参加するようになりました。当時は茨城県の内原訓練所に入所し、当時の所長は加藤莞爾（かんじ）でございました。1944 年の 8 月にはですね旧満洲国東安総省勃利（ぼつり）県勃利青年満蒙義勇隊に入所した。これが義勇隊に入った時期です。

それから 1945 年の 8 月 9 日ソ連軍の侵攻が始まりまして、8 月 11 日からやったと思いますけんど、勃利の訓練所を後にして退避するという、撤退するということになりました。それで私は最後の青少年義勇軍のあれでしたから、その 11 日の夜だったと思いますが、訓練所を出ることになって、それでどういう格好で出たかと言ったら、訓練所には主には農耕の仕事をしていたので、馬もおれば豚もおる牛もおるということで、ソ連軍と長期で戦う必要があるということで、私は一番若い団員ですから部隊とこれを責任をもって勃利の町まで連れて 500m も行かないうちにすっと行った。というわけで豚の後ろ脚をくくって、豚を前に立てて後から追って避難すると。そういうことから始まったんですが、豚も自分の住処から離れるということはとても嫌いますから、すっと、もうほんと 100m も 500m も行かないうちにすっと帰ろうとするんです。だからどうにもならんからね、「もうほっとけ。」ということで縄を解いて帰して自分だけ勃利の町に出ました。だいたい勃利の駅までは訓練所から 50 キロ近くありましたから一晩がかりで勃利の駅へ到着しました。で、その勃利の駅にはすでにもう佳木斯（チャムス）とか北の方からどんどん避難してくる日本の一般の方々がたくさんおりまして、そしてもう初めて見たんですけれども、中国人の略奪暴動からいろいろですね、見ました。

私たちの義勇軍は三個大隊だったと思いますが、2000 名近くおりました。だからそれが一団体として勃

利の駅までは出たけれども、それからはとてもこんな団体で行ったらね、これは敵にすぐ見つかるということで、勃利の駅から私たち義勇軍は高知と熊本の高熊中隊というて、混成中隊を 300 名くらいの中隊でした。その中の 12 人のまあ仲良しグループというか、これがもう我々はね、我々で独自の行動をとろうということで、当時 15 歳でしたけれども勃利の駅からただ南へ向かって南下すると、あてもなく。それでどの道を通ったら南へ早く行けるかということを皆で相談をして、まず鉄道、もう汽車は通っておりませんでしたから、鉄道を伝って行こうということで鉄道線路沿いに避難をすることが始まりました

それで第 1 回のソ連軍の空軍の機銃掃射を受けたのは約 30 キロ南下した林口という、そこで機銃掃射を受けて、そこへ避難しちょったもうすべての人々が、キビ畑ですね、これへ避難したんです。だけど上から見ればすぐ分かりますから、もう無差別に約３０分ぐらい機銃掃射を受けましたからね。で、それからソ連の戦車隊が入ってきまして、我々が逃げる前にソ連の兵隊が南下していくと。その南下した後を逃げなきゃならないという、そういう逃避行の特徴がありまして.後ろから終われるのであれば逃げやすいけれども、もうソ連軍は先に行ってるもんですから、その合間をくぐって果てなく南の方向に避難すると。だから当時 15 歳ですから、地図もなければ磁石もない。南方へということは朝の太陽がどっから出るかというそしてどこへ沈むか、それで東西南北を見取って、それだったら南はこの方向だと、あの山を目指して進もうと。ということでもう、道という道はもう全然通りませんでしたから。山越え湿地越え、山越え湿地越え、４０日間歩き通したわけです。

それで 1945 年の 9 月 20 日、吉林省敦化県、そこに大阪の開拓団だったと思いますが、一応その人たちも避難しておったけれども町には食べるものもないし、住むところもないし、何もないからまた引き上げてきて、元の開拓団に行って生活しておりました。そこへ中国人に案内をしてもらって、まあ中国人を信用してなかったから 300m ばあ先に立てて、ソ連軍の所へ案内して見ろと。まだ当時は私らあは銃を持っていましたから、「後ろから撃つぜよ。」という脅しをかけてその開拓団を案内してもろうた。それが 1945 年 9 月 20 日。この時初めて日本軍が負けたと、敗戦になったということを知りました。それまでは山越え湿地越え、山越え湿地越えでしたから誰から何も聞くことはないし、絶対負けるようなことはないという一心で避難を続けとった。そしてそこの開拓団に 12 人の我々の組が各 1 人ずつ配分されてそこで厄介になりました。そこではだいたい 12 月頃までかな、お世話になって、避難してきた人や元おった日本人と一緒に生活をしたんですが、初めてそこで米の飯を食べました。40 日間米の一粒も肉の一切れも食べることができませんで、そこで 12 月頃まで一緒に生活をして、主に私は 15 歳の少年でしたから、日に 2 回くらいはソ連の兵隊が巡視して来よりました。それでまあ、日本人の女の人の着物とか時計とかそんなものを漁って帰りよりましたがね。もちろん日本の婦人なんかはひどい目にさらされるものですから、私らはその開拓団でソ連軍が見えたらそれを知らせる、中国人の暴動の一団が現れるとそれを知らせると。それで日本の若い女子やご婦人方は頭は坊主にして、顔は鍋炭を塗って真っ黒くして、男やら女やら分からんようにしながら「ソ連軍が来た」という知らせを受けると、自分たちが逃げる場所、それを全部それぞれが構えてそこへ逃げて、帰るまではそこでじっとしていると、そんな状態の生活を続けてきた。

それから 1945 年の 12 月だったと思いますが、20 キロくらい離れた所に開拓団からソ連軍の通信班、これは後半ですが、 6 人だったか 7 人だったか駐屯しておりまして、そのソ連兵が開拓団に来て、私ともう一人伊野から来ていた森岡という二人を「ちょっと来てくれ」ということで連れていかれて、そこのソ連軍の世話をすると。で仕事は薪を割ったり水を汲んだり。通信兵ですから電線が壊れる、切られる、そういうときには一緒に行って直したり、或いは食料を運搬に一緒に行ったり、だいたいそんな生活で。私は 15 歳の時ですから、子ども扱いにされておりましたから別に制裁が加えられるとかそういうことはなかったし。ソ連の兵隊の食事は黒パンの食事でしたが、「そんなものはあんたらは口に合わんだろう」ということで、そこの中国人の部落の部落長に相談をして、 1 週間ごとに一軒一軒順番にですね回って、そこで朝晩食事は中国人が作った食事をいただくというそういう生活をしよりました。そこでまあ一つ話しておけば、日本軍の元兵器や銃とか機関銃とか、いろんなそういう武器を集めておった倉庫がありまして、「そこのおまんらあ一番好きな銃を一丁やるから取れ」ということで今日は弾薬をひと箱、いっぱいありましたからね、担いで、ひとつ鉄砲の打ち方を教えてやろうというふうなことで、本当まあソ連軍はですね、射撃は上手だったですね。もちろん私たちも義勇軍のときに銃剣をもって戦争の教練は受けたけれど実弾をぶっ放すということはなかったし、そういう実弾は無駄にせられんと、いうことで撃ったことはなかった。けんどソ連のそこに行ってからはもう天気が良かったら毎日行って、どっちが上手かやるかという、そういうことが繰り返されて、だいぶこう、銃の打ち方、どうしたら当たるかも教えてもらいました。そりゃあ楽しかったです。

とにかくね、ソ連の兵隊は実弾をしょっちゅう使って練習してるからそれは上手です。それから自分の銃は、銃と構えたらもうずっと手放さないで、一生自分の銃としてその銃の特徴をきちんとね覚えているから、照準通りに狙っても当たらんと、右へ或いは少し高くというような特徴がそれぞれあって、それを覚えてるもんだから、よく電線とか電話線を狙ってね「あれに当ててみるから見てみろ。」ということでよ

うやって当てよりましたね。
　それから、犬なんか、「あの犬の後ろ脚を撃つから見よってみろ」ということでやりましたからね。それであんたたちにやった銃はあんたたちの銃としてやね、その特徴をつかめと。そのためにはやね、どんどんどんどん撃って撃って撃ちまくってね、そしたらその銃の特徴が分かるから。照準通り撃ってもね、それは絶対当たらんと。だからその特徴をつかんだら百発百中当たるから、それを掴めということを習いましたがね。
　そういうことでソ連軍と一緒に生活したのはそれほど苦にもならなかったし、朝晩の水汲みとストーブの薪割りと、たまに食料運搬に一緒に行ったり、電話線が切られたのを直しに行ったりそんなことを一緒に生活をしました。なんせ子ども扱いですから。それから中国人も一般の日本人に対しては必ず暴動や略奪や、殴ったり蹴ったりいろいろ暴行を加えるんですが、私はそこも子どもですから、子どもには責任はないと。悪いのはね日本の戦争へ帝国主義の親分じゃと。そういうことでお前らには罪はないということで寛大にしてもらいましたから。
　それから 1946 年 4 月にソ連の兵隊は引き揚げました。それで一緒に半年ばかり生活しておりましたからお前たちモスクワへ連れて行くと言うから、モスクワでもどこでも連れて行けと。どうせみんな俺たちの友達は死んでしまったと。どこへでも行こうぜやと言って、そこを引き上げる時には一緒に出たんですけんど、大隊本部まで一緒に行きましたら、ソ連の大隊長が「お前何歳なら」と。「15 歳じゃ。」「15 歳いうたら子どもやか。ソ連の軍法に子どもを連れていく、そんな法律はない。だめだ。」とはねられまして、ほんで一緒におったソ連の兵隊たちが心配をして、「これからどうするぜよ。」ということでいろいろ心配をしてくれまして、ほんで新しい日本の軍服を、これを 2 着くらいやると。食料は一ヶ月やると言うて 、そこへちょうど市民解放、八路軍が入ってきた。ほんでソ連軍は引き上げる、八路軍が入ってくる、そういう時にソ連のそこの中隊長が「お前たちあの軍隊へ入れ。」と。銃も持っているからそのまま行けるやかと。ということで「今から紹介するからついて来い」ということで、八路軍の中隊長その所へ行って紹介を受けて「この子は日本人や」と。「我々と一緒にずっと生活をしてきたし、あんたたちも意思が通じるはずだから軍隊に入れろ。」ということで紹介されて、「叩いたり物を食わさざったりいじめたりするっちゅうことは絶対したらいかんぞ。」と中隊長に言いよりましたがね。そういうことでソ連軍から市民解放軍に渡っていくと、そういうことで。
　それからだいたい朝鮮戦争が終わったのが 53 年でしたかね？それまでは解放軍に身を置いておりました。その朝鮮戦争が終わって、もうこれから先はそれ以上大きな戦争はしばらくはないだろうと言ってましたことで解放軍を除隊して、そして日本に帰るか中国に残るかそれは自由ということを言ってましたが。ちょうどその時ですね、日本の共産党の徳田球一、これが密出国のかっこうで中国に渡っておりましたし、その徳田球一の配下に、人数は忘れましたが何人か密出国で、最初はどっか朝鮮におったんではないかと‥。それから中国へ渡って、そこで私たちもそこへ呼ばれて、そこで北京郊外の近くで当時呼んでたのは人民大学校という学校でしたが、帰ってきて日本共産党の新聞なんかを見ると北京機関という言い方をしておりました。ほんでそこは周囲は城壁に包まれて解放軍の軍隊が一個中隊ずっと昼夜警備を務めておりましたし、猫の子一匹外へも出さない、中へも入れないと、
で、そういう学校でしたね。
　それで、そこで約 5 年間勉強をしました。内容は社会科学、哲学、経済学、ソ連革命と中国革命の教訓、それから世界情勢史と言ってそんなものを、約 2500～2600 人はおったと思います。そういう学校を出て、1958 年の 8 月、最後の帰国船で天津から舞鶴に引き揚げてきました。そのときの最後の帰国船ですから、当然日本から密出国しておったそういう人たちも一緒の船で。それでよく考えたもんだと思いましたけれども、中国の領海を出るまでは密出国の人たちのことは何一つ言いませんでした。領海を出たら、「密出国の人はそちらへ集まれ。そうでない人はこちらへ」ということで分けられて。後で聞いたことですけんど、領海を出たらいやでも日本へ連れて帰らなければならない、その船は日本に行くより他にないと。そういうことらしい。それで、呼応して密出国でしちょったのは岡村虎彦という人がおりまして、この人は亡くなりましたけどね。それから密出国ではなくて中国の学校で一緒になったのは立木洋、戦前戦後長いことやりよりました。それから今は吾川郡の元吾川村の大崎というところに井上輝美という人がおります。これはご夫婦でまだ健在です。
　この人だけかな。あちこち私も探してみるけれども、もと義勇軍で参加した人たちがどこに行ったのか、会うことがないし、皆死んだのかとも思ったりもします。それでま、そういうことで帰国までの足取りですね。まあ、いろいろまとまっておりませんから、いろいろ分からないところがあると思いますが。まあ、今私が特にあちこちで話して回っておるのは安倍内閣があまりにもひどい暴走をするから、私の戦争体験は大したことはないと思っていたけれども、まあ私がこの目で見た戦争の実態、この耳に感じた戦争の実態を訴えて、一人でも多くの人が二度度戦争はしないようということを訴えて回っております。

渡部：順を追っていくつか質問をさせてください。国民学校を出られて、それからその義勇軍に行こうと思ったのはどういう・・？
村尾：これはですね、当時日本の戦局は日に日に負けると、負け戦になってきておったんです。だから私たちが渡満するにも朝鮮の環境は、救命胴衣を着けて行かなければもう行けないという、いつ敵艦に爆撃されて沈むかもわからんという状態で、もう日本は最後のあがきと言いますか、我々に対しては一億火の玉、撃ちてし止まずというスローガンだとか、満蒙は日本の生命線、あんたら若い者は南海の海の果てに散ろうと、満蒙の地に散ろうと。おんなじことや。ということで当時の校長、担任、全てが総力を挙げて当時の国策に総力を挙げて我々の卒業生「お前は海軍。」「お前は特攻隊。」「お前は満鉄。」「お前は義勇軍。」こういう割り振りでですね、もう強制的でしたから、嫌とは言えん、嫌とは言わさんとそういう関係に追い込められてた。何も言うことも、何もすることもできないという状態でした。それで義勇軍に入った。
渡部：同級生から一人ですか？
村尾：あの、元江川崎村ではね、私と森という人と、それから今は一緒になっておりますけど、当時津大村という、そこに今城とかね、何人かおりました。それから江川崎にも私より一つ先輩で長山しげるとか、田辺はかる、田辺はかるさんが私んとこの近くですから、まだ生きておられるようですからね。そういう人たちが送られたわけです。
渡部：その訓練所は全体でどのくらい集まって訓練所になっていたのですか？
村尾：内原の訓練所は有名な日輪兵舎といってまん丸い兵舎に宿舎になっていて、そこへ全部がこう、宿泊できるような。だからそこにはものすごい何千人とおりましたよ。それから渡満した勃利には 3000 人からおったんじゃないですかね。三個大隊ぐらいおりました。
渡部：訓練というか、そこでは教育というかどういうことをしていましたか？
村尾：内原の訓練所では主には開墾鍬を担いで農耕の訓練でした。それから中国に渡った勃利訓練所では「満蒙は日本の生命線、お前たちは片手に銃、片手には開墾鍬。」ということで。普通は開墾鍬を担いで農作業、それで月に何日間は直接関東軍の軍人が戦闘教練、軍事教練に来ておりました。ほんで銃の撃ち方とか銃の形はそこで習ったけれども、実弾は発砲するようなことはなかったと。だから、まあ結局中国の植民地化ソ連に対する備えと言いますかね、その一角として我々は駆り出されたものと。
渡部：実際はその原野を本当に開墾していくわけですか。
村尾：実際はね私たちが行ったところはね、中国人と直接関わりあうような所ではなかったです。勃利の駅からはかなり離れて山奥でしたし、狼が２０頭、３０頭毎晩のように群がって出てくる山でしたからね。主には木の根を掘り起こして畑にしていって、そこへまず最初は大豆を植えて、それからだんだん畑をならして他の物を植えると。水源はなかったです。そんな状態でしたね。
渡部：そこで住む家というのは？
村尾：家というのはね、内原は日輪で丸い兵舎でしたけど、あそこは普通の兵舎で一個小隊一個小隊。その宿泊できるそういう家で、ほんで下、オンドルと言いまして、薪を焚いて煙を送って暖を取ると、ま、そういう所でしたがね。何せ寒い時は零下 40 度と下がりますから、暖の取れない仲間たちは朝になったら足を二つこうやったらカチカチと凍ってしまって、凍傷にかかって切らなければならないそういう状態がずっと続いておりましたね。食事は何とかありました。
渡部：それで、開墾をしながらずっとしていたところにソ連が来たんですね。
村尾：そうです。それで私たちは一生懸命農作業をしていたら、ソ連軍が入る 1 週間くらい手前から、日本の無敵関東軍と言われた軍隊は、夜昼構わず南下して、軍用トラックでね、南下して行って。ほんで「どこへ行くんだ」と言ったら「南方戦線へ行くんだ」と。「後はお前たちに任す。」と。そういう格好でしたね。私は我々を置き去りにして逃げたと、一番先に逃げたと、そういう認識をしております。
渡部：義勇軍が入ったところには、上には大人の組織というか義勇軍の本部とかがあったんですね。
村尾：あったんです。
渡部：そこは軍人というわけではない？
村尾：主には軍人出身のね、人ですけどね。そうじゃない人もおりました。農事関係の幹部だとかね。ま、いろいろ幹部がおりましたけどね。それから保母さんやいうような人もおって、世話する人もおったし、病院もありましたし。
中村：その義勇軍の人はだいたい何歳から何歳ぐらいなんですか？
村尾：14 歳から 15、6、7 歳じゃなかったですかね、入るのはね。それから年のたった人はもうすでに兵隊に引っ張られて。もう義勇軍で下ごしらえをしたから、兵隊としてね全部召集されて
中村：だいたい同郷の人は一緒に近いところで暮らすですか？それともそれはもう全然関係なく？
村尾：義勇軍の中におった時はそれぞれの小隊中隊、班に分かれてね、生活をしておりましたけれども。逃避行に入ってからはね、もうバラバラでしたね。だから、どの人が死んでどの人が帰っておるか。私も帰ってたいちゃ探すけれども、見当たりません。だから、わたしのその戦争体験を話すことを勧められる

ことがあったけれども、大した体験ではないと、みんな死んでしまって、これは生きて帰ってきて申し訳ないと、そんな気持ちがはたらいておりました。
﨑山：訓練所から敦化ですかね、12 月に行きつくまでの間 4 か月のぐらいはもう何にも持たずに何にもなしで、ろくに食べるものもなくって逃避行をなさったって言ってらして・・・。
村尾：そうです。
﨑山：その時が一番苦しかった？
村尾：そうですね。私の目に焼き付いたのはね、戦争は絶対にいかんと思ったのは、どっから避難してきたか分らんけれども、勃利の駅から 10 キロくらい南へ下がったところで、若いお母さんと女の子 2 人、3 人で大きな声をたてると敵に分かるからほんと苦しい泣き声で泣いておりました。それは 3 日目になるとかいいましたが、下の 4 歳の女の子は足が痛くてもう歩けんと。そこでお母さんは 2 人を連れて逃げることは到底出来んと。そうしたらどうするかということで、下の子を殺すか、捨てるか、中国人に預けるか、そういうことで親子が泣いていた。だけど、殺すこともできないし、殺してくれと言って頼んでも殺してくれる人もおらんし、中国人に頼むというてもそういう手掛かりはないし。結局残っていた乾パンですかね、戦時中の食料、携帯食、これを 5、6 個与えて、お母さんが「美味しいものを買ってすぐ帰ってくるから待っていなさい。」ということで、捨てていきました。それを見ても私は何一つできないと、いうのがこれがもうね私の目から離れない。それからもう一つは先ほどソ連の空軍の機銃掃射を受けた時にキビ畑でお母さんは頭を撃たれて即死、背中にはまだ赤んぼがいて、それがわんわん泣いていた。これを見た時もね、何もできない。なんで戦争は殺さないかんろうかということが焼き付いております。それからもう一つ牡丹江の西側に横道河子という所に川があって、それは四万十川よりちょっと小さいかな、だけどそこの川はかなり流れが速かった。それで日本の兵隊たちもそこの川を渡って、そして鉄道を渡って国道を渡らないと南には行けないということが言われておりました。私たちは 15 歳の裸一貫ですから、どうするかということで、まあ、昼間は渡れんと、夜渡ろうと。かなり流れが激しい。そしたら流れに逆らうと溺れてしまうから流れに沿って 200m 先を目指して渡ろうと。そういうことで渡ったが、あのお母さん方や小さい子どもたちは、あそこで何百人流されて死んだか。その、流されるときの親子の叫び声がね、とても頭から離れません。
　それからもう一つ私が身に感じたのは、「今日の命を明日にどうつなげるか」と。これは本当に 40 日間苦しみました。何も食うものがない。人間は食わざったら死にますよね。何かは食わんといかん。それでちょうど夏の時期でしたから、中国人や朝鮮の人、日本人の作った作物を朝暗いうちに盗みに行って、それを食べると。ある時にはたばこの葉っぱとも分からず、たばこの葉っぱがあって、これがきれいに育ってた。これが野菜と思ってそれを食べたこともあった。それから動物が食べよる植物、木の根、葉っぱ、それは食べても毒にはならんということを参考にして何でも食べました。それが 40 日間続いたし、それからもう一つ、睡眠です。40 日間屋根の下で寝たことはありませんから。湿地の横で寝るか、山の陰で寝るか、川のふちで寝るかということで何とか睡眠をとって、そしてまあ、生きてきたわけですけんど。雨に打たれたら体がびしょ濡れと、着替えの一つも持ってない。自然の乾燥を待って、それで過ごしたと。それで先ほども言ったようにソ連の軍隊が先に南下しているから、その後を逃げるということは並大抵ではないんです。どこで会うやら分からん。我々は絶対戦争はせんと、たった 10 人くらいのあれでぶっぱなしてもやね、何の価値もないから。もし前に現れたら我々は遠くへ回って逃げると。そういう戦法。そういうことで 9 月に入ると中国の東北はかなり寒くなります。だから野宿をしようと思うても寝れないんです。だから夏場の時期が過ぎて、秋、冬に向かうその時期には、畑にもどこにも何一つ食うものも盗むものもありません。そういうことでほんとあの 40 日というのは私ら生死をさまよう 40 日でした。だから今でも食べ物に対してはどんなものでも無駄にはようしませんし、皆にもそれを言ってありますけんど。そういうことで食事、睡眠、これは大変身にしみました。こういう事を二度と若い青年や子どもたちにさしてはならないと、これが私の信念です。
渡部：逃避行の間中国人の部落を通ることもあったのですか？
村尾：あったんです。
渡部：で、銃も持ってるわけですよね。向こうには日本人って分かるわけですよね。
村尾：だからまあね、スイカがね、よう実ってね、スイカ畑があった。そこでこれをちっとごちそうになろうかということで、スイカを腹いっぱい食べたと。中国人が現れてほんとにもう命からがら逃げましたがね。義勇隊の、当時は中国人と直接交わったり関係したりということはね、ま、いうたら初年兵みたいなもんですから、そんなあれはなかったですからね。先輩の人らはよう中国人と何かシャツやら服やらを持ってって、焼酎と代えてきたり。やってくれなきゃ無くても取って来るということをやりよりましたけど。私はまだ力もなかったからね、そういう中国人との関わりにはね、恨みをかうことはどうすることも・・・。まあ、もちろん日本人としてね、中国の植民地化、それより中国におったものですから、まあ恨みはあるでしょうけど。お前は子どもだからということで寛大に見てもらったわけです。

中村：訓練所から 8 月 11 日撤退することにした時、その時は何人で行動されてたんですか？
村尾：もう中隊、大隊・・・
中村：その単位で？
村尾：急に出ましたから。勃利の駅まではそれで行ったんです。
中村：駅で独自の行動を取ろうと？
村尾：そう。もうこういう大部隊と行ったらね、こりゃ中国人にもソ連の軍隊にも・・・。特に複雑でしてね、満軍（満洲軍）という日本が組織した満軍、鮮軍（朝鮮軍)、日本軍、ま、いろいろそれがまあ避難しよるわけですからね。前へ現れるのは全て敵だから。前へ現れたら「これはやばいぞ。」と思ったら、絶対にそれへ向かっていくんではなくて遠回りして南へ下がると、そういうことをしてこの地図でもこれ、東満総省から牡丹江を経て吉林省まで、距離にして測ることもできませんけれども、山越え湿地越えですから。だからその間の食事、睡眠とこれはほんとに毎日毎日がですね、今日の命を明日にどうつなぐかということは苦労しました。
﨑山：逃げる時は一銭も持ってらっしゃらなかったんですか？
村尾：お金も持ってない。お金持つというても使いませんからね。買うものも何も、そんなところへ出て行けるわけでもないし。
﨑山：お金もないし何もない。本当に身一つなんですね。
村尾：何にもない。身一つでただ 15 歳という、これはまあ、これだけは持とうと。いざというときには我々はね、自分で自殺をせないかんかもしれんと。
﨑山：銃はそのソ連軍に行った時に・・？
村尾：いやいや八路軍・・いや、八路軍じゃなくて、義勇軍の時からね持っておりましたから。片手に銃ということで・・。
﨑山：どこで手放しました？
村尾：それは開拓団で埋めました。開拓団の人がね、それは持っておっても仕様がないと。それは畑に埋めていこうと。で、畑に埋めました。
中村：その時はまだ日本が戦争に負けたということはご存じなかったと？
村尾：だから、開拓団にいた時初めて聞いた。 9 月の 20 日。
中村：その、それまではもう南に逃げなきゃいけないということで 40 日間はもうどういう状況かははっきり分からないまま？
村尾：分からないし、まあ負けるとは考えてなかったし。
中村：そういう状況でも負けてないという・・。
渡部：じゃ、敗戦を知った時はどう・・・？
村尾：まあ、開拓団のねおばあさんなんかがね詳しく話をしてくれてそれで納得したんですけれど、最初はね、「あんたらもごまかされちゃあせんか。」と。日本が負けるはずがないと考えてましたけどね。現実にソ連の兵隊が日に 2 回 3 回と来ると、中国人が暴動を起こすと。何も手助けは出来んと。で、「ああこれは日本が負けたんだな」と。
渡部：そこまで 12 人は無事・・・？
村尾：そこまでは無事だったです。で、そこの部落でソ連軍に 2 人だけ引っ張られて。後は帰国しソ連軍と半年生活をしたと。そのソ連軍が帰るときに「お前たち、はもう行くとことがないから、食糧は一か月やるから八路軍に入れ。」ということで八路軍に身を置いたわけです。
中村：その 2 人選ばれたのは若い子どもの方を選んだということですか？
村尾：そうそう、同級でしたからね。それで一個班ですからそう何人もいらんわけです。それで 2 人やったらえいと。
中村：なかなか、でもその、子どもとは言え銃を渡して撃ちかたを教えてというのは・・。そこは信頼関係というか、ソ連側としては・・・？
村尾：まあ子どもだからというあれがあったんでしょうねえ。まあ日本の兵隊が現れたら一緒に戦うんだろう・・？というようなことは言いよりましたけどね。そんなものは現れなかったけれども。
﨑山：村尾さん少年時代可愛らしかったと思うから可愛がられたんじゃないです？今のお顔見たら何か少年時代すごく可愛らしかったと思う。
村尾：それで写真がね、解放軍の時は写真もあったし、いろいろあったけれども、それは「全部置いて帰れ」と言われて証拠を持ってないですが、あの一学生時代の同級生が一緒に写った写真はどっかにあったと思って探したけれども、どこに置いちょるか・・。もうちょっと探したら出てくると思いますけんどね。
渡部：ソ連の通信の班というのは、ソ連兵は若いんですか？

村尾：いや、若いのは２人くらいやったなあ。後は 30 代頃が２人。中には、どうか分からんけど、犯罪を犯した人もここにはおるとか何とか言うて、「おまんらあんまりやけを言いよったら殺されるぞ。」と脅かされたこともあるけんど。
渡部：でもその通信の隊では可愛がられてここでは苦労という苦労はなかったということ？
村尾：それほどね、いじめられることもなかったし。だから「食事も合わんだろうから、中国人の部落長に話をするから、中国の食事をねお前ら口に合うやろうから」言うてずっと朝晩中国人の了解を得て食べらしてもらいよりました。
中村：そこにはもう村尾さんと森岡さんだけ？
村尾：そうですね。
﨑山：言葉、どうしました？
村尾：ソ連軍？　ソ連とは最初はね、手まね足まねでね、やりよりましたが、ま、半年もおるとね、そこそこ覚えたりもしましたからね。それから解放軍に入ってからの言葉もね。軍隊用語は分からざったです。それは苦労しました。けど、ま、日常会話はね、そこそこ中国語も分かってましたから。
渡部：それはもう内地の訓練所で中国語の基礎とか習うんですか？
村尾：それは本当、まあ、１回か２回、習うか何か、そんなことでとてもじゃないが習得できるようなそんな・・・。
﨑山：それはすぐにしゃべれば身につくでしょうけど、しゃべらないで習っただけだったならね、しゃべる機会がなかったでしょ？だからそりゃ役に立ちませんよねえ。
村尾：ほいで、解放軍に入ってからはもうあの日本語を話してもね、誰も取りおうてくれないから、いやでも中国語を話さないかんし、いやでも覚えないかんし。そういう環境におかれるとね、案外ね、覚えやすいです。正式かどうかは分からんけど。
﨑山：実地が一番ですよね。その解放軍には２人入ったんですか？一緒に？
村尾：そうです。２人で。
渡部：八路軍には日本人が、そういう形で入っている人たちがそれなりに？
村尾：いなかったですね。あとで日本人の看護婦さんとかお医者さんとかそんなのはだいぶおったように聞きましたけどね。中国人の人民解放軍と一緒に銃をそろえて戦うという、そういう人はおりません。特に私たちが入った時は、遊撃戦、吉林省の山奥で遊撃戦の戦争が最初でした。それから１年ぐらいしてからは運動戦と言ってましたからね。この運動戦というのは夜の戦争です。一つの部落に対して、こっちから攻めて、向こうが大勢出てきたらさっと引いて、裏へ回って裏から攻めると。まさにこれはね、すごいです。運動というかね。私も最初は疲れてよう歩かんこともあったけれど。その点中国人はえらいですね。もう子どもの時から乗り物にあまり乗ったことがないと。歩く一方ですから。走る一方ですから。そりゃ逃げるにしても速いし、攻めるにしても速い。私も半年ぐらいしてからは負けんようになりましたけどね。「お前は銃を撃つのはうまいけんど、よう歩かんじゃないか、よう走らんじゃないか」いうて言われて。夜間の戦闘の時には副班長が気を使ってくれて「お前、絶対死んだらいかんぜよ。」と。だから両方とも中国人ですから、我々はこれへ（左腕）白いタオルを巻いて夜戦争に行くときはこれが目印で。これを外したら味方に殺されても責任は負えないと。我々が見てもこれは中国人、これは敵かな、これは味方かなというような分からない状態ですから。同じ言葉を使ってね、だいたい同じような服装をしてきてるからね。昼間ならね、服装で分かるけれども夜は分からない。それほど大激戦というような、激戦というのはあまりしなかったですね。遊撃戦争なんかでも、勝てばやる、負ければ逃げる。運動戦でも勝てばとことん。勝つ条件があればとことんやるけれどもね。これはやばいと思ったらさっと引く。
﨑山：あっという間に、ほんと共産軍はいなくなりましたからね。そういうのは潔いんでしょうかねえ。
村尾：ほんで、八路軍の古い兵は、副班長でしたが、私によく話をしてくれて、「日本の軍隊ほど相手にしよい軍隊はない」と。日本の軍隊はね、ここへ来たらなんぼ来てもね。これは勝ち目はないと皆死によると、そういう地理的条件の所を選んでおるわけやね。それにも関わらず、日本の指揮者は「進めー、突撃ー、進めー、突撃ー」。引くことを全然知らんと。だからこれほどね、相手にしやすい軍隊はおりませんと言うてね。私はその反対に子どもながらに軍国主義の思想がありましたから、敵の兵力をおびき寄せる任務を負うて一個班、出て行ったんです。で、私は中国語がそのころ分からんから、一個班でも一個大隊と戦うのかと、それでもえいやと、戦うわと言うて行ったんですが、副班長が必死に私の横におって、引っ張って「引けー、引けー、引けー。」と。「引けって、あんた、そんな卑怯なことを・・。」と。「なんであんた引かないかんか」と。日本の兵隊は１人になろうが何時やろうが引かんぞと、いうことでたいちゃ笑われたことがあります。「お前はそれほど死にたいか」と。だから、もう「今におもしろいことが起こるからまあ引け」と。我々は敵をおびき寄せる任務が引くと向こうはえい気になって入ってくる、そうすると両側の山からガンガンガンガン撃って。それでそこの半分くらいは捕虜にする。捕虜にしてもあまり殺さないんです、一緒に戦うならそのまま銃を与えて一緒に戦うと。土地革命いうて貧農に土地をただで与えた

から、毛沢東の戦略で。俺は帰って自分の畑で百姓したいという人は全部帰しよりましたからね。
崎山：こういう事、聞いたことあるけど、こんなに直にお聞きするのは初めて。
渡部：八路軍に入った軍事訓練とか規律教育とかそういうのは受けるんですか？
村尾：日本人は受けます。軍事教練も。一回大隊長が検閲に来て、それぞれの中隊を検閲するわけですよ。ちょうど私と森岡が日本人で、中国語が分からん。「右向け右！」言うたって左向いたり、「回れ右！」言うたって横向いたり。大隊長が上から、壇上から見よって、「あの２人は何しゆうがな。」ひとつもまともに動けんがよ。そしたら中隊長が「実はあの２人は日本人や」と。「けんど我々と一緒に銃をもって肩を並べて戦っておるんだ」と。「まだ中国語はね習得できてないから至らんところもあるけど一緒にがんばっておる」と。こう報告した。そしたら大隊長が「そんな者、無理にそこへ入れんでもいいからここへ連れてこい」と。横へ立たらかして「一緒に見よれ」と。ま、そんなことがありましたね。
渡部：八路軍いうたらやっぱりみんなあれですか、軍服とか何とか・・。
村尾：まあね、みんな真面目。一式の軍服いうものはね、ほとんどなかったですね。私物。私物で、あれは全面戦争に移ったころかなあ。48 年頃だったろうか、その時は制服としてね出てきたけれども、それもざっとした服で、２回３回山岳戦でも行けば脛は坊主になるし、ひじはのうなってしまうと、質素なものでしたがね。だから私たちはソ連軍に銃をもらって、その銃をもってそのまま参加したんです。銃を持たない解放軍の人はいっぱいおりました。それこそそれは 15・6 歳から若い青年でしたね。腰に手りゅう弾を３つばあぶら下げて「俺はこれでやるんだ」と、ま、そういう格好でしたからね。銃がない兵隊に対しては、戦争に出る前に中隊長は必ず「アメリカの新式の銃を受領に行く」と。だから「銃を持っていないお前たちは好きな銃を受領してこい」と。「それを受領したのはね、お前のもんだ」と。だから敵の銃をかっぱらってくるわけです。それで蒋介石という輸送大隊長がアメリカの新製兵器を輸送してきゆうから、それを我々は受領するというそういうことでトラックを囲んで、そこへ積んでいる武器とか兵隊を捕虜にして武器を手に入れる。それまでは八路軍の中でも日本の古い銃、三八銃とか九九機関銃とか。そんなんやってるとだんだんアメリカ式のね、新しい銃に変わってきて、最後にはソ連兵が持っちょった 73 連発の自動小銃、これを持つようになって、それで全面戦争に打って出たわけですよね。だから結局敵の武器を捕獲して、それで軍隊を増やして、それでこの全面戦争が出来る平常軍（ママ）に成長していったと。だから、ま、昔からよく言われよったけんど、孫子の兵法か何かで戦闘は「敵を知り己を知れば百戦百勝あやまりなし」として。弱いと思うたら逃げる、引くわけです。勝てると思うたら出て行く。この柔軟性がねあるわけでね。だからまあ、そう簡単に人民解放軍は死にません、無理せんから。ま、遊撃戦争なんかも、ほんともう、日本の卓球やるよりまだおもしろいばあの戦争しよったですけんね。無理せん、もう全然。ほんで無理しないでもね、我々は勝つ方法があると。無理な時は引けと。有利な時は出て行けと。そして人に傷をつけずにとにかく向こうの武器をね取って兵隊をいながら帰して。一緒にやるもんはいっしょにやろうと。そういうことでしたからね。
渡部：やっぱり、その兵士たちは革命というか中国の解放とかいう感じの会話が当たり前にあるんですか？
村尾：やっぱりね、さっき規律の問題があったけれども、八路軍にもそういう規律のがありました
ね。歌もよう歌わされたけんど。人民のもの百姓のものは針一本糸一本盗んではならんと。
借りたものは返せ、壊したものは弁償ぜよと。これが規則でしたがね。これは中国の一般の人たちは、軍隊という軍隊はろくな軍隊じゃないと、かなり侵略戦争を受けてきちょった。日本各国から。ロシアの軍か、日本の軍か、イギリス、アメリカ、ドイツ、全ての軍隊はね、ろくなもんじゃないという軍隊に対するいやな風習、それに対して毛沢東がこの軍隊だけは違うんだということを身をもってやってね、百姓に知らせた。で、私たちが新しい部落を解放して入ったら、必ず宿舎をね、泊るところを交渉してこいと、どこでもかまんと。無ければ馬小屋でもかまん、ロバ小屋でもかまん。とにかくそこの百姓が、と結び付けた。そういう政策で。「朝起きたら水を汲んでやりなさい。そして暇なときは薪を割ってやりなさい。手伝いをしなさい。決してののしってはいかん」と。で、それをね、毎日戦評という形かね、１時間、「今日はどうであったか、良かったこと、悪かったこと。百姓に対してどうであったか」と。、その反省会みたいなものをずっともっておりましたからね。なかなかそういう面では上から押し付けた厳しい規律というよりもみんなで話し合ってね、解放軍として任務を果たせれるかと。他の国たちと違う。そのことを認めてもらわないかんと。そういうことは厳しかったですね。毛沢東も最後は変な格好に行ってしまったけんど・・・。

（後略、戦後の中国での生活に関する証言の一部はテープ起こしを省略した）

戦禍に散った命を忘れないで伝えていこう
～会えなかった従姉弟たちを葛根廟事件命日会に訪ねて～

岡田とし

はじめに

高知県朝倉村（現高知市）で、1939 年（昭和 14）の春に一組の若い夫婦が両家に祝福され結婚式を挙げ、そして大陸に夢を抱き中国満州に渡りました。3 人の子宝にも恵まれ仲睦まじい姿を手紙やハガキ、写真で実家に数多く送って来ておりました。それから数年の先に夫（義伯父）も子供も失い 27 才でたった一人になった未亡人は私の伯母で、亡くなった 3 人の子供たちは私の会うことのなかった従兄姉たちです。

満州国関連地図

2021 年に、これらを含む古い写真と資料を龍馬の生まれたまち記念館の古写真展に提供したのをきっかけに、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会の崎山ひろみさんに出会いました。それから伯母の家族が亡くなった 1945 年（昭和 20）8 月 14 日の葛根廟事件を知り、お話を伺ったり本を読んだりして自分なりにこの事件を調べました。そして 2022 年 8 月 14 日、コロナの為に東京都目黒の五百羅漢寺で 3 年ぶりに開かれた葛根廟事件の「命日会」に初めて行くことが出来ました。

生まれた時期や場所が違っただけでこれほど運命が違いものでしょうか。幼子の命を奪われ、また妻や幼子を残したまま終戦の前日に死んで行った義伯父の無念はいかばかりであったかと思うと涙が何度でもこぼれます。同じ時期に、この家族だけではなく何十万の人々、家族が非業の死を遂げ、生き延びたとしても、地獄であったことは忘れてはならない事実で、後世に伝えていかなければなりません。以下に記すのは、戦争のため破壊された一家の物語です。

伯母・澄子（旧姓：伊野部澄子）は戦前良家の子女として育ち、多くの良縁がある中、伯父・小谷栄一とお見合いで出会いました。外国語大学を出てすらりと男前の未来ある満州興安の公務員（満語の通訳と聞いている）の伯父と、おっとりとお嬢様の澄子は、互いに一目ぼれだったとのこと。2 人はめでたく夫婦となって満州に渡り、王爺廟（おうやびょう）代用官舎で新婚生活を始めました。私の祖父母になる澄子の両親も 40 歳手前で、満州に若い娘を嫁に出すことにその時は何の抵抗もありませんでした。それにあの頃は一旗揚げようと、親戚も満州に向かっていたとのことです。澄子の家族の構成、生没年は以下のようになります。

小谷	栄一	大正 2 年 2 月 23 日生	昭和 20 年 8 月 14 日 **葛根廟**にて死亡 32 才	
妻	澄子	大正 8 年 6 月 4 日生	平成 27 年 11 月 24 亡	享年 94 才
長男	征一郎	昭和 14 年 12 月 10 日生	昭和 21 年 11 月 16 日亡	享年 7 才
長女	尚子（ひさこ）	昭和 16 年 12 月 7 日生	昭和 23 年 4 月 9 日亡	享年 7 才
次男	卓也	昭和 19 年 8 月 20 日生	昭和 20 年 9 月 30 日亡（満州国龍江省垣途（たんと）にて死亡）	享年 1 才

以下、澄子の実家である伊野部家に伝わった資料群（伊野部家資料）の中から、家族が住む官舎があった満州国興安南省の王爺廟と興安街から送られてきた手紙のいくつかを紹介

しながら、家族の暮らしと生涯を追ってみたいと思います。家族に関係した当時の関係資料も写真でできるだけご紹介します。

（凡例）
一、漢字の旧字は、一部の固有名詞を除き、現行の字体とした。原文の字下げ、日付・宛名の配置などは、可能な限り反映した。原文の体裁を尊重しつつ、振り仮名等、文字の大きさについては、適宜校正した。
一、読みやすさを考慮し、適宜、句読点を加えた。判読不能の文字は■で表した。
一、筆者による送り仮名は（）で記し、注は〔〕を用いて表記した。

１、幸せな時代～長女・尚子（ひさこ）の誕生～

【資料１】栄一から朝倉の妻の両親（平男・ゆき）への手紙

（昭和 16 年 12 月 13 日、便箋３枚、封筒あり）

謹啓御返電被下厚く御礼申述ます。
時恰も歴史的英米宣戦布告丸一日前に当りますので、生日も思ひ出深きものと成ります。
尚子と命名致しました。
八紘一宇の聖戦にあやかり尚武を意味するのです。
その後、母子共に元気この上無し万事好調子であります。
先ず心から御安心下さい。
扨（さて）、予定日も二旬目にならんとしましたので、澄子も少々心配になり無茶働をしたら、早く生るだろう等言って、生まれる前の日も元気で働いて居ましたが六日午前六時頃、いよいよ予震の陣痛が始まり、征坊の時と同様風呂に入り、頭髪を洗ったりして、出て来た所床に附し暇も無く陣痛を訴へたと思うと

赤ん坊が踊り出て来ました。
予想外の軽産にて、無論、産婆も間に合はず、僕が受け止めた様な次第にて、私自身は濡れた儘の赤ん坊を掌中に入れた時には、全く神の授物と言った様な気持で、少しも慌てず、産婆を待ちました。
経過はその後上々の上、澄子は寝てゐるのが怠屈だと言って、床の上に四日目から座ったりしました。
赤ん坊も元気で、女の子故声も優しく、すやすや寝て居ます。
生まれたときは七日午前十一時、体重七六〇匁、身長四八糎です。
顔は鼻から下部が澄子に似て居ますが、上部は僕に似て居るとも断じ難く、征坊㋮より少々、ヘゴです。
女故に征坊の時よりとても楽だと申して居ます。

下が出来て見ると、赤ん坊だった征坊がお兄ちゃんらしくなり、扱い良くなりましたと同時馬鹿に嬉しいらしく、子供■ら、アーチャンアーチャン（赤ん坊の愛呼）と言って、何だか有頂天になって、チョケて居ます。
澄子の身体の世話と夜中の赤ん坊、征坊の世話は僕が一手に引受けて居ますので、疲れ、報告も遅くなりました。
悪しからず御了承下さい。
御両親様も五丁目の方の御世話で嘸かし御多忙でせう。

約束のバター張智婦人の世話にて、入手の運と成りました。近々の中に御送り致します故、胃病御加療の好薬となされ度く、全快の早からんと祈って居ります。
実は友人が新京に行きますので、買って来てもらう積りで居ました。

戦争も米英既に我が敵に非ず、皇軍の活動も痛快至極。皆手を挙げて快哉と叫ばざるを得ず、寔に御同慶に堪へません。遅きに馳せ乍ら情況を御報告申上ます。　　不一

十三日　　栄一拝

御両親様
追信
　~~乳~~乳は征坊の時程でも有りませんが充分出ます故
　　赤ん坊も肥って育つでせう

同じ時期に娘澄子からも出産の様子を記した手紙が高知の両親に届いています。そこにはお父ちゃまが、俺に似て美人になると悦に入っていると書かれています。そして栄一さんが八紘一宇の縁起を担いで尚子と付けてくれた。きっと名前の通り幸多い子になるでしょうと書かれています。2 人の仲睦しく、幸せにあふれた様子が綴られていました。子供の名前にも戦争が色濃く反映し神の授物と喜んだ父、名前に幸多くと願いを込めたのも皮肉としか思えません。
長男は実家のある高知県朝倉村で出産しました。高知で生まれた長男と嫁を待ちわびる思いの手紙も残されています。母親（ゆき）は、生まれたばかりの初孫を興安まで連れて行った時に、こんなにも遠くに娘を嫁にやったことを少し後悔したようでした。しかしその時はまだ、後の悲劇を知る由もありませんでした。長男・征一郎は、それは元気な男の子で、実家へ連れて帰った時はあまりの腕白ぶりに娘 2 人しか知らない両親が悲鳴を上げたそうです。その元気な腕白な満州ならではの様子も手紙で送られてきました。

【資料２】澄子から母（ゆき）への手紙（便箋３枚、封筒なし）

この頃はマーチョ〔馬車〕に乗って「代用官舎」とすまして言っています。
そのまま来てくれてホントにどうしませう。
でも元気一パイだから何よりです。今年夏は去年の失敗をしない様にと思っています。
ねる時はチャンと手をついて「父ちゃま（おやすみ）チャイ」と、おれいし　神仏もおがんでねます。中々に茶目で面白い子で、何時も二人で見るのは惜しい。高知へ帰ったら皆が大騒ぎするだろうと話し合っているのです。
私も毎日忙しいですが、赤ちゃんがとても楽で助かります。夜は十一時間位寝ます。昼は四時間毎にお乳をやるだけです。時々抱いて外に出ると、かうかうを買ってもすぐ小さいお兄ちゃんがつぶしてしまいます。

■ちゃんの子供の死んだ話を聞いて怖しくなり、一日一回外に連れ出してやりました。そして~~幼~~乳児体操を婦人之会によりやってゐますが、とても元気で、目を覚ましますと足をどんどんふみ　何時も　二枚のカケ~~団~~ぶとんをはひでしまひ、足をその上に乗せて遊んでゐて風邪引きそうでなりません。色が白いので楽しみです。
フヰルムを送ります。この間は　キレイな写真　有難う。■■■なつかしく、美く咲いた桜見て帰りたくなってしまいました。征坊のボーシはお父ちゃまの大連のおみやげ、洋服は■皆私の編んだのでした。

大きなお父ちゃまのクツが大好きで、よくはいて　引きずり廻て出てゆきました。~~ウマレ~~■〝もくば〟は大連

からのお土産でした。
征坊はどうしてこんなかと心配でなりません。それは何でもマネしてその模倣力の強いのには驚きます。マーチョのムチが大好きでマーチョが来る度に喜んで行ってニーヤ（馬車夫）のを取上げマーチョに乗ってマーフー（馬車夫）とそっくりに、「チャァーチャァー　イイイイ　オー」とムチをふり回廻してやってゐます。馬や牛が少しも怖くなくこの間も大きな牛の頭を棒でなぐりつけて私のキモを冷やしました。姿が見えないと思ったら、馬車を追って遠くまで行ってゐます。近所の方も皆「征坊のマーチョ好き」を知ってゐて大評判です。無ちやで向う見ずで■■■危いです。

これは昭和 17 年（1942）ごろの手紙です。満州での生活ぶりが分かるようです。広い満州で幼い命を懸命に生きていたと思います。もし生きていたら満州と日本の架け橋になっていたかもしれません。

【資料３】澄子から母（ゆき）への手紙（昭和 19 年 8 月 8 日、便箋３枚、封筒あり）

八月五日、今日は予定日ですがまだ生れません。
先便の様に美代子さんところへ来てゐた家政婦をやっと雇って来てもらひ安心してゐます。お父ちゃんは、アルシャンに出張してゐます。■日帰ります。
美代子さんは三週間目でだったので、とても気の毒でなりません。私は全くゆめにも来てもらへるなど、思ってゐませんでしたので、初めは狐(キツネ)につままれた様な気持ちでしたが、本当に安心しました。とても珍しい位よく働く小母さんで大助りしてゐます。一日も早く生まれてくれればよろしいですけど…
子供達も今年の暑さにもかかはらず割合大元気で征坊など、真っ黒にやけてゐます。

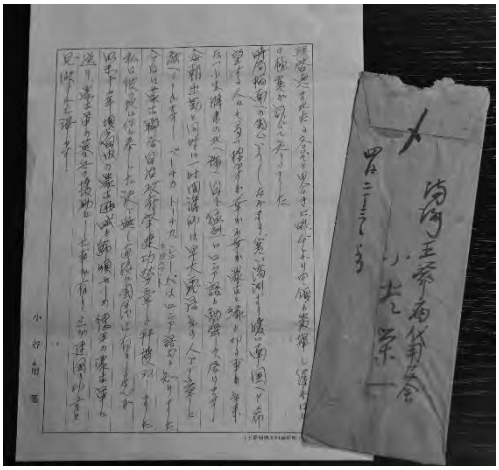
あっちこっちで、日本人の子供が死んで、大い時には一日に四五人も死にます。今年の暑さの故でせう。大抵の子供がお腹をこわしたり、百日咳などをしてゐます。
さて満州にも敵機はやって来ました。細川の小母ちゃんもどんなにか忙しい事でせう。
お父ちゃんも高等官の試験にパスすれば、八月十五日から三カ月間、新京の大同学院に入校せねばなりません。もう発表があってゐる筈ですけれど、　■■だからわかりません。
どうかパスしてゐる様にと思ってゐます。家政婦さんは新京は一日三円だそうですが、当地は四円です。早く生まれんとお金が■るです
がお金には代へられんですから、私は運がよかっ

たと感謝してゐます。
こうしている間も熱い事熱い事死にそうです。
男なら知己(トモキ)、牧(マキ)子とつけると言ってゐます。
では　又　三十日に出した　二度の小包まだつきません。子供達が待ち兼ねてゐます。

八月五日　　すみこ
お母ちゃんへ
昨日七日　栄一さんもとうとう合格発表がありました。有難い事です。中々一度でパスす

る人はないのに、よつぽど運が良かったと思います。二十日から三ケ月新京の大同学院に入校します。

八月八日　まだ生まれません。待ち兼ねてゐます。
さて昨日ハ小包着きました。征坊はゾーリを大よろこびで早速外に飛び出しました。手カゴは運動会にお弁当を入れて行くと張切ってゐます。


小谷栄一の手紙（資料 11―資料集）

次男・卓也が生まれる直前の手紙です。待ちに待った次男は 19 年 8 月 20 日に生まれ、卓也と名付けられました。夫・栄一の高等官の合格、無事に子供が育っている自分を「運が本当に良かったと感謝しています」と言った 1 年後、卓也は龍江省垣途の地に一人眠ることとなります。

その後の栄一の手紙には、満州国高等試験合格や合自治政府肇健労賞を拝受した喜びや、ロシア語を習っていること、蒙古匪賊の戦法を聞きながら支那料理で酒杯を交わしている様子などが綴られています。教育にこれからの自分の力を注ぎたいと希望に満ちた 3 人の子供の良き父親としての姿も垣間見えます。また、配給のバターは一人 1 個しか買えないので、外套を換えて 2 回並んで買ったと書かれたユーモアあふれる内容もありました。仲良くなったモンゴル人から遊牧民がジンギスカン料理をするためのナイフと象牙の箸のセットを貰ったことも書かれていました。このセットは朝倉の実家に送って来て蔵にありましたが、澄子が殺生をするような道具は見たくないと処分してしまいました。綺麗な色の房の着いた異国情緒あふれる美しい物でしたので残念に思います。秋林（チュウリンという毛皮の店）で高級な狐の襟巻を、大枚をはたいて買ってもらったことなど、幸せで微笑ましい手紙や絵葉書も実家に送られて来ました。一方で、便せんの「満州帝国政府」と紙上に印字された箇所がいつのころか切り取られ、「ミシンを買っても重くて持って逃げられない」との文面もあり、だんだんと戦況が厳しくなった様子が分かります。

２、妹・光枝満州に渡る

終戦 4 カ月前の 1945 年（昭和 20）4 月、大阪の軍需工場で働いていた澄子の妹（光枝・後の筆者の母）が空襲に遭うのではと両親が心配し、また 3 人の子育ても大変であろうと、満州の興安に職を構えて姉（澄子）の所に逃がすことにしました。運命の悪戯か、ご先祖様の助けか…ソ連参戦、葛根廟事件、そして終戦が目の前に迫っている時でした。

1945 年 8 月 9 日にソ連の参戦を知った栄一は、職場からボーイさんに 1 枚のメモを光枝の職場へ届けました。紙には「今すぐに家を出よ。自分は職場の片付けをすませ、すぐに後を追うから」と書いてあったそうです。当時医学院に勤務していた栄一は患者移動や病院の後始末に残ったようです。ただならぬ気配を察し、直ぐに乳飲み子（卓也）を負ぶい、長男（征一郎）の手を澄子が、長女（尚子）の手を光枝が引きました。風呂敷包みに身の周りのちょっとした品を包み、虫の知らせか、お守りのつもりだったのか澄子は夫（栄一）の写真を胸に入れ家を出たそうです。しかし、どんなに待ってもそれっきり、夫と二度と会うことはありませんでした。

３、葛根廟事件

赤星月人「葛根廟事件邦人遭難の図」

（天恩山　五百羅漢寺所蔵、画像は同寺提供）

8 月 14 日の朝、栄一ら一行は興安から徒歩でラマ教の寺院・葛根廟を徒歩で目指したそうです。11 時 40 分に日ソ不可侵の中立条約を破って突然現れたソ連軍は、無常にも無辜の人々を銃撃し戦車でひき殺したのです。1100 人ほどの隊列は 9 割が女子供、年寄り。細い道を 2 キロくらいの列になり、先頭かしんがりかを数少ない男性が守っていたとのことですので挟み撃ちにされたら、アッという間だったと思います。

32 歳で突然命を絶たれる瞬間、栄一にどんな思いがよぎったのでしょう。おそらく妻と 3 人の子供の無事を祈ったこととは思います。もしかしたら故郷の親兄弟のことも頭をかすめたのかも知れません。銃撃されたのか、戦車でひき殺されたのかどんな最後だったかは分かりません。

この事件は千人以上の犠牲者を出し、戦車 14 両、トラック 20 台で生きている人間をそのままキャタピラーで引き殺し、国連条約で禁止されているマンドリンという何百発も銃撃できる武器で確実に全員が死ぬまで発射したそうです。あたりは血の海、ちぎれた足や手胴体、色んな荷持つが散乱して凄惨極まりない地獄絵図であったそうです。しばらくは戦車が人をひき殺す音、銃撃の音、悲鳴叫び声やうめき声泣き叫ぶ声と異様な光景であったけれど、2 時間あまりで無音になったそうです。たまたまトウモロコシ畑に逃げ込んだ人、死体の下敷きになって奇跡的に生きていた人、壕に入って助かった人は、その時は、それはそれは恐ろしかったとのことです。生き残っても中国人暴民に何度も襲われ、水も食べ物もなく、歩いて街まで行くのはあまりにも暑くて遠い。これまでと死を選び、持たされていた青酸カリを飲む人々、幼子を殺す母親、殺して下さいと軍刀を持つ人の前には列ができたそうです。

数少ない生き残りの葛根廟命日会会長の大島満吉さんから、実際の話をお聞きしました。聞いているだけでも息が苦しくなってきます。それでも、旧満州最大の一般人の悲劇を多くの方に知ってほしいと思います。この時事件で生き残った人や遺族が供養の為に毎年被害にあった同じ日、同じ時刻に命日会として東京目黒五百羅漢で、お経をあげていることを知りました。

４、過酷な逃避行

こんな事件があったことも知らずに、澄子、光枝の姉妹と幼子 3 人はただただ歩いて新京を目指していました。途中の道が右左、大きい道、山道と別れるたびに「私はこちらの道へ」「私はこちらに道を行くわ」「お元気でまた会いましょう」とお互い無事を祈りながらだんだんと少ない人数の隊となったそうです。後に、大きい道を選んだ隊が全滅し、行方不明のままの人たち、残留孤児になった人など、幾つもの運命の分かれ目があったことを知ったそうです。

川を渡る時、あまりに哀れに見えたのか、ソ連兵が戦車から降りてきて風呂敷包みを持ってくれて手を引いて渡してくれた。女の兵隊たちは戦車の上から意地悪そうに笑いながらそれを見ていた、国は関係ない結局は個人である。などの話を伯母の澄子から聞きました。食べるものも十分なく、明けても暮れても歩くばかり。ある日背中で赤ん坊（次男・卓也）

は亡くなっていたそうです。お乳も出ないし餓死であったと思います。服を着せては現地の人に鍬で掘り返されるからと、裸で藁を敷いて埋めたそうです。澄子はその穴の中に自分も入るのではと思うほど泣き崩れ、光枝に肩を抱きかかえられ、やっとその場から去ったそうです。おそらく、こんなことはあちこちであった情景だったと思います。隊もいつまでもそこに居るわけにもいかず、2 人の子供も連れて帰らなくてはなりません。後に澄子は、私は妹光枝が居なければ、一人で幼子 3 人を連れては日本に帰れていない。途方に暮れ、子供とともに青酸カリを飲んで死んでいただろうと語っています。

王爺廟の代用官舎を出た時は多くの人々が一緒でしたが、女子供ばかりの団体を連れる隊長がある駅で「申し訳ないがここで解散とさせてください」との宣言に、多くの人達がまるでひよこの集団のように騒ぎたてたそうです。路頭に迷っていると子供が「〇〇おじちゃんだ」と知り合いを見つけたそうです。ほほ被りをし、炭で顔を黒く塗った栄一の部下の 2 人が助けに来てくれたのです。澄子はこの 2 人は中村（旧中村市）の池田さんと山北（旧香我美町山北）の山崎さんだったと語っており、会いたがっていました。あの時、私に今の知識があれば捜すこともできたのかもしれないと思うと残念です。

途中、中国人は貧しくても親切でどこかの家が泊めてくれて、コーリャンのお粥を食べさせてくれたそうです。しかし下痢に悩まされながら無理やり食べたそうです。妹・光枝は 20 歳前でしたから、隊の為に八路軍の嫁にと言う話が出た際、澄子は「両親に生きて顔向けができない。そんなことを言うなら今すぐに青酸カリを飲む」と言ってその話は取りやめになったと聞きました。

朝倉の実家では 2 人の娘と 3 人の孫がどこでどうしているのか消息も掴めず、悪い噂ばかりが耳に入るので両親（平男・ゆき）は心労のあまり雨戸を閉めて寝ていたそうです。

５、新京

新京に着いてから、長男・征一郎は途中で靴が破け履けなくなってしまい、布を巻いただけの素足で無理に歩かせたせいで、口もきけないくらいやせ衰え、足は萎え歩けなくなっていたそうです。新京では澄子と征一郎は病人の入る病棟へ、そして光枝と尚子の健康組と別れて暮らしていたそうです。所持金もなく、市場で納豆を買って家々に売って回ったりして飢えを凌いでいるような生活だったそうです。お金持ちの日本人の中には、けんもほろろの扱いをうけたそうで、さぞや惨めな気持ちにもなったことでしょう。4 人が別々になりお互いどんなに心細かったことでしょう。この家族の様子は、森田尚『生きて帰りたい　妻たち子供たちの「満州」』（p259～261）に以下のように書かれています。

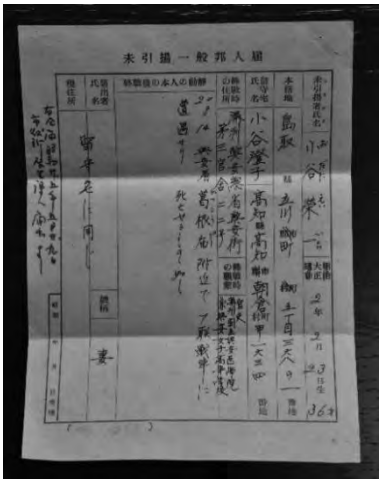
私の左隣の場所には、私より少し年上らしい母親と五，六歳くらいの坊やが座っていた。奥地からの避難民らしいが、母親はよほど大らかな環境に育った人なのかとてもおっとりとした美しい人で、私のしゃべる言葉を聞いて、

「まぁなつかしい、あなたは関西の方でしょう。言葉のアクセントですぐわかりましたわ」

と言う。この女性は高知の人なのだそうだ。高知県のことはほとんど知らない私に、土佐の暮し、とくにお祝いのときに、いくつもの九谷焼の大皿に新鮮な海の幸を豪華に盛りつけて客人をもてなす「皿鉢料理」の話をしてくれた。

見たこともない異郷の豪華な料理の話は、灰色の気分だった私を瑞々しく、心蘇る想いにさせてくれた。それまでは、病を患っているとはいえ、とりつく島もない人ばかりだったこの馬小屋で、はじめて心開いておしゃべりできる人に出逢い、私はまるで肉親に出逢ったような、しあわせな気分になっていた。

しかし、敗戦後の彼女の体験は、そのおだやかな表情からは想像できない過酷なものだった。彼女は満州の奥地、興安南省の興安街（興安総省の所在地）で八月九日ソ連参戦をしる。当時医学院に勤務していた夫は、患者の移動や病院の後始末のため現地に残り、彼女は青酸カリを与えられて一歳の次男を背負い、六歳の長男と四歳の長女の手をひき、他の避難者と共に興安嶺山の中、遠く新京をめざして二か月間の苦しい逃避行をつづけた。その途中で一歳の坊やを飢えで死なせ、十月初めにやっと新京に辿り着いたのだそうだ。しかも、夫はすでに終戦の前日、葛根廟でソ連軍に攻撃されて死亡したという。



小谷栄一の未引揚届

そのうえ、生活の始まった新京でのある日、長男が食事中に箸をポトリと落とした。不審に思って医者に診せたら、脳性小児マヒとのこと。頭はしっかりしているが、半身の自由がきかなくなってしまった。やっと内地送還が始まって学齢に近い長男をおぶって、新京からこの錦州まで来たという。

なぜ、この人ばかりに、こんな悲しいことがつぎつぎに起こるのだろう。私は話を聞きながら、言葉を失っていた。彼女には、終戦の四か月前に彼女のもとに身を寄せた妹さんがあり、敗戦後なにかにつけて彼女を援けていたという。このときも、妹さんは四歳の長女を預かり、一日も早い帰国を願って健康組に入っていた。毎日のように二人で、彼女と 6 歳の長男を見舞いにきていた。

敗戦までは、夫婦と子供三人、申し分なくしあわせだった彼女の家庭は、敗戦後一挙にこんな悲しい姿になってしまったのである。

その事情を知るにつけ、ともかく私たち母子は元気に生きているのだ。けっして「敗戦の被害者」などとは思うまい、と心に強く誓った。幾多の悲しみを乗り越えた彼女の屈託のない姿は悲劇が充満しているこの馬小屋で、私の大きな心の支えとなった。

6、帰郷

1946 年満州在留日本人の帰国が始まり、引揚港となった満州の葫蘆島から先に船に乗れたのは健康組の光枝と尚子だったそうです。しかし、船に病人が出て港に留め置かれ、後発の澄子と征一郎が先に長崎・佐世保に着いて高知に帰って来ました。

満州から帰る知らせを受け、朝倉駅に迎えに行った母（ゆき）。どんなにか安心したことでしょう。澄子が背中におぶった征一郎を迎えに来た母に「こんなになってしまって」と見せると「無事に帰ってきたがやき、かまんかまん」と 2 人は朝倉駅でただ涙にくれたそうです。無事に帰って来たのもつかの間、征一郎はそのまま回復することなく眠りにつきます。その後光枝と帰ってきた尚子は、目の前で兄も弟も死に、父も行方不明でどんなに心細かったことでしょう。「おにいちゃん、尚子がいじめられたらだれが守ってくれるの！死なないで！」と泣いて泣いて、そばにいたみんなも一緒に泣いたそうです。この時に伯母は一人残された尚子を立

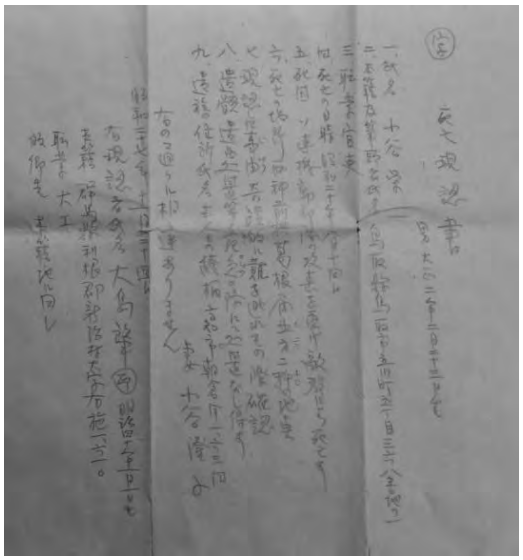
外地引揚者証明書

派に育てて行こうと決心しました。

いつのころかは分かりませんが、興安で一緒だった人が訪ねて来たそうです。「自分は『手洗いに行ってくる』と隊を外れたその間にソ連兵が襲ってきた。小谷さんはその時にやられた」と知らせてくれたそうです。手洗いに行っていたというのは生き残ってしまった方なりの遺族に対する気遣いであったかもしれません。

【資料４】死亡現認書　昭和 27 年 11 月 24 日

一　氏名　小谷　栄一　　大正二年二月二三日生
二　本籍及び筆頭者氏名　鳥取県鳥取市立川町五丁目三六八番地の一
三　職業　官史
四　死亡の時　昭和二十年八月一四日
五　死因ソ連機動部隊の攻撃を受け敵弾により死亡す
六　死亡場所　西科前旗葛根廟　北方ニキロの地点
七　現認した事由　奇跡的に難を逃れその際確認
八　遺骸、遺品処置等危急の降りにて処置を得ず
九　遺族の住所氏名本人の続柄　高知市朝倉甲一六三四　妻　小谷澄子
　　右の通り相違ありません
　昭和二七年一一月二十日
　右現認者氏名　**※大島　肇**　明治四十一年七月一日生まれ
　職業　大工
　本籍地　群馬県利根郡新治村大字布施一六一〇
　帰郷先　本籍地に同じ



資料４　小谷栄一の死亡確認書

資料に出てくる大島肇さんは、現命日会会長の大島満吉さんのお父様で命日会・初代会長です。義伯父・栄一の死亡現認を戦後・肇さんがして下さっています。

尚子は祖父母（平男・ゆき）と母親・澄子に大事にされながら無事に小学校（みのり学園）に上がりました。父親に似て歌も踊り上手で発表会には一人で歌ったり踊ったり、末は歌手になれると皆がこの子に希望を託し成長を喜んでいたそうです。しかし、ふとした風邪がもとで、帰らぬ人となりました。過酷な逃避行、父、兄、弟の死、慣れない高知での暮らしと心身ともに疲弊していたのだろうと思います。澄子は毎日神社にお百度詣りをし、神様仏様にすがったそうです。しかし運命は残酷だったのです。

亡くなる時に、「お家へ帰る、お家へ帰る」というわごとを言い「ここが尚子のお家よ」と言っても「お家へ帰る」と聞かなかったそうです。尚子にとっては、お父さん、お兄ちゃん、弟が居る家族 5 人で平和に暮らした満州王爺廟の代用官舎がお家だったのだそうです。そして、「きれいなお花畑が見える、小谷の（亡くなった）おばあちゃんがお迎えに来てくれた」と言って亡くなりました。

澄子は、「優しかったお父さんやお兄ちゃんのいる世界にあの子は行ってしまった。子煩悩だったお父さんが尚子を連れに来たのかもしれない」と言っていました。一人残された澄子の気持ちはどんなに辛かったろうと思うと胸が痛みます。そのことを思い、尚子が通っていたみのり園の園長先生が追悼文を下さいました。澄子は「みのり学園に入ったわずかな間が、あの子の人生の華だった」と話していました。

資料５　みのり学園長の追悼文

〔資料５〕　「みのり学園」深瀬園長の追悼文

小谷尚子さんの御霊の前に謹みてささぐ
尚子ちゃん、園長先生はあなたが大好きです。かしこくてげんきで朗らかで舞踊がお上手で、おめめをかがやかしてお話を聞く尚子ちゃん。音楽にあわせて熱心に踊る尚子ちゃん。
発表会の雨ふりは、とてもよく出来ましたね。
昭和 21 年 1 月 6 日入園この方丁度 2 年と 3 か月お優しいお母さまとご一緒に休まず通った尚子ちゃんの可愛らしい面影、どうして忘れませう。尚子ちゃんもみのりを忘れないでくださいね。

７、家族のその後

（1）澄子

1946 年 12 月の南海地震が高知を襲った時、皆が外に逃げる中 5 人家族で一人生き残ってしまった伯母・澄子は死ぬつもりで家に居ました。しかし、揺れは大きかったものの塀が倒れたくらいで家の方は何ともなかったそうで、これも運命だったのでしょう。

戦前は地主であった伊野部家の土地は農地改革で小作のものとなり、米すなわち現金収入がなくなり、アイスケーキの商売を始めようとした澄子の父・平男は機械代を騙され、二重に代金を払うことになり大きな借金を抱えてしまいました。いわゆる武士の商法で商売はうまくいかなかったようで、柔道家で体格の良かった平男はこの時期にげっそりと痩せてしまったそうです。気苦労が絶えなかったのでしょう。

澄子はそれを期に、播磨造船の持つホテルで仲居の仕事を泊まり込みですることを決意します。以来 10 年間お給料は全部実家に送ったそうです。お陰で借金の返済もでき、何とか暮しにも困らなかったようで、ゆきと平男はずっと澄子に感謝していました。

後年、澄子は「悲しみに暮れる間もなく家のために仕事に打ち込めて、かえって良かったかも知れない」と言っていました。おそらく悲しみの淵にのまれそうになりながら、贖罪をあがなうように、自分が生かされたのは家のためだと言い聞かせて懸命に働いたのだろうと想像します。

（2）光枝

妹・光枝（筆者の母）は満州から帰り、今なら心身症とか鬱という診断名がつくのでしょうけれど、当時は心療内科が今ほど身近なものではなく、気持ちが塞ぎ、気力がわかず廃人同様となり、祖父母も体が丈夫になる道場に通わせたり、医者に見せたりしたが一向に良くならず、腫れ物に触るような生活だったようです。思えば、若い時代を戦争一色で過ごし多感な時代に目の前で何人も死んだり撃たれたり、歩けなくなった老人を置き去りにする場

面など惨い場面にも遭い、明日は我が身のストレスに晒され、食うや食わずで、姉妹 2 人とも引き揚げてくるまで生理も止まっていたそうです。心と体の傷は大きかったのでしょう。

10 年もの間若い娘が何もできず、世話が全部いる状態に母（ゆき）が耐え切れず、そして自分たちもいずれ年を取ることの心配もあったのでしょう。次女光枝が 30 歳になる時にゆきが結婚させたいと言い出したのです。父・平男はこの状態で結婚させることに反対したそうですが、ゆきの気持ちもむげにはできず、その代わり養子を迎えて手助けをするという条件で承知しました。6 人兄弟の 5 男を養子に迎え、生まれたのが筆者の私です。

物心ついた時に私は祖父母（平男・ゆき）の家にいました。参観日も祖母のゆきが来てくれていて、私はそれが当たり前のこととして何も感じませんでした。ただ、ある日母の光枝が来ると、私は母にしがみついてワーワー泣いたそうですが記憶にはありません。

母には子育てはムリと判断して祖父母が私を引き取り育ててくれていたのです。時々父の転勤先の小学校に入るのですが、母は学校の先生や他の父兄とのコミュニケーションが苦痛で家事も出来なかったので、結局私は祖父母の元に帰されました。次の子供ができても自分は育てることが難しいとあきらめたそうです。

その後、母はだんだんとたくましくなり、7 年後に妹ができました。私が市内の私立の中学校に上がるのと妹が小学校に入るのが一緒になり、父だけが単身赴任の形となって親子 3 人は祖父母の元で暮らし始めました。

しかし、祖父母に育てられた私と急に母親面してくる母と私との衝突は絶えず、母との関係に悩みました。母は人と関わりが難しいため、自分と子供との内向きの小さな世界だけで生きる人でした。近所親戚付き合い、友人、趣味、仕事を持つことが難しくその分子供をかまい逐一口を出して自分の言う通りにならないと癇癪を起こす。口を開けば愚痴ばかりで、何故世間の母親のように母親らしく料理をしたり楽しく娘と買い物に行ったりできないのだろうと友達を羨ましく、母を毒母と思い嫌っていました。それは生来のものかも知れませんが戦争体験者の心の傷などを聞くと、おそらく母も 20 歳前で幼い甥、姪を無事に高知に連れて帰ることに持てる力の全部を注ぎ、心が壊れてしまったのだろうと推測します。母の通知表に書かれていること違うので人格が変わってしまったのでしょう。絶望と虚無感、人間不信の中で混乱もしていたことでしょう。

満州のことは一切記憶にないと言っていた母です。引き揚げの話は全て伯母の澄子から聞いたものです。生涯母が自分の育ちや経験、自分の気持ちを人に語ることはありませんでした。それまでの記憶は胸の奥深くに仕舞い込み消してしまったのでしょう。後に人が母のことを「童女のような人だった」と言っていました。おそらく辛くはなかった子供の頃に返ってしまったのでしょう。そして、健全な家族ではなかった私にも問題があるように思います。戦後 80 年近くたってもなお心の傷は、子々孫々に繋がります。

（3）晩年の澄子

伯母・澄子はその後、40 歳を過ぎて縁あって 5 人の子供のいる家に後妻に入り、神奈川県に移り住みました。自分の子供は育てることが出来なかったから、せめて人の子供でも育ててみようと言って苦労を承知で嫁いでいきました。2 度目の夫はシベリア抑留の経験のある軍人で、伯母は満州引き揚げの経験とお互いに戦争、連れ合いを亡くするという辛い経験をしていたので、長い年月 2 人は互いの身の上を語りあったことと思います。澄子はこの夫との関係の中で辛い気持ちを慰められ癒されたであろうと思います。

義伯父・栄一の連れ子の 2 人の女の子は戦前生まれで成人していたので、下の 3 人の男の子を中学生と小学校 3 年生〈双子〉から育てました。言葉どおり苦労の末、義理の子供た

ちを立派に育てましたが、古い家制度の封建的な考えの澄子は、戦後生まれの民主主義教育で育った息子たちや特に嫁たちと折り合いが悪く、目も緑内障を患い失明して孤立し、ますます気難しくなっていました。夫は一人妻を残しては死ねないと思ったのか103 歳まで頑張りました。伯父の存命中は顔を出した子供たちもめったに来ることもなく、夫亡き後は一人暮らしで大変不自由な暮らしをしていました。

晩年の伯母・澄子

澄子の晩年は目が見えないのでケガや骨折を繰り返し、ヘルパーさんの介護では限界となり、最後の 2 年間は私が高知の実家に連れて帰って家政婦さんのお世話になりながら看取りました。当時の話ができる人に会わせあげ、思い出の場所に連れて行ってあげようと思いましたが、すでに当時の話のできる人はいませんでした。淋しい晩年であったと思います。私は祖父母の元に居て古い澄子の価値観が理解できたので何とか看ることが出来ました。

娘時代を恵まれた環境で過ごし幸せな時を送った大好きな実家、子供たちも見送った思い出深い実家で亡くなったのが、せめてもの慰みと思います。苦労続きの 94 年の生涯でした。今は両親と妹夫婦と幾多のご先祖様と共に眠っています。

（4）来世で

母・光枝は閉じ込めた辛い思いを、同じ思いをした引揚者と話をして共有できていれば、今でいうところのカウンセリングでも受けて胸の内を話せていたなら、もう少し楽に生きられたのではないかと思います。戦後はこのことを誰にも話せず、共感理解してもらえなかった母も可哀そうな被害者だったのでしょう。この辺の歴史をもっと前に知っていれば私の母に対する気持ちも柔らかかったかも知れません。

伯母の澄子はあちらの世界で 32 才の夫と曾孫のような我が子に再会できていればいいなと思います。そして来世というものがあって、もう一度どこかで出会い 5 人で幸せな家族として戦争のない平和な時代に暮らしてほしいと願わずにはいられません。

８、今思うこと

伯母・澄子と母・光枝は生きて故郷の土を踏み、天寿を全うできただけ良かったのだと思います。もし、母が八路軍の誰かと結婚していたのなら、母は残留婦人で私は残留孤児です。そして、満州の龍江省垣途で眠っている赤ん坊を、現地の人に預けたのなら…歩けなくなった征一郎を置いてきたのなら残留孤児となっていたことでしょう。

もし、自分がその立場に置かれていたならば、いつか草の根分けても探し出して、連れて帰ってほしいと願うでしょう。そして、「辛い思いをさせてすまなかった」と戦争をした人たちに心から詫びて欲しいと強く思うことでしょう。あれは自分たちのせいではない。仕方なかったのだと無視されなかったことにされたらどんな気持ちになるでしょうか？

以前ふるさと創生基金で国は１億円をばらまき高知では金のカツオが作られました。俳優で引揚者でもある故宝田明さんが講演で、「そんなお金があるのなら、望郷の思い耐え難い残留孤児、残留婦人に何故思いを馳せそのことにお金を使わなかったのか」と話しておられました。はっとしました。その頃ならまだ戦争体験者、引き揚げ体験者が数多くおられたでしょうに。戦後の混乱でみんな食べる為に必死だったとは聞きます。しかしその後に２度のオリンピック、2 度の冬季オリンピックができ、今は多くの観光客が中国と日本を簡単に

旅行できます。あの時に置き去りにされ筆舌に尽くし難い苦労を重ねてきた人々が今の日本をどう見てどう思うのでしょうか。ただただ申し訳なく恥ずかしいです。

戦争を体験した人々が帰れない人に心を寄せる。国が責任を持って帰国させる、そして育ててくれた中国の養父母には心からの感謝・謝礼をする。人として当たり前のことをしていたら、もっと中国との関係も違ったかもしれません。

本当の意味で人を大切にしていれば武器を持ち人の命を奪う戦争にはならないと思います。被害にあわれた方々への丁寧な聞き取りと生活の保障があってほしいと願います。このことは、満州だけではなく北のシベリアから南の島々、迷惑をかけた国々にも全部です。それが、国の責任の取り方だし、美しい国日本の行いと思うのですが、難しいことでしょうか？お国の為と我慢し命を捧げた人の御霊は穏やかでしょうか？残された家族はその後の人生をどんな風に暮したのでしょうか？どこの国の人も好き好んで人を殺しているのではないかと思います。

愛国心と忠義を植え付ければ普通の人も簡単に殺人鬼と化してしまいます。社会で役職に就いている人は非国民の誹りを恐れ、自分のプライドと功名の為にお国のためだからと力強く、若者を戦場に送り出します。そして戦争が終わると「あれは上からの命令で仕方がなかった。責任はない」と言うのです。善良な普通の人々がそうなるのです。私はそれが恐ろしいのです。

このことを伝えないで忘れてしまえばまた同じことが繰り返されはしないかと懸念します。平成、令和の生まれの若者を昭和生まれの私たちが再び戦禍に巻き込むことはないのでしょうか？一般人が戦争に巻き込まれて亡くなっても、そのうち忘れ去られ誰の記憶にも残らない。どこでどう死んだのかも分からず、墓も骨すら残らない。生まれてきて死んだ意味はなんだったのでしょうか？あまりにも理不尽で可哀そうです。

これは、私が生まれる 12 年前に本当にあった、残酷で悲しく恐ろしい出来事です。幼くして死ななければならなかった、会えなかった従姉弟たち、若くして死んで行った栄一伯父の話です。こんな一家があったことを記して忘れないでいようと思います。

2022 年 8 月 14 日の「命日会」には、9 歳の時に実際に葛根廟事件に遭遇した会長の大島満吉さん、作家の藤原作弥さん、そして森繋久彌さんの息子さん、研究しておられる先生方、葛根廟事件の映画監督らが参加されておられました。遺族は本堂に入れて、後の方は別の部屋でリモートの参加でした。遺族は年々少なくなることでしょう。テレビ朝日が取材し大島さんの体験談とともに夕方のニュースに取り上げてくれました。この日も日本人が忘れてはいけない大切な日だと思います。母が満州から苦しい引き揚げをして病んだ心身で私を生んだのは、私に澄子、光枝姉妹のことを託すため、そしてこのことを語り継いで欲しいと願い先祖が私をこの世に送り出したのかもしれません。

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会の崎山ひろみさんに声をかけていただいて、2021 年 11 月 28 日から 12 月 5 日まで高知市の市文化プラザ「かるぽーと」で開かれた王希奇展（ワン・シーチー展）のお手伝いをさせていただきました。中国人画家の王希奇さんが満州・葫蘆島からの引き揚げを描いた迫真の大作絵画「一九四六」を中心にした展覧会でした。母と伯母 2 人の従兄姉もここ葫蘆島から船で日本に帰ったと思うと感慨深いものがありました。絵の中のどこかに居るような気がして捜しました。

「155 万人が国の政策で満州に渡り、葫蘆島からは 105 万人、大連から 22 万人の日本人が帰って来ましたが、は犠牲になっています。原爆のニュースももちろん大切だけれど、旧満州の歴史や 30 万人ほどの犠牲者のことをもっと伝えていかなくてはいけない」と語る崎山さんの言葉に心からうなずきます。実際に満州での生活、引き揚げを経験された崎山さん

の言葉には強いものがあり、崎山さんの中に当時の伯母や母従妹たちの姿が重なり、自分もこの絵に入ったような気になります。崎山さんのお勧めで、2022 年には明治大学生田キャンパスの陸軍登戸研究所平和資料館、新宿の平和記念資料館も訪ねました。3 月には長野県阿智村の満蒙開拓記念館を崎山さんらと訪ね王希奇先生にお会いすることができ、6 月には旧満州も訪問することができました。

９、これから

いろんな人との出会いから、満州と関係した満蒙開拓青少年義勇軍や葛根廟事件の歴史を知ることとなりました。犠牲となった幾千万の人々が居たことを忘れないためにもっと戦争の歴史を知って、伝えなくてはと思います。

何故こんなにも多くの生身の親も妻も子もいる尊い人間が簡単に死んでいかなければならなかったのか？　しかもこれは近い将来再現されはしまいか？との疑問を持ちながら…

謝辞

最後に実家の蔵にタイムカプセルのように眠っていたアルバムや資料を紐解くきっかけを下さいました龍馬のうまれたまち記念館の森本琢磨学芸員、そしてそれを調査して保存の手助けを下さいました高知城歴史博物館の渡部淳館長、高知新聞社の楠瀬慶太記者、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会の崎山ひろみさん・小野由美子さん、高知大学の小幡尚先生、松本瑛子先生はじめ高知地域資料保存ネットワークのメンバーの皆様のご協力のお陰で、このような文章を書く機会をいただいたことを感謝いたします。

80 年の時を超えて手紙や資料を世に出していただいたことが、無念の死を遂げた先祖の何よりの供養となりました。ありがとうございました。

葛根廟事件関係資料集―伊野部家資料の翻刻―

岡田とし

「戦禍に散った命を忘れないで伝えていこう」で、紹介できなかった小谷栄一、澄子から高知県朝倉村の伊野部家に送られてきた葛根廟事件前の手紙二二点（資料番号は「戦禍に一」から連続した番号を採用、資料番号は年代順でなく整理順とした）について、今後の歴史資料として活用してもらうことを想定し、資料翻刻を以下に掲載します。資料群は、伊野部家資料として二〇二一～二〇二二年度に高知地域資料保存ネットワークが整理しています（二〇二四年に『高知県近現代資料集成Ⅲ―目録集③―』で資料目録を公開予定）。資料翻刻は筆者が主に行い、高知地域資料保存ネットワークの松本瑛子先生、崎山ひろみさんほかに御教示いただき、楠瀬慶太さんが校閲・校正を行ってくれました。

〔凡例〕
一、漢字の旧字は、一部の固有名詞を除き、現行の字体とした。原文の字下げ、日付・宛名の配置などは、可能な限り反映した。原文の体裁を尊重しつつ、振り仮名等、文字の大きさについては、適宜校正した。
一、読みやすさを考慮し、適宜、句読点を加えた。
一、判読不能の文字は■で表した。
一、筆者による送り仮名は〈〉で記載し、注は〔〕を用いて表記した。
一、便箋と付随する封筒は、筆者整理過程で混在した可能性があり、その旨注記している。

【資料６】栄一手紙　昭和一九年八月七日（便箋４枚、封筒あり）

謹啓満州高等文官試験合格の御通知をいたします。本七日新聞を見て居りますと、政府広報にて高文合格者の発表が有り、合格者は応募者の二割七分との率等も出て居ましたので、早速下駄を引っかけて人事課へ行って見た所、皆が料理屋へ電話を掛けやうと思って居た所だと言いますので、落第するものをひやかすないと言ったら、これを見ろと総務■■からの通牒を見せてくれました。
小谷栄一の名は正しくありました。
人生最後の試験であり、官吏の登竜門たる高文に、斯も簡単に入りましたので、年のせいもあろうが、中学校入試の時の如く足が地に着かない様になる感激も無し。遂に来るものが来たと言った安心感を得た丈です。

かく申せば、全く、俊才の如き聞えますが、実は私は今回の試験には、全然準備勉強をして居りません。
併し、何とは無しに自信を持って居りました。僕は書物を読んで勉強するので無くして、自分の仕事を通じた勉学すると言う主義で進んで参り、殊に当世の教育問題に付ては、意見を持って居りました。
来る二十日より、今回の合格者全員が新京大同学院に入校を命ぜられ、参ケ月間訓練を受けます。
大同学院とは政府職員の幹部たる者を教育する所にて、官吏は該校を出なければ栄達出来ぬ訳です。
あとは澄子のお産を待つ許りです。
又本日は子供達に誠に結構なるものを御贈り仕り

有難くお礼申し述べます。
子供達も至極元気です。
手伝のオバサンがよく働いてくれるので、澄子は呑気に赤ん坊の生まれるのを待って居ます。
この度は予定を大分伸びる様です。
今日は、山本守先生が興安に着いて居ます。
明日は先生を招いて鶏のスキ焼にビールで行かうと思って居ます。
先生に視学官で来て頂き、私が事務官で協力し、大いに当世教育の推進を図らうと計画中です。
若し実現すれば、どれ程私は御教示を得る事が出来るかと思い、目下、人事と交渉中です。

では皆様によろしく御伝へくださいませ。
右御通知まで
草々
八月七日
栄一拝
父上様

【資料7】栄一手紙　昭和一六年（便箋4枚、封筒あり）

拝啓大変御無沙汰致しました。
其の后御一同様益々御健勝の趣御喜び申し上ます。
御存知の通り本年は吾が満州国も建国十週年に当り格別諸行事に忙殺されて居ます。
九月十五日から新京にて建国十週年の祝典が挙行される予定にて、教育関係にある私達色々と準備をして居ります。七月には東亜教育者大会が同様新京で開催され、大東亜共栄圏での教育者四百名参加し、懇法会をするようになって居ます。
教育が最も大きな時代の要請として、真剣にとりあげられる様になり輩国の精神を以て本来の、人林と養成する為日本を道場となし、満州国はその准模範を示す訳です。
扨（さて） これは私の考へで、大東亜戦争の根本理念なるものを当古社会の指導者たる■■に徹底的に認識させようと言う訳で、活佛の巡錫宣伝たるものを私が立案し、これぞ本省独自の環境を活用した思想宣伝也と大分ジャーナリストを動かして宣伝し、現地の蒙古通に委嘱して講習会を開き並び新京、旅順、大連の見学を致して参りました。
十三日に出発し、二十一日に帰って参りました。
活仏なんて言う奴は砂漠の蒙古では文字通り、尊崇の的で大したものですが、新京や大連の幅湊（ふくそう）した、有様には目かくしても歩ける蒙古と一寸調子が違うわいという訳で、珍しいや、恐ろしや嬉しやの百面相、目をパチクチしながら、丸で子供の如く、僕の手や肩を握って歩き、中々骨が折れました。
活仏の内には仲々の者も居て印度、西蔵（チベット）で修業したりマレ半島やシンガポールに足跡を残して居るもの居り、洋食の食べ方を得意になって教へるのも居り面白いです。
何か土産と思いチョコレートを送りました。
バターはそんなに早くなくなろうとは思わず買いませんでしたが、四月六日将又四平着公署に打合せの為公用出張致しますので、新京へ足を延し買って参りませう。
それから何時も久保様に御世話になるばかりにて一向御礼も出来ず、心苦しく思って居り何か適当の品物を送る筈ですが、序手〈ついで〉の際私の気持ちをお伝え下さい。
一郎君に何か差上げませう。御注文すれば結構ですが、フィルムは大連にいくらでもありますので十個求めました。
これからは、精々写真を撮て、皆様の御希望に添いませう。当地は一週間位前は内地の暖かさと同様ですっかり春支度にした所が又もや寒気襲来し、全くの気狂日和です。
土佐は目下櫻花爛漫と咲き乱れ一番いい時候でせう。
一度帰って見度くも思いますが、今は滅死奉公の時代、僕達何時御召してあずかるかも知れず、この頃は月に三日間エイーヤの練習をやって居ます。
右近況迄申し上げます。
御自愛を祈りつつ
不一
栄一拝
御両親様

【資料8】栄一手紙　康徳一〇年六月　昭和一八年（便箋3枚、封筒なし）

拝啓戦時下教育行政は非重点業務と言はれ乍らも、仲々多忙にて、緊急整理事務に忙殺されて居ます。
四平省公署へ三日間示した問題解決の為公用中昨日は帰任しました。
御下命（でもありませんが）バターはこの機会を逃せずと奔走、やっと五キログラムのもの三個購入致しました。
半個は当方で使うこととして、二個半近日送ります。秋林というロシア人の商店に有りました。一人当り半個しかくれないというのをあの手この手で押込み買いました。
物資難のこの節客が頭を叩かねならない時代です。
パンも大きなものを焼いて居りましたので、無理算段で五個買い朝はパンとコーヒーで洒落て居ります。
旅先で家ごとにせんと走り廻り嬉しさうに喰いつく、我が子の姿を見れば

旅の苦労も露消致します。
征坊はますます元気者にて、丸々と太って参りました。
身長は満三年の標準にて一年早く、■■胸囲の如き、七ケ年と言う小学校一年生の胸です。
尾籠な話ですが、大便をさすのに澄子では駄目にて、糞小便掛は僕の一手引き受という有り難くない御用命を預かって居ります。
この頃は尚子が可愛らしく成り、あやすとゲラゲラ笑います。
生育極めて良好です。
ドシドシ写真を撮って送りませう。
フィルムも十個大連で求めましたので不自由は致しません。
物資の豊富なのに驚きます。
これは運送の関係で満州の玄関でたまったやうな沢に成って居ると

駅員が申しておりました。
それでも流石に三輪車は無し、製造禁止らしいです。
公用で日本に帰る機会を従おうと思って居りますが仲々無し。
満州国よりの訪日旅行も札等制限を余儀なくされ居ります。教育宗教の行政の中で予定とした。皆で教員の日本視察旅行や■■の訪日旅行も計画しては居りますが、相等困難らしいです。若し実現の暁は澄子はこの間高知へ帰省させてやろうかと話して居りますが、大してあてにせず御待ち下さい。
では今日はこれまで失礼申します。
胃の方は快方に向かって居られますか　　不一
栄一より
母上様

【資料９】栄一手紙　康徳九年　昭和一七年秋（便箋３枚、封筒なし、※実家に帰省した澄子宛か）

拝啓帰国後二週間未だ一回の消息にも接し得ざる理由は如何？
今月は出張ばかりで居ないと言った言葉を信じて出しても無用と思って書かないのか、多忙の故書けないのか。
征一郎元気なりや、尚子又明朗に遊び居るや
父上様より十九日附書翰拝見、兎角元気で居る、故安心した。
最近在郷軍人の射撃大会や、四平遠征軍の歓迎宴が有ったり、何れも秋口の冷気と共に痔が悪いばかり、遂に悪化して赤く肥大して化膿し初め満腫中。
歯は痛むし、痔は物凄い鈍痛に堪へない事も有り二十三、四の夜は熱が出て、痛み、今にでも内地に帰へろうかと思ったが、財務の方からは予算編成方針を書いてくれと言って来ました。

来月中頃の文教科長会議その前へ参事官会ギと準備の為手放しもならず　痔がこの侭であれば十一月の初旬頃帰るか或は未になるかも知れん。
新規学官は着任早々　次女が危篤にて奉天に帰ったが二、三日前死んで、そこへ奥さんがお産をするやら人手は無し当分休暇を取るらしい。
この現状を見て、僕は今帰れない。
明日から一週間札蘭屯へ行く。温泉が有るから入ってくる積りだ。
宇多さんの奥さんが実によくしてくれる。
配給物は買ってくれるので大助かりさ。
今頃カルピスの配給が有った。
中さんが来てからジャガイモ、ネギ、大根、人参の煮物一点張り。

（後欠）

【資料１０】栄一手紙　昭和十八年一月二八日（便箋３枚、封筒ありだが消印相違で別の手紙のもの）

拝啓過日は御丁寧な御たより頂戴致し有難うございました。其の後御両親様を始め御一同様御息災にて御過の由承り御喜び申上ます。
御陰様にて極めて頑健、仕事もますます忙しく相成り又本年は我が国建国十週年の行事にて、留守をする事も多いだろうと思います。
春には女子が内地へ引揚せねばならなくなるだろうとの御話ですが、奥地行政の第一線にある我等は楽観して居ます。
皇軍の守護陣は恰も鳥の両翼の如く北の守り固きが故に南戦捷も当然にて戦果を挙れば崇る程、皇軍の威武の前には屈せざる得ないでせう。
扨この間から沢山の品々正月用品を御恵贈被下厚く御礼申

り被下、洵（まこと）に相済ませんでした。嘸（さぞ）かし、吃驚（きっきょう）されたる事だろうと思います。
もう少し早くから十全の連絡を取って置けば良かったんですが、何しろ多年の懸案を思いつきに

て解決しようと焦った訳にて、笑止千万に御免を蒙りたく思ひます。
実は去る二十日頃中央からの招集にて突如、新京に公用主張をしなければならない要件が出来ましたので、小官兼而の大言壮語銀狐を手に入れたやうと言う訳、二百四拾円の現金は有ったんですが、同じ買うなら一生使へるもの故悔を千年に残さぬようにと一■■御願いしたんです。
所でこの時持参した金は出張旅費の八〇円と合して三百九拾円でしたが、三等の汽車に乗り、二円の志那宿に泊まり文官通り

臥薪嘗胆やっと旅費から四拾円を浮かし、最高値の三百五拾円の銀狐を買ひ、澄子多年の宿望を遂げさせた訳です。カムチヤッカの手産、昔なら倍の値段だった様です。
決して時局を忘れた訳でなし、緊張の裏にユーモアをたたへ、積極生活の意図に出でたるもので、御無理と御願致したる金員は近々の中に必ず御送り致します。
色々御心配をかけましたが小生の苦衷を御賢察度く
では今日はこれまで
父上様にもよろしく御鳳声相成度御願ひ申上ます

一月二八日　　栄一拝

母上様

【資料１１】栄一手紙　年月日不詳（便箋２枚、封筒なし）

拝啓恵まれたる冬ぞと思いきに昨今より本領を発揮し遅ればせの極寒が訪れて参りました。
時局柄、南への関心いよいよたかまり、寒い満州より暖い南国へと希望する人々も多い様ですが、幸か不幸か蒙古と縁と切る事の出来ない小生、将来の北へ備へ目下猛烈にロシア語を勉強して居ります。毎朝出勤と同時に一時間講師は早大露語出の人で丁寧に教へてくれます。ペーチカ、トーチカ、シューバはロシア語だと知りました。今日は蒙古　合聯合自治政府肇建功労章を拝受致しました。私は彼の地に任を奉じた訳で無し直接に関係は有りませんが、昭和一二年頃省内の蒙古匪賊を帰順せしめ、徳王の蒙古軍に送り、蒙古軍の募兵の援助をした事が有り、之が建国の功労と見做された訳です。
蒙古匪賊の三頭目と通寮の志那料理店に歓迎し、匪賊の戦法を聞き酒杯を交わしたのも面白い思い出です。
呉越同胞にて又蒙古で逢はん事を約束した事でした。
扨尚子も生後五十五日、生れた時は鼻の低い色黒のヘゴだと思って居りましたが、この頃はとても色が白く成り、顔が優しい。大分肥えて、首も座り、相手になると大きなエクボを出して笑ひます。この分なら年頃にもなれば、人がふり向く程の美しい娘になるかも知れんなんて、親馬鹿よろしく、悦に入る事も有ります。
写真は出来上り次第送ります。
征坊は元気この上無し、明朗に育って居ります。面白い事をしてよく笑はせます。
早く朝倉や高知へ連れて帰って皆に見せてやり度いと思います。

〔後欠〕

【資料１２】栄一手紙　年月日不詳（便箋２枚、封筒なし）

〔前欠〕

上ます。毎日の如く小荷物が到着致します。
全部到着致しました。時節柄小荷物の到着期日も一定せず、満州向の荷送りは事故が多いと聞いて居ますが僕達の方は完全なものです。
尚子には高価な羽子板を有難うございました。
内地の新年の情況を満面にたたへた様な気が致します。
何度も尚子や征坊の写真を請求されますので、この間上京の際入手に奔走致しましたが残念ながら買へず、とうとう近所の人に御願ひして撮って頂きました。出来次第送ります。バターも良質のロシアバターが沢山有りますので、又無くなれば御送り致します。
この間突然電報為替を御願致しました所早速御送

〔欠〕

では今日はこれまで

栄一拝

母様

追伸
珍らしい蒙古刀を手に入れました。
これは軍刀式のものではなくてナイフ式のもので、箸がついて居り、蒙古人は常に佩用して居ります。旅行するとき等羊の肉を食べる時にこのナ

イフで肉を切り、箸で食べます。モンゴルヒトガ（蒙古刀）と言ひます。御入用なら送りますが御返事下さい。箸は象牙です。

【資料１３】栄一手紙（ハガキ）　伊野部平男宛
康徳九年六月七日消印　　昭和一七年

冠省新京の民生部（文部省）に事務連絡が有り、状況致しましたら、教学■■に朝倉の安岡源一という人が居て紹介されました。軍人出身の人らしいです。平男さんを知って居るなんて心易い事と■ってましたが、■■■の人ですが田渕大尉の弟で二期位中学の後輩の人に■■で■出し、■いました。八月とは遊試選手■■■で上京の■■です。

不一

【資料１４】栄一手紙（ハガキ）　小谷澄子宛　康徳九年九月一八日消印　昭和一七年

冠省安東よりの瑞書落掌。当地はめっきり初冬の兆、自炊生活も平気だ。
明日は四平省の選手が遠征して来るので、好敵を迎えて大いにやる。二十一日頃から奉天へ二十七日頃札蘭屯へと出張する。
十月二日帰任の予定。僕の前任の早坂氏は新京で吐血して運動から見離された、自宅にて静養中。僕の歯は相不変痛んで困る。
正月は是非帰る。
征一郎と尚子を大事に育ててくれ。御元気で。

草々

【資料１５】栄一手紙（ハガキ）　伊野部ゆき宛
康徳十年五月二十四日消印　昭和一八年

拝啓御芳書嬉しく拝読致しました。帰任草々演習続きで参りました。やっと今日■■■着きました。裏に仔細な手紙を認め澄子に頼んだが着いたかどうかと思い乍、内地で美味しい御飯を食って居りましたので、帰満してから食欲不振でしたが、この頃やっと復帰致しました。玉子は完全のまま半コへあげました。■は幾度か捨てやろうと思いつつ、何とか持って帰り便利に用いて居ます。写真有難うございました。流石おばあちゃんの印象は深いらしく、コエコエと指さして忘れずに居りました。

【資料１６】栄一手紙（ハガキ）　伊野部ゆき宛
康徳十年五月二十四日消印　昭和一八年

征坊は相変わらず近隣の腕白と喧嘩ばかりして居ます。尚子は甘え専門ですので泣いて居ます。澄子は忙しく帰満来一度も町へ出て行きません。では元気で暮らして居ります故何卒御安心下さい。纏まりのでつかぬことを認めますが、今はこれまで

出勤前に

不一

【資料１７】澄子手紙　　昭和一七年二月六日
（便箋６枚、封筒あり）

御手紙ありがたう御座居ました。今頃は小包が皆無事着た事が判り安心して居られるでせう。草履も皆無事着き早速越智様に差上げました。大変喜こび恐縮しておられ、御礼状を出すからところ書きを失ったので尋ねて来てくれました。又介■■を下さるとのことです。さて高知はお天き如何ですか。当地ハ一月終りより又急に寒くなり私も風邪を引き熱を二度ばかり出しましたが、もう良くなりました。矢張り産後ですね。晴ちゃんが帰って余り張り切って働いていたので少し弱って　　居たところへお産栄一さんの仕事の相手に夜をふかし（二晩）続いて来客が十二時まであり、その次の日風呂で洗濯して少しぬるいのに入りましたら　　風邪を引きました。普段はその位の事に何とともありませんのに・・・。

この間の　ウルメは大変美味しく大喜びでした。残念な事にまだ大分残ってゐたのを全部、ねずみに引かれて泣きの涙です。二軒　おすそ分けして大変喜んで頂きました。ずーと前の　ちりめんじゃこも　家中　大好きで、まだ少し惜しくて残してあります。
羽子板は、あんなに良いものを下さって、すみません。随分高かったでせう。窪田から色々送って来てゐる由楽しみに待ってゐます。
毎日、衣装製整理に勤しんでゐます。征坊のパジャマも、縫って来たのが（高知に居る時に縫ったの）破れてしまいましたので、もう一枚又お父ちゃまのお古を頂戴して作ってやりました。赤ちゃんのフード帽も、私の腹合帯の桃色のシュシュ地の切布で作ってやりました。可愛いです。

当地はお砂糖もお米も余る程あります。
関釜連絡船が危くなくなれば光ちゃん達は是■■■■甘いものをウントご馳走しませう。
香代ちゃんも帰高して高知の高女へ行れるそう

ですね。お母さんも大変ですが賑やかになりいいですね。
先日水埜さん（先輩）が来られて　ご馳走して色々と話してゐる時、家の事など　お互に言つてゐたら、水埜さんが「それは　お母さんが気の毒だ。妹さんに　別に家を借りる様小谷君から手紙出さんといかん」と申してゐました。
唯、後妻の母と妹達も一緒に居る言つた丈で。栄一さんもとうからそう言つてゐましたが、それを聞くお父ちゃんでないので手紙出しません。

外は皆元気です。征坊もどんどん大きくなり、送つて頂いたタビも洗濯すると小さくなりました。そしてもう　親ゆびが破れました。今の品は詮無いですね。
尚子ちゃんも大変色白で可愛くなりました。笑つてアックンと言ひエクボもとても可愛らしいです。よくねんねもしてくれて大助かりです。オムツも征坊の様になく、ウンコも日に一度か　タマニ二三度が普通です。八時頃乳をのみますと良くねる。時々、四時半までねます。
征坊がシッコ起きてゴトゴトしたりすると、目を覚す時もあります。昼でも征坊が騒がしくなつたら、またまたよく寝て来るでせう。内地へ帰り初対面の時は何時でせう。過日、長谷部さんと言ふ方の八ケ月の嬢ちゃんが亡くなられ

ましたが、それが朝起きたら　ウワムケになつて死んでゐたそうです。皆タブン　ガスで窒息死だろうとのことですが本当に怖いですし、お気の毒です。その方は、三十一　で高美家で、奥様はアメリカ生れの牧師さんの娘さんで二十三　とてもキレイな可愛しい素晴しい洋装です。病気ならともかく、諦めがつかんでせう。お気の毒な事です。
当地もどんどん人口が増します。今昨年の春より最近になり私達の家の周囲に四五軒移築しましたが、又今年は何軒か召会が出来るそうです。
トーフも牛肉もいくらでも有ア有難い事です。
内地では衣料も切符制度になり大変ですね。色々送つて頂け無くなりましたが、かくつて緊張して節約し良いですわ。

今度は、ワイシャツの古で　もう少し暖かくなり外で遊ぶ時、洋服の上に着る　上着とズボンを縫つてやろうと、準備中です。ミシンがあればどんなに良いかしれませんが仕方ないです。
衣装も切符制となれば、古物更生が何よりの道ですね。が、■みな事です。
皇軍も物凄いですね。本当に有難いです。
では又　　御身御大事に

すみこ

拝

二月六日記

御母さんく

【資料１８】澄子手紙　昭和一七年四月八日（便箋２枚、封筒ありだが整理時に混在）

御手紙有難う存じました。
当地も大分暖かくなりました。四温の日まで二三日前も、暑い位で征坊にも急いで半袖半パンツに着換へてやる有様でした。これから満州は楽しみです。ポツポツ気をつけてみると芽も出はじめてゐます。間もなく見る間に真夏になるでせう。毎日忙しくしてゐますが一同元気です。
この間は十円受取りました。丁度栄一さんが出張して新京へ着いていたので、チョコレート　やバタ　はしまつたと思つてゐましたら帰つて来られて送つたとの事。丁度よかつたと思いますです。
バターは四月に上京します時送ります。
大連は実に物資が豊富だとの事。栄一さんのクツと（コードバンと言つて上等の）征坊のクツ（本革の■です）

小包をやつと送ります。
バター　小包　羊羹　十個（四月）これは悪いですけれど、長襦袢干菓子の中にカタン糸が２つ入れてあります。
バターは半個しか売らんといふのを　栄一さんが人のオーバーを借つて、変装ソウしてやつと　三個　買つて来ました。
三個で十円送り　一個三円三〇銭です。
無事に着くやう祈つてゐます。　おひな様も皆着いて本当によろこんでゐます。早速小谷へも報告します。
今度　新京へ上京したら■■へ何か送ります。小谷からは　さすがお母さんが　おひな様の代りに洋服でも縫ておくりませうかと言つてきています。
雨着は送つて下さい　では又

【資料１９】澄子手紙　七月（便箋４枚、封筒なし、※昭和一九年頃　三人目のお産前か？）

御手紙ありがたうございました。皆様お元気で何よりです。お祖母ちゃんも暑くて中々世話が大変でしやう。当地も今年雨が少なくて物凄い暑さです。夜などねられず尚子ハ三分とふとんの上に居

ず困ります。二人共元気です。尚子ハ暑さに弱い子で汗かきで、可哀想です。でも他所の子供は食欲がないと云ひますが、二人共よく御飯を食べます。はだかにしないと、暑くて可哀想だし、お腹が冷えたら困るし中々難儀します。
私も元気です。お産も後一ケ月以内となりましたが、お腹が割合小さくていです。

子供が少小さくて安産なら良いがと思ってゐります。お産の用意もすっかり出来ました。昨日は、オムツももう一度洗って干しました。丁度二十枚出来ました。初着もねるなら四枚もありますが、こんなに暑い年なので、八月もまだ暑いだろうと、シミーズの古で一枚、お父ちゃんのタオルのねまきの古で一枚、新しいキャラコで一枚、ベビー服を縫ひました。ガーゼの肌着はつくろって、四枚出来ました。帽子も尚子の時のがまだ全部新しいのがありますし、何も揃ひました。ただ、おしめカバーに困りますが、毛糸であんで作りました。当分は間に

合ふでせう。家（ウチ〔マン字でルビ〕）なんかはないと云ってもまだ十分有る方で初産の方は気毒です。
今度はきっと男の子と思ひます。お父ちゃんも益々忙しくそれでも元気でやってゐます。お金も保険の他に千円以上出来ました。
お祖母ちゃんのお見舞いやら、小包を送ってもらふので少し送りませうと、為替を頼んでもらってありますが、暑くて中々に局までよう行きません。内地は中々らしいですね。当地は暮しは本当に楽です。メリケン粉もありますし、お砂糖もないといっても内地の様ではなく、美味しい生菓子も五日に一度十五個買へます。

西瓜はまだまだ出来ませんが、こちらも今年は増産で、あまり作ってないとか言ひます。
加藤さんの奥さんが、近所のお産を手伝いに行った時の話に、「たらひも　みがいてない、汚れたので石ケンも薄っぺら、湯上タオルも、黄ばんでいたので、　■■も流しがどろどろ。上の子供は出て行け言っても、泣いて（七つの女の子）産室には入って来るし」などなど笑ってゐましたが、私はどうか　笑はれん様にと、毎日タラヒをみがいてゐます（今はタライも買えませんから洗濯のです）

以上七月記（〔マン字でルビ〕）

【資料２０】澄子手紙　昭和一六年一二月七日（便箋６枚、封筒ありだが整理時に混在）

お手紙有難う御座居ました。
手紙を待ち兼かねていらっしやるだろうと気にかかり乍らみな忙しくてこんなにおそくなり失礼しました。
すみませんでした。
さて七日の朝五時頃かすかに痛み出して七時頃晴ちゃんを起こして、お風呂を湧かして貰ひ、十時頃お風呂に入り髪を洗って出て来ると、それ程大した事もなかった痛みが急に激しくなって、顔にクリームをつけると髪を結ふ暇も無くふとんをしいてね巻に着かへ、もう一度電話をかけに行って貰ひ、帰ってからお腰をさすって貰って居ますと、何だか生まれそうになって産婆さんは来ないし、産んでは困る思って、ちっともいきまなかったのに、今にも生れて来そうになったので（四つん這ひにお腰

を立てて居ました）うんと一いきみするともうオギャアと云って飛び出して、栄一さんの両手で受けました。
ほんとに自分でもびっくりする程かるくてうその様です。産婆さんはそれから十五分程してやっといらっしゃいました。それ迄、近くの外語先ばいの奥さんが赤ちゃんにさらしやらかけて下さって私にもふとんをかけて下さり処置をして下さったので少も慌てませんでした。
赤ちゃんは体重七百六十匁、胸囲三十二糎、身長四十八糎でした。
かほはまだはっきりは分りませんが、鼻と口は私ですが、全体的にはお父ちゃまらしいです。
はなは小谷に似ていれば良いのに、伊野部のはな

にそっくりです。
口はとてもかはいくて、お父ちゃまは俺に似て美人になると悦に入ってゐます。
色は白いか黒いか分かりません。ひたひの両脇が出てしはのある所がお母さんに似てそっくりです。
とっても楽で、三時間三時間に目を覚まします。征坊が多少しやけるらしく、おっぱいをのます時にはせりついて来てニヤニヤして居ます。かん気も起さず思ったよりらくです。お陰でお父ちゃまとね寝れてほくほくものです。しかし、病気後しつこを四五回もして起してやらないとしっぱいして閉口します。此の頃はやっと口がきけ出して、朝から晩迄色々としやべって居ます。

赤ちゃんの名は、栄一さんがお知らせしたと思ひ

ますが、尚子（ヒサ）とつけました。事ク八角畫三畫の縁起
をかついで笑はれて居りますが、きっと幸多い子になるでせう。
色々おくって下さるそうで有難う御座居ます。
この物の高い時に新品をかはなくても結構です。
征坊の時に女だったらと思って持ってかへってその儘、置いて来ましたが、あの光ちゃんに譲った紅
葉の羽織の布（キし）で何か造ってやって下さい。
ほんねるは二丈かったのをその儘置いて来ましたからどこかに有る筈です。
五丁目の方からも何からも何か戴けるそうで、古物の方が返って嬉しいです。

二人ともよく働いてくれて、私も安心してやすんで居ります。
■■のおばさんにもよくお礼をいって置いて下さいませ。私も大変元気に肥って居りますから御安心くださいませ。バタを越智さんに頼んであまりやっと手に入れて戴きましたから送ります。
当地でもずっともう古の奥でないと、仲々手に入らない貴重な品ですから、人には上げないでお母さんのおくすりにして下さいませ。百目が五円位します。
又、越智さんの奥さんにもへかつをぶしかおじうやこなんか有れば良いが、なけねれば、奥さんに下駄でも送って下されば結構です。二十六才ですが、わりあひ派手ですが、趣味のとっても良い方ですから、良いのを選んで下さいませ。

とき物は光ちゃんにとかして下さい。
では又次に
お大事に
　　澄子
お母様へ

【資料２１】澄子手紙　四月二十日（便箋３枚、封筒なし、昭和一七年）

御無沙汰してゐるやうなしてゐない様な気がしましたので、何度も手紙を書きかけては、止め止めしてゐるからでした。一同皆元気にしてゐます。
一七■■　当地は天然痘　が　発生して、家族四人が　又種痘を打ちました。尚子も熱も出ず、平生と少しも変わりありません。　栄一さんも又通遼へ出張しました。本当に小包有難うございました。三包共無事に着きました。早速征坊ハ絣を着て下駄をはいて我出前のゴミ箱には入って遊んで石炭の粉で真黒になって帰って来ました。本当に困ったものでした。
尚子は窪田で頂いた人形をねてゐる上に、首と足を吊してつってゐやりますと、一人で笑って遊んでいました。

征坊の足袋を作りのも上手になりました。
送って頂いた光枝のセーターで、又素晴らしい服が出来ると喜んでゐます。ミシンの事は栄一さんに相談してみます。きっと「オレが買ってやるよ」と言ふでせう。
昨日ニュースや新聞では日本空襲を知り驚き且つ身内の引しまる思ひがしました。今は非常時であり、当地も万一の事でもあると、ミシンも重荷となりますし、今しばらく様子をみてゐみることにします。
あーちゃんは幼年学校をスベッて残念でした。
健ちゃんはよかったですね。
光枝ももっともっとガンバランといけませんね。
■甲平均点が甲になるのは、易い事です。姉ちゃんでもなったのだから一寸
勉強すればよいのです。しっかりやる様にして下さい。
素晴しい買物袋が出来早く■出したいと思います。アの写真で、小母さんも持ってゐますね。中々素晴しく撮れてゐます。実物以上だとおつたへ下さい。二人共。
では又今日はこれまで
　　かしこ
四月二十日　■■
　　すみ子
お母さんへ
　今征坊は寝てゐます

【資料２２】澄子手紙　一月一六日（便箋６枚、封筒なし、昭和一七年か）

〔便箋上に追記〕
■代子さん初着（七日）
五十日と同じ様ふの　を送つて下さいましたが、お直しはするに及びません、■代子さんの時に十円あげました。お返しはしたをかったから。

光ちゃんより■葉■■しました。
尚子（ひさ）ちゃんも大分大きくなりました。昨日で四十日でした。はじめてリンゴ汁を少しやってみましたが、ウンコも別に悪くありませんでした。眼も見えだし完全ではないけれどあやすと笑ひます。えくぼが両方に（片方と思ってゐたが）出来とても可愛いです。これはお父ちゃまの小さな時に似

七にたでせう。
満州は今が一番寒いですが、今年は昨年に比べて大変暖いです。
御礼廻りもすませてホッとしました。
尚ちゃんは終日ベッドに寝てゐます。眼を開けてしばらく一人で遊んでゐます。征坊と大変違ひラクです。

中々暴れて泣きだしたら、足をふんばりすぐおむつを押出して着物にうんこやしっこして居ます。耳が大変聞え出し、眠くなってウトウトしてゐても、眠って居ても、征坊が大声を出すと、起きて困ります。征坊が赤ちゃん赤ちゃんと言って、オッパイを飲ませる時は必ず来て、顔に自分の口をひっつけたり、頭を手でさわったりしてゐます。可愛いのでせう。おむつを替える時も、アシアシと言って、足をつかまえて居ます。本当に一寸も油断のならぬ子で、中々にすばしっこいです。そしてマネをすぐして一度教へたら必ず覚えて居ます。

この頃は大変しゃべり出し、面白くてなりません。私も朝七時に起きて働いて居ますが（七時は真暗です）、栄一さんが出勤したら（九時半始り）、お茶碗を洗へばもう用がなくなり、ひまでひまでなりません。
二ケ月経たなければ、針を持たれないとか、ですから、足クツ下つぎも出来ず、本ばかり読んでゐます。　本は立ってよみます。征坊がうるさいので…。

晴ちゃんは中々賢いので隅に置けません。表面可愛らしいけれど、お母さんにでせう。
中々に内心横着です。つまみ食ひをするのにはくイコウしました。めったに無い良質の片栗粉を一斤も出来ず何時の間にかペロリと食べてゐるのです。それで、もし、征坊か

誰かお腹を悪くした時は困ってしまふので（めったに中々売ってない）、腹が立って、「私はこんなに食べてない、あんたがたべたかね」と言ふとすましてて「いいえ私はたべません」と言いますので、「そんなら旦那さんが食べたあがったろうか」と言ふと、「あそうそうまきました」といふ。いくらなんでも一斤もまく事はないのに平気でそんなウソを言ひます。後でウソは言はれんと悟してやりましたら。ウソ泣きしてゐました。
ぜんざいでも栄一さんが大変好きでよくしますが、その度に（一度ならず必ず）、残ったのを持って来いと言ふと、大方食べて無いのです。　チャンと一緒に同じ様にやってあるのに、心臓の強いやしいのにイヤになります。ウソを平気で言ひます。

でも大変腰■軽で役に立ちました。が、湯たんぽをはじめとして、物をワッタ事ワッタ事、大変損しました。お礼は六十円あげました。旅費と合せて百二十円余り入りました。
さて昨日は電報を打ち驚いたでせう。
二十二日、栄一さんが新京へ出張するのに付で、キツネを買ってやるとの事（これから満州でも、次第に高くなる由）。貯金が百五十円位ありますが、足りませんからすみませんが貸して下さい。六月のボーナスで返します。
長年ののぞみをやっと達するわけです。
毛布も良いのがあれば買ってきます。当地にはもうありません。

　オーバー、毛糸、本ネルやその外の小包は未だ着きません。どうか無くならぬ様に毎日そればかり思祈ってゐます。では又　取急ぎ　右にて
かしこ

一月一六日記　　すみ子
お母さんへ

【資料２３】澄子手紙　（便箋4枚、封筒ありだが別の手紙のもの　※昭和一七年三月か）

御無沙汰しています。
土佐はもう早咲きの桜も咲き始めた事と存じます。当地も漸く春らしくなり、三寒四温の温の日々です。官舎の前は皆子供達がゾロゾロ出て来て、冬中、人気の無い外がまるで幼稚園の様になり、スベり台に、ブランコに一生ケン命です。征坊も、下駄をはいて毎日外に出ては泣かされたり、転んだりしてゐます。
兄ちゃん達と遊んで、そのマネのひどい事と言うたらありません。唯今、「何とかしたんだ」と言ふ事を覚えて、御飯食べたんだ、自動車いったんだ、と盛んにやってゐます。尚子も、とても色白で可愛

くなり、ぼつぼつ外気にふれさせております。
栄一さんも今、ラマ僧を連れ、大連へ行ってゐます。
フキルムが手に入ればよいがと思って願ってゐます。
お土産が楽しみです。さて、同封にて百円御送りします。これは、栄一さんが、もれば こちらから、お借りしたのだし、どうしても返しておけとの事

ですから、一まずお返ししておきます。　毛布は又　■から。征坊は遊びがひどくなって、洋服が一度外にでたらほころやぶれになるので、ネネルのワイシャツで遊び着を縫ってやりました、大変可愛く皆さん感心してゐられ、よく二人もつれて暇があると、仰言います。一度仕上げると、アレモコレモと楽みで楽みで

なりません。今度は、防寒カーテンの黒まくの残布でオブイ紐を作ろうとしてゐます。　征坊の時のはビロードが悪く、チギレチギレになってしまひました。その次は、送ってもらった茶色の服地で半パンツを縫ひます。ミシンの無い不自由さつたらありません。白の久米島ガスリの不要のものなどがあれば置いておいて下さい。葉虫でもカしすが、ズボンは不用ですから、もんぺが■しいですが、出来ますから。子供の大きくなるのは楽しみですが、衣装費のいるのはヘイコウです。唯今新聞をにぎはして■■■■の母■■涙が出ます。

過日配給で一尺（満州尺）四十銭で一人三尺（晴ちゃんの分も十五尺もらひました）白ネルを求めました。
とても地の厚い上等でうれしくてなりません。
綿も配給がありましたが、買ひませんでした。尚子が男なら楽ですが、女で又着るものを新たしくしなければならず、不経済この上なしです。毛糸の事ですが、アノレイウール（人造毛糸）の白と桃色はまだ有るでせうか？あれば送って下さい。足袋つぎと一緒に、アレで編んで出産祝にあげまして、経済的でした。尚子にも帽子など編んでやりますから。　　では　又

【資料２４】澄子手紙　昭和一七年五月二八日
（便箋４枚、封筒あり）

雪溶解けとなりましたが、別に変った事もありませんが、秋頃は如何でせうかしら。
■も随分悪くなりましたし、一度帰り度いと思ひますが、留守中の事や、お金の事や途中の事など考えますと、中々に思ひ切って帰れません。栄一さんは、六月じゃボーナスをもらったら帰って来いと申しますが、夏の旅はこりごりです。お父さんが来満されるなら、ついて帰ろうかとも思ひますが、まだきまりません。
さて、かつをぶしやおじやこを早く送って下さい。上の人に差上げるに内地から送って来ましたからといってあげるのが一番都合よいです。
香代ちゃんも元気で通学してゐるとの事に、安心し切ってゐます。これも、お母さんのお陰様ですと、叔母ちゃんの手紙に書いてありました。
第六に通ってゐますか、御母さんも忙しいですから二人の子供に手伝たらよいでせう。子供の為にもこれを私でしなかったから直更申します。
クツ下、ハンカチ、ズロースなど小物は必ず自分で毎日洗はす様にしたらよいでせう。
祖母ちゃんは相変らずですか。
さて、こちらも元気です。征坊など元気過ぎる程です。チブスが発生して四人死にました。昨日注射して今日は痛くてなりません。

昨日から急に夏の様に暑くなりましたが、又今日風が強くなりました。
満州をしろなれば、こっちのものです。
皆様お元気でせう。昨日細川から家族の写真を香代ちゃん出発の前日の揚しさといふのを送って来ました。子供達が大きくなってゐて驚きました。香代ちゃんなどまるで女学生のようですね。叔父さん叔母さんも中々どっしりと品よくとれてゐますね。
尚子のも一枚安東に送りました。
さて、この前の写真こちらで焼付けたのは例により小谷に送りましたから、すみませんけれど又焼付けて送って下さいませんか。

それに当地はだしじゃこが全然ありませんし、重曹かふくらし粉はありませんか、あったらおねがいします。
三輪車はまだ昌ちゃんが乗ってゐますか、征坊が好きで好きで他家のを放しません。水埜さんのを今日はお借りして来て一日遊びました。それもコワしてゐて乗れないのですけれど。お暇の時にさがして下さい。
では、今日はこれにて

五月二八日　　澄子

【資料２５】澄子手紙（ハガキ）　伊野部ゆき宛
康德九年三月一六日消印　昭和一七年

皆様の写真大変なつかしく拝見致しました。中々に素晴らしく撮れて居りますね。誰方が撮影されましたか。秋恵小母さんもお心使い様と思い乍らつい■■■■■ゐます。中々素晴らしいとよろしく申して下さい。毎日忙しく張切つて働いてゐます。この間中ワイシャツで征坊の遊び着など作つたり編物したりして仕上げ、気持がサバサバしてゐます。オーバーは少し大きいけれど、結構役に立つて着てゐます。大助かりしました。モンペ（黒）を送つて下さい。前のズボンはよろしいです。大分暖かくなり大喜びしてゐます。
では又

【資料２６】澄子手紙（ハガキ）　伊野部ゆき宛
康德十年五月二一日消印　昭和一八年

五月二八日本日無事小包が着きました。大変うれしく厚く御礼申し上げます。持参したわらびや竹の子が随分重宝してゐてこんな事ならもつと沢山持つて来ればよかつたと思つた事でした。先日配給の勝どき餅五個えましたので近日送ります。着物も送りませう。大豆が一パイあつて困つてゐます。郵便局で聞いて送つてよろしいでしたら送ります。粉でもみそにでもして下さい。メリケン粉は一ケ月に大人一■キロ（征坊も）です。ネルの配給が二十円払とありました。魚も肉も中々有りません。

【資料２７】澄子手紙（ハガキ）　伊野部ゆき宛
康德十年六月一四日消印　昭和一八年

婦人之友ノ五月号送つて下さい

次第に暑くなつて来ます。もう小包は無事に着いたでせうかしら。こちらも皆お陰様で元気です。尚子におばあちゃんはどう言ふ？と問へば、ホーイと答へ、おじいちゃんは？と問えば、舌をペロリと出しました。本当に良く覚えてゐます。光枝おばちゃんは？と云ふと、征坊が側から勉強すると申しました。
一郎さんのお父ちゃんと征坊とお■■角力をとつたよ、と言つたりします。まだ色々覚えて■■です。さて、又送り物をお願ひします。フクラシ粉、ひき茶（青い粉）、私の運動グツ（白でも黒でもよし）、ひじきは持つて来るのを忘れました、有るならお願ひします。すしの素（少し沢山願ひます）、又お菓子送りマス。

記録集の全文 PDF は、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会のホームページでも無料公開しています。なお、『地域資料叢書』は九州大学比較社会文化学府地域資料情報講座（現在は改組）が、1997 年から学会誌等では公開しきれない地域のフィールド調査の成果を公表するために刊行してきた学術書のシリーズです。現在は講座の卒業生や高知県の市民団体が引き継いで刊行を続けています。

＝＝

『青少年義勇軍・葛根廟事件 高知県関係資料集－第４回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集－』

（地域資料叢書 27）

編集　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会
（編集責任者：大野正夫（会長）、編集担当：楠瀬慶太（事務局長））

協力　　高知地域資料保存ネットワーク

発行者　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会（高知県土佐市宇佐町井尻２６２－１）
e-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

ホームページ　https://mansyu-kochi.yuhocreate.com/

発行日　　２０２３年７月３０日

印刷　　西岡総合印刷株式会社
〒640-8324　和歌山市吹屋町 5 丁目 54

＝＝